

市川市国府台遺跡第13地点(2)

—独立行政法人国立国際医療研究センター
国府台病院埋蔵文化財調査報告書1—

平成24年9月

独立行政法人 国立国際医療研究センター国府台病院
公益財団法人 千葉県教育振興財団

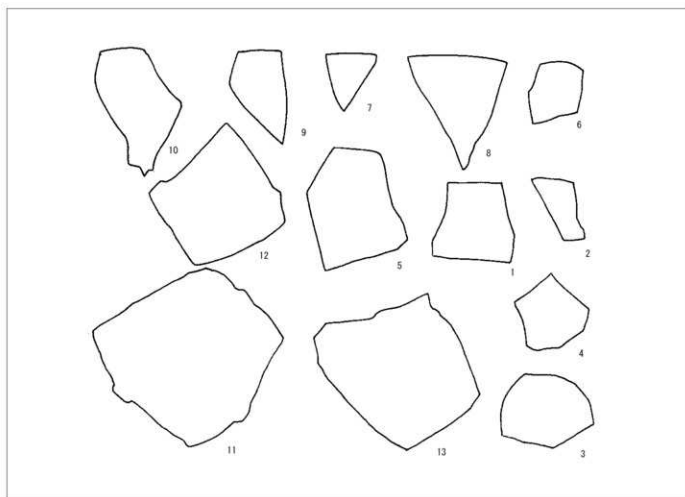
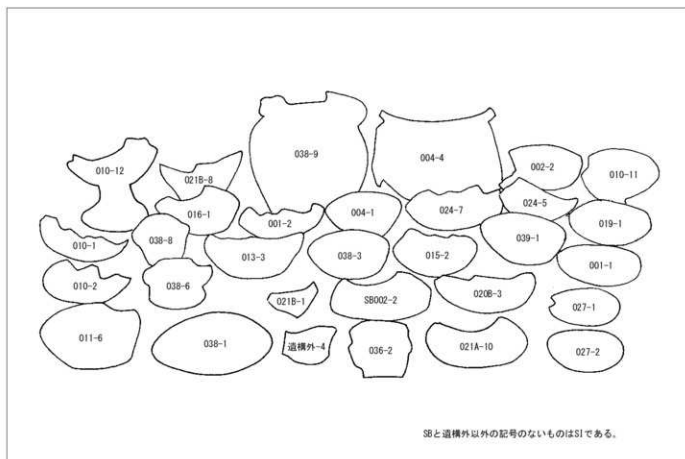
市川市^{こうのだい}国府台遺跡第13地点(2)

—独立行政法人国立国際医療研究センター
国府台病院埋蔵文化財調査報告書1—





奈良・平安時代土器集合写真・中世貿易陶磁器集合写真



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第688集として、国立国際医療研究センターによる国府台病院建て替え事業に伴って実施した市川市国府台遺跡第13地点（2）の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

国府台遺跡は下総国府関連の遺跡としてこれまでに幾度も調査が実施され、多大な成果があがっております。今回の調査でも奈良時代から平安時代の集落跡や、中世館跡遺構群が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られています。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係者の皆様や関係機関、また、発掘作業から整理作業まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成24年9月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理 事 長 渡 邊 清 秋

凡 例

- 1 本書は、独立行政法人国立国際医療研究センターによる国府台病院建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県市川市国府台1丁目7番地1の一部に位置する国府台遺跡第13地点(2)で、遺跡コードは203-003(2)である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人国立国際医療研究センター国府台病院の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び期間は第1章に記載した。
- 5 本書の執筆は、第3章を糸川道行、それ以外を鳴田浩司、大岩桂子が担当し、編集は大岩が行った。
- 6 奈良・平安時代の須恵器については加藤恭朗・郷堀美司・富田和夫・根本靖・松本太郎・渡辺一各氏から御教示をいただいた。中世陶器については愛知学院大学教授藤澤良祐氏、千葉県埋蔵文化財調査センター 笠瀬裕一氏からご教示いただいた。
- 7 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、市川市教育委員会、国立国際医療研究センター国府台病院の御指導・御協力を得た。
- 8 本書で使用した地形図は、下記の通りである。
 第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「松戸」NI-54-25-2-1(東京2号-1)・「船橋」NI-54-25-2-2(東京2号-2)
 第2図 市川市発行 都市計画図 1/25,000地形図
- 9 遺跡周辺航空写真は京業測量株式会社による昭和44年3月撮影のものを使用した。
- 10 本書で使用した座標は、世界測地系に基づく平面直角座標(国家標準直角座標第IX系)で、図面の方位はすべてその座標北を示す。
- 11 本書の遺構及び遺物の縮尺は以下を基準とするが、作図の都合で統一されなかったものもある。
 竪穴住居跡・掘立柱建物 1/80 カマド 1/40 陥穴・竅穴・土坑 1/60 溝状遺構 1/150
 土器・瓦 1/4 陶磁器 1/3 石製品 1/3 金属製品 1/2 銭貨 1/1
- 12 図や記号の用例は、以下の通りである。



本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
1	調査の経緯と経過	1
2	調査・整理の方法	4
第2節	遺跡の位置と環境	6
1	遺跡の位置と地形	6
2	周辺の遺跡	6
第2章	旧石器時代・縄文時代	9
第1節	旧石器時代	9
第2節	縄文時代	9
1	遺構	9
2	遺物	9
第3章	奈良・平安時代	11
第1節	概要	11
第2節	竪穴住居	11
第3節	掘立柱建物・ピット群	51
第4節	遺構外出土遺物	55
第4章	中・近世	61
第1節	遺構	61
1.	概要	61
2.	台地整形区画	61
3.	掘立柱建物	61
4.	竪穴状遺構	71
5.	地下式坑	78
6.	土墳墓	86
7.	火葬施設	86
8.	粘土貼り土坑	87
9.	袋状土坑	88
10.	土坑	89
11.	溝状遺構・道路状遺構	95
第2節	遺物	99
1.	陶磁器・土器	99
2.	石製品	103
3.	金属製品	103
第5章	まとめ	111
第1節	奈良・平安時代	111
第2節	中世	112
	報告書抄録	巻末

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡……………2	第36図 SI-017・029・031・SK-096……………72
第2図 国府台遺跡第13地点(2)調査範囲図…3	第37図 SI-030A・B・SK-097・SI-033・034 ……73
第3図 グリッド呼称法……………4	第38図 SI-032・035・041・SK-001 ……74
第4図 コンクリート基礎地区割り図……………5	第39図 SK-009・027・029 ……77
第5図 下層発掘区位置図……………5	第40図 SK-004・039 ……79
第6図 遺構全体図……………8	第41図 SK-062・101 ……80
第7図 SK-015・043及び縄文時代の出土遺物 ……10	第42図 SK-100 ……81
第8図 SI-001 ……12	第43図 SK-105・107・108・109(1) ……83
第9図 SI-002・003・004 ……15	第44図 SK-105・107・108・109(2)・046 ……84
第10図 SI-005・006・007・008・009・037 ……18	第45図 SK-060・111・112・065・066・067 ……85
第11図 SI-010 ……21	第46図 SK-023・025・041 ……87
第12図 SI-011 ……24	第47図 SK-044・045・072 ……88
第13図 SI-012・013・014 ……27	第48図 SK-074・076・088・089・090・098(1) 89
第14図 SI-015・016・018 ……30	第49図 SK-074・076・088・089・090・098(2)・ 005・006・008 ……90
第15図 SI-019・020A・B ……33	第50図 SK-010・011・012・013・014・016 ……91
第16図 SI-021A ……35	第51図 SK-028・031・032・059・061・063・093・ 094・095……………92
第17図 SI-021B ……38	第52図 SK-103・104・106・113・114・115・116・ 117・120……………94
第18図 SI-022・023・024 ……41	第53図 SD-001・002 ……96
第19図 SI-025・026・027・028・036 ……45	第54図 SD-003・004 ……97
第20図 SI-038 ……48	第55図 SD-005・006 ……98
第21図 SI-039・040・SK-123A・B……………50	第56図 貿易陶磁器……………99
第22図 SB-002・003 ……52	第57図 陶磁器(1)……………100
第23図 SB-001・004 ……53	第58図 陶磁器(2)……………101
第24図 奈良・平安時代遺構外出土遺物……………56	第59図 陶磁器(3)……………102
第25図 遺構外・グリッド出土の瓦(1)……………58	第60図 陶磁器(4)……………104
第26図 遺構外・グリッド出土の瓦(2)……………59	第61図 陶磁器(5)……………105
第27図 エリア区分図……………62	第62図 陶磁器(6)……………106
第28図 エリアA……………63	第63図 陶磁器(7) 転用砥石 ……107
第29図 エリアB……………64	第64図 石製品(1) 砥石 ……108
第30図 エリアC……………65	第65図 石製品(2) 石臼 ……109
第31図 エリアD……………66	第66図 金属製品……………108
第32図 エリアE……………67	第67図 銭貨……………110
第33図 台地整形区画 SX-001……………68	
第34図 SB-013・014 ……69	
第35図 SB-015・016・017・018・019……………70	

第68図	中世陶磁器遺構出土分布図……………	113	第70図	中世陶磁器組成……………	112
第69図	中世陶磁器グリッド出土分布図……………	114			

表 目 次

第1表	時代別遺構一覧……………	6	第7表	中世陶磁器観察表……………	123
第2表	奈良・平安時代土器観察表……………	115	第8表	中世砥石計測表……………	126
第3表	奈良・平安時代瓦観察表……………	119	第9表	中世金属製品計測表……………	127
第4表	中世方形竪穴状遺構集成表……………	120	第10表	中世銭貨計測表……………	127
第5表	中世土坑集成表……………	120	第11表	中世陶磁器破片数集計表……………	128
第6表	中世溝状遺構集成表……………	122			

図 版 目 次

巻頭図版	奈良・平安時代土器・中世貿易陶磁器集合 写真			物出土状況(南から) SI-023遺物出土状況(西から)・SI-024遺物 出土状況(東から)	
図版1	遺跡周辺航空写真(約1/10,000)				
図版2	調査前風景		図版7	SI-024遺物出土状況(南東から)・SI-025(北 西から)	
図版3	SI-001(北から)カマド(南から) SI-002遺物出土状況(東から)(北から) SI-003(東から)・SI-004(北西から) SI-004遺物出土状況(南東から)			SI-026(東から)・(南東から) SI-036(南から)・SI-037(東から) SI-038遺物出土状況(南東から)・カマド遺 物出土状況(南から)	
図版4	SI-005-006(北西から) SI-007(北から) SI-010(東から)(南西から) SI-010遺物出土状況(東から)		図版8	SI-038遺物出土状況(南東から)・SI-039(北 東から) SI-040遺物出土状況(南から)・SK-123遺物 出土状況(南西から) SB-001・SB-002・SB-003・SB-004(東から)	
図版5	SI-010遺物出土状況 SI-011遺物出土状況(西から)・カマド遺物 出土状況(西から) SI-012(北東から)・SI-013(南西から)・SI- 014(東から) SI-015(手前)・016(奥)(東から)・SI-018 (東から)		図版9	渡り廊下北側(東から)・SK-015(北西から) SX-001西端(南東から)・土坑(南東から)・ 柱穴・掘立柱集中 SB-005(南から)・SB-012(東から)	
図版6	SI-019(南から)・SI-020A・B(南東から) SI-021A・B(東から)・カマド(西から) SI-022遺物出土状況(北東から)・カマド遺		図版10	SI-017(北西から)・SI-029(奥)・SI-030A・ B(西から) SI-031(西から)・SI-032(北から)・SI-033 ・034(東から)	

	SI-035 (西から)・SI-041 (南から)・SK-001 (北から)	SK-074・088・089・090・098 (北から)
図版11	SK-097 (北から)・SK-121 (北から)・SK-004 (北西から)	SK-093 (左)・094 (中)・095 (右) (北西から)
	SK-039 (西から)・SK-046・SK-062・066・067 (西から)	SK-104 (手前)・103 (中)・102 (奥) (西から)
	SK-106・100・110 (南から)・SK-101 (東から)	SK-113 (北東から)・SK-114・SK-115 (左)・116 (右) (北東から)
図版12	SK-105・107・108・109 (南から) SK-060 (南から)	図版18 SK-117 (東から) SK-120 (東から)
	SK-111 (北西から)・SK-112 (南から)	SK-040・057・058・069・SD-001・002 (北から)
	SK-025 (西から)・SK-041・042 (南から)・SK-045 (東から)・SK-072 (北東から)	SD-001遺物出土状況(東から) SD-003・SD-004 (北から)
図版13	SK-005・006・008 (北西から)・SK-074・088・089 (南から)	SD-005 (西から)・SD-006 (北から)
	SK-007 (東から)・SK-017 (北東から)・SK-018 (北から)	図版19 SX-001①F-1Aa (北から)・SX-001①F-1Ab (北から)
	SK-019 (東から)・SK-020 (北から)・SK-021 (北から)	SX-001②F-2A (北から)・11L・12L付近(西から)
図版14	SK-028・029 (北西から)・SK-031 (北西から)	SX-001③F-5BCa (北から)・3F病棟北(西から)
	SK-035 (東から)・SK-032 (奥) (北西から)	SX-001④F-9A (北から)・3F病棟北(東から)
	SK-037 (左)・038 (右) (北から)・SK-039 (北西から)	図版20 奈良・平安時代土器(1)
	SK-046 (左)・045 (右) (東から)・SK-039 遺物出土状況(南から)	図版21 奈良・平安時代土器(2)
図版15	SK-047 (西から)・SK-048・049 (南から)・SK-050・051 (東から)	図版22 奈良・平安時代土器(3)
	SK-052・053 (南から)・SK-055 (南から)・SK-059 (北西から)	図版23 奈良・平安時代土器(4)
	SK-056 (西から)・SK-060 (東から)	図版24 奈良・平安時代土器(5)
図版16	SK-061 (西から)・SK-063 (北西から)・SK-074 (南西から)	図版25 奈良・平安時代土器(6)
	SK-075 (右)・078 (左) (南西から)・SK-076 (南西から)	図版26 奈良・平安時代土器(7)・軽石・土製品・奈良・平安時代の瓦(1)
	SK-081 (西から)・SK-082 (北から)・SK-083 (北西から)	図版27 奈良・平安時代の瓦(2)
図版17	SK-084 (北西から)・SK-085 (北東から)・SK-086 (西から)	図版28 奈良・平安時代の瓦(3)
		図版29 奈良・平安時代の瓦(4)
		図版30 中世陶磁器(1)
		図版31 中世陶磁器(2)
		図版32 中世陶磁器(3)
		図版33 中世陶磁器(4)
		図版34 中世陶磁器(5)
		図版35 中世陶磁器(6)
		図版36 転用砥石
		図版37 金属製品・砥石
		図版38 石臼・銭貨

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

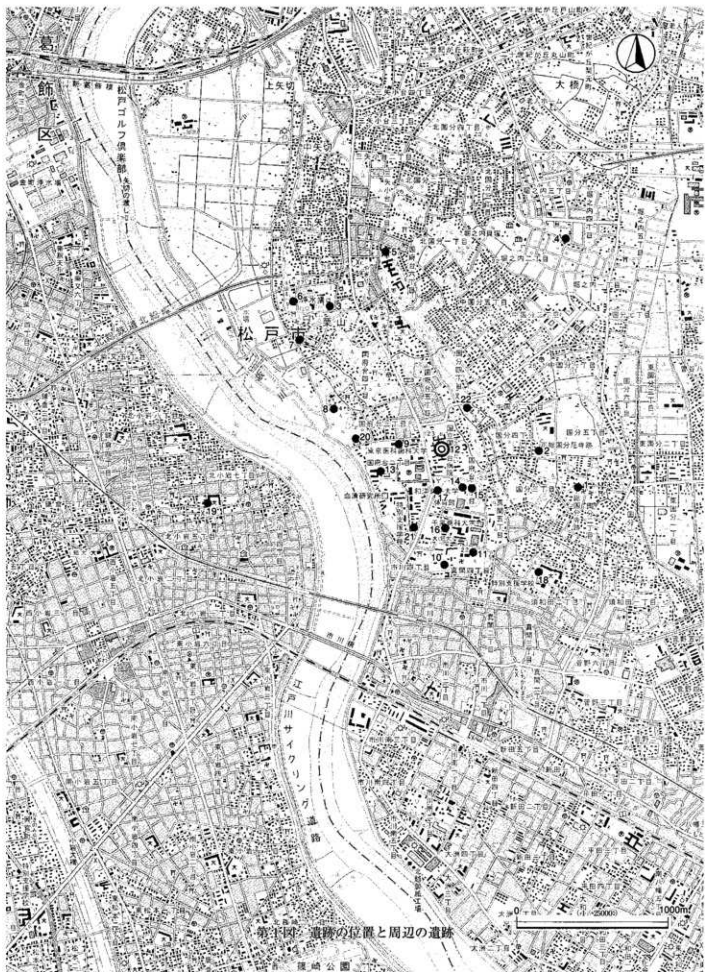
国立国際医療研究センターは、市川市国府台に所在する国府台病院の、病棟建て替えを行うこととなった。敷地内周辺には下総国府をはじめとして、数多くの貴重な遺跡が分布するが、建築物の公益性・重要性から敷地内の埋蔵文化財の取り扱いについては、協議のうえ千葉県教育委員会の指導のもとに記録保存の措置が講じられることになった。調査は公益財団法人千葉県教育振興財団文化財センターが平成21・22年度に実施した。国府台遺跡は病院敷地内にとどまらずその周辺を含む広大な面積をもつ遺跡であるが、今回報告する病院敷地内は全域すべて第13地点と呼称されている。なお平成21年度の調査区を第13地点(2)、平成22年度の調査区を第13地点(2)として調査を実施した(第2図)。年度毎の発掘調査期間・整理期間・担当者等は以下のとおりである。

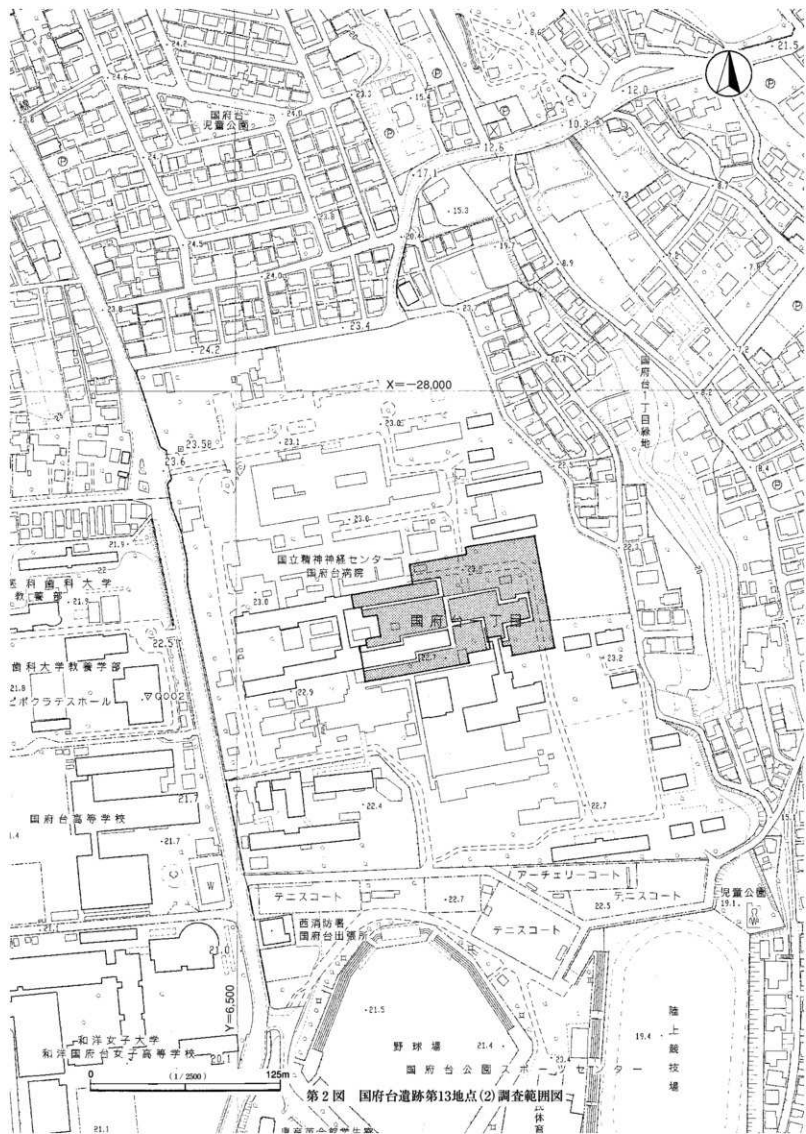
発掘調査

平成21年度	西部調査事務所	所長 橋本勝雄
	調査期間	平成21年11月4日～平成22年3月26日
	調査面積	(規模) 4,660㎡ (確認調査)上層-/㎡・下層92㎡ /4,660㎡ (本調査)上層4,175㎡・下層0㎡
	調査担当者	鳴田浩司
平成22年度	西部調査事務所	所長 橋本勝雄
	調査期間	平成22年4月6日～平成22年6月15日
	調査面積	(規模) 1,170㎡ (確認調査)上層-/㎡・下層24㎡ /1,170㎡ (本調査)上層1,170㎡・下層0㎡
	調査担当者	鳴田浩司

整理作業

平成22年度	北部調査事務所	所長 野口行雄
	整理期間	平成22年4月1日～平成22年11月30日
	整理内容	水洗・注記の一部～原稿執筆の一部まで
	整理担当者	鳴田浩司・糸川道行
平成23年度	北部調査事務所	所長 野口行雄
	整理期間	平成24年1月4日～平成24年3月31日
	整理内容	水洗・注記の一部～原稿執筆の一部まで
	整理担当者	鳴田浩司
平成24年度	整理課長	高田 博
	整理期間	平成24年4月1日～平成24年6月15日
	整理内容	原稿執筆の一部～印刷刊行まで

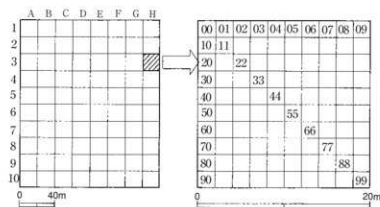




第2図 国府台道跡第13地点(2)調査範囲図

2 調査・整理の方法

国府台遺跡の調査では調査区全域を世界測地系に基づく方眼網で覆って調査を行った。第13地点は国府台病院敷地をすべて覆う範囲となるため、今後の発掘調査を見据えて、国府台病院敷地全域がカバーできる方眼網を設定した。方眼は20m×20mの区画を大グリッドとし、起点から東へアルファベット、南へ算用数字を振っている。第13地点(2)は東から西へGからN、北から南へ8から13まで使用している。大グリッドの内部を100分割した2m×2m区画が小グリッドで、北西隅を00、南東隅を99としている(第3図)。00を起点に東へ01・02…、南へ10・20…と振っており、大グリッドと組み合わせて例えば9K-72のように表記した。



第3図 グリッド呼称法

国府台遺跡第13地点の北東隅で、起点となる1A-00グリッドの座標値は $X = -27,940.000$ 、 $Y = 6,420.000$ となる。ちなみに調査地点の基準点の一つである13K-00は、旧座標で $X = -28,180.000$ 、 $Y = 6,620.000$ である。

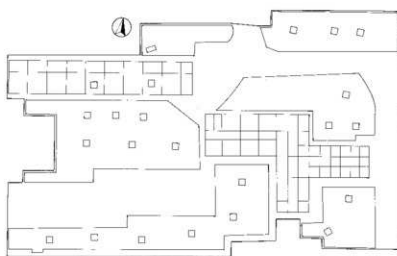
調査対象からは、既存の建物基礎工事中にすでに立川ローム層最下部まで掘削されている部分については、当初からその対象範囲・面積から除外されている。

平成21年度は5,830m²の内4,660m²を対象に調査を実施した。国府台遺跡は下総国府関連遺跡であり、周辺の既調査実績から、上層については当初から全面が調査対象となった。まず表土除去は重機を使用し、遺構を検出した後本調査を実施した。その結果、上層遺構については調査区全体に古墳時代～平安時代の堅穴住居が分布しており、国府関連の集落遺跡であることが確実となった。さらに中世においても、調査区中央部分及びその周辺から濃密な遺構分布が確認された。国府台病院は、明治初期に現在の里見公園内に陸軍教導団病院として設立され、昭和11年に国府台陸軍病院と改称された。明治13年には県道を挟んだ現在の地に新築移転された。戦後は厚生省の所管となり、国立国府台病院として発足した。国府台一帯は戦前は陸軍の軍用地として、戦後は大学等の文教用地として利用されて、様々な建物が幾度となく建て替えられたことから、遺跡は多くの攪乱を受けていた結果、攪乱部分を除いた本調査面積は4,175m²となった。また、調査区内には旧病棟のコンクリート基礎がかなりの割合で残っており、その撤去工事と平行しての発掘調査になったため、一度に広い範囲での調査や調査杭の打設が困難であった。そのため調査にあたっては第4図のような地区割りを設定し、1地点1区画ずつ調査を終了する必要が生じた。下層確認については第5図のように対象面積の2%にあたる92m²の調査を実施したが、遺物の出土はなく、本調査までは至らなかった。なお旧石器時代の石器は他時代の遺構やグリッドからの出土もなかった。

平成22年度には残り1,170m²を対象に調査を実施した。前年度からの継続調査となった。上層本調査は全城1,170m²となったが、下層については対象面積の2%にあたる24m²の確認調査を実施した結果、遺物の出土はなく本調査には至らなかった。前年度同様奈良・平安時代の堅穴住居や中世台地整形区画、地下



第4図 コンクリート基礎地区割り図



第5図 下層発掘区位置図

式坑、道路状遺構、土坑幕、土坑などが検出され、同期の遺物が出土した。

調査時の遺構番号は原則として下三桁が数字で、その前に遺構の種別を表す略号を付けた。遺構略号は、堅穴住居がSI、掘立柱建物がSB、土坑等がSK、溝状遺構・道路状遺構がSD等である。具体的にはSI-001、SK-001のように呼称した。遺構種別・遺構番号の詳細については第1表に記載した。なおSX-001は台地整形区画全体を

表し、その台地整形区画内には多くの掘立柱建物、地下式坑、土坑等が存在するものであり、報告にあたってはSX-001内の遺構としたものが多く存在する。

遺物の注記は、遺跡コード、遺構番号、遺物台帳に記載された遺物番号を、順に書き込んだ。上層や下層の遺物包含層など、グリッド出土物については、上記の遺構番号がグリッド名に換わる。また変則的なたちであるが、本道跡の場合、病棟基礎の区割りを付加して記入したのものもある。これについては公

共座標にのっていないが、グリッドと同様の性格のものである。なお直接書き込むことが好ましくない遺物については、袋または札に記入した。

第1表 時代別遺構一覧

時代	遺構名	遺構番号
縄文時代	陥穴・土坑 (SK)	015・043
奈良・平安時代	竪穴建物 (SD)	001・002・003・004・005・006・007・008・009・010・011・012・013・014・015・016・018・019・020A・020B・021A・021B・022・023・024・025・026・027・028・036・037・038・039・040
	竪穴建物 (SK)	123
	掘立柱建物 (SB)	002・004
	柱穴群 (SB)	001・003
	土坑 (SK)	010・011・012・013・014・016・026・034・038・118・119・122・123
中・近世	台地整形区画 (SX)	001
	掘立柱建物・柱穴群 (SB)	013・014・015・016・017・018・019
	方形竪穴遺構 (SD)	017・029・030・031・032・033・034・035・041
	(SK)	001・009・027・029・080・086・087
	地下式坑 (SK)	004・039・046・062・100・101・105・107・108
	土塙墓 (SK)	060・066・067・111・112
	火葬施設 (SK)	023・025・041・042
	粘土貼土坑 (SK)	045・072・
	袋状土坑 (SK)	006・088
	土坑 (SK)	003・005・007・008・017・022・024・028・031・032・034・038・040・044・047・053・056・059・061・063・065・068・069・071・073・078・081・087・089・091・095・098・099・102・104・106・109・117・120・121
溝状遺構 (SD)	001・002・003・004・005・006・007・番号なし (SH15・16間)・SK-002・SK-054・SK-055ほか	
欠番	SK-030・033・036・079・080・099	

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地形

国府台遺跡第13地点は、千葉県市川市国府台1丁目7番地1に所在し、江戸川東岸の標高約23.0mの国府台上に広がる国府台遺跡の一部である。

市川市北部には下総台地の南西部端に位置し、支谷に開折された柏井台・曾谷台・国府台の3つの台地があり、これらの台地の中で最も西に位置するのが国府台である。国府台はさらに先端を六反田支谷により東西に開折されている。この東西に開折された台地の東側を国分台、西側を国府台と通称しており、国府台遺跡はこの国府台上の南西部に位置する。

国府台遺跡は「国府台」の名のごとく古代下総国府の所在地と推定されており、六反田支谷を隔てた東側の国府台上には下総国分僧寺跡、下総国分尼寺跡などが所在している。

2 周辺の遺跡

周辺の遺跡については先学による文献が多いことから、本遺跡に関係する古墳時代以降にしぼって記述する。なお、第1図に掲載した遺跡名は以下の通りである。

1. 国府台遺跡第13地点
2. 下総国分寺跡
3. 下総国分尼寺跡
4. 天神山遺跡
5. 権現原遺跡
6. 新山遺跡
7. 栗山古墳群
8. 丸山古墳
9. 明戸古墳
10. 法皇塚古墳
11. 弘法寺古墳
12. 真間山古墳
13. 国府台遺跡第1地点
14. 下総総社跡(六神社跡)

15. 市営総合運動場内遺跡 16. 国府台遺跡第4地点 17. 国府台遺跡第3地点 18. 須和田遺跡
19. 上小岩遺跡 20. 市川城跡(国府台城) 21. 和洋学園国府台キャンパス内遺跡
22. 不入斗遺跡

国府台の台地では古墳時代以降、遺跡数が増加する。まず、下総国府設置に先立つ古墳時代後期の古墳として、国府台古墳群(7~12)が注目される。国府台古墳群は6世紀前半または中葉~後期の築造で、前方後円墳3基と円墳1基が現存し、隣接する栗山古墳群(7)を含め、周辺の中核をなしている。特に、法皇塚古墳(10)¹⁾からは、多数の副葬品が出土している。国府台の主要な遺跡としては、下総社跡遺跡(14)²⁾、国府台第1地点(13)³⁾、国府台遺跡第4地点(16)、国府台遺跡第5~11地点⁴⁾、和洋学園国府台キャンパス内遺跡(21)⁵⁾、国府台遺跡第13地点(1)⁶⁾、市営運動場内遺跡(15)⁷⁾、新山遺跡(6)⁸⁾などがある。

国府台南東端の須和田台上には須和田遺跡(18)⁹⁾があり、弥生時代から平安時代までの遺跡や遺物が確認されている。また、国分台上には下総国分僧寺跡(2)¹⁰⁾、下総国分尼寺跡(3)¹¹⁾、権原遺跡(5)¹²⁾、下総国分遺跡などの奈良・平安時代を中心とした遺跡がある。国府台と国分台を分ける六反田支谷には、奈良・平安時代~中世の遺物が出土した不入斗遺跡(22)¹³⁾がある。中・近世の遺跡としては市川城跡(国府台城跡)(20)¹⁴⁾などがあげられる。

註1 「法皇塚古墳」市川市川博物館研究調査報告第3冊 市川市川博物館 1976

2 「市川市出土遺物の分布-古代の鉄・土器について」市川市教育委員会 1996

3 「平成2年度 市川市埋蔵文化財発掘調査報告」市川市教育委員会 1991

4 「平成7年度 市川市埋蔵文化財発掘調査報告」市川市教育委員会 1996

5 「下総国府台Ⅰ 和洋学園国府台キャンパス内遺跡第1次調査概報」和洋学園 1997

「下総国府台Ⅱ 和洋学園国府台キャンパス内遺跡第2次調査概報」和洋学園 1998

「下総国府台Ⅲ 和洋学園国府台キャンパス内遺跡第3次調査概報」和洋学園 1999

6 「平成10年度 市川市埋蔵文化財発掘調査報告」市川市教育委員会 1999

7 「昭和55年度埋蔵文化財発掘調査報告書」市川市教育委員会 1981

8 「市川市新山遺跡-北総開発鉄道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ-」(財)千葉県文化財センター1990

9 「須和田遺跡第6地点」市川市境域委員会 1992

10 「下総国分寺跡 平成元年~5年度発掘調査書」市川市教育委員会、市川市考古博物館 1994

11 「下総国分尼寺跡Ⅰ」昭和57年度調査報告 市川市考古博物館 1983

「下総国分尼寺跡Ⅱ」昭和58年度調査報告 市川市教育委員会、市川市考古博物館 1984

「下総国分尼寺跡Ⅲ」昭和59年度調査報告 市川市教育委員会、市川市考古博物館 1985

「下総国分尼寺跡Ⅳ」昭和60年度調査報告 市川市教育委員会、市川市考古博物館 1986

12 「日本考古学年報第20号」日本考古学協会 1972

13 「収蔵品目録Ⅰ」市川市考古学博物館 1981

14 「市川市史」第2巻 吉川弘文館 1974

第2章 旧石器時代・縄文時代

第1節 旧石器時代

旧石器時代(下層)の確認調査は、調査地点ごとに上層の調査が終了後、順次実施した。調査対象面積は5,830㎡で、基本的に2m×2mのグリッドを立川ローム層が削平されている地点を除いて、29か所を設定した。確認調査グリッドは人力によって掘削したが、遺跡全体に攪乱が著しいため、上面を機械で掘削した後、人力で掘り下げたグリッドもある。その結果、旧石器時代の遺構・遺物は検出されなかった。また、上層遺構調査段階でも、旧石器時代の遺物は採取されていない。

第2節 縄文時代 (第7図、図版9)

1 遺構 調査区南側の13Kグリッドから縄文時代の陥穴2基が検出された。2基は相互に6.5mほど離れている。

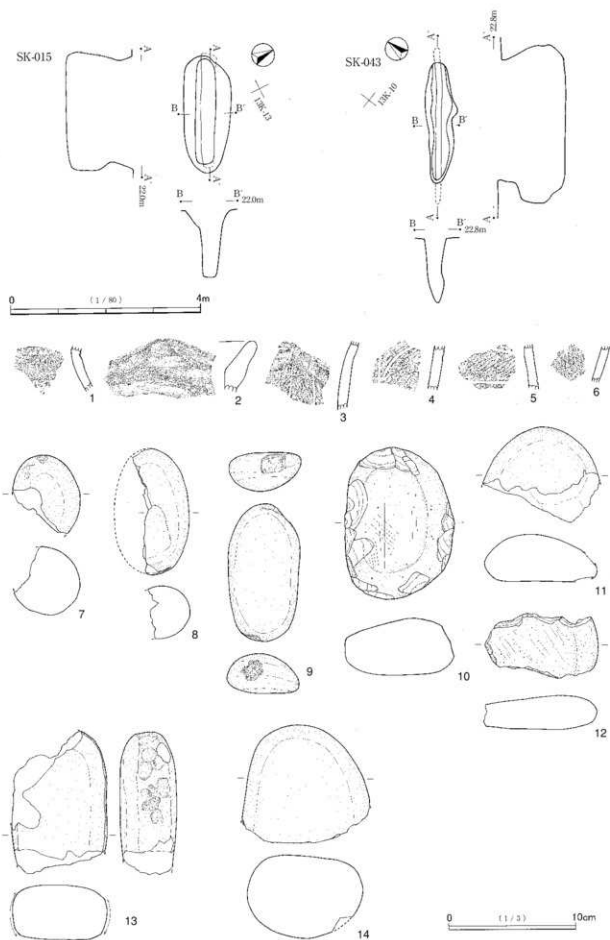
SK-015 13K-12・13グリッドから検出された。検出面でのプランは長軸2.49m×短軸1.03mを測る不整形円形を呈し、長軸方位はN-64°-Wを取る。断面を観察すると、短軸側は北東壁がほぼ垂直、南西壁は漏斗状を呈し、長軸側の北西及び南東両壁はオーバーハングしている。ほぼ平坦な底面は長さ2.43m×幅0.33mを測る溝状を呈し、検出面からの深さ1.42mを測る。遺物は出土していない。

SK-043 13J-19、13K-10グリッドから検出された。検出面でのプランは長軸2.54m×短軸0.62mを測る不整形長楕円形を呈し、長軸方位はN-51.5°-Eを取る。断面を観察すると、短軸側の両壁はほぼ垂直に底面に至り、長軸側の両壁はオーバーハングしている。ほぼ平坦な底面は長さ3.32m×幅0.12mを測る極めて細い溝状を呈し、検出面からの深さ1.38mを測る。遺物は出土していない。

2 遺物 出土量は極めて少ないものの、前期から後期に属する縄文土器と石器が出土した。

縄文土器 6点を図化した。いずれも小片ばかりである。1は屈曲部に具設の腹縁押圧による刻みを持つ前期・浮島系の土器である。地文に施された縄文が微かに見える。2は無文の波状口縁の波頂部片で、中期・加曾利E式土器である。3～6は地文である縄文と沈線によって文様構成されたもので、いずれも後期の土器と思われる。5は加曾利B式、他は堀之内式であろうか。

石器 礫石器8点を図化した。大きさはまちまちであるが、いずれも磨石・礫石として利用されたものと思われる。7は大きめの鶏卵形を呈するもので、図の上面と裏面に敲打痕を有する。被熱しており、ほぼ1/3が欠損している。石材は砂岩で、遺存重量180gを量る。8、9は小判形を呈する。8は被熱・破砕したものと恐れられ、ほぼ1/2が欠損していると思われる。石材は安山岩で、遺存重量173gを量る。9は図の表裏面は平滑で、上下面には敲打痕を持つ。安山岩で、276gを量る。10はちょうど掌に収まるほどの石鱗形を呈するもので、側面には敲打による剥離痕がほぼ全周する。図の裏面には平滑な平坦面を持つ。安山岩で、672gを量る。11、12は比較的に平らな円礫の一部で、いずれも側面は磨耗している。11の裏面と12の表裏面の平坦面は石皿として利用された可能性が大きい。石材はいずれも安山岩で、遺存重量は11が289g、12は158gを量る。13は厚みのある小判形を呈するもので、表裏面は平滑、側面はほぼ全周にわたり敲打による小さな凹凸が刻まれている。被熱・破砕したものと恐れられ、欠損部分が多い。花崗岩で、遺存重量602gを量る。14は厚みのある大型の礫の一部で、全面が平滑である。欠損部の大きさによっては片手で扱うのは難しく、台石としての利用も想定される。安山岩で、遺存重量764gを量る。



第7図 SK-015・043及び縄文時代の出土遺物

第3章 奈良・平安時代

第1節 概要

検出した遺構は竪穴住居34軒、掘立柱建物2棟、ピット群4か所、土坑13基である。竪穴住居のなかには古墳時代のものが1軒あるが、他は奈良・平安時代に帰属する。古墳時代のものも併せて本章で記述する。竪穴住居は調査対象範囲全域に分布しているが、台地整形区画等の中世の遺構によってかなり削平され、また近代以降の土地利用によって破壊されたものも少なくない。ピット群は掘立柱建物や欄列等の可能性があるが、撓乱や調査対象範囲の制約により本来の性格を明瞭に把握できないものである。ピット群の時代は不明瞭であるが、近隣に奈良・平安時代の竪穴住居や掘立柱建物が存在することから、本章で扱った。土坑の一部についても同様の理由により、本章に掲載した。

遺構群が立地する台地は標高22m～23mで、おおむね平坦である。

個々の遺構の記載をする前に計測値等について若干の説明を行う。規模については主軸長×副軸長の順で記述する。これは壁上端間の数値であるが、カマドの突出部を含めない。主軸方向は、原則としてカマドに對面する辺から直交してカマド中心に向かう方向とし、北からの方位を記載する。副軸は主軸に直交する方向とする。主軸長を長さ、副軸長を幅とするが、カマドに向かって横長の形態の場合、幅が長さを上回る。なおカマドが位置不明で、出入口ピットの位置が判明している場合、出入口側の辺から對面する辺への方向を主軸方位とする。壁上端での面積はカマドの突出部を含めている。また床面の面積は壁直下内を計測した。

通常4か所ある主柱穴については、主軸に向かって左奥をP1、右奥をP2、右前をP3、左前をP4とした。この対応関係は4か所のすべてが検出されない場合でも崩していない。なお柱穴が検出された遺構は非常に少ない。竪穴内の位置関係については、東西南北の他、左右及び前・奥(後)を使用した。後者については、カマドの對壁、通常は出入口側からカマドに向かってみた状態での方向である。

第2節 竪穴住居

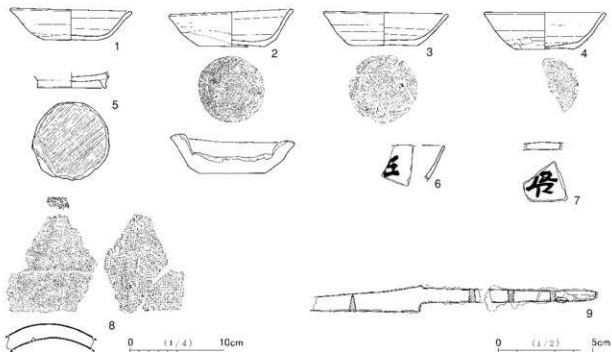
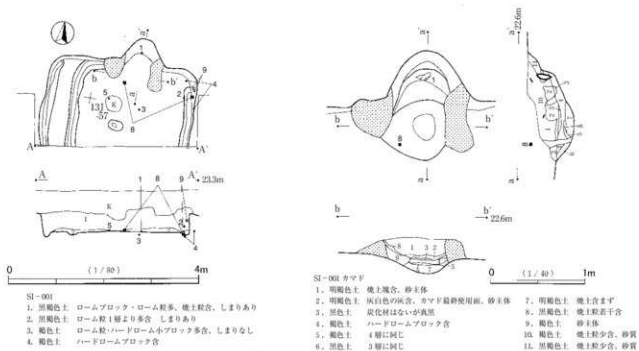
SI-001 (第8図、図版3)

位置 調査区南西端の13J-47グリッド周辺に位置する。

形状・規模 南半部が調査区外のためやや不明瞭であるが、ほぼ方形を呈すると思われる。規模は幅が3.18mであるが、主軸長は不明である。主軸方位はN5°-Wである。周溝の様相から西側に拡張したものと思われる。拡張後の床面積は形態がほぼ方形であるとすれば、推定で9.5㎡である。確認面から床面までの深さは最も深いところで33cm、現表土からの深さは87cmである。また記述した数値は原則として最も遺存のよい部分である。

床面 ほぼ平坦である。ハードルーム層まで達しており、全体に硬化している。ただし隅部は床面を形成する土層に黒色土がやや多く含まれており、やや軟質である。竪穴掘削時や床面修復のさいに黒色土がやや多く充填されたものと思われる。

柱穴等 4本柱の柱穴は検出されなかった。竪穴のほぼ中央に径34cm×20cm、床面からの深さ17cmのピ



第8図 SI-001

ットがある。推定される四隅を結ぶ対角線の交点に近い位置にあり、柱穴の可能性も考えられるが、カマド寄りの部分にも攪乱扱いとしたビットがあるため、断定しがたい。本ビットも攪乱の可能性はある。

周溝 南半部が不明であるが、全周するとみられる。隅部がやや不明瞭であるが、床面が若干黒ずんでいるためと思われる。西壁から約70cmのところに溝があり、堅穴拡張前の周溝と思われる。東壁からこの溝までの長さは2.6mである。南壁側が不明であるが、方形プランであれば、2.6m四方から3.2m四方まで、南壁側にも拡張されたと思われる。

カマド 北壁に位置する。拡張後の竈穴ではやや右（東）寄り、拡張前の竈穴ではほぼ中央に位置する。方形プランからの突出はやや大きい。両袖は遺存するが、状態はあまり良好ではない。火床部には特に赤色化した面がみられない。底面はかなり深く窪んでいる。使用時における灰のかき出し以外にカマド構築時に深く掘られたことも考えられる。堆積土中に灰白色の灰を多く含む層がみられ（2層）、カマドの最終的な使用による土層と思われる。底面からはかなり上方で、床面に近いレベルである。その下層（3層）と手前側主体の下層（6層）は黒色を呈し、炭化物を多く含む土層であろう。堆積土下層はあまり焼土を含んでいない。

堆積土 若干のローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土で、ほぼ単一な土層である。床面際はローム粒を多く含み、貼床とも思われるが、断定しがたい。

出土遺物 図示できた遺物は9点である。1～4・6・7はロクロ土師器杯、5はロクロ土師器高台付杯、8は瓦、9は鉄製の刀子である。

1は全く破損のない完形品である。内外面の一部に赤みや黒ずみがみられ、二次的に火を受けたと思われる。器面はやや荒れている。カマド煙道部下層から倒位で出土した。煙道部の立ち上がり部分で底面が急傾斜のためかなり横向きであるが、伏せた状態とみられる。2も遺存がよく、接合しない同一個体の小破片を加えると遺存は95%程度である。破損部分の大きさは口縁部周約1/3で、口縁部からの深さは器高の1/2強程度である。その形状は土器を横からみて「コ」の字状であり、体部破断面が平らな整った形態である。体部の破断面は細かい剥離がみられる。意図的に打ち割られたものとみられ、そのために接合しない。小破片を除く土器主要部分は破損部から続くひびにより2辺に割れて接合する。しかしこれは打ち割り時に意図されたものか断定しがたく、後の破損も考えられる。内面に薄い黒色の筋が底部から口縁部近くまでみられるが、灯明に関わるものか断定しがたい。器面はやや荒れているが、変色や煤の付着はない。3も遺存のよい個体であるが、かなり細かく割れている。口縁・体部内外面が黒ずんでおり、二次的に火を受けたものと思われる。4は全体に暗い色調の土器である。内面に黒みの強い部分があり、油煙の付着とも思われるが、断定しがたい。5は高台部周辺の遺存である。カマド左袖前方の床面から出土した。体部は下端しか遺存しないため皿の可能性もある。破断面は平面的にみて2/3程度が整った円弧を呈し、意図的に整形されている。高台は一部を欠くが、これは単なる破損かもしれない。また現状はほぼ半截に近い状況でひびが入っているが、当初のものか断定しがたい。一部に破断面部分まで黒ずみや赤みがみられ、整形後に火熱を受けたものと思われる。形態からみて再利用品であり、灯明芯の押さえや硯等への転用が考えられる。

6・7は文字の墨書をもつ土器である。ともに小破片で、墨書は欠損部分まで続き、判読できない。6は体部外面に正位で書かれていると思われる。7は底部外面中央にやや大きく記されている。

8は丸瓦で、無段式のものである。狭端面がわずかに遺存するが、両側面及び広端面側を多く欠損する。凸面は回転を利用した横方向の入念なナデが凸面側からみて右から左に施されている。広端縁から6cmのところ強いロクロ目がみられ、わずかに段状となっている。広端面は凸面側上方からみて右から左へのヘラズリが施されている。凹面は布目痕が広端縁まで存在する。また粘土板の切り離し痕が凹面からみた左上から右下に至る幾条もの平行線としてみられる。胎土は白色粒・透明粒等を含み、色調は黄灰色、焼成は良好である。焼土が付着しており、カマドの構築材として使用された可能性が考えられる。

9は切先を欠くが刃部の多くと茎を遺存する。茎の途中で折れて2片になっているが同一個体である

う。本来は折損部で接合すると思われるが、錆跡により接合しない。また莖は途中で折れたものが重なって錆付いている。背肉は深く直角的に作り出されるが、刃間は浅い。現存長は2片を合わせて14.0cmである。莖長は現状で8.3cmであるが、重なった部分を考慮するとおよそ9.4cmである。本来の刃部長は5.7cm以上、本来の全長も15.1cm以上である。刃部幅は7.0mm～13.0mm、背厚は3.0mm、莖幅は4.5mm～6.5mm、厚さは2.5mm～3.0mmである。莖尻側には、柄の木質の一部が錆付いている。重さは2片合わせて18.21gである。1片は下層であるが、もう1片は上層からの出土である。

図示できた土器とできなかった土器片を合わせた総量は4,050g（重量の総量について以後は本遺構と同様であり、単に重量と記述する）、今回の調査区のなかでは多量なものの一つである。杯類は土師器が多く、須恵器は少ない。土師器杯のなかには内面及び内外面とも黒色処理されたものがみられる。須恵器杯の産地は新治窯産、南比企産、下総産があるが、他の窯跡産もあるかもしれない。なおここでいう下総産は千葉市・佐倉市・富里市など鹿島川・高崎川流域等に所在する窯跡出土の須恵器を指す。千葉市南河原坂窯は上総国に入る可能性があるが、同種の須恵器については便宜的に下総産に含めて扱う。逆に下総国でも三和窯など北西部に所在する窯跡出土の須恵器については下総産に含めない。甕は下総産がやや多い。土師器甕は武蔵型がやや多く、在地産は少ない。

SI-002(第9図、図版3)

位置 調査区南側の12K-93グリッド周辺に位置する。

形状・規模 わずかに横長の方形で、2.5m×2.77mの規模である。深さは10cmであり、遺存が悪い。また南側では帯状に擾乱を受けている。全体の面積は7.24㎡、床面積は6.31㎡である。

床面 ほぼ平坦である。床面は中央が若干硬化しているが、周囲との差は顕著でない。

周溝 北壁を除く三壁に巡る。

カマド 北壁中央に位置する。方形プランからの突出は大きく、カマドはほぼ突出部に納まると思われる。構築材は遺存しないが、突出部の底面は全体に赤みを帯びている。

堆積土 ローム粒を含む黒色土を主体とする。カマド部分は焼土を多く含む。

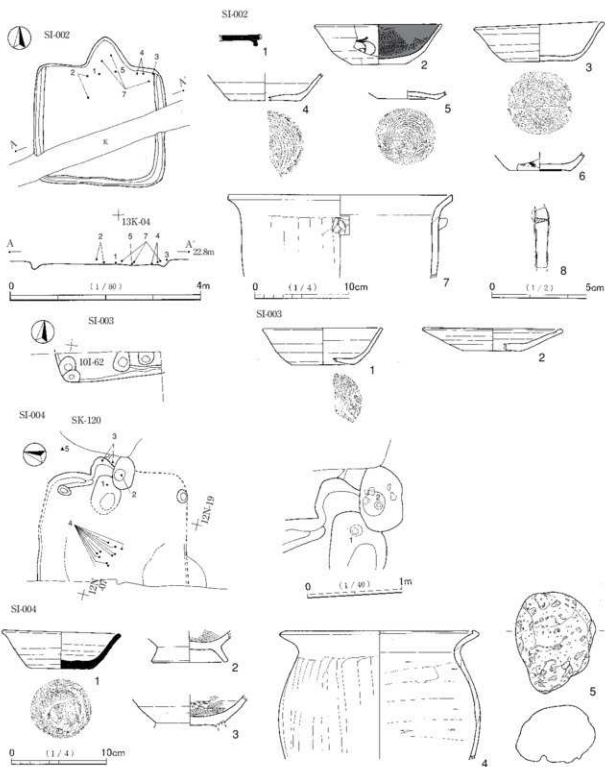
出土遺物 図示できた遺物は8点である。1は緑釉陶器皿または椀、2～6はロクロ土師器杯、7は土師器甕である。8は鉄製品で鉄鎌と思われる。

1は底部周辺の小破片である。灰白色の素地に明るい緑釉が全面に掛かっている。釉によって器面はガラス質になり、内面には貫入風のひび割れがみられる。狼投産と思われる。2・3はやや遺存がよいが、他は悪い。

2・6は体部外面に墨書がある。ともに欠損部に続き、判読できない。2は文字と思われるが、記号の可能性も若干考えられる。6は遺存が少なく、文字か記号か不明である。2は内面に黒色処理が施されている。3の底部は回転糸切り後、回転ヘラケズリが施されている。体部下位に施されるヘラケズリはやや手持ち風な部分もあるが、底部の様相から回転ヘラケズリでよいと思われる。4・5の底部は回転糸切り後ほぼ無調整である。

7は胴部外面上位に崩れた方錐状の把手が付く。色調はわずかに灰色みを帯びる部分があるが、大部分が褐色である。胴部外面には手持ちヘラケズリが施されており、タキ目はみられない。胴部内面の調整もヘラナデである。器形は須恵器的であるが、須恵器生産が衰退していく過程での土師器と思われる。

8は鉄鎌の刃部片である。片刃箭式の刃部で、先端を欠く。刃部から棒状部へは連続的ではみられない



第9図 SI-002・003・004

い。現存長は3.1cm、刃部の最大幅は7.5mm、厚さは3mm、茎の幅は6mmである。重さは2.47gである。

遺物はカマド及びその周辺から出土した。出土層位は竪穴の遺存が下部であるため、床面から下層である。3は破損しているが北東隅部から正位の状態で出土した。廃棄時には完形に近い状態であったことも考えられる。

重量は800gである。須恵器杯片は少ないが、新治窯産や北武蔵産と思われるものがある。土師器甕は

武蔵型で、小型のものもその可能性がある。須恵器甕は下総産と思われるものが少量ある。その他に灰釉陶器碗の破片がある。

SI-003(第9図、図版3)

位置 調査区北西側の10I-62グリッド周辺に位置する。

形状・規模 方形の形態で、遺存する東西方向の長さは2.2m、深さは25cmである。南西隅部付近を検出したが、多くが調査区外に入る。また掘乱によりかなり破壊されたと思われる。縦長・横長等の形態の区別は不明である。カマド・出入口ピットの位置が不明のため、主軸方位も不明である。

床面 本来は平坦と思われるが、堅穴内に幾つかのピットが検出され、遺存も少ないため凹凸がある。南西隅部のピットは床面からの深さが13cm～20cmであり、掘形底面を露呈させた可能性がある。東側のピットは2基が接続した形状で、隅部側のものは床面からの深さが65cm、堅穴中央側のものは18cmである。掘乱に近く、片方はかなり深いため掘乱の一部と思われる。

周溝 南辺の一部に遺存する。全周するか不明であるが、他壁にも巡ると思われる。

カマド 他の堅穴住居の様相から南壁を除く3壁のいずれにも位置する可能性があるが、北壁と東壁のどちらかに位置する可能性が高い。

堆積土 ローム粒・ロームブロックをやや多く含む暗褐色土である。遺存が少ないため土層断面図を作成していない。

出土遺物 図示できた遺物は2点である。1はロクロ土師器杯、2はロクロ土師器皿である。ともに遺存は少ない。1は体部外面下位に回転ヘラズリが施されているが、底部外面は回転糸切り後無調整である。2はやや不明瞭であるが、体部外面下位に回転ヘラズリ、底部外面に手持ちヘラズリが施されていると思われる。重量は400gであり、少量である。須恵器甕に新治窯産と下総産がみられる。また緑釉陶器碗または皿と思われる口縁部片が1点ある(図版25、3・参)。灰白色の素地に明るい黄緑色の釉が掛かるものである。

SI-004(第9図、図版3)

位置 調査区南東側の12N-08グリッド周辺に位置する。

形状・規模 方形で、南北方向の長さはおよそ3.1m、深さは5cm前後である。西辺隅を検出したが、中央付近から東辺隅は調査区外に入る。床面付近のみの遺存で状態が悪く、縦長・横長等の形態の違いは不明である。カマドの位置は不明であるが、北壁か東壁に位置すると思われる。北壁の場合、主軸方位はN-12°-W、東壁の場合、主軸方位はN-78°-Eである。プランがほぼ正方形の場合、面積は9.5㎡程度である。

床面 東辺中央から中央に向かってかなり広く硬化しており、南北壁際との差が明瞭である。

周溝 検出範囲内ではほぼ全周する。南辺の周溝が不整であるが、堅穴の遺存が悪い影響であろう。

カマド 調査区内では山砂等の構築材が確認できなかった。

堆積土 暗褐色土で、ロームの包含はあまり多くない。土層断面図を作成していない。

出土遺物 図示できた遺物は5点である。1は須恵器杯、2・3はロクロ土師器高台付杯、4は土師器甕、5は軽石である。1は下総産の須恵器で完形品である。若干の接合があるが、ひび割れ程度のものである。底部外面はヘラ切り痕が顕著に残る。底部は手持ちヘラズリが施されているが、体部下位には施されていない。カマド部分の下層から正位で出土した。出土状況から、廃棄時にはひびのない完形であったことも考えられる。2は高台部周辺の破片である。高台は低く、「ハ」の字状に開く。3は底部から体部

下位にかけての破片である。ほぼ欠損した高台部の破断面が磨られており、再利用されたものである。無台の杯的な使用や砥石としての使用などが考えられる。2・3もカマド周辺の出土である。2は倒位の状態で出土した。4は口縁部から胴部中央までの遺存は2/3程度あり、比較的よいが、下半部を欠損する。口縁部が内側に肥厚する。やや細かく割れているが、堅穴中央から比較的にまっすぐに出土した。重量150gであり、少量である。須恵器杯には下総産の他、北武蔵産と思われるものがある。

SI-005 (第10図、図版4)

位置 調査区東端の10N-65グリッド周辺に位置する。

形状・規模 方形の堅穴である。南北方向の長さは2.93mであるが、東西方向は不明である。なお南北方向と東西方向のどちらが主軸か不明である。深さは数cmであり、遺存が悪い。東側が遺存するが、東辺中央付近はSK-032に破壊されている。また堅穴中央部分は南北に走る擾乱により大きく破壊されている。西辺が確認できなかったが、床面まで浅いことに加えて、大きな重複が予想されるSI-006の存在によるものであろう。カマド・出入口ピットは検出されず、主軸方位は不明である。仮に北壁側にカマドが存在するとみるならば、主軸方位はN-16°-Wである。またはほぼ正方形に近い形態と仮定すると、面積はおおよそ9.0㎡強である。

床面 ほぼ平坦である。堅穴中央部分を主体として硬化している。

周溝 一部の遺存であるが、本来は全周すると思われる。

出土遺物 図示できた遺物は2点である。1はロクロ土師器杯、2は瓦である。1は底部周辺の小破片である。内外面の一部に黒色物質の付着がみられる。やや光沢があり、灯明の油煙の可能性があるが、断定しがたい。2は平瓦の狭端部側と思われる一部の破片である。凹面に捺板痕跡がなく、一枚作りと思われる。狭端面と凹面からみて左側面の一部が遺存する。狭端面は凹面側上方からみて左から右、左側面は下から上へのヘラケズリが施されている。凹面には布目がみられるが、狭端縁まで残る部分とナデまたはヘラケズリにより消される部分がある。側縁際は下から上へのヘラケズリによって面取りされ、布目が消えている。凸面はたたき目が狭端縁、側縁までみられる。胎土は白色・黒色・褐色・透明等の砂粒を含み、色調は黄褐色、焼成は良好である。1・2とも南側から出土した。

重量は150gであり、少量である。土師器甕のなかに口縁部が内側に肥厚するものがある。

SI-006 (第10図、図版4)

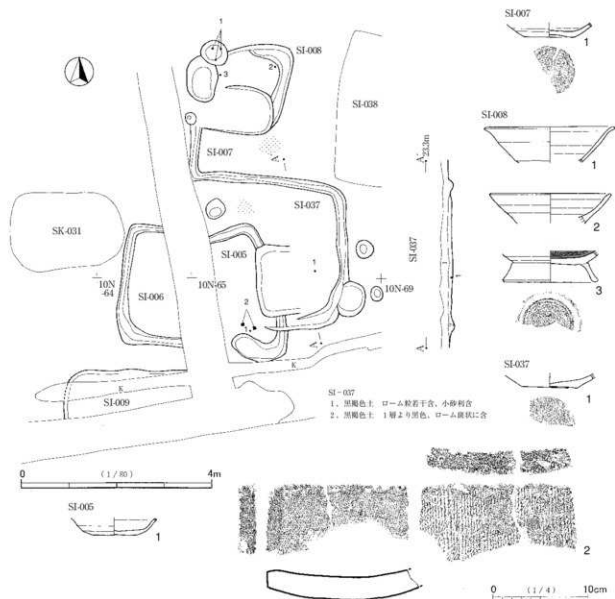
位置 調査区東端の10N-64グリッド周辺に位置する。

形状・規模 方形の堅穴である。南北方向の長さは2.49mであるが、東西方向は不明である。またどちらが主軸か不明である。深さは数cm～8cm程度であり、遺存が悪い。西側が遺存するが、堅穴中央部分から東側が南北に走る擾乱により大きく破壊されている。東側が確認できなかったが、床面まで浅いことと重複が予想されるSI-005の存在によることが考えられる。カマド・出入口ピットは検出されず、主軸方位は不明である。仮に北壁側にカマドが存在するとみるならば、主軸方位はN-5°-Eである。またはほぼ正方形に近い形態と仮定すると、面積はおおよそ6.0㎡弱である。

床面 ほぼ平坦である。

周溝 検出範囲内では巡る。全周すると思われる。

出土遺物 重量は50gで、土器片数点の出土である。図示できる遺物はない。土器片の時期は9世紀代と思われる。



第10図 SI-005・006・007・008・009・037

SI-007(第10図、図版4)

位置 調査区東端の10N-45グリッド周辺に位置する。

形状・規模 方形の堅穴の南西隅部周辺を検出したと思われるが、南辺と思われる周溝がSI-037北辺の周溝と共有するかのような状況であり、不明瞭である。また中央から北側はSK-033に切られている。さらにSK-033の北側にはSI-008があり、本堅穴と重複すると思われるが、重複状況は確認できない。東辺・北辺は検出されなかった。以上のように本遺構の様相は不明瞭であるが、その原因としては、まず本遺構周辺で遺構の重複が著しいこと、また確認面と床面のレベルが近いこと、さらに本遺構の東側と思われるところで調査年度が異なることなどがあげられる。本遺構の東方にはSI-038があり、その様相から本遺構とは重複していないと思われる。本遺構の規模は不明であるが、SI-038まで延びないとすると、東西長は3m以下であろう。南北長は不明であり、そのため面積も不明である。確認面からの深さは4cmであり、床面付近のみの遺存である。カマド等は検出されず、主軸方位は不明であるが、仮に北壁側にカマドが存在するとみれば、主軸方位はおよそN・4°・Eである。

床面 ほぼ平坦である。検出した範囲の東側に焼土範囲がある。

周溝 南西隅部周辺の周溝を検出したと思われるが、様相が不明瞭である。

出土遺物 図示できた遺物はロクロ土師器杯1点で、底部周辺の小破片である。底径は小さい。底部の切り離しは回転糸切りで、底部周縁と体部下位外面に回転ヘラケズリが施されている。重量は60gで、ごく少量である。

SI-008 (第10図)

位置 調査区東端の10N-35グリッド周辺に位置する。

形状・規模 遺存が少なく、検出したのは北東側の一部である。北東隅から東側周溝の一部が遺存していると思われるが、かなり不明瞭である。西側も不明瞭で、土坑状のピット2基があるが、本遺構の名残と思われ、本遺構に含めた。中央から南側は土坑SK-033に切られている。SK-033南方にはSI-007があり、本来的には本遺構と重複していると思われるが、重複状況はうかがえない。本遺構の縦横の長さは不明であり、面積も不明である。深さは6cmである。カマド等は検出されず、主軸方位も不明である。

床面 一部が平坦であるが、本来の床面よりもやや下がっていると思われる。

周溝 わずかに東壁北側から北東隅部分にかけて遺存していると思われる。

出土遺物 図示できた遺物は3点である。1・2はロクロ土師器杯であるが、杯部の一部のみの遺存であり、高台が付く可能性がある。3はロクロ土師器高台付杯である。3の内面は黒色処理が施されている。1・2は黒色処理が施されておらず、3とは別個体である。3の高台は足高で、大きく開く杯部が付く。杯部の器形は椀形も考えられるが、椀形のものも杯に含める。1の杯部も同様である。1は西側ピットのうち北側のものから出土し、2は北東部から出土した。3は西側で、南側ピット脇から出土した。

重量は130gで、少量である。土師器杯のなかには底部がやや突出し、回転糸切り後無調整のものがある。須恵器甕は新治窯産がある。また壺片は東海産と思われる。

SI-009 (第10図)

位置 調査区東端の10N-74グリッド周辺に位置する。

形状・規模 方形の堅穴で、北西隅部周辺の遺存である。東側及び南側が攪乱により大きく破壊されており、検出範囲内にも攪乱がみられる。確認面から床面までの深さも5cm程度であり、遺存が悪い。縦横の長さは不明であるが、遺存する東西方向の長さは2.7mである。カマド等は検出されず、主軸方位は不明である。北辺の様相から、四壁はほぼ東西南北に沿っていると思われる。

床面 ほぼ平坦である。

周溝 検出されなかったが、堅穴が浅い影響が考えられる。

出土遺物 なし。

その他 出土遺物がないため、本遺構の時期を特定できないが、形態や周囲の様相から奈良・平安時代に属する可能性が高いと思われる。

SI-037 (第10図、図版7)

位置 調査区東端中央の10N-56グリッド周辺に位置する。

形状・規模 南北長は3.27mであるが、東西長は不明である。深さは最も遺存のよい部分で5cmであり、概して遺存が悪い。カマド・出入口ピットは検出されず、主軸方位は不明であるが、北壁にカマドが付くとするとN-0°-E (W)、東壁にカマドが付くとするとN-90°-Eである。西辺側は攪乱により破壊されている。

る。中央から南寄りではSK-032と重複し、切られていると思われる。東辺南寄りでも円形の小土坑と重複し、周囲に小ピットもあるが、これらも後世のものと思われる。また南西側でSI-005と重複するが、新旧関係は不明である。さらに北側に位置するSI-007と本遺構は周溝を共有するかのような検出状況である。このようにプランが不明瞭である原因についてはSI-007のところにて記述したが、簡単に再述すると、浅い遺構の著しい重複、本遺構の東西で調査年度が異なることがあげられる。面積は正確な数値が出ないが、北辺・東辺・南辺の様相からプランは図のような復元案が考えられる。この場合、およそ10.5mである。

床面 細かい凹凸はあるが比較的平坦である。硬化面はみられない。2か所の焼土範囲が北西側にある。

周溝 北辺及び東辺から南東隅部周辺に遺存する。北辺の周溝がSI-004との関係で不明瞭であるが、本遺構に関わるとすると、本来全周することが考えられる。

堆積土 ロームを斑点状に含む黒褐色土である。

出土遺物 図示できた遺物はロクロ土師器杯1点である。底部周辺の小破片である。底部は回転糸切り後回転ヘラケズリが施され、糸切り痕は中央にわずかに残る。体部下位も回転ヘラケズリが施されている。内面は赤褐色の色調を呈するが、外面もまだらに赤褐色部分があり、赤みの強い胎土によると思われる。遺物の時期からも赤彩は施されていないと考える。竪穴東寄り中央の床面から出土した。

重量は150gで少量である。土師器杯に内面黒色処理されたものがある。土師器甕は常陸的な胎土であるが、ミガキはなくヘラケズリの施されたものがある。須恵器甕は下総産のものがあるが、土師器的なものである。須恵器杯は新治窯産が1点あるが、下総産はみられない。

SI-010(第11図、図版4・5)

位置 調査区北西側の9M-53グリッド周辺に位置する。

形状・規模 平面形態はわずかに縦長の方形で、長さ3.2m×幅3.0m、深さは25cmである。主軸方位はN-91°-Wである。確認面の面積は9.63㎡、床面積は8.40㎡である。5基～6基の土坑・掘乱等に切られている。土坑等は主として東(前)壁付近と北(右)壁際に位置する。

床面 はほぼ平坦である。ハードローム層まで達しており、全体に硬質であるが、中央部がやや顕著に硬化している。

柱穴等 4本柱の柱穴は検出されなかった。東辺で土坑が重複しているが、壁外にはみ出す大きな2基は後世の土坑である。中央のものも後世の遺構の可能性はあるが、竪穴内で東壁際中央に位置することから出入口ピットの可能性も考えられる。上部で広がっているのは土坑の影響であろう。床面からの深さは18cmである。

周溝 全周する。

カマド 西辺左寄りで、左隅部際に位置する。隅カマド的であるが、対角線上に向かうものではない。両袖の一部が遺存するが、かなり崩れており、状態が悪い。方形プランからの突出はあまり強くない。

堆積土 ロームを含む黒色土である。下層はロームブロックを多く含む。

出土遺物 図示できた遺物は12点である。1～9は土師器杯、10はロクロ土師器杯、11はロクロ土師器高台付杯、12は土師器高杯である。以上のうち1～9は古墳時代後期の土器、10・11は平安時代の土器である。本遺構の時期は遺物数が多い古墳時代後期であり、10・11は混入品と思われる。

1～8は浅い丸底の杯で、北武蔵型の杯である。また9は口縁・体部の小破片であるが、浅い丸底杯であろう。2～8はほぼ同様の形態・法量であり、9も近似した法量と思われるのに対して、1はそれらよ

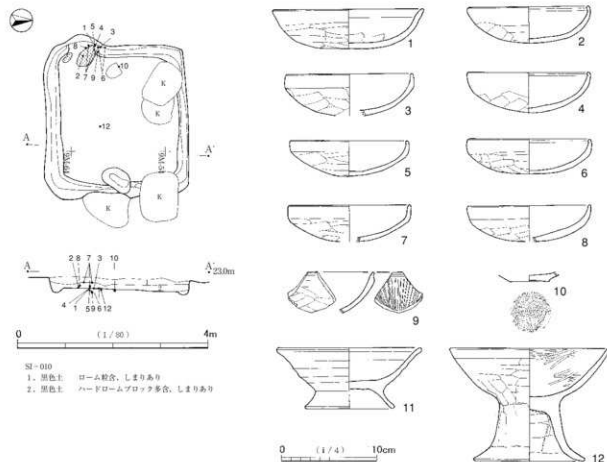
りも大型で、器高もやや深い土器である。2～8の口径は12.5cm前後、1の口径は15.6cmである。2～8の口縁部と体部の境は概して不明瞭である。また1の口縁・体部はヘラケズリにより、境が比較的明瞭であるが、体部から口縁部にかけての器形は連続的である。

9は北武蔵産の暗文杯である。内面に放射状のミガキが施されたもので、7世紀代に出現した畿内産土師器や金属器模倣等の新型土師器杯である。なお図示していないが同様のミガキをもつ土師器杯が他に5点ある。その一部またはすべてが9と同一個体と思われるが、胎土からやや断定しがたいものが含まれている。1～8のうち2・4・6は口縁端部内面が玉縁状に肥厚しており、5もややその傾向がうかがえる。直接か間接かは別にして銅鏡等の影響がみられる。1～8には放射状のミガキがないが、新型土師器杯の範囲で考えたい。なお3・7の口縁・体部は屈曲がやや強く、須恵器模倣も考えられるが、他の杯の様相からそれらも新出杯の影響が強いと思われる。

1～8のうち、最も遺存のよい2でも3/4程度であり、遺存良好なものは少ない。器面が概して荒れており、火熱を受けたものと思われる。1の色調は黒色部分が多いが、内面の一部で赤みが強く、被熱痕跡が顕著である。なお意図的な黒色処理は施されていないと思われる。

12は口縁部の遺存がわずかであるが、体部以下の遺存は比較的よい。杯部の内面は所々に煤が付着し、1～8同様被熱痕跡がうかがえる。

11は足高台の杯である。比較的遺存がよい。10は底部周辺の小破片である。底部はやや突出し、回転



第11図 SI-010

糸切り雑しの後は無調整である。11も赤みや器面の荒れ等被熱痕跡がみられる。11はやや不明瞭であるが、煤と思われる暗褐色物質が付着しており、同様と思われる。

遺物はカマド内及び周辺から集中して出土した。そのうち2はカマド器掛け口と思われる位置から正位で出土した。また1・3～7・9はカマド右袖周辺から出土している。なかでも比較的遺存のよい1・3～6は重なった状態で横向き及び傾いた正位で出土しており、一括して廃棄された状況がうかがえる。本遺構で使用されていた可能性も考えられ、その場合、カマド右袖脇に置かれていたか、カマド上方に置かれていたものがそのまま転落したというような状況を想定できる。2はカマド廃棄の祭祀に伴う可能性があるが、カマドの遺存が悪いため断定しがたい。12は竪穴中央やや南寄りの床面から横に倒れた状態で出土した。10はカマド近くの攪乱土中からの出土である。

重量は2000gで、多量である。土師器製のなかには常陸型甕があるが、非常に少ない。また武蔵型と思われるものもあるが、不明瞭である。概して明瞭な特徴をもつものが少ない。

その他 本遺構は今回の調査区内において唯一古墳時代後期に属する竪穴住居である。

SI-011 (第12図、図版5)

位置 調査区北側の9K-68グリッド周辺に位置する。

形状・規模 北辺が調査区外に入るが、ほぼ方形の形態と思われる。長さは3.77m、幅は推定で3.65m～3.8m程度であろう。深さは45cmである。主軸方位はN-74°-Eである。推定面積は確認で14.0㎡前後、床面で13.0㎡前後である。また主柱穴間の推定面積は3.9㎡である。西側部分が攪乱によりやや多く破壊されている。南(右)辺両隅は遺存するが、北東(左奥)隅は調査区外に入る。北西(右前)隅は遺存しないと思われる。

床面 ほぼ平坦である。柱穴間からカマド前まで硬化している。左右の壁際はやや軟質であり、中央部よりも黒色土を多く含んでいる。中央右寄りの床面に径60cm×20cm～30cmの焼土範囲がある。

柱穴等 3か所の主柱穴(P1～P3)が検出された。本来は4か所であるが、左前のもの(P4)は遺存しない。右前の柱穴(P3)は1/2程度の遺存である。遺存するカマド側の柱穴の径は56cm×41cm～42cmであり、ほとんど同じ大きさである。また床面からの深さも、左奥のもの(P1)は52cm、右奥のもの(P2)は54cmで、ほぼ同等である。P3の深さは64cmであり、やや深い。出入口ピットは破壊されているであろう。

周溝 検出範囲内では巡る。全周するとみられる。

カマド 東辺中央に位置する。方形プランからの突出は強くも弱くもない。両袖は遺存するが、前側の遺存が悪い。カマドの前側・焚き口部は方形プラン内に位置する。構築材は山砂を主体とするが、若干のローム粒を含む。被熱痕跡は強く、右袖の一部は内壁から袖内部まで赤褐色化している。また左袖周辺にも赤変した内壁及びその崩落土層がみられる。カマド底面は窪まず、カマド構築にさいしてあまり掘り込まれていない。底面(床面)は硬く、ぼろぼろになっていない。また赤変もみられない。灰を多く含む土層(5層)は底面及び底面よりもやや上位に堆積している。堆積土の煙道部側は天井部が崩れたと思われる山砂を多く含む。

堆積土 ローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土主体である。上層を主体にハードロームブロック主体の土層がみられるが、攪乱の影響と思われる。

出土遺物 図示できた遺物は11点である。1・2は須恵器杯である。3～6は土師器杯で、3・4は非ロクロ、5・6はロクロ土師器である。7は須恵器高台付杯、8は須恵器壺、9・10は須恵器甕、11は土

師器甕である。4・5以外は奈良時代の遺物と思われるが、4は古墳時代、5は平安時代の土器であり、混入品と思われる。

1は底径が大きく、やや浅い土器である。底部外面にヘラ書きがあるが、欠損部に伸びる部分の方が多いと思われる。文字か記号か不明である。灰白色の色調で、胎土は緻密である。やや粒径の大きな白色・暗褐色の砂粒を含むが、量は少ない。色調はややあまい。口縁部外面の一部が暗褐色の筋状に焦げており、二次的に火熱を受けたと思われる。産地は新治窯産と思われるが、永田・不入窯産の可能性も若干考えられる。不明瞭で、東海産や南比企窯産などが考えられる。2も底径の大きな杯である。底部周辺の遺存で、口縁・体部を多く欠損する。器高は不明であるが、1よりも深くなるとと思われる。胎土は白雲母や粒径の大きい白色・淡黄色粒を多く含む。新治窯産の杯である。7は底部周辺の小破片である。遺存が少ないため復元した法量にやや不安がある。胎土は白色針状物を含むと思われる。南比企窯産であろう。

3・6は内外面全面が赤彩された土師器杯である。4の外面は口縁端部近くまでヘラケズリが施されている。遺存は少ない。6は遺存のよい土器である。口縁部の一部を欠損するだけで、遺存部分はまったく破損がない。欠損部は口縁部の約1/5周である。破断面は正面からみて若干の凹凸が繰り返されており、意図的に打ち欠きされたものと思われる。内外面の器面は所々で焦げており、二次的な火熱を受けている。光沢をもつ油煙はみられないが、灯明に使用された可能性が考えられる。

4は須恵器杯蓋模倣と思われる土師器杯である。口縁部と体・底部の境は明瞭で、口縁部は「ハ」の字状に外に開く器形である。

5は3や6から時期が降るが、遺存のよい土器である。欠損部は口縁・体部の1か所である。その形態は弧状を呈し、かなり整っており、意図的に打ち欠きされた可能性がある。遺存部分は2片の接合個体で、細かく割れていない。口縁部の欠損段階では割れていなかったことも考えられる。器壁が薄く、焼成がかなりあまい土器である。

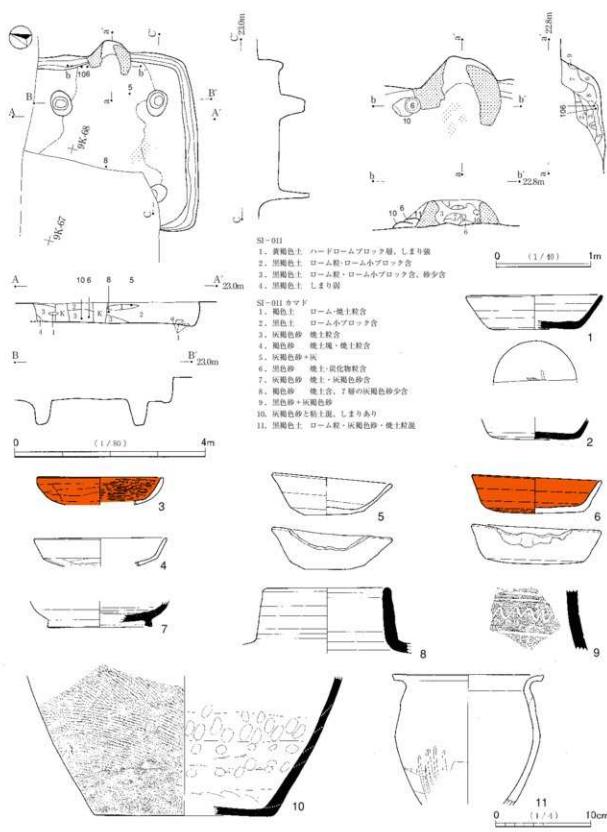
8は須恵器の直口壺で、遺存は口頸部周辺の一部である。やや長い口頸部が直立的に伸び、器壁は厚い。外面の色調はセピア色を帯びる灰色で、灰黄緑色の軸が一部に掛かっている。頸部と胴部の境に溜まって光沢をもつ部分もある。猿投窯等の東海産と思われる。

9は須恵器甕の頸部の破片である。外面は上位に2条、下位に1条の沈線があり、その間は1条の波状文が巡らされている。外面の色調はわずかに赤みをもつ暗灰色である。胎土は緻密で、焼成は堅緻である。産地は東海産と思われる。

10は新治窯産の須恵器甕である。胴部下位から底部にかけての一部が遺存する。胴部内面には、当て具痕の他、指頭圧痕が多くみられる。圧痕は底部内面から4cmと8cm前後の高さで横位の列状を呈している。粘土組織み上げの接合箇所を指で押さえたものであろう。上の列の4cm上位にはみられないが、遺存が少ないため中位以上に存在しないかどうかは不明とする。底部外面はナデにより製作台の痕跡が消されている。白雲母を多量に含み、焼成はややあまい。

11は小型の土師器甕で、常陸型の甕である。胴部外面下位は横方向のヘラケズリの後、ミガキが施されている。内面は黒ずんでいるが、口縁部から胴部上位にかけては器面が多く剥落している。

6・10はカマド左袖脇の床面から重なって出土した。10は胴部外面を上にした状態で出土し、その上に6が伏せた状態で出土した。欠損した10は6の台状の様相を呈しており、両者が本遺構の遺物として日常的に使用された可能性が考えられる。ただし6の欠損部は打ち欠きされ、灯明使用の可能性も高いことが



第12図 SI-011

ら、最終的にはカマド廃棄の祭祀に伴う遺物と思われる。8は中層からの出土である。また時期が降る5は確認面近くからの出土であり、かなり埋没した時点で本遺構に入り込んだものである。

重量は4,000gで、遺物量はかなり多量である。土師器甕の破片は常陸型が多いが、武蔵型もかなり多く、その量比は3:2程度である。

SI-012(第13図、図版5)

位置 調査区北西側の9M-47グリッド周辺に位置する。

形状・規模 小型の竪穴で、東西方向の長さが2.7m、南北方向の長さは不明、深さは12cmである。攪乱によって中央から南側を多く欠損するため正確な形態が不明であるが、正方形に近い形態と思われる。カマド位置が不明で、北辺では検出されなかった。近隣に位置するSI-010と同様に西辺に付くと仮定すると、主軸方位はN-78°-Wである。逆に東辺の場合はN-102°-Eである。いずれにしても南辺にカマドが付く可能性は低いと思われるので、東西方向の長さが主軸長と考えられる。形態がほぼ方形とすると、推定面積は7.0㎡前後である。竪穴内東側に土坑があり、本遺構を切っていると思われる。また北辺際中央から外側に幾つかのピットがみられるが、近世以降のものと思われる。

床面 全体に硬化しているが、中央が顕著である。

周溝 検出範囲内では巡る。全周すると思われる。

出土遺物 図示できた遺物はない。武蔵型の土師器甕口縁部片1点のみの出土で、重さは5gである。

SI-013(第13図、図版5)

位置 調査区北側の9K-71グリッド周辺に位置する。

形状・規模 長さは不明、幅は3.89m、深さは23cmである。攪乱により中央から南側を多く欠損する。また北辺は北西隅が遺存するが、中央から北東隅際が調査区外に入る。主軸方位はN-20°-Wである。ほぼ方形の形態と仮定すると、遺存は1/2強で、推定面積は確認面で15.0㎡程度、床面で14.0㎡程度であろう。

床面 確認面から床面までやや浅く、床面はソフトローム層下位からハードローム層上位に構築されている。そのため全体にやや軟質であるが、中央は若干硬化している。壁際は黒色土をやや多く含んでおり、特にカマド右、北東隅近くの床面が顕著である。ピットが中央右寄りと中央左寄りの攪乱際に存在するが、位置から本遺構に伴うものではないと思われる。

周溝 検出した範囲では巡る。全周するとみられる。

カマド 北辺中央に位置する。両袖前側を検出したが、多くが調査区外に入る。底面は床面よりもかなり窪む様相がうかがえる。

堆積土 ローム小粒を含む黒褐色土が主体である。

出土遺物 図示できた遺物は8点である。1は須恵器蓋、2はロクロ土師器蓋、3は須恵器杯、4・5はロクロ土師器杯、6は須恵器甕片転用の砥石、7は須恵器甕、8は土師器甕である。

1はおよそ1/2の遺存である。つまみを欠損する。天井部頂部には、沈線が直径1cmの大きさで円形に巡っている。つまみを貼り付けるためのものである。周囲には回転さ切り痕がみられる。色調は灰色である。胎土に白色針状物が多く含まれることから南比企窯産と思われる。

2は口縁部の1/2が遺存するが、天井部を欠く。口縁端部は直角に短く折れ、先端部は丸みをもつ。内面は沈線が巡り、口縁端部を形成している。調整手法は丁塚で、天井部のヨコナデは四重から五重の圏線状を呈する。胎土は白色・黒色・褐色の細砂粒を含むが、概して緻密である。色調は橙色で、在地の土器

であるが畿内産土師器的な雲間気をもつ。焼成はややあまいが、全体に作りは良好で、国府に特徴的な土器である。

3は新治窯産の杯である。口縁部・体部上位をおおむね弧状に欠損する。欠損部から続いて口縁部が小さく破損するが、一部を除いて接合する。その他はひび割れ程度で破損がなく、比較的遺存がよい土器である。欠損部の破断面は弧状が2連続していると思われる、不整な「W」状の形態である。口縁部周は全体のちょうど1/3である。破断面の形状とともに意図的な打ち欠きとみられる。底部外面にはヘラ書きが存在する。細く浅い線のため一見して明瞭ではないが、図で右上から左下に走る1条の線はやや強い。またそれに交差する左上から右下に走る線はやや弱いが確実である。その中間にも1条線があるが、ヘラケズリの痕跡とも思われるため図示しなかった。さらによくみると、ミガキ的な2条線がある。それらを加えると計5本の線となり、五芒星の可能性も考えられる。しかし調整技法とも思われ、不明瞭であることから、確実な「×」だけを図化した。また内面は下半で黒ずむ部分が多い。外面も体部下位の一部分がやや黒ずみ、上半部はやや赤みを持つ部分がみられる。

以上から、この土器は灯明器として使用されたものと思われる。ヘラ書きが焼成前であることを考慮すると、当初通常の器として使用しても、ゆくゆくは灯明器とすることが当初から予定されていたと思われる。なお打ち欠きの実施は、灯明開始時、使用中、使用後のいずれの場合も考えられるが、器高がやや深いため使用開始時を考えるのが最も自然と思われる。

4は箱形の形態を呈する杯である。遺存は口縁・体部の1/4以下である。歪みはないが、復元した図が大きく、違和感がある。遺存が少ないためであり、法量はやや小さくなる可能性がある。

5は底部外面に回転糸切り痕がみられる。周縁及び体部下位には回転ヘラケズリが施されている。

6は新治窯産の須臾器器身胴部片を砥石として再利用したものである。破断面4面のうち3面が磨られて滑らかである。そのうち1面は大きくカーブしており、平面形は5角形状である。広い面も元の土器の外面側はタキが一部で消えており、磨られた可能性がある。内面側の使用は焼成がややあまいため不明瞭である。土器としてみた場合、胎土は白雲母を多く含み、色調は明るい灰色である。

7は胴部上位の破片である。胴部上位の肩部分から最大径周辺にかけてカキ目ふうの沈線が巡っている。外面上位から中位周辺はヨコナデ調整であるが、下位の一部に平行タキがみられる。胎土は白色粒等の砂粒を多く含む。外面の色調は暗灰色部分とやや明るい灰色の部分がある。内面はやや青みのある灰色である。焼成はややあまい。産地は新治窯産と思われる。

8は武蔵型の土師器甕である。口縁部は「く」の字形から「コ」の字形に移行しつつある時期のものであるが、外面に接合痕がみられ、まだかなりの長さをもつ。

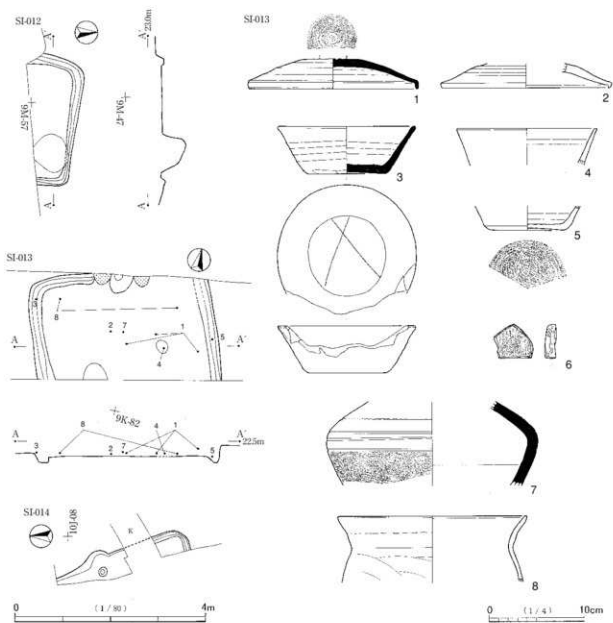
重量は1,550gで中量である。須臾器破片は新治窯産が多くを占める。土師器甕は武蔵型が多い。

SI-014(第13図、国図5)

位置 調査区北側やや西寄りの10J-07グリッド周辺に位置する。

形状・規模 遺存は東辺の中央付近と南東(左奥)隅周辺の一部である。多くが調査区外に入るため、正確な平面規模は不明である。また北東から南西に走る掘痕により破壊されている。深さは数cm～12cmである。東辺にカマドがあり、主軸方位はN-67°・Eである。カマドが辺の中央にあると仮定すると幅は3.9mである。不確実な数値であるが、おおよその規模がうかがえる。

床面 床面まで浅いため軟質である。



第13図 SI-012・013・014

周溝 左奥隅部分では巡っている。全周することが考えられる。

カマド 東辺に位置する。山砂等の構築材は遺存していない。カマド底面部分は周囲からの深さ17cmの窪みがある。使用に伴い窪んだこととカマド構築時の掘り込みの双方が考えられる。

出土遺物 図示できた遺物はない。土器量は少なく、重量は300gである。土師器片のみで須恵器片はみられない。杯は9世紀代と思われるロクロ土師器である。甕は在地のものとして武蔵型が混在する。

SI-015(第14図、図版5)

位置 調査区北側の9K-94グリッド周辺に位置する。

形状・規模 逆台形的な方形で、長さは推定3.4m、幅は2.9m～3.2m、深さは13cmである。主軸方位はN-17°-Wである。推定面積は確認面で10.2㎡、床面で9.25㎡である。南北に走る溝状遺構によりかなり多

く切られている。また北西(左奥)隅でSI-016と重複し、切られていると思われる。南壁もほとんど調査区外に入るため、周溝の一部を検出したに留まる。さらに東(左)壁も擾乱により上部で多く欠損している。以上のように本遺構は検出できない部分かなりあるが、遺存部分からほぼ形態が復元できるため、規模の推定値に大きな誤差はないと考える。

竪穴内には5か所の小ピットがある。それらが柱穴や出入口ピットにあたることを検討したが、位置的に難があり、擾乱扱いとした。また東壁ほぼ中央の壁外にも確認面からの深さ60cmのピットがある。これも擾乱であろう。

床面 床面まで浅いが、中央部分はかなり硬化している。壁際は若干の黒色土を含み、やや軟質である。

周溝 検出した範囲では巡っており、全周とみられる。

カマド 山砂等の構築材や焼土等は検出されなかった。東辺及び西辺中央には痕跡がうかがえず、南辺に付く可能性も低いと思われる。北辺中央には溝状遺構があり、この位置にカマドが存在したと思われる。

堆積土 ローム粒を含む黒色土が主体である。

出土遺物 図示できた遺物は7点である。1・2はロクロ土師器杯、3はロクロ土師器高台付杯、4はロクロ土師器杯または皿、5は須恵器甕、6は土師器甕、7は瓦である。

1は内外面とも暗褐色で、一部黒色に近い色調を呈する。2は口縁部・体部上位を不整な弧状に欠損する。その他ははひび割れだけで破損がなく、遺存がよい土器である。打ち欠きされたものと思われる。3は高台部から体部下位の一部にかけての破片である。口縁・体部のほぼ全周と高台の一部を欠損する。破断面は部分的に水平であり、欠損が意図的であるようにも思われるが、乱れた部分もあるため、断定しがたい。内面はミガキ・黒色処理が施されている。高台は輪高台で、杯部との接合が明瞭な部分がある。特に外面に顕著である。4の底部は突出し、円盤高台または平高台といえるものである。底部外面は回転糸切り後、周縁にヨコナデが施されている。糸切り痕が大きく残る。

5は須恵器甕の胴部片である。外面に同心円文のタタキがみられる。胎土は白雲母と白色・淡黄色粒を多く含む。新治産産である。他の土器と比べて古い時期のものであり、混入品と思われる。

6は小型の甕で、在地の土器である。内外面とも暗褐色の色調である。

7は平瓦である。広端部側と思われる破片である。広端面と凹面からみて左側面の一部が遺存する。広端面は凸面側上方からみて左から右、左側面は下から上へのヘラケズリが施されている。凹面には布目があり、側縁まで続く。広端縁は側面側が斜めに切れ、布目がみられないが、中央側は凹面と広端面が直角をなし、布目が縁まで続く。凸面はたたき目がみられるが、磨耗しており、やや不明瞭である。圧痕はナデまたはヘラケズリによって消されたか、または叩きが及ばない部分があると思われる。特に両縁際は叩きがみられない部分が多い。また広端縁は斜めに切られている部分がある。一部に粘土板の圧着痕跡がみられる。また粘土板の切り離し痕が凹面からみた右上から左下に至る幾条もの平行線としてみられる。胎土は白色・黒色・褐色・透明等の砂粒を含み、色調は褐色系、焼成は良好である。

床面まで浅いため、遺物の出土層位は床面から下層である。2は北東隅床面から出土し、3も北東隅寄りの床面から出土した。ともに正位・倒位等の状況は不明である。4の一部と1・7も2・3近くの出土で、出土遺物は北東隅周辺に多い。4は広く散っている。

重量は1.950gで、比較的多量である。土師器甕は武蔵型と在地のものがあり、常陸型はみられない。須恵器杯は新治産産、須恵器甕は新治産産と下総産がある。また須恵器大甕の破片があり、東海産または

北武蔵産と思われる。

SI-016 (第14図、図版5)

位置 調査区北側の9K-93グリッド周辺に位置する。

形状・規模 小型の竪穴で、形態は不明瞭であるが、逆台形的な方形になる可能性が考えられる。長さは不明、幅は2.21m、深さは35cmである。主軸方位はN-16°-Wである。面積は不明である。北側は攪乱により破壊されている。南東(右前)側でSI-015と重複し、本遺構が切っていると思われる。

床面 中央が硬化している。右前側の床面が低い、やや掘りすぎていると思われる。隅部分の床面が黒色土をやや多く含んでおり、床面の検出が難しかったためである。

周溝 検出範囲内では巡っており、全周とみられる。

カマド 山砂等の構築材や焼土等は検出されなかった。南辺及び遺存のよい東辺には痕跡がうかがえない。西辺は中央部分を欠損し、若干の可能性はあり、隅カマドも可能性はあるが、北辺に付く可能性が最も高いと思われる。そのため竪穴の南北方向を主軸方向とした。

堆積土 ローム粒・ロームブロック小粒を含む黒褐色土が主体である。上層の一部にローム主体の土層があるが、攪乱土と思われる。

出土遺物 図示できた遺物は新治窯産の須恵器杯1点である。遺存がかなりよく、口縁・体部に主として2か所の欠損がある他は破損のない土器である。2か所の欠損部のうち、一つはやや大きく、もう一つは小さい。大きい方の割れ口は整った弧状を呈し、小さい方も比較的整った弧状である。ともに打ち欠きされたものと思われる。なお大きい方でも口縁部周の1/6強、下位は器高の1/2程度のところである。したがって油や酒等の液体もある程度注ぐことが可能である。大きい方の破断面の下位は若干磨滅している。焼成があまりいため、打ち欠き後の自然な磨滅かもしれないが、意図的なものとも思われる。いずれにしても打ち欠き自体は丁寧に実施されている。器面は内外面とも一部が黒ずんでいる。灯明器として使用された可能性があるが、顕著な油煙ではなく、やや断定しがたい。東(右)辺際中央の下層から出土した。正位・倒位等の状況は不明である。

重量は850gで、やや少量である。土師器杯のなかに内外面赤彩されたロクロ整形のものがある。須恵器杯は新治窯産が多いが、北武蔵産と思われるものがわずかにみられる。須恵器甕は新治窯産のものである。土師器甕は武蔵型・常陸型及び在地のものがみられる。常陸型は少量である。

SI-018 (第14図、図版5)

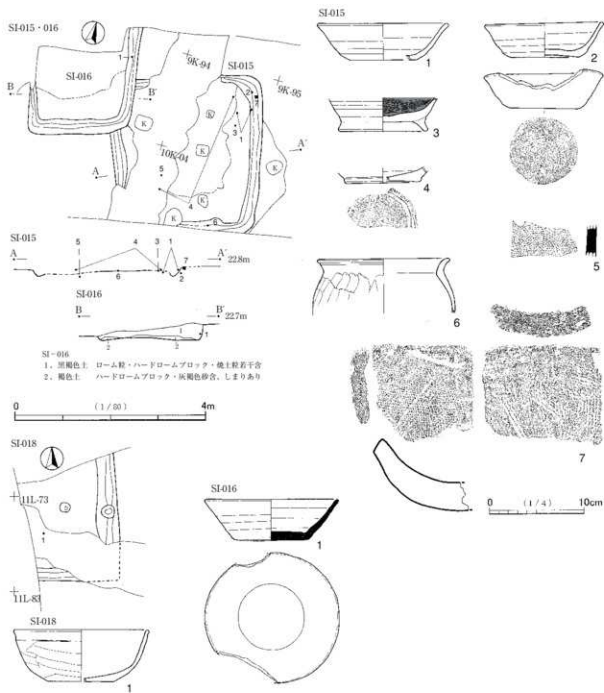
位置 調査区中央の11L-74グリッド周辺に位置する。

形状・規模 四辺はほぼ東西南北に沿っているが、検出できたのは南東側の一部であり、平面規模は不明である。深さは遺存のよいところで14cmであるが、数cmの部分が多い。中央から北側は攪乱により破壊されている。攪乱の北方は調査区外であるが、北壁は遺存しないとみられる。中央から西側は調査区外である。調査区内でも南東隅から中央にかけてSK-002により切られている。カマド位置は不明であるが、北壁に位置すると仮定すると、主軸方位はN-1°-Wである。

床面 周溝際を除いて硬化している。

柱穴 径24cm×20cm、床面からの深さ18cmのビットが検出された。右前側の主柱穴の可能性が考えられるが、浅いことと南壁から遠いため、断定しがたい。

周溝 検出範囲内では巡っており、全周すると思われる。東壁の周溝でビットが検出された。径28cm、



第14図 SI-015・016・018

深さは周溝底面から10cm、床面から20cmである。壁柱穴の可能性が考えられるが、他にはみられない。なお床面内のビットと本ビットを結ぶ線が南辺に平行、東辺に直交的である。偶然かもしれないが、両者とも本堅穴に伴う可能性も考えられる。

カマド 調査区内では痕跡を確認できなかった。東辺は中央付近まで遺存しており、片側に着ていれば東辺に付く可能性も考えられるが、調査区内で検出された堅穴住居のカマドが西辺に付くものが非常に少ないことから、北辺に位置する可能性が最も高いと思われる。

出土遺物 図示できた遺物は土師器杯1点である。非ロクロの土器と思われる。口縁部外面に接合痕が

残る。内面はミガキ、ナデが施されており、比較的丁寧な調整である。遺存は少なく、全体の1/3程度である。重複するSK-002部分から出土したが、本遺構に関わる出土遺物と思われる。

重量は400gで、少量である。須恵器杯は新治窯産が多く、盤もみられる。また灰釉陶器碗の口縁部片がある。土師器杯には灯明器と思われる油煙の付着したものがあ

SI-019 (第15図、図版6)

位置 調査区北東側の10M-07グリッド周辺に位置する。

形状・規模 やや縦長の方形で、調査区内では比較的大型の堅穴である。長さは4.4m、幅は3.8mである。深さは最深で45cmであるが、確認面に高低差があり最も浅い部分は数cmである。主軸方位はN-4°-Eである。推定面積は確認面で16.9㎡、床面で15.4㎡である。攪乱により堅穴中央から南北方向を主体に大きく破壊されている。また南西(左前)隅周辺がSD-004により切られている。

床面 中央が硬化している。壁側の床面は中央部よりも黒色土をやや多く含んでおり、若干軟質である。焼土範囲が東壁際南寄りの床面上で検出された。径は75cm×60cm、厚さは9cmである。

周溝 東壁中央部分と南壁の一部、西壁で伴う。南東(右前)隅周辺と東壁北寄りでは検出されなかった。しかし隅部分はやや掘り過ぎており、本来は巡っていたと思われる。東壁北寄りが不明瞭であるが、本来は全周することも考えられる。

カマド 検出されなかった。東西両壁は中央に周溝がみられるため、カマドが位置しないと思われる。北壁に位置すると思われるが、攪乱により破壊されたのであろう。

堆積土 上層はローム粒を若干含む黒色土がやや厚く堆積する。下層はローム粒・ハードロームブロックを多く含む褐色土である。下層もかなり軟質であり、硬化していない。下層の一部は床面を構成していたと思われるが、軟質でやや暗い土層であるため、隅部や壁際の床面の確認がやや困難であった。

出土遺物 図示できた遺物はロクロ土師器杯1点である。底部外面は回転糸切り離し後無調整である。完形の土器であるが、口縁・体部の3/4強が割れて接合したものである。底部は遺存している。焼土範囲からまとも出土しており、本来は破損していなかったものが土圧等により破損した可能性と意図的な打ち割りであることも考えられるが、断定しがたい。南東隅寄りの下層から出土した。正位・側位等の状況は不明である。重量は165gで、非常に少量である。1以外は土師器甕片である。武蔵型及び在地の甕と思われる。

SI-020A (第15図、図版6)

位置 調査区西端中央の11I-32グリッド周辺に位置する。

形状・規模 北東側の1/4程度を検出した。長さ・幅の数値は不明である。深さは10cmである。西側は調査区外に入る。南側はSI-020Bと重複している。土層断面の観察では本遺構の方が新しいと思われるが、SI-020B上に存在したであろう本堅穴の床面等を平面的に検出することはできなかった。調査区内でも攪乱が東西に走り、かなり壊されている。カマドは北辺に位置し、主軸方位はN-4°-Wである。

床面 確認面からは浅く、やや軟質である。攪乱のため硬化範囲を認めることができない。

周溝 北壁の一部にみられる。東壁にはみられないが、遺存が少ないため本来巡らないう不明としたい。

カマド 山砂等の構架材が北壁側に堆積しているが、袖部等を認めることはできなかった。煙道部が長く延びるが、攪乱や調査範囲の制約による影響が考えられる。形状はやや違和感があるが、方形プランから大きく突出する可能性が考えられる。なお煙道部分が北壁中央の位置と仮定すると、推定される堅穴幅

の数値は3m程度である。

堆積土 ローム粒を含む黒色土を主体とする。

出土遺物 図示できた遺物はロクロ土師器皿1点である。底部が突出する平高台の土器である。底部外面は回転系切り離し後無調整である。内外面がやや黒ずみ、一部に赤みの強い部分もある。二次的な火熱を受けている。カマド周辺の下層から出土した。

SI-020Bの1は破片の半分弱が本遺構から出土しており、どちらに帰属するか不明瞭な遺物である。便宜的にSI-020B出土遺物として扱ったが、本遺構と関わる可能性もある。なお本遺構の1と図示したSI-020B出土遺物に明瞭な時期差はみられない。

また、位置を記録していない出土遺物についても、SI-020B出土遺物と区別できない。

SI-020B(第15図、図版6)

位置 調査区西端中央の11I-43グリッド周辺に位置する。

形状・規模 中央から北東側にかけて全体の2/5程度が検出されたと思われる。長さ・幅とも不明、深さは28cm、主軸方位はN-10°-Wである。南側と西側は調査区外に入る。仮に平面プランがほぼ正方形であるとする、一辺の長さは推定3.7m、推定面積は確認面で13.5m²強、床面で12.5m²前後、柱穴間で3.0m²強である。北側でSI-020Aと重複する。本遺構が切られていると思われるが、本遺構の方が深い、下方は遺存している。また攪乱によりカマド煙道部の奥壁が若干破壊されている。

床面 中央が広く硬化している。しかしカマド前から北東(右奥)隅周辺の床面は、ロームブロックと黒色土を含むかなり軟質の土で構成されており、床面を検出できなかった。この範囲では床面からの深さが20cmを超える部分があり、竈穴構築時の掘りかた底面を露呈させたものと思われる。

柱穴 カマド側の主柱穴(P1・P2)2か所を検出した。左奥側のP1の径は33cm、床面からの深さは46cmである。右奥側のP2の径は37cm×34cm、深さは66cmである。カマドの両脇にもビットが検出された。左側のビットの径は35cm、深さは36cmである。右側のビットの径は29cm×20cm、深さは46cmである。カマド周辺の上屋を支える補助柱穴と思われる。

厨溝 検出範囲内では巡る。全周するとみられる。

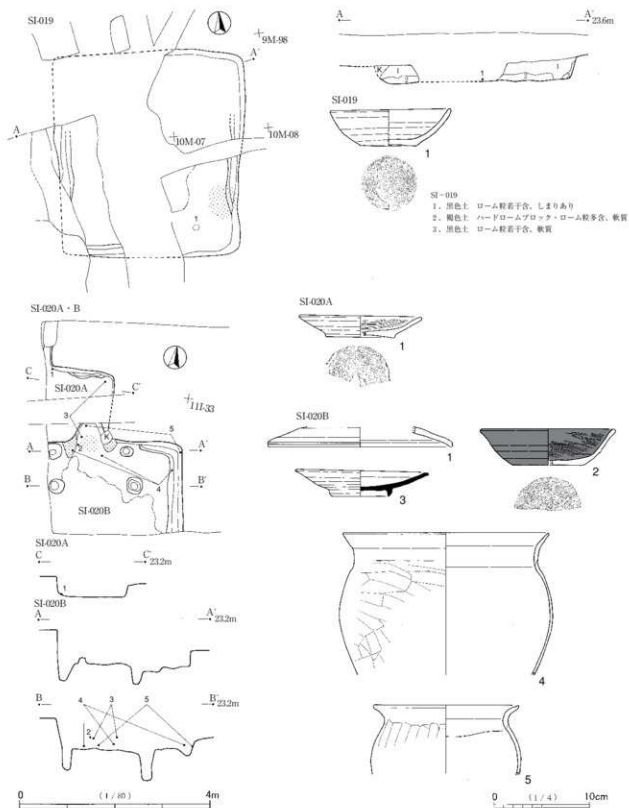
カマド 北辺に位置する。方形プランからの突出は比較的強い。両袖は遺存するが、状態はあまり良好でない。特に右袖はわずかな遺存である。火床部底面は赤褐色に焼けた被熱痕跡がみられる。カマド底面はほとんど窪まず、床面と同等の高さである。

堆積土 ローム粒を多く含む黒褐色土を主体とする。

出土遺物 図示できた遺物は5点である。1はロクロ土師器蓋、2はロクロ土師器杯、3は灰軸陶器皿、4・5は土師器甕である。

1は口縁部の1/3程度が遺存する。口縁部は外面からみると若干の折返し状であるが、内面は屈曲が小さい。内面の一部が強く黒ずみ、二次的な被熱痕跡が顕著である。2は底部外面中央に回転系切り痕が残るが、回転ヘラケズリにより多くが消されている。色調は全体に黒みが強く、内外面に黒色処理が施された土器と思われる。遺存は1/3程度である。3は60%の遺存である。高台の形態は三日月形で、接地部は狭い。軸は薄く、外面の範囲が不明瞭であるが、高台周辺は施されていないと思われる。内面は見込み部分を除いて施されている。O53号甕式並行のものと思われる。

4は武蔵型の甕である。口縁部は「コ」の字形を呈し、古い時期のものよりも短い。胴部の膨らみが強く、



第15図 SI-019・020A・B

最大径は胴部にある。ずんぐりした形態である。5は小型の土師器甕で、在地の土器である。

その他に図示していないが、小さな円鏝が2点ある。形態はともにやや扁平な楕円形で、大きさは長径2cm強、短径1.5cm強である。色調は一つが茶色、もう一つが白色である。自然石を何らかの石製品として利用したようにも思われるが、断定しがたい。

3は一部がカマド内中層から出土したが、一部はSI-020Aの北東隅に散っている。2もカマド内出土であるが、層位は中層である。4・5は広く散っており、層位は床面から中層にわたる。図示した遺物で出土層位が床面のみのものはみられない。

先述したように、出土遺物のうち位置を記録していないものについては本遺構とSI-020A出土遺物を区分できない。そのため以下に述べる遺物のなかにはSI-020A出土遺物が含まれている。しかし量的には本遺構出土遺物の方が多いと思われるため、遺構単位では正確性にやや欠けるが、ここで双方を合わせた土器破片全体の様相を記述する。重量は4,950gで多量である。土師器杯に箱形形態のものがあるが、古い土器の混入と思われる。須恵器杯には新治窯産の他、北武蔵産と思われるものがある。須恵器甕も新治窯産・下総産の他、東海産や北武蔵産と思われるものがみられる。また須恵器瓶に五孔の底部をもつ下総産のものがある。土師器甕は武蔵型が多いが、在地のものが一定量含まれると思われる。常陸型は少ない。

SI-021A(第16図、図版6)

位置 調査区西端中央の111-39グリッド周辺に位置する。

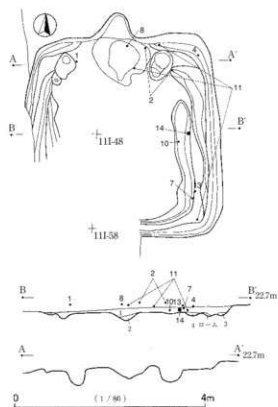
形状・規模 わずかに縦長の方形である。周溝が一部で三重に巡っておりプランの拡張が三回実施されたと思われる。最も外側のプランの長さは4.32m、幅は4.05m、深さは26cmである。主軸方位はN-2°-Wであり、拡張前も変わりが無いと思われる。南西側1/4程度の部分がSI-021Bと重複している。本堅穴の方が斬しいが、貼床が非常にわかりにくいいため重複部分のプランが不明瞭である。推定面積は確認面で17.4㎡、床面で15.8㎡である。

壁から二番目の周溝に伴う堅穴の規模は不明瞭であるが、推定される規模は長さが3.65m、幅も同等の3.7m程度である。推定床面積は11.0㎡強である。最も内側の堅穴の規模も不明瞭で、推定の長さは3.35m、幅は3.1m、推定床面積は9.5㎡程度である。

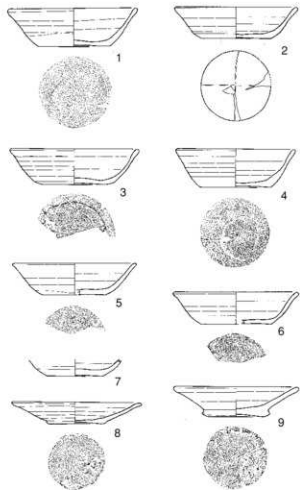
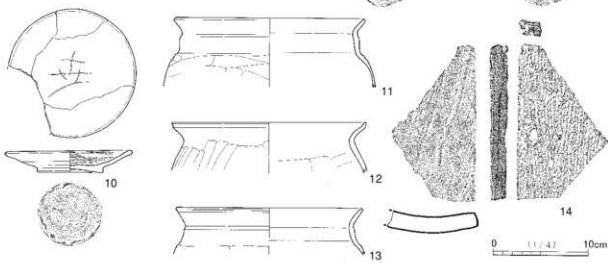
床面 全体的に硬化している。SI-021Bと重複する部分はSI-021Bの床面上にハードローンを充填して床面を形成していると思われる。貼床構成土に混じりがあること、及び本堅穴とSI-021Bの床面の差が少ないことから、この部分の床面や周溝を平面的に検出することができなかった。

柱穴等 ビットが2か所、カマド両脇の両隅に近い位置で検出された。右側のビットは径が67cm×46cm、床面からの深さが17cm・24cmである。左側のものは二つのビットが接した形状である。北側のやや大きい方のビットは径40cm、深さが31cmである。南側のやや小さいビットは径が20cmで、深さは不明であるが、北側のものよりは浅い。右側のものも底面が二段で南側が浅いことから、左右とも同様のあり方といえよう。南側のものが堅穴拡張前のビット、奥側のものが拡張後のビットと思われる。カマド周辺の土層を支える補助柱穴であろう。

周溝 最も外側の周溝はSI-021B重複部分を除いて検出され、ほぼ全周するといえる。内側の周溝はやや不明瞭である。中間の周溝は東西(左右)壁側で検出され、北壁もカマドの左右側に若干続くと思われる。しかし南東隅近くで外側の周溝とつながっていると思われ、消えている。南壁側は拡張されていないと思われる。最も内側の周溝は東壁から南壁側にまわり、南壁側に若干拡張されていると思われる。西壁側



- SI-021A
- 1. 黒色土 ①-土粒・砂粒・焼土粒・炭化物粒若干含
 - 2. 黒色土 ①-土粒少含、しまりなし
 - 3. 黒褐色土 ①-土粒含、しまりあり
 - 4. 黒褐色土 砂含、軟質



第16図 SI-021A

でも一部で検出されたが、カマドのある北壁側では検出されなかった。

プラン拡張前の周溝は一部で不明瞭であるが、本堅穴の周溝は本来的には全周すると思われる。

カマド 北辺中央に位置する。煙道部側が方形プランから突出するが、カマド本体は多くが方形プラン内に位置する。床面まで浅い影響もあって遺存は悪く、まったく形を留めていない。

堆積土 ローム粒を含む黒色土を主体とする。

出土遺物 図示できた遺物は14点と多い。1～7はロクロ土師器杯、8～10はロクロ土師器皿、11～13は土師器甕、14は瓦である。

2・10は線刻をもつ土器である。2は底部外面に「×(+)」の線刻がある。底部は遺存するが、口縁・体部は1/2強欠損する。遺存部分はやや細かく割れて接合する。1は2と同程度の遺存であるが、他の杯は1/2以下の遺存である。7を除くロクロ土師器杯は、底部に回転糸切り離痕がみられる。その後底部外面と体部下位に回転ヘラケズリが施され、糸切り痕はいずれもかなり消されている。7は回転ヘラケズリが底部全面におよび、切り離し痕がみられない。

10は底部内面中央にやや大きな線刻がある。5本の交差線で、九字切りに類似した記号と思われる。口縁・体部が弧状に1/4弱欠損する土器である。遺存部分の口縁・体部は三か所で割れて接合する。ただし線刻には破損が及んでいない。線刻の存在から、欠損部は打ち欠き、破損部は打ち割りされた可能性が考えられるが、それらが故意のものかやや断定しがたい。東側中央で内側の周溝上から出土した。正位・倒位等の状況は不明である。8も比較的遺存がよいが、やや細かく割れている。

土師器杯皿類には二次的な被熱痕跡がみられるものが多い。概して黒ずみ・赤み・灰色みを帯びており、特に5は顕著である。皿は8内面が全体にやや黒ずみ、10も口縁部の一部が内外面に黒ずんでいる。

11・13は武蔵型の土師器甕で、ともに「コ」の字形口縁である。特に11は典型的な形態である。12は在地の甕である。口縁端部が上方に立ち上がる。

14は平瓦である。小破片のため髪斗瓦との区別が付かないが、平瓦として扱う。狭端部側の破片と思われるが、やや不明瞭である。厚さが1.6cm前後であり、やや薄い。狭端面と思われる面の遺存は少ない。凹面からみて右側面の遺存がやや多い。右側面は上から下へのヘラケズリの後ナデが施されている。中央に稜がみられる。狭端面もナデが施されている。遺存が少ないためヘラケズリの方向が不明である。凹面には布目があり、両縁まで続くが、一部で粘土板への着着が少なく、痕跡が薄い。凸面は縄目圧痕があり、これも両縁まで続く。粘土板の切り離し痕が凹面からみた右上から左下に至る幾条もの平行線としてみられる。胎土は白色・透明等の砂粒を含み、色調は黄灰色、焼成は良好である。

位置を記録していない出土遺物については、SI-021B出土遺物と区別できない。なお位置を記録した遺物については、便宜的にSI-021Bに入らないものを本遺構出土遺物とした。SI-021B内のもも本遺構に関わる遺物が存在すると思われるが、混在していると思われるため、上記の扱いとした。

土器片については、SI-021Bの時期に近い古相のものや本遺構の時期に近い新相のものも若干みられるが、小片であるため全体を明確に二分することはできない。そのため遺構単位では正確性にやや欠けるが、双方を合わせた土器破片全体の様相を記述する。重量は18.53kgで非常に多量である。須恵器甕は下総産と新治窯産が多い。新治窯産のなかに横方向のタキをもつものがあるが古相のものである。須恵器杯は新治窯産が多く、南比企窯などの北武蔵産も定量みられる。下総産は少量である。土師器甕は武蔵型、在地産、常陸型がみられる。武蔵型が多く、常陸型はやや少ない。在地産のなかに回転糸切り離し痕をもつ

底部破片がみられるが、新相のものである。土師器杯には非ロクロのものも少量存在するが、古相のものであろう。その他では灰釉陶器碗、須恵器長頸壺、土師器蓋のつまみ、釥などがみられる。

SI-021B(第17図、図版6)

位置 調査区西端中央の111-57グリッド周辺に位置する。

形状・規模 わずかに台形に近い方形で、長さは3.0m～3.31m、幅は3.02m～3.23m、深さは20cmである。主軸方位はN-3°-Wである。面積は確認面で9.9㎡、床面で9.02㎡である。東辺が西辺よりも長く、北辺は南辺よりもわずかに長い。西側が南北に走る攪乱により破壊されている。また西辺は遺存するが、調査区外に接近しており、西側の形態にやや不安がある。北東側で大きくSI-021Aと重複している。本遺構の方が古いが、若干深いため、この部分の床面付近が遺存している。

床面 中央から南側が広く硬化しているが、SI-021Aと重複する部分はカマド前方で、底面は床面よりも深く掘り込まれている。深い部分は20cmを超えており、カマド構築・修復時だけではなく、本堅穴構築時の掘りかたと思われる。ハードルームブロックを主体とする土層が充填されているが、硬化面は確認できなかった。なお充填された土層が本堅穴の貼床か、SI-021Aのものか区別が付かず、またどちらも似たものであった可能性も高い。

柱穴等 南壁際中央で出入口ピットが検出された。径は21cm×17cm、床面からの深さは47cmである。ピットの手前で周溝との間の部分が、周囲の床面と比べて5cm～10cm高いが、ピット周辺の残りが良いのかもしれない。

周溝 比較的遺存がよい東辺と南辺の一部では巡っており、本来は全周するとみられる。

カマド 北辺やや右寄りに位置する。方形プランからの突出はあまり強くないが、遺存が悪いことや不明瞭である。両袖等の遺存はみられない。壁面に焼けた山砂や焼土が付着している。

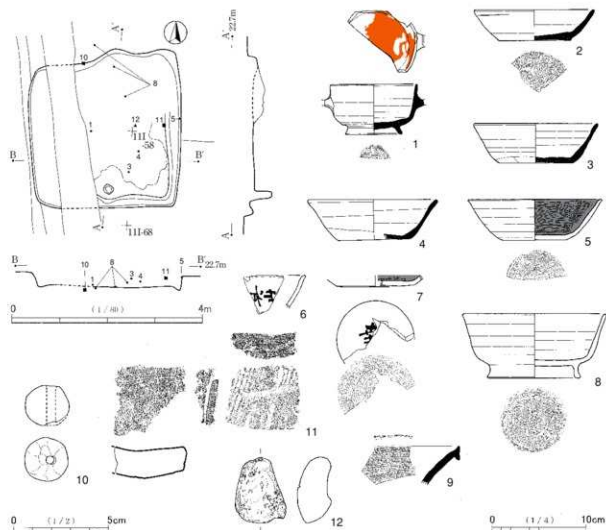
堆積土 ロームブロックをやや多く含む黒褐色土を主体とする。

出土遺物 図示できた遺物は12点で、やや多い数量である。1は須恵器双耳杯、2～4は須恵器杯、5～7はロクロ土師器杯、8はロクロ土師器高台付杯、9は須恵器甕、10は土玉、11は瓦、12は軽石である。

1は遺存が1/3程度である。把手(耳)は一か所の遺存である。相対する位置にもう一つの把手が付くと思われるが、欠損している。そのため器種は片耳杯の可能性もあるが、当該器種の様相から双耳杯の可能性が高いと考える。把手は断面長方形の板状で、杯部外面のやや上方に貼り付けられている。貼り付け痕が把手の下部で明瞭に残り、やや雑な貼り付けである。接着した基部側の遺存であり、中央付近から先端までの形態は不明である。杯部は高台が付き、高台端部は内面が凹んでいる。杯部は口径と底径の差が少ない箱形の形態である。内面の多くに赤色物の付着がみられ、朱墨の痕跡と思われる。内面はあまり滑らかではない。底部外面中央に焼成前の一条の線がみられるが、ヘラ書きではなく調整痕と思われる。切り離し技法は丁寧なヨコナデにより不明である。色調はやや暗い灰色で、焼成は緻密である。胎土は白色・灰色の砂粒を含む。常陸産の須恵器と思われる。

2の底部外面は回転糸切り離し後、無調整である。色調はわずかに黄色みを帯びる灰色で、胎土は緻密、焼成は良好である。白色針状物の含有は不明瞭である。器面は滑らかな質感である。東金子窯産と思われる。3・4は新治窯産の杯である。3は粒径の大きな砂粒は少ないが、白雲母を含む。4は多量の白色粒・小石、白雲母を含む。

6・7は墨書をもつ土器である。6は口縁・体部の小破片である。墨書は体部外面に横位で記されてお



第17図 SI-021B

り、文字を特定しがたいが、「…真山…」または「…具山…」などが考えられる。7は底部周辺の破片である。底部外面中央に「幸」と思われる文字が記されているが、欠損しているため判然としない。墨書は欠損部に続く。5・7は内面にミガキ・黒色処理がみられる。底部外面と体部下位に回転ヘラケズリが施され、糸切り痕はいずれもかなり消されている。

8は底部の遺存がよいが、口縁・体部は1/4強の遺存である。底部外面の高台内には静止糸切り痕が大きく残る。高台は丁寧に貼り付けられており、内側に沈線がみられる。また爪形圧痕がその内側の一部にみられる。高台端部は外側にやや鋭く張り出しており、接地部の幅がやや広い。口縁・体部はやや直立的で、形態は箱形的である。内面の一部が黒ずむが、二次的な被熱痕跡かやや不明瞭である。

9は口頸部の破片で、口縁部下の頸部外面に櫛歯状工具による押圧痕が巡る。外面は光沢があり、内面も降灰軸により部分的に光沢をもつ。色調はやや黄緑色を帯びる深みのある灰色である。混入物は少なく、焼成は堅緻である。東海産と思われる。

10は片方の孔側が若干欠損する。色調は赤褐色で、焼成は良好である。重さは11.21gである。

11は平瓦である。小破片のため鬘斗瓦との区別が付かないが、平瓦として扱う。狭端部側の破片で、凹

面からみて右角の部分である。右側面は下から上へのヘラケズリが施されている。狭端面は凹面側上方からみて左から右にヘラケズリが施され、またその後ナデが施されている。凹面には布目があるが、両縁側はヘラケズリが施され、消されている。狭端面側は左から右へ幅 2cm～4cm と広く面取りされている。右側縁側も 2cm 幅のヘラケズリであるが、遺存が少なく、方向は不明である。凹面には枳板痕と思われる痕跡がみられる。凸面はたたき目があり、両縁まで続く。かなり磨滅している部分がある。粘土板の合わせ目痕が所々でみられる。胎土は褐色・白色・透明等の砂粒を含み、色調は褐色、焼成は良好である。

12の色調はやや暗い。重さは25.9gである。

遺物の出土状況は散在的で、層位も床面から確認面までわたる。特段の傾向はうかがえない。

位置を記録していない出土遺物については、先述のとおりSI-021A出土遺物と区別できない。また位置を記録した遺物についてもSI-021Aのものが含まれる可能性があるが、便宜的に本遺構のプラン内のものを本遺構出土遺物とした。なお土器破片全体の様相についてはSI-021Aのところで記述した。

SI-022(第18図、図版6)

位置 調査区西端中央の11I-69グリッド周辺に位置する。

形状・規模 横長の方形で、長さは3.09m、幅は3.48m、深さは12cmである。主軸方位はN-5°-Wである。面積は確認面で10.43㎡、床面で9.58㎡である。南東(右前)側が攪乱により破壊されている。また確認面から浅いため全体に床面付近の遺存である。特に北西(左奥)隅部は、周溝まで欠損している。

床面 硬化面が中央を主体に南北にかけてみられる。北側はカマド前である。南側は出入口側と思われるが、ピットは検出されていない。

周溝 検出した範囲では、左右奥側の両隅周辺を除いて巡る。本来は全周すると思われる。隅部周辺については床面まで浅いため検出できないのであろう。ただし隅部は他の部分よりも若干浅くなっていると思われる。北西隅部に径18cm、深さ30cmのピットがある。周溝の位置であり、壁柱穴とも思われるが、他にみられないため断定しがたい。

カマド 北辺右寄りに位置する。方形プランからの突出は強い。土製支脚がやや奥側から出土している。基部のみの遺存と思われる、最終的な使用時の位置を留めているとみられる。支脚の位置から、カマドはほぼ突出部内に納まるといえる。両袖等の遺存はない。底面は床面からわずかに窪んでいるが、灰のかき出し等、使用に伴う程度のものである。堆積土に焼土粒を含む赤褐色土がみられる。

堆積土 若干のローム粒を含む黒色土を主体とする。

出土遺物 図示できた遺物は3点である。1はロクロ土師器杯、2はロクロ土師器高台付杯、3は土師器甕である。1はやや小型の杯である。杯部は碗形で、底径が非常に小さい。底部外面と体部外面下位に回転ヘラケズリが施されている。底部は回転糸切り離してあるが、糸切り痕はヘラケズリで多く消されている。カマド焚き口部と思われる位置から出土した。2は高台部付近の遺存で、杯部をほぼ欠損する。杯部の欠損が意図的なものか断定しがたい。切り離し痕は丁寧なヨコナデに消されてみられない。3は胴部の破片である。外面に格子目タタキが施されている。内面はヘラナデが強く施されており、当て具痕はみられない。在地における須恵器等の窯業生産終了後の土器と思われるため土師器とした。南壁際とカマドに近い北壁際に広く散っている。

重量は600gで、少量である。土師器が多く、須恵器との量比は9:1程度である。須恵器杯には新治窯産がある。また東海または北武蔵産と思われるものがあるが、小片のため灰土陶器の可能性もある。須

土器甕は下総産と新治窯産がある。土師器杯には回転糸切り離し後無調整のものもある。土師器甕は在地産、武蔵型、常陸型が混在している。

SI-023(第18図、図版6)

位置 調査区西側中央の11J-34グリッド周辺に位置する。

形状・規模 横長の方形で、主軸長は2.93m、副軸長が3.66mである。深さは5cmで床面の一部と周溝、カマドの火床面を残すのみの堅穴住居である。主軸方位はN-87°-Eである。推定面積は確認面で10.8㎡、床面で9.9㎡である。堅穴内に周溝の一部とカマドがみられ、本遺構の拡張前のものと思われる。南西(右前)隅周辺がSK-073に切られている。また北(左)側が東西に走る攪乱により破壊されている。

床面 中央が広く硬化している。遺存が少ないが、床面については比較的広範囲に把握できた。西側のカマド前周辺に2か所のピットがある。カマド前のは径42cm×35cm、床面からの深さが39cm、やや左側のは径30cm、深さが29cmである。カマド前のは深いため、本堅穴の掘りかたではなく、後世のものと思われる。左側のもも同様であろう。

周溝 全周するとみられる。中央からやや北(左)側に本堅穴以前の堅穴住居に伴うと思われる周溝が検出された。周溝の走行方向が本堅穴の四辺と平行していることから、本堅穴は旧堅穴から拡張されたと思われる。しかし十字状の形態を呈しているため、以前の堅穴住居がどのような形態であったか不明瞭である。何度かの拡張があったのかもしれない。拡張の場合、最も長く遺存する周溝と本堅穴の北(左)壁間の距離が1.2m～1.3mあり、大幅な拡張が含まれる。

カマド 西辺やや右(南)寄りに位置する。方形プランからの突出はやや強い。袖部は全く遺存していない。南東(右奥)隅部に大きなピットが検出された。径は70cm×54cm、床面からの深さは13cmである。古い堅穴住居のカマド火床部跡と思われる。

出土遺物 図示できた遺物はロクロ土師器杯1点である。底部付近から体部下位の一部にかけての遺存である。底部の切り離しは回転糸切りで、その後底部周縁と体部下位に回転ヘラケズリが施されている。右奥(南東)隅部の床面と同等レベルから倒れて出土した。

重量は300gで、少量である。須恵器はみられないが、灰軸陶器片が数点ある。土師器甕は在地のものである。

その他 上記の様相から、古い堅穴住居の様相を推測すると、右奥(南東)隅部に隅カマドをもち、最小の規模は東西方向2.5m、南北方向2.4mである。ただし以上の想定はかなり不確実である。

SI-024(第18図、図版6・7)

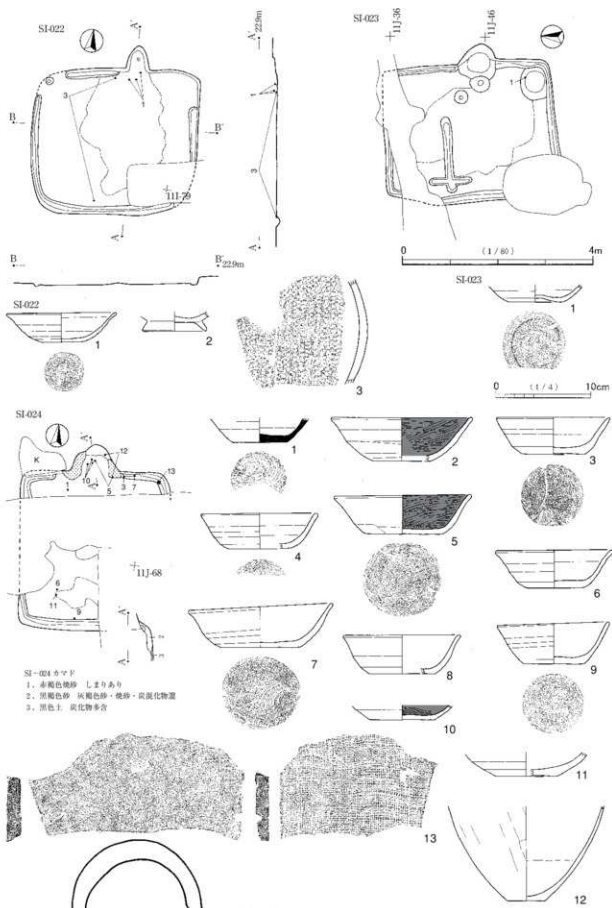
位置 調査区西側中央の11J-57グリッド周辺に位置する。

形状・規模 ほゞ方形で、長さは3.37m、幅は推定で3.1m、深さは24cmである。主軸方位はN-7°-Wである。推定面積は確認面で10.9㎡、床面で9.4㎡である。攪乱により多くが破壊されており、遺存するのは北壁際と南西側の一部である。

床面 中央部に若干の硬化部分がみられる。

周溝 検出範囲内では巡っており、全周する可能性が高い。

カマド 北辺中央に位置する。方形プランから大きく突出している。両袖が遺存するが、山砂の遺存はやや悪く、構築材に黒色土やロームが混じっていることも考えられる。被熱痕跡の遺存も悪く、火床部底面に赤変した面はみられない。底面は床面から若干窪んでいるが、あまり深いものではない。



出土遺物 図示できた遺物は13点である。1は須恵器杯、2～11はロクロ土師器杯、12は土師器甕、13は瓦である。

1は底部から体部中位にかけての一部が遺存する。底部外面は回転糸切り離し後は無調整である。体部外面はナデ・ヨコナデ調整で、明瞭なケズリ痕がみられない。胎土は白色粒を多く、白色針状物を少量含む。白色粒は粒径の大きいものもある。東金子窯産の須恵器と思われる。

土師器杯は法量に違いがある。本遺構のなかで大型と小型の二者に分けると、小型のものに3・4・6・8・9があり、大型のものには2・5・7・10・11がある。なお後者のうち5はやや小振りである。2・5・10は内面にミガキ・黒色処理が施されており、本遺構では大型品に集中する。完形に近い状態で遺存するものはなく、またいずれも破損している。最も遺存のよい7で80%程度である。すべての杯が黒ずみや赤み、または灰色に変色する部分があり、二次的な被熱痕跡がみられる。

12は武蔵型の甕である。胴部下位から底部までの一部が遺存する。胴部外面の一部は強く焦げて、炭化物が付着している。

13は丸瓦である。左右両側面とも一部が遺存するが、両端面はともに遺存しない。凸面は回転を利用したやや斜め方向の強いナデが凸面側からみて右やや上から左やや下方向に施されている。両側面は下から上へのヘラケズリ後ナデが施されている。凹面は布目痕が存在する。布目痕は右側縁まで連続するが左側縁は斜めに切られている。胎土は白色粒・透明粒・褐色粒等を含むが緻密である。色調は黄灰色であるが、内部はやや暗い灰色みを帯びる。焼成は良好である。

遺物はカマド周辺から北東隅にかけて多く分布する。また南西側にも若干みられる。遺物量が多いため、攪乱部分にも比較的多く分布していたと思われる。カマド内からは5・10・12が出土した。また1は左袖前方から正位で出土した。3はカマド右袖脇の下層からやや傾いた正位で出土し、7はその右脇の北壁際床面から正位で出土した。13は北東隅下層から狭端部側の破断面を下にして出土した。9は南壁際下層から正位で出土し、6は南西側中層から正位で出土した。出土状況からは特にカマドや堅穴住居廃棄の祭祀に関わる様相を認めたい。

重量は2250gで、多量である。須恵器杯には新治窯産の他、北武蔵産と思われるものがある。須恵器甕は新治窯産及び北武蔵産と思われるものに加えて、下総産がみられる。土師器甕は武蔵型のものと思われる。量的に少なく、常陸型はみられない。

SI-025 (第19図、図版7)

位置 調査区西側やや南寄りの11J-95グリッド周辺に位置する。

形状・規模 攪乱により北側と東壁際が破壊されている。規模は不明であるが、遺存する部分を計測すると、東西方向が3m、南北方向が2.6mである。深さは数cmであり、床の硬化面と周溝の一部をわずかに残すのみである。カマドは北壁に位置すると思われる。東側中央付近は床面が遺存している部分があり、その様相からカマドが位置する可能性は低いと思われる。したがって主軸は南北方向と推測される。方位はN-7°-Wである。

床面 硬化面が中央から南側の周溝際までみられる。

周溝 検出範囲内では巡っており、全周する可能性が高いと考える。

出土遺物 図示できた遺物はロクロ土師器杯2点である。遺存は少なく、1は底部から口縁部にかけての一部、2は底部付近の一部の遺存である。底部の切り離しとともに回転糸切りで、その後底部周縁と体

部下位に回転ヘラケズリが施されている。ともに一部が黒ずんでおり、二次的な火熱を受けたと思われる。1は南壁際西寄り周溝内から出土し、2は東側中央の床面から出土した。

重量は550gで、少量である。土師器が多く、9割以上を占める。土師器杯には回転糸切り離し後無調整のものもある。土師器甕は武蔵型が多い。須惠器杯は新治窯産と南比企窯産と思われるものである。

SI-026 (第19図、図版7)

位置 調査区西端中央の11I-34グリッド周辺に位置する。

形状・規模 検出したのは北壁側部分で、中央から南側は調査区外に入る。長さは不明、幅は5.46m、深さは58cm、主軸方位はN-8°-Wである。面積は不明であるが、ほぼ方形の形態と仮定すると、確認面で30.0㎡前後、床面で27.0㎡前後と推定できる。調査区内では最も大型の竪穴住居である。中央部分と東側が攪乱により破壊されている。しかし他の竪穴住居と比べて確認面から床面まで深く、壁の遺存がよい遺構である。

床面 壁側のみは遺存であるが、ハードルーム層に達しており、全体に硬質である。

柱穴等 大型の竪穴住居で、4本柱の主柱穴と出入口ピットの存在が予想されるが、調査区内では検出できなかった。

周溝 北西隅側周辺では巡る。北東側周辺では検出されなかったが、攪乱による影響と思われる。全周する可能性が高いと考える。

カマド 北辺中央に位置する。方形プランからやや大きく突出するが、カマド前側はプラン内に位置する。攪乱により右袖を含むほぼ1/2が破壊されている。左袖は奥側が遺存するが、前側は遺存しない。構築材はやや黄色みがかった灰白色の山砂である。粘性はやや弱く、砂質である。内壁は赤褐色に被熱している。カマド底面は床面よりも最深で24cm低い。底面上の土層(6層)はハードルームブロックを若干含む褐色土であるが、かなりほろほろしてしまりのない土層である。カマド左袖はこの土層の上に構築されている。6層はカマド構築時または作り替え時に埋め戻された土層である。火床部は6層上にあつたと思われるが、亦変した範囲はみられない。火床部の土層(4層)は灰を含むが黒みの強い土層である。まとまった焼土は4層上にみられる(3層)。

堆積土 ローム粒を含む黒色土主体である。単一的な様相である。

出土遺物 図示できる遺物はない。重量は650gで、少量である。須惠器甕は新治窯産のものである。須惠器杯の産地は不明瞭であるが、新治窯産でないものがあると思われる。土師器甕は多くが、武蔵型が在地のものであるが、胴部片等は区別が難しい。常陸型はあるが少ない。土師器杯は性格の分るものが多い。非ロクロのものがあるが、古墳時代の土器かもしれない。

SI-027 (第19図)

位置 調査区西端やや南寄りの12I-44グリッド周辺に位置する。

形状・規模 北東側1/4程度を検出したが、残り3/4は調査区外に入る。平面規模は不明、深さは19cmである。カマド・出入口ピットが不明のため、主軸方位も確定できないが、北辺にカマドが付くとするとN-6°-E、東辺に付くとするとN-96°-Eである。西辺に付く可能性は低いと思われる。検出した範囲の南側は攪乱を受けており、遺存が悪いと思われる。また東壁・北東隅部分も一部が攪乱を受けている。

床面 検出された床面は全体に硬化している。

柱穴等 主柱穴としてよい位置にピットが検出されたが、深さが8cmと浅いため、断定しがたい。検出

したのは一部で、現状での径は47cmである。多くが調査区外に入るため、調査区外で深くなることも考えられるが、支柱穴の有無は不明とする。

周溝 検出範囲内では巡る。全周すると思われる。

堆積土 ローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土主体である。上層を主体にハードロームブロック主体の土層がみられるが、攪乱の影響と思われる。

出土遺物 図示できた遺物は6点である。1・2は小型のロクロ土師器杯で、底径は小さく体部下位は丸みをもつ。ともに細かく割れているが遺存が良い。底部外面はともに回転糸切り離し後無調整である。体部はヨコナデのみで、ヘラケズリは施されない。北東隅寄りの下層から重なって出土した。正位・倒位等の状況は不明である。3・4・5はロクロ土師器高台付杯である。3は口縁・体部の一部の遺存である。小さな高台が付くと思われるが欠損している。口縁・体部は丸みをもつ碗形の器形である。器種は高台付碗や右台碗としてもよいが、これも広い意味で高台付杯に含めておく。4は底部付近の破片である。高台は接地部側をほぼ欠損する。貼り付けが剥がれたと思われるが、破損後削られて、無台の杯的に使用されたことも考えられる。切り離し痕はナデ・ヨコナデにより消えている。内面はミガキ・黒色処理が施されている。5は体部下位から底部にかけての遺存である。高台は小さく「ハ」の字に開く形態である。回転糸切り痕がみえるが、高台貼り付け時のヨコナデによりかなり薄れている。口縁・体部は碗形と思われる。6は平瓦である。側面の一部が遺存する。図では側面を凹面からみて右側としたが、上下は不明瞭である。側面は凹の向きで上から下にヘラケズリが施されている。側面を縦に3分割する状況で、筋状の沈線が2条みられる。凹面には布目がみられるが、側縁部が2cm弱の幅でヘラケズリ・ナデにより面取りされ、布目が消えている。凸面は縄目痕が側縁までみられる。胎土は白色・黒色・褐色・透明等の砂粒を含み、粒径のやや大きなものもみられる。色調は淡黄灰色で、焼成は良好である。

重量は1,500gである。本調査区内では中量の出土量である。須恵器は土師器よりも少量である。須恵器類は新治窯産、南比企窯産、下総産がある。須恵器杯は小片のため不明瞭である。また灰輪陶器及び緑釉陶器と思われるものがある。土師器杯のなかにはは回転糸切り離し後無調整で底部が突出するものがある。土師器類は少量の出土である。口縁端部内側が肥厚するものがみられる。

SI-028 (第19図)

位置 調査区南西の13I-29グリッド周辺に位置する。

形状・規模 攪乱により大きく破壊されており、遺存するのは西壁側の一部である。南北方向の長さは2.73m、東西方向の長さは不明、深さは30cmである。カマドの位置が不明のため主軸方位も確定できないが、北辺にカマドが付くとするとN-5°-W、東辺に付くとするとN-85°-Eである。面積は不明であるが、ほぼ方形のプランとあれば確認面で7.5m前後と推測される。南側でSB-002と重複するが、新旧関係は不明である。

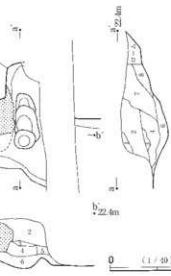
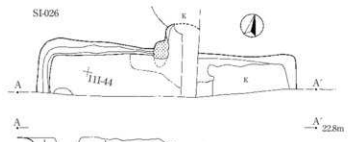
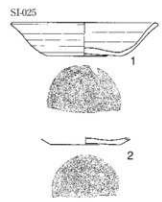
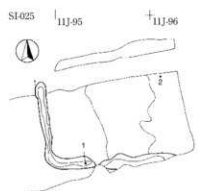
床面 北側が南側よりも10cm浅く、床面の把握も不安定である。硬化面については確認できない。

周溝 検出されなかったが、本来巡らないか不明とする。

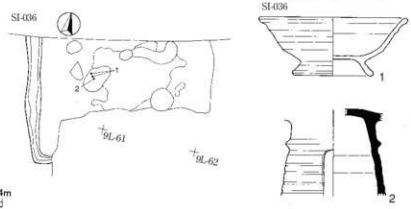
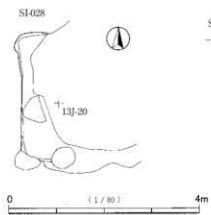
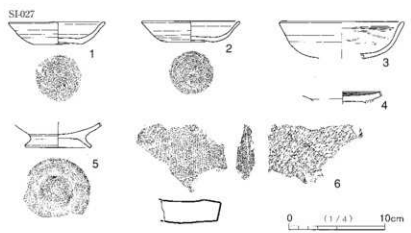
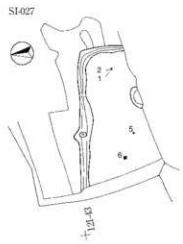
出土遺物 なし。

その他 出土遺物がないたため帰属する時期が不明である。また遺構の様相も不明瞭であるが、奈良・平安時代の堅穴住居が存在する可能性が考えられるため、ここで記述した。

SI-036 (第19図、図版7)



- SI-026
1. 黒色土 ローム粒・粘土・砂混合、しまり強
 2. 黒色土 ローム粒・粘土・砂混合、軟質
 3. 褐色土 灰褐色砂混合
 4. 褐色土 ローム小ブロック含、軟質
- SI-027
1. 灰褐色砂塊 乾燥して硬い
 2. 黒色土 粘土・砂混合、砂多含、軟質
 3. 赤褐色土 塊砂主体
 4. 黒色土 砂・灰多含、軟質
 5. 灰褐色土 砂質、軟質
 6. 褐色土 ハードロームブロック若干含、コマドの高層層
 7. 灰褐色砂 粘土塊含、砂質、しまり弱
 8. 褐色土 ローム粒若干含、砂質、しまり弱



第19回 SI-025・026・027・028・036

位置 調査区北側中央の9L-50グリッド周辺に位置する。

形状・規模 検出されたのは中央から西辺・南西隅の一部である。北側は調査区外に入り、南側と東辺は擾乱のため破壊されている。東西方向の現存長は3.9m、深さは7cmである。遺存は悪く、床面まで数cm以下の部分もある。カマドの位置が不明のため主軸方位が確定できないが、北辺にカマドが付く場合はN-15°-W、東辺に付く場合はN-75°-Eである。面積は不明であるが、東西長が本来の規模に近く、ほぼ方形のプランであれば、確認面で160㎡前後と推測される。中央に幾つかのピットがあるが、後世の擾乱と思われる。

床面 中央に硬化面が遺存している。部分的に損なっていると思われ、細かい凹凸があるが、大きな傾きは無い。

周溝 西辺中央付近から南西隅部にかけて検出された。本来は全周する可能性がある。

カマド 検出されなかった。位置については、本遺構及び周囲の状況から西辺に付く可能性は低く、南辺もほぼ無いと思われる。周囲の竪穴住居を見ると、SI-011・SI-014はカマドが東辺に位置し、SI-013は北辺に位置する。本遺構のカマドも北辺か東辺のどちらかであると思われるが、特定しがたい。

出土遺物 図示してきた遺物は2点である。1はロクロ土師器高台付杯である。杯部は碗形で、低く小さい高台が「ハ」の字状に貼り付けられている。遺存は60%で、やや細かく割れている。2は円面硯で、土師器か須恵器か判然としない。圈足円面硯である。遺存は硯面部から脚部にかけての一部である。硯面部は磨られて平滑である。硯面部外縁は欠損する。脚部は長く、上位凸帯が巡っている。凸帯の突出は弱い。凸帯の下方には長方形の透かしがある。透かしは四方にあると思われるが、遺存が少ないためやや断定しがたい。また凸帯の下方には4条の沈線が巡っているが、透かしは沈線の施文の後に切り込まれている。脚端部は欠損する。脚部外面は凸帯の上下で丁寧なナデが施され、脚部内面は強いヨコナデが施されている。胎土は白色粒・透明粒等を含む。粒径の大きなものも若干含まれるが、量は少なく、比較的緻密な胎土である。色調は淡褐色・赤褐色である。土師器的な色調であるが、須恵器であるならば下総産である。

1・2とも竪穴西寄りの擾乱上から近接して出土した。擾乱部分からの出土であるが、本遺構に関わるか近い時期の遺物とみてよいであろう。

重量は650gでやや少量である。土師器杯には内面黒色処理された高台付杯や外面まで黒色処理された杯がある。土師器甕は少量で在地のものと思われる。口縁端部が内湾気味のものがある。須恵器甕には北武蔵産と思われるものがある。

SI-038(第20図、図版7・8)

位置 調査区東端中央の10N-47グリッド周辺に位置する。

形状・規模 基本的には方形であるが、カマド左側が張り出すため、わずかに台形状である。中央では2.95m×3.0mの規模であるが、主軸長左(西)側の長さは3.2mである。深さは10cm強である。上部があまり遺存していないが、床面の破壊はなく、本調査区のなかでは比較的良好な遺存である。主軸方位はN-7°-Eである。全体の面積は9.16㎡、張出部を含む床面積は8.39㎡、含まない床面積は8.15㎡である。

床面 ほぼ平坦である。壁際を除いて広く硬化している。

柱穴 南壁際中央に出入口ピットがある。径40cm×30cm、床面からの深さは21cmである。

周溝 全周する。ただしカマド左側の周溝が若干内側に位置する。その周溝から北西隅までを張出部とするが、張出部の床面と周溝の内側の床面で、深さに違いはない。北西隅周辺の壁直下には周溝がみられ

ない。

カマド 北壁中央に位置する。方形プランからの突出は中程度で、火床部は突出部に納まるが、両袖側は方形プラン内に突き出る。構築材は黒灰褐色砂質土で、山砂に若干の黒色土を含むものである。右袖基部はかなり破損である。また煙道部奥壁にも構築材が貼り付けられている。火床部底面は窪んでいないが、よく焼けて赤色化し、ぼろぼろの状態である。火床部前方、焚き口部も平坦である。カマド左脇の北西隅部分は棚状施設の可能性はある。しかし床面(底面)に高低差がないため、プランが拡張されたことも考えられる。

堆積土 ローム粒を多く含む黒褐色土を主体とする。ロームの含有量は西壁側で下層の方が上層よりも多いが、東側は下層の方が少ない。

出土遺物 図示できた遺物は11点である。1は須恵器蓋、2は須恵器高台付杯、3・4は須恵器杯(碗)、5は非ロクロの土師器杯、6はロクロ土師器杯、7はロクロ土師器鉄鉢形土器、8はロクロ土師器短頸壺、9は土師器甕、10は砥石、11は鉄鎌である。

1は破損しているが完形に近い状態に接合できる土器である。口縁端部は折り返され、天井部にはボタン状のつまみが付く。天井部外面は回転ヘラケズリが施されている。白色粒・小石を多く含む。新治窯産である。

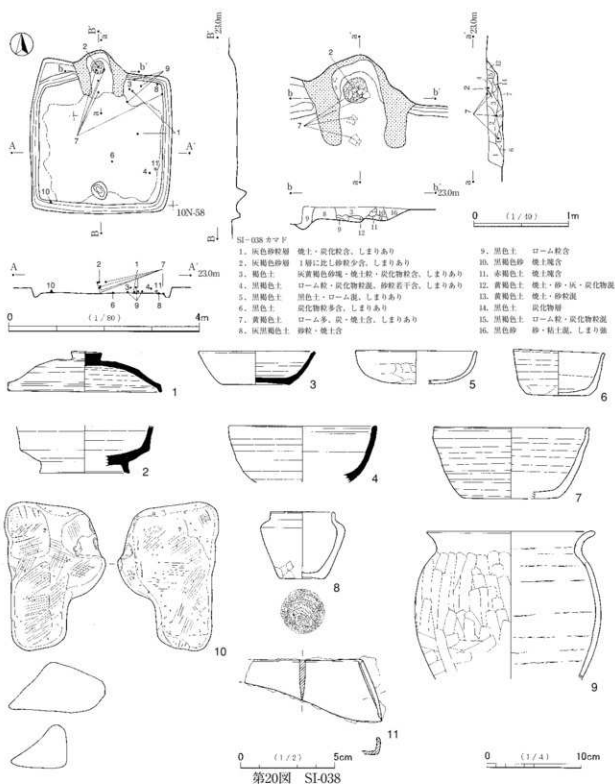
2はやや大型の有台杯である。遺存は少なく、高台部周辺から体部にかけての破片である。高台部がやや重んでおり、法量に若干の不安がある。また体部が垂直的に立ち上がるが遺存部分の様相に左右されているかもしれない。他の部分ではもう少し傾くことも考えられる。胎土は白色粒を多く含むが、比較的緻密である。色調は灰色、焼成は良好である。白雲母はみられないが常陸産と思われる。

3は若干割れているが、ほぼ完形に接合できる土器である。口縁・体部の一部が小さく「W」字状に接合しており、その形から意図的に打ち割りされた可能性が考えられる。しかし大きく遺存する部分も2片に割れており、また出土状況の様相も不明瞭なため、破損が人為的なものか断定しがたい。外面全面に自然釉が付着している。一部が暗緑色の光沢をもつが、光沢をもたない部分の方が多く、器面がざらついている。底部外面は丁寧なナデが施されており、切り離し痕がみられない。ロクロ目の凹凸は顕著でない。胎土は白色針状物・白色粒を含む。色調は暗灰色であるが、外面はやや紫色を帯びている。焼成は堅緻である。南比企窯産と思われる。

4は杯よりも碗と呼称した方がふさわしい器形である。遺存は口縁・体部の一部で、遺存が少ないため法量にやや不安がある。口縁端部内面は肥厚し、その下には沈線が巡る。胎土は白色針状物・白色粒を多量に含む。色調はやや黄色みを帯びる暗灰色である。これも南比企窯産と思われる。

5は遺存が少なく、細かく割れている。6は箱形の器形である。数片に割れているが、かなり遺存のよい土器である。底部中心から比較的均等な割れ方を呈している。出土状況も1か所からの出土であり、土圧の影響が考えられる。本来は破損していなかったかもしれない。外面の片側が黒ずんでおり、若干の光沢をもつ部分もある。灯明の油煙の可能性はあるが、内面は痕跡が顕著でなく、断定しがたい。

7は70%程度の遺存であるが、接合しない破片があるため大きな形にならない。口縁端部は玉縁状の形態を呈する。外面に顕著な沈線があり、内面にもぶく凹む。やや金属器的な様相がうかがえる。外面のロクロ目は稜がやや鋭いが、内面は比較的平坦である。内面は概して黒ずんでいるが、一部の接合破片には黒ずみがみられない。黒ずみは二次的な被熱によると思われるが、被熱の様相に破片単位で差があったと



思われる。体部下位及び底部外面は回転ヘラケズリが施されている。切り離し痕は消されてみえない。

8 はほぼ完形である。破損も口縁端部のわずかな部分だけで他は全く割れていない土器である。手持ちヘラケズリが底部外面周縁と胴部下位に施されている。外面の一部に黒斑がみられる。

9 はやや小振りの甕で、在地の土器である。下方を欠損するが、口縁部から胴部中位までは比較的遺存がよい。焼成が良好であるが、胴部内面には接合痕が多くみられる。

10は砥石と思われる石製品である。やや不整な形態で横断面形は角の丸い三角形を呈する。全体的に滑らかな質感であるが、最も広い面と次に広い2面が特に滑らかで、また比較的平坦である。

11は鎌で、基部側の破片である。現存長は7.2cm、幅は基部側で3.3cm、刃部の欠損部で1.2cmである。背の厚さは2.5mm、重さは30.7gである。柄側は直角からやや鈍角に折れ曲がっている。背側で1cm程度の長さである。基部の刃側は端から1.3cmまで刃がない部分があり、背とはほぼ平行であるが、そこから弧を描いて刃を形成する。刃部の欠損か所の幅は狭く、研ぎ減りにより、かなり当初の幅が減ったと思われる。刃はあまり尖っていない。

遺物はカマドから北東(右奥)隅周辺での出土が多い。8は北東隅床面から口縁部を北壁に向けて横に倒れた状態で出土した。カマド右脇・北東隅周辺からは、1・3・9が出土した。1はやや中央側に散っている。遺物の出土層位は堅穴が浅いため下層から床面であるが、そのなかでも3はやや浮いている。正位・倒位等の状況は不明である。カマド内からは2・7が出土した。ともに底面からはやや浮いている。7は一部の破片が北東隅に散っている。6は中央付近の床面から正位で出土した。4・11は東壁南寄りから出土し、10は南壁際西寄り床面から出土した。

重量は3.210gで、本調査区のものではかなり多い。土器片は実測個体が多いのに対してやや少量である。須恵器と土師器の量比は6:4程度で、須恵器の方が多い。須恵器甕にも南北企窯産と思われるものがある。また内面に黄土が塗られた猿投産と思われるものがある。土師器甕は細片に常陸型のものがある。武蔵型もあると思われるが、破片では在地の土器との区別が難しい。

SI-039(第21図、図版8)

位置 調査区東端やや南寄りの10N-97グリッド周辺に位置する。

形状・規模 東辺側を検出したが、大部分が攪乱により破壊されている。南北長は3.7mと思われるが、北側部分がやや不明瞭であり、2.9mの可能性もある。深さは最も遺存のよい部分で34cmである。主軸方位はN-5°W前後と思われる。規模が不明瞭なため正確な面積が出ないが、プランがほぼ方形であるとすると、小さくみて8.5㎡程度、大きくみて13.5㎡程度である。南側で近世の溝状遺構SD-007と重複し、切られている。

床面 北側で段差がある。その部分が壁面である場合、本遺構の規模は上記の小さい数値が妥当であるが、判然としない。その他には顕著な高低差はない。凹凸がかなりあるが、検出された範囲が狭い影響と思われる。検出範囲は壁際のため硬化面はみられない。

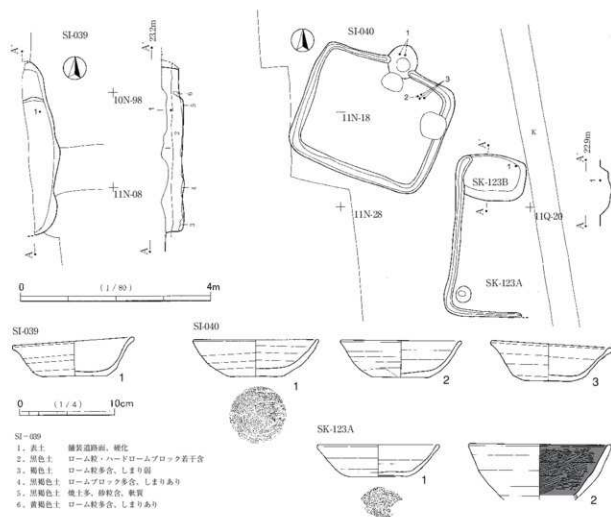
周溝 検出されなかったが、本来巡らないか不明としたい。

カマド 検出されなかったが、東辺には位置しないと思われる。調査区内では南辺に位置する堅穴住居はなく、西辺に付くものは古墳時代のSI-010のみである。カマドが不明な堅穴住居の存在を考慮しても、北壁に位置する可能性が最も高いと考える。

堆積土 ローム粒・ロームブロックを若干含む黒色土を主体とする。床面際はロームを多く含む土層と焼土粒を多く含む土層がある。

出土遺物 図示できた遺物はロクロ土師器杯1点である。口縁・体部の1/4弱が割れているが、接合して完形となった土器である。回転ヘラズリが底部全面と体部下位に施されている。切り難し痕は消されてみえない。北側の土層から出土した。

重量は430gで、少量である。土器片はほとんどが土師器である。回転系切り無調整の土師器杯がある。



第21図 SI-039・040・SK-123A・B

土師器甕は在地品、武藏型、常陸型がある。常陸型は1点である。

SI-040(第21図、図版8)

位置 調査区東端南寄りの11N-8グリッド周辺に位置する。

形状・規模 横長の方形で、主軸長2.65m×副軸長3.1mである。上部の遺存が悪く、深さは5cm～6cm以下である。主軸方位はN-24°-Eである。確認面の面積は7.95㎡、床面積は7.11㎡である。円形の小土坑がカマド前と東壁際北寄りにあり、本遺構を切る後世の擾乱と思われる。また南東隅にも深さ12cm程度の窪みがあるが、これは後世の擾乱と堅穴構築時の掘りかた底面の双方の可能性が考えられる。

床面 比較的平坦である。硬化面はみられない。

周溝 全周する。

カマド 北壁中央に位置する。方形プランからの突出はやや強い。袖部等は崩れて遺存していないが、火床面全体が焼けて赤色化した山砂に覆われている。

出土遺物 図示できた遺物は3点で、いずれもロクロ土師器杯である。1の底部は回転糸切り痕が全面に残り、その後無調整である。黒ずむ部分が多いが、接合破片の1片には黒ずみがみられない。二次的な

被熱の様相に差があったと思われる。カマド内から出土した。2は手持ちヘラケズリが、3は回転ヘラケズリが、底部全面と体部下位に施されており、両者とも切り離し痕が消されてみえない。3の底径はかなり小さい。また3は歪んでおり、雑な作りである。2・3は堅穴右奥側からまともに出て出土した。

重量は870gで、やや少量である。土器片は土師器が多く、須恵器が少ない。土師器裏には口縁端部内面が肥厚するものがみられる。またロクロ土師器杯片に漆のパレットと思われるものがある。須恵器杯・蓋に下総産があると思われるが、新治産産の存在は不明瞭である。また須恵器裏に南比企産と思われるものがある。なお須恵器は図示したロクロ土師器よりも古いものが混入している可能性がある。

SK-123A(第21図、図版8)

位置 調査区東端南寄りの11N-28グリッド周辺に位置する。

形状・規模 西辺と南辺の周溝の一部が遺存するのみの堅穴住居である。当初周溝の存在が不明瞭であり、北側の土坑をSK-123として調査したが、重複して周溝が検出されたため、堅穴住居分をSK-123A、土坑をSK-123Bとして報告する。規模は不明瞭であるが、西側周溝部分の3.5mが堅穴の南北北に近い数値と思われる。東西長は不明である。また本来の床面はほとんど遺存していないと思われる。主軸方位は不明であるが、カマドが北壁に付くとするとN-3°-Eである。面積も正確な数値は出ないが、ほぼ方形のプランとすると、12.0㎡程度と思われる。

床面 硬化面の名残もみられない。

周溝 本来は全周する可能性が考えられる。

カマド 検出されなかった。

出土遺物 図示できた遺物はロクロ土師器杯2点である。ともに遺存はあまり多くない。1は回転系切り離し後無調整の杯である。体部下位は二次底部面ともいえる底部からの立ち上がり丸みをもつ部分である。ヘラケズリはみられないが、あるいはかなり弱いヘラケズリ後ナデであるかもしれない。2はやや大振りの土器で、内湾する椀形の器形である。底部は遺存しない。内面に黒色処理・ミガキが施されている。2はSK-123Bから出土したが、上層出土であり、本来は本堅穴内に存在した遺物と思われる。

重量は530gで、少量である。土師器杯に回転系切り後無調整のものがある。

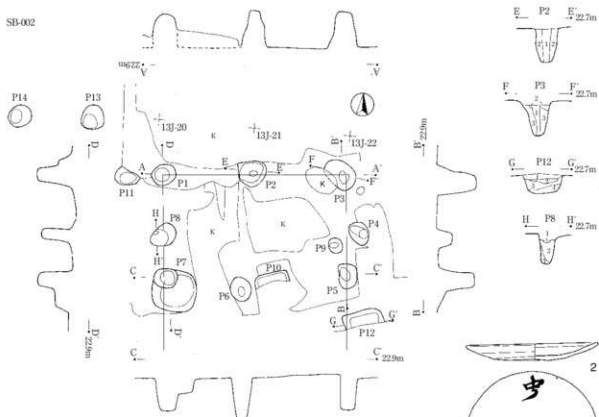
第3節 掘立柱建物・ピット群

SB-001(第23図、図版8)

調査区南西端の13I-40グリッドを中心に位置する。柱穴を含むと思われる小規模な穴(ピット)の集合をSB-001とした。掘立柱建物や櫛列等の可能性がある遺構と思われるが、規則的な配置をみることができない。しかし至近に奈良・平安時代の堅穴住居SI-001があり、東方にも掘立柱建物SB-002が存在するため、掘立柱建物や櫛列等の可能性がある遺構とみておく。調査区地の制約や擾乱により一部しか検出できていないのかもしれない。

検出した小穴・土坑はおよそ20基で、規模・形態は様々である。なかでもP1は長大で、底面が平坦でないことから、数基の遺構が連接している可能性が考えられる。同様にP14・P15も数基の小穴が一列に連なったものにみえる。P2は楕円形で規模がやや大きい。底面の深さに違いがある。P17は近接した位置関係にある3基の小穴群である。確認面では重複していないが、上部で重複することも考えられる。規模については、P1が最大で、確認面での長さが1.95m、最大幅が65cm、確認面からの深さが23cm～34cmで

SB-002



SB-002

P2

1. 黒色土 ローム粒多含、しまり弱
2. 黒褐色土 ローム粒、ハードロームブロック多含

P3

1. 黒色土 ローム粒多含、しまり弱
2. 暗黒褐色土 ローム粒多含
3. 黒褐色土 ハードロームブロック多含、しまり弱

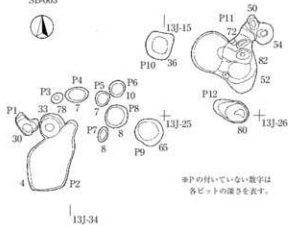
P12

1. 黒色土 ローム粒多含、しまりあり
2. 黄褐色土 ハードロームブロック主体、しまりあり
3. 黒褐色土 ローム粒多含、しまりあり
4. 褐色土 ローム粒・ロームブロック多含、しまりあり

P8

1. 褐色土 ローム粒少含、しまりあり
2. 黄褐色土 ハードロームブロック多含、しまり弱
3. 黒色土 ローム小ブロック多含、しまり弱

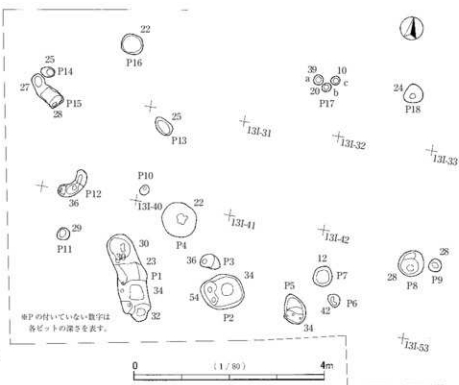
SB-003



*Pの付いていない数字は
各ピットの深さを表す。

第22図 SB-002・003

SB001



SB-004

P1

1. 黒色土 ローム粒多含、しまり強
2. 黒色土 ロームアロツク若干含、しまりあり
3. 黒色土 土層に比較不明な、しまり弱
4. 黒褐色土 ローム主体、しまり強

P2

1. 黒色土 ハードローム粒・ローム全アロツク含、しまり強
2. 黒褐色土 ローム粒多含、しまり弱
3. 黒褐色土 ハードローム粒・ハードロームアロツク含、しまり弱

P3

1. 黒色土 ハードロームアロツク含、しまりあり
2. 黒色土 ローム粒少含、しまりあり
3. 黒褐色土 ハードローム全アロツク少含、しまりあり
4. 黒褐色土 ハードローム含

P6

1. 黒褐色土 ローム粒・ハードローム粒含、しまりあり
2. 黒色土 軟質、しまりあり
3. 黒色土 ローム粒少含、しまりあり

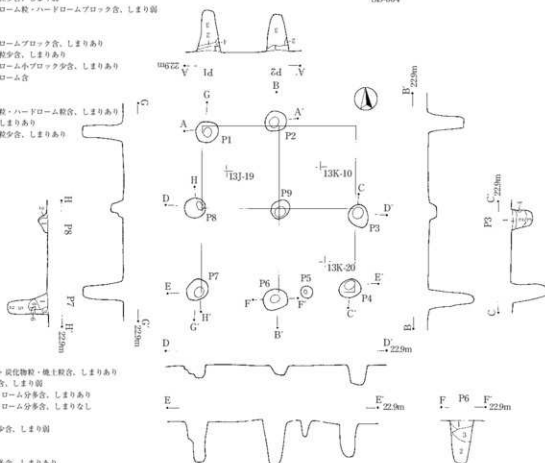
P7

1. 黒色土 ローム粒・炭化物粒・機土類含、しまりあり
2. 黒色土 ローム粒含、しまり弱
3. 褐色土 ローム粒・ローム分多含、しまりあり
4. 褐色土 ローム粒・ローム分多含、しまりなし
5. 黒色土 しまり弱
6. 黒色土 ローム粒少含、しまり弱

P8

1. 黒色土 ローム粒多含、しまりあり
2. 褐色土 ローム主体

SB004



第23図 SB-001・004

ある。最小のものP17の各小穴である。径20cmで同大の平面形であるが、深さは39cm (a)・20cm (b)・10cm (c)とばらつきがある。その他幾つかのピットの規模をみると、P2は長径85cm、短径75cm、深さは34cm・54cmである。なお深さ54cmは最深の数値である。P4は平面形が円形で、規模は径70cm、深さは22cmである。

SB-002 (第22図、図版8)

調査区南西の13J-11グリッドを中心に位置する。梁行2間×桁行2間以上の棚柱南北棟建物で、規模は梁行3.9m×桁行2.3m以上である。東西の桁行は南方の調査区外に続いていくと思われる。棟方向はN-5°-Wである。北西でSI-028と重複するが、新旧関係は不明である。また周囲は掘乱により多くが破壊されており、本遺構の柱穴もかなり影響を受けている。

北梁行中間柱穴 (P2)・北東柱穴 (P3)の土層断面に、柱痕がみられる。柱間寸法をみると、北梁行は東の間が1.95m、西の間が1.9mでほぼ等値である。桁行は0.85m～1.35mで、北の間がやや短く、南の間がやや長い。柱筋の通りは、北梁行・西桁行で比較的良好だが、東桁行中間柱穴 (P4)が外に振れている。柱掘りかたは円形・楕円形で、径は40cm～75cmである。なお調査区内での南西柱穴 (P7)は一段浅い部分の規模が95cm×85cmの規模であるが、柱位置は深い部分であろう。浅い部分は柱抜き取りに伴うものと思われる。深い部分の平面規模は50cm×49cmである。確認面からの深さは東桁行中間柱穴 (P4)が浅く、32cmである。また西桁行中間柱穴 (P8)もやや浅く、64cmである。その他の柱穴は70cm～80cmであり、梁行中間柱穴P2の深さも隅部の柱穴と同等以上である。掘乱が多いため、確認面の高さが不安定であるが、底面の高さをみると、P8は西桁行のP1・P7よりもやや浅い。桁行中間柱穴は浅く、梁行中間柱穴は隅部とあまり変わらない深さとみることができよう。

P2・P3の柱痕部分の堆積土は、ローム粒を含む黒色土である。周囲の埋土は、ローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土を主体とする。P3はロームブロックの含有が多い。

P1～P8周辺にも幾つかのピットがある。そのうちP10は南桁行中間柱穴の可能性があるが、形態が方形を呈すると思われる。周囲の掘乱が著しいこともあって不明瞭である。P11は北桁行の西側延長線上にあり、本遺構と何らかの関わりをもつことも考えられる。P12は東梁行の南方延長線上にわずかにかかるが、形態が方形であり、本遺構を構成する柱穴とは思えない。土層断面には柱痕がみられない。概してロームを多く含み、埋め戻されていると思われる。またP11北西方向にP13・P14が並んで位置するが、本遺構とは別の掘立柱建物か欄列を構成する柱穴であろう。P13の径は55cm×50cm、深さは31cm、P14の径は50cm×45cm、深さは38cmである。

図示できた遺物は2点である。1はロクロ土師器杯、2はロクロ土師器皿である。1は体部下位と底部に回転ヘラケズリが施されている。底部には若干の回転糸切り痕がみられる。内面は黒色処理及び粗いミガキが施されている。2は比較的遺存がよい土器である。「中万」と思われる墨書文字が口縁・体部外面に正位で記されている。底部外面中央に回転糸切り痕がみられるが、周囲に丁寧な回転ヘラケズリが施されており、糸切り痕は小さい。欠損部分の1か所の破断面が弧状を呈するが、遺存部分はやや細かく割れており、欠損が意図的か断定しがたい。図化できない遺物は9世紀代と思われる土器片が主体である。

SB-003 (第22図、図版8)

調査区南西の13J-14グリッドを中心に位置する。SB-001同様、小規模の穴・土坑の集中箇所である。西方にSB-002・SI-028、東方にSB-004が所在する。

検出した小穴・土坑はおよそ13基で、規模・形態は様々である。最大規模のP11は円形・楕円形の幾つ

かのピットが接続したものとされる。規模は最長1.83m、最短34cmであるが、径30cm～90cm程度の円形・楕円形のピットが重なった結果であろう。確認面からの深さは50cm～82cmである。P 2も平面規模が大きいが、深さ4cm～5cmの浅い部分が多くを占める。深さが33cmの部分は径53cmの円形を呈し、周囲のピットと大差がない。その他は円形・楕円形を基調とするピットで、径は20cm～60cm程度のものが多い。そのうちP3は径20cm～25cmで平面規模が最小であるが、深さは78cmであり、かなり深いピットである。深さのあるピットとしては、P12が80cm、P10が65cmであり、それらは平面規模も比較的大きい。一方、P4～P8は深さが10cm未満の浅いピットであり、平面規模も比較的小さいものが多い。

SB-004(第23図、図版8)

調査区南側西寄りの13J-19グリッドを中心に位置する。梁行2間×桁行2間の総柱建物で、わずかに南北に長い建物である。規模は梁行3.2m～3.35m×桁行3.4m～3.75mである。棟方向はN・2°・Eである。面積は推定11.4㎡である。柱筋の通りが悪いため規模の数値に幅があるが、整然とした形態に復元した場合、梁行3.24m×桁行3.53mの規模である。

北東柱穴は確認できないが、その他の柱穴は遺存している。柱掘り方の平面形は円形・楕円形である。南北梁行中間柱穴(P2・P6)はやや外側に張り出しており、柱穴中央間を結ぶと外形線が亀甲形的な形態を呈する可能性がある。南梁行中間柱穴(P6)と南東柱穴(P4)の間に小ピット(P5)があるが、P4・P6を結ぶ直線上に位置するため、本遺構に関わる可能性が考えられる。P5の径は25cm、深さは33cmである。柱間寸法は、梁行が1.45m～1.7mで、平均値は1.6mである。桁行は1.5m～1.9mで、平均値は1.73mである。P5を除く各柱穴の規模をみると、平面径は45cm前後である。中央柱穴(P9)がわずかに小さいが、他の柱穴との差はあまり大きくない。しかし深さは梁行中間の3柱穴(P3・P8・P9)が16cm～41cmと浅いのに対して、他の5柱穴は70cm～94cmであり、明瞭な違いがある。前者と後者で分けた場合、深さの平均値は前者が28cm、後者が81cmである。

いずれの柱穴も柱痕はみられなかった。堆積土は浅い柱穴も深い柱穴もローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土が主体である。

出土遺物はごく少量の奈良・平安時代の土器片である。遺存が少なく、図示できたものはない。

第4節 遺構外出土遺物(第24～26図、図版24～29)

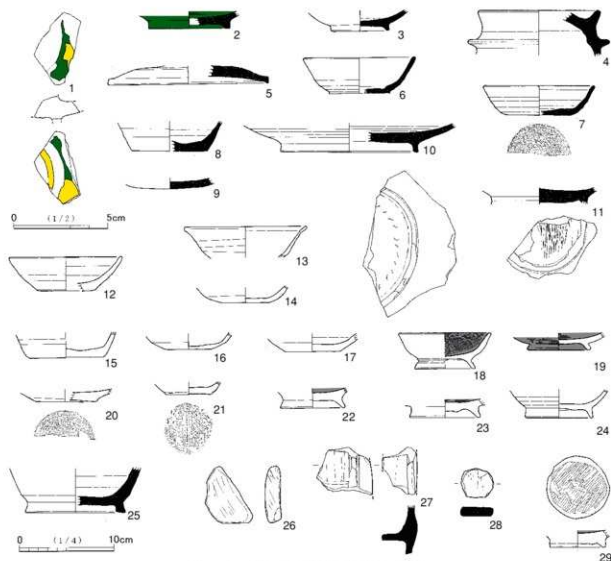
1 土器・陶器・土製品等

1は奈良三彩の托である。遺存はごくわずかで高台部周辺の破片である。内外面とも緑釉・褐釉がみられ、底部外面中央部は白色釉(透明釉)が施軸されていると思われる。高台接地区は磨耗しており、内面の受け部も破損している。

2は緑釉陶器または越州窯青磁と判断できない皿で、9世紀～10世紀代の産物である¹⁾。体部内面に2条の浅く細い沈線が巡る。口縁部個が遺存しないが、除刻花文が存在した可能性が考えられる。高台は角高台である。素地は灰色で、やや暗い黄緑色の釉が施されている。

3は灰軸陶器碗である。体部内外面は施軸されているが、見込みにはみられない。また高台接地区と高台内にもみられない。灰軸は漬け掛けで、折戸53窯式のものと思われる。

4は須恵器の圈足円面硯である。遺存は硯面から脚部にかけての一部である。硯面は中央部が墨溜まりの海部分かなり丸みをもって高まる。外堤はやや開いて立ち上がるが硯面の隆中央の方が高いと思われる。



第24図 奈良・平安時代遺構外出土遺物

る。脚部の上位凸帯は水平からやや上向きに巡っている。外面は入念なヨコナデが施されている。内面はナデが施されているが、粘土の貼り付け痕が一部に残り、やや雑な調整である。胎土は白色粒を多く含むが、比較的緻密である。色調はやや明るい灰色を呈し、焼成はやや軟質である。新治産産と思われる。

ほかの須恵器を一括してみていく。5は蓋、6～9は杯である。10は高台付盤、11は高台付杯、25は壺である。産地は6・7が南比企産産と思われる。5・9～11が新治産産で、8も常陸産と思われる。また25も白色粒・小石等の夾雑物が多く、常陸産と思われる。10は外面高台部内側に爪形圧痕が周囲している。11は底部外面に筋状の平行線が多くみられ、砥石として再利用されている。26も新治産産の須恵器壺片が砥石として使われたものである。ほぼ全面が使用され、破断面も非常に平滑である。砥石としての使用は中世であることも考えられる。

次に土師器を一括して取り上げる。杯は12～17・20・21、高台付杯は18・19・22～24・29である。ともに概して遺存が少ない。17・21は回転糸切り無調整の杯であるが、他は底部に回転ヘラケズリが施されている。15は底径が大きい。21は底径が小さく、カワラケの可能性もある。わずかであるが内面に油煙と思

われる黒色物が付着しており、灯明に使用された土器であろう。

高台付杯のうち、18は小振りの土器で、比較的遺存がよい。24以外は内面に黒色処理が施されている。19は外面まで黒色であり、黒色土器といえるものである。29は高台部周辺のみで遺存で、口縁・体部をほぼ欠損する。体部下位の破断面は磨られて、平面形は円盤状を呈する。底部内面にやや太い筋状の窪みが3～4条みられる。砥石として再利用されたものである。

28は須恵器壺片を再利用したもので、やや不整な楕円形状の製品である。破断面を細かく打ち欠き、一部を磨って整えたものであるが、性格は判然としない。土器自体は新治窯産と思われる。

27は須恵器置カマドの破片である。図示した右上図の右側が焚き口の空間である。焚き口の左側面の破片と思われる。前面外側に鈎が巡る。やや深い褐色の色調を呈する。下総産の須恵器と思われる。

2 瓦

1・2は軒丸瓦である。1の瓦当文様は蓮華文で、「下総国分寺跡」²⁾で1202とされた資料に相当する。面違い鋸歯文縁単弁十六葉蓮華文軒丸瓦と思われる。瓦当文様は鋸歯文縁と蓮華文がわずかに遺存するのみである。瓦当裏面はヘラケズリを多用したもので、布目痕をもたないと思われるが、遺存が少ないためやや不明瞭である。瓦当部と丸瓦の接合に際しては裏面下半に粘土が付加され、周縁部分が最も厚い。製作技法は「下総国分寺跡」分類のⅢbと思われる。凸面はミガキ的なヘラケズリが施されている。広端面側から瓦当部へ方向である。胎土は白色粒・褐色粒を多く含む。色調は淡褐色・褐色で、焼成は良好である。

2の瓦当文様は宝相華文である。摩滅が著しいため文様が判然としないが、「下総国分寺跡」分類の1105に相当すると思われる。瓦当文様が不明瞭なため、拓本及び遺存するとみられる文様を図化したものの両方を掲載した。図の華文内には二本の支葉があると思われるが、外側の支葉は図化できず、内側の支葉は太くなりすぎていると思われる。三葉状小華文は実物ではおぼろげにうかがえるが、不明瞭なため図化しなかった。なお図は陰線幅を黒く塗りつぶしたため、拓影よりも全体に文様が太くなっている。瓦当裏面も遺存が少ない。遺存部分の調整はナデである。凸面は丁寧なヘラケズリが施されている。胎土は白色の細粒を多く含む。色調は暗灰色で、焼成は良好である。

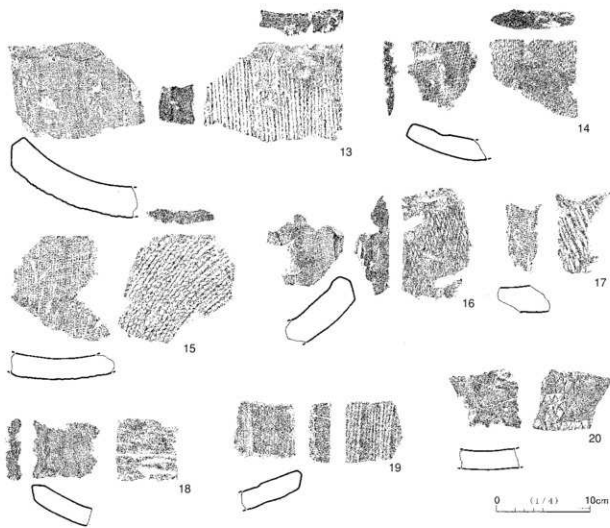
3～7は軒平瓦である。3の瓦当文様は対葉形宝相華文で、「下総国分寺跡」で2112とされた資料に相当する。左から4番目の花文付近の破片である。左から3番目の花文は遺存せず、その部分の范に彫り返しのないaか、彫り返しのあるbか不明である。製作技法は技法Aで、瓦当部と平瓦部を別個に作成して接合したものである。曲線顎で、瓦当部裏面での平瓦部の接合位置は中位である。平瓦部は瓦当部に対してやや鋭角に接合すると思われる。顎面に赤色塗彩の痕跡は遺存していない。胎土は白色粒・透明粒等を含むが、細粒で緻密である。色調は黄灰色で、焼成はややあまい。

4の瓦当文様は唐草文で、「下総国分寺跡」分類の2311に相当すると思われる。小片で、瓦当文様は圈線と唐草文の一部が遺存する。また凹面側が遺存するが、凸面側は接合された平瓦部分が剥がれて欠損する。凹面には布目痕がみられる。平瓦部との接合面には幾状もの筋がある。なお単なる切り離し痕であったとしても接着効果はあると思われる。色調は瓦当文及び凹面が灰褐色、接着面及び内部が褐色である。胎土は白色粒を多く含む。焼成は良好である。

5は軒平瓦の瓦当文様部右端に近い破片である。瓦当面は遺存しない。砥石として再利用され、特に凸面と一部の破断面の使用が顕著である。凹面は若干摩耗しているが、布目が残り、砥石としての使用は顕



第25図 道構外・グリッド出土の瓦(1)



第26図 遺構外・グリッド出土の瓦(2)

著でない。胎土は白色粒・小石を含み、色調は暗黄灰色、焼成は良好である。なお砥石への転用は中世時点の可能性が考えられる。

6・7は軒平瓦の平瓦部である。ともに製作技法はAで、別個に作成された瓦当部がはずれている。6は瓦当部の中上位に挿入する状況で接合する。凹面・凸面とも瓦当部との接合強化のための深い刻みが多くみられる。刻みは平瓦部の長軸に平行的なものである。6・7とも凹面は強いナデが広端部から狭端部方向へ施されている。また広端面は凹面を上にしてみた場合、右から左方向へのナデが施されている。胎土は多量の白色粒を含む。色調はやや黄色みを帯びる灰色であるが、凹面は褐色を呈する。焼成は良好である。7の凹面は付加された接合粘土があまりみられず、平瓦部は瓦当部の上位に接合されている。残存する顎部には一部に赤みがみられるが、赤色塗彩の痕跡か断定しがたい。黒ずむ部分も多く、二次的な被熱痕跡の可能性もある。顎の破面から平瓦部凸面が露呈し、縄目圧痕と離れ砂を確認できる。胎土は白色粒・透明粒等を含む。色調は黒灰色・暗黄灰色で、焼成は良好である。

8～10は丸瓦である。8は有段式の丸瓦である。玉縁部はほぼ欠損する。凹面での胴部から玉縁部への屈曲はやや緩い。玉縁部を手前にして胴部凸面をみた場合、ヨコナデが施されている。また有段部端面も

右から左へのヨコナデが施されている。凹面には布目痕がみられる。玉縁部際の一部はヘラケズリが左から右へ施されて、布目が消されている。胎土は白色粒・透明粒等の細粒で緻密である。色調は灰色で、焼成は堅緻である。9は側面が遺存するが、端面は遺存していない。上下は不明である。凸面はともにナデが施され、縄目圧痕等はみられない。凹面もともに布目痕がみられ、また端縁際はヘラケズリ・ナデにより布目が消されている。色調は灰色である。10は狹端面側の遺存と思われるが、破片のため不明瞭である。側面は遺存していない。端面は凸面を上にしてみると、右から左へのヘラケズリが施されている。巻き付けた粘土板の合わせ目面で剥がれていると思われ、端面が狹端面とすると、巻き付け方は「S」である。胎土はともに細砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色である。

12は文字をもつ平瓦である。凹面に「荒」のヘラ書き文字がみられる。広端面側の破片と思われるが、文字を優先して広端面を上にして図示した。図の向きの凹面を上からみた場合、右側面がかなり遺存する。下総国分尼寺・僧寺出土瓦のヘラ書き文字に「荒人」が存在することから、本資料も「荒人」であり、「人」が欠損部に存在すると思われる。凹面は強いナデまたはヘラケズリが施されている。広端面側から狹端面側への縦方向が主体であるが、広端面際は横方向で図の向きで左から右に施されている。広端面も凹面を下にしてみた場合、同様に左から右方向、側面も同様に上から下にヘラケズリが施されている。凸面は縄目圧痕がみられる。磨耗が著しいが、双方の縁まで施されていると思われる。胎土は白色・灰色・透明粒等の砂粒の含有が多く、かなりざらつきがある。

その他の平瓦は以下の9点であり、まとめて述べる(11・13~20)。なお小片が多く、概して破斗瓦との区別が付かないが、平瓦として扱う。凹面はいずれも布目痕がみられるが、20はナデによってかなり消されている。14は目が粗い。枠板痕が19の凹面にみられる。凸面は16・20に斜格子目の叩きが施されている。16は目が細かく、20は粗い。11・13~15・17~19は縄目圧痕がみられる。18の縄目は瓦の長軸に対して横方向であるが、その他は縦方向・斜方向である。17は粗く、節が不明瞭である。13~15は端面が遺存するが、破片のため広端面か狹端面か不明瞭である。図では便宜的にいずれも狹端面側とした。また側面が11・13・14・16・18・19に遺存する。13・16・18は面取りされて断面が山形・三角形状を呈し、19も若干その傾向がうかがえる。14・16・17の色調は褐色みが強く、19の色調は灰色みが強い。20は凹面・凸面が淡褐色であるが、内部は黒灰色である。11・13・15は黄灰色・褐灰色、18は淡灰色である。14は胎土に褐色粒を多く含む。焼成は14・20がややあまく、19は堅緻、その他は中間的である。19は破断面3面のうち2面が磨れている。中世に瓦の破片が砥石に転用されたものと思われる。側面の対面が比較的良好に磨られて平坦である。また図上面も若干使用されているが、下面は使用されていないか、頻度が非常に少ないと思われる。

註1 市川市考古博物館 松本太郎氏のご教示による。

2 山路直充他1994 「下総国分寺跡 平成元~5年度発掘調査報告書」 市川市教育委員会

第4章 中・近世

第1節 遺構

1. 概要

遺跡全体を整理の段階で5区に分け、それぞれを第27図のようにエリアA、B、C、D、Eとした。各区を概観すると、エリアAは台地整形区画内に存在する小規模な区画を中心とした区域で、遺構密集地の北側半分を占める。エリアBは台地整形区画の中央部分に当たり、遺構密集地の南半分である。コンクリート基礎の残る区域で、多くの遺構の詳細が不明となっている。エリアCは調査区の南に位置し、台地整形区画の想定範囲の南端部に当たる。エリアDは調査区の東に位置し、方形堅穴状遺構の密集地である。エリアEは調査区西側のコンクリート基礎の残る区域で、土坑群が確認された。

2. 台地整形区画(SX-001)(第33図、図版9)

本遺跡からは、地山を削平し、段差を形成して区画する台地整形区画が調査区中央で確認された。本遺跡の中世遺構群の中心となる遺構である。整形区画内からは、地下式坑をはじめとする多くの土坑や掘立柱建物などが検出されている。南側に検出された台地整形区画と遺構の密集状況などから、その範囲45m前後の不正台形を想定して破線で示した。北側に位置する小規模な区画は、一辺14.0m前後でコの字状を呈している。深さ60cm～70cmほどの掘り込みが確認された。南側は、SD-001と重複しており、全容は明らかではない。

3. 掘立柱建物(第28・29図)

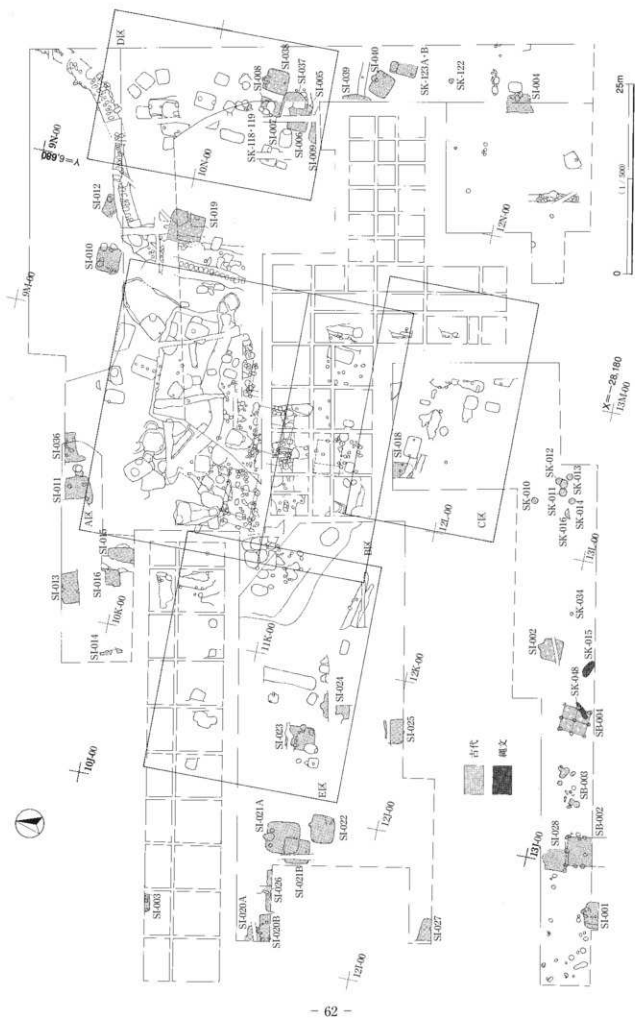
調査区中央北側エリアA・B内からは多数のピットが検出された。調査時には台地整形区画SX-001として総括し、各ピットには遺構番号は付与されていない。掘立柱建物については調査時点及びその後の整理作業時にこのピット群の検討を行う中で把握したものである。7棟の建物の存在を確認したが、ピット群の状況からそれ以上の数の建物が存在したことが考えられる。SB-013からSB-019まで新たに番号を付与した。なお、SB-013とSB-017、SB-014とSB-018は同一の軸上に位置していることから同じ時期に構築されたと考えられる。

SB-013(第34図)

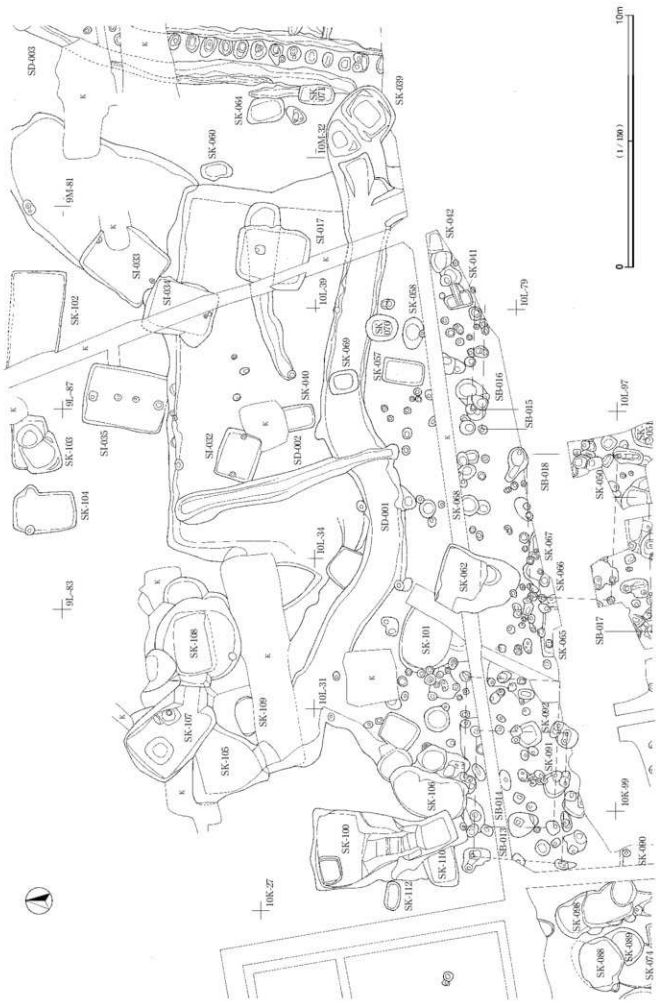
エリアA内、10K-79グリッドを中心に位置する。東西3間×南北2間の東西棟の掘立柱建物と思われる。規模は桁行4.95m～5.24m×梁行3.55m～3.70mである。桁行方位はN-91.0°-Wである。柱間寸法は、桁行(東西)方向で1.50m～1.70m、梁行(南北)方向で1.60m～2.00mを測る。柱穴掘り方は径30.0cm～70.0cm程度の円形・楕円形である。確認面からの深さは55.0cm～80.0cm程で底面は方形を呈しているものが多い。

SB-014(第34図)

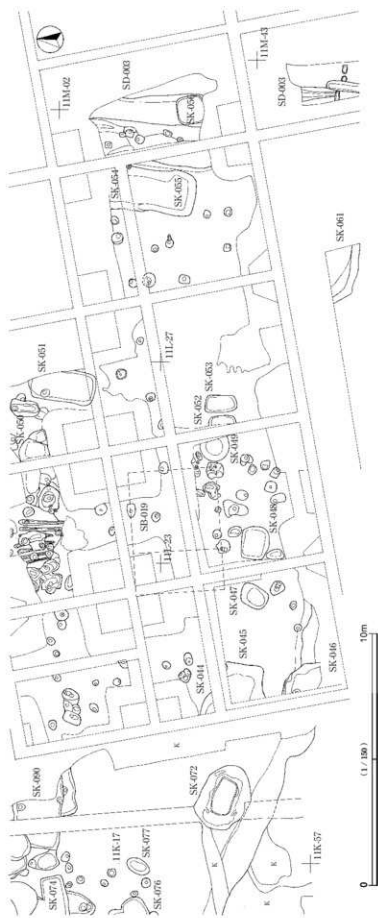
SB-013と切合って位置する。SB-013の桁行き方向と軸方向をほぼ同じに構築された掘立柱建物である。SB-013の南東隅柱穴の掘り方をSB-014が切っていることから、本遺構が主軸方向を変えずに、東に1.10m、北に0.5m程度移動して建て替えたと考えられる。南東隅の柱穴と北桁中間に位置する柱穴が検出されなかった。柱間寸法は、桁行(東西)方向で1.90m～2.00m、梁行(南北)方向で1.35m～2.10mを測る。柱穴掘り方は径30.0cm～50.0cm程度の円形・楕円形である。確認面からの深さは32.5cm～67.0cm程で底面は方形



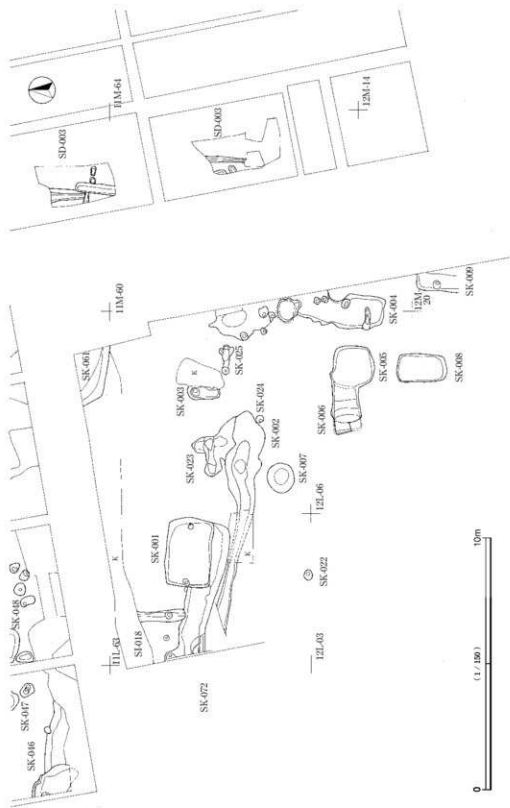
第27回 エリヤ区分図



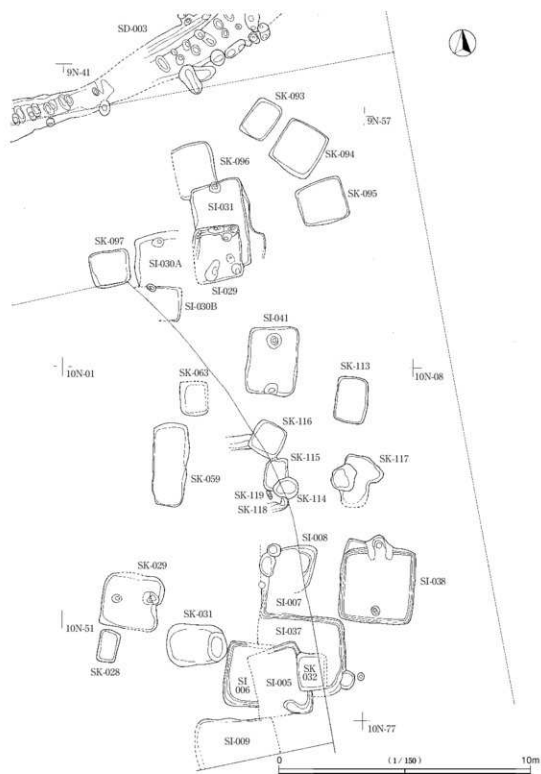
第28図 エイジヤ



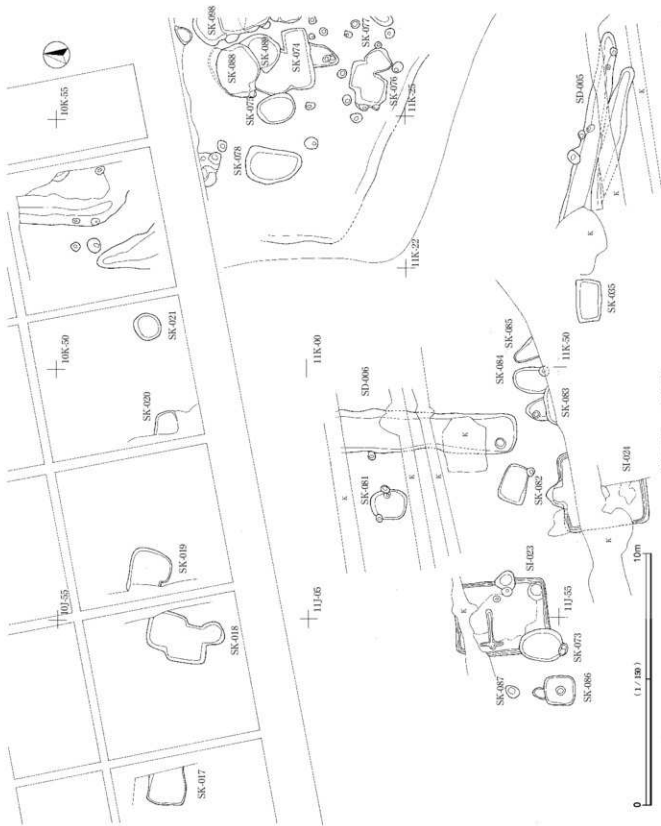
第28図 エリ7B



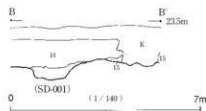
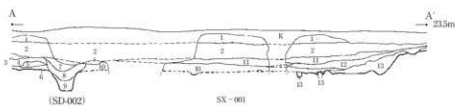
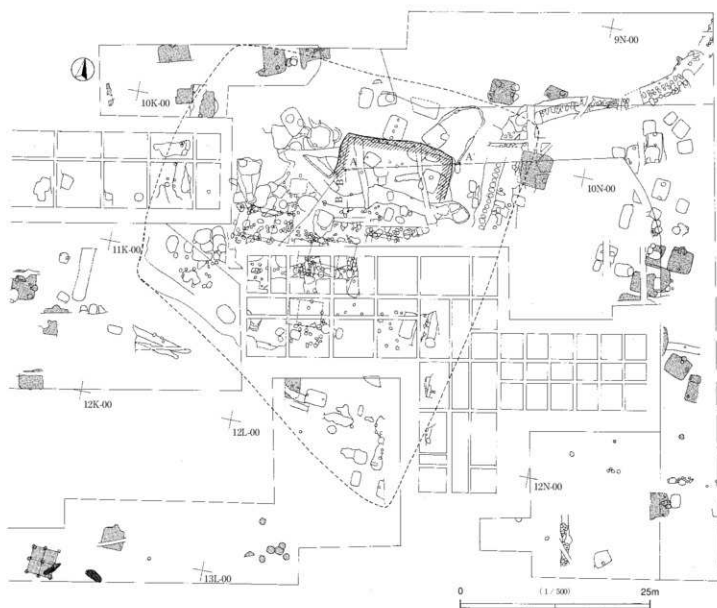
第30図 エリ7C



第31図 エリアD



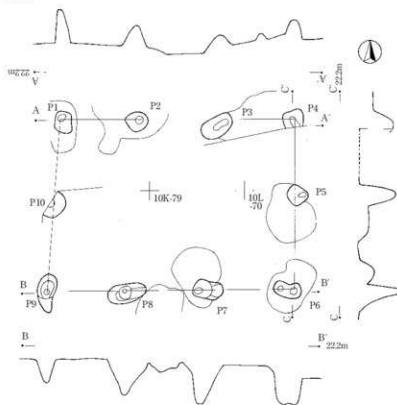
第32図 エリテ



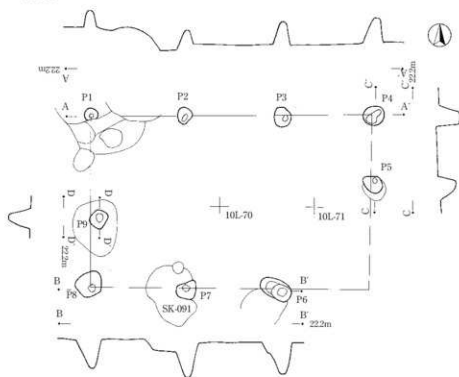
- SX-001
- | | | | |
|---------|-------------------|----------|----------------------------|
| 1. 黒土 | ローム状含、しまりあり、自然層 | 9. 黒褐色土 | ハードローム小ブロック含、しまりなし |
| 2. 黒色土 | ローム状含、しまりあり、自然層 | 10. 黒褐色土 | ローム状多含 |
| 3. 黒褐色土 | 軟質ローム・黒色土混 | 11. 黒色土 | ローム状・ハードローム小ブロック多含 |
| 4. 黒褐色土 | 軟質ローム土体、やや粗 | 12. 黒色土 | ハードローム・ハードローム小ブロック若干含 |
| 5. 黒色土 | ハードローム・4の軟質ローム混 | 13. 黒色土 | ハードローム小ブロック多含、しまりなし |
| 6. 黒褐色土 | 軟質、ハードローム小ブロック若干含 | 14. 黒色土 | ローム状・炭化物粒・焼土層若干含、しまりあり、自然層 |
| 7. 黒色土 | 黒褐色土・ローム状含、しまりあり | 15. 黒褐色土 | ローム状・ハードローム小ブロック多含 |
| 8. 黒褐色土 | ハードローム大ブロック、しまりなし | | |

第33図 台地整形区画 SX-001

SB-013

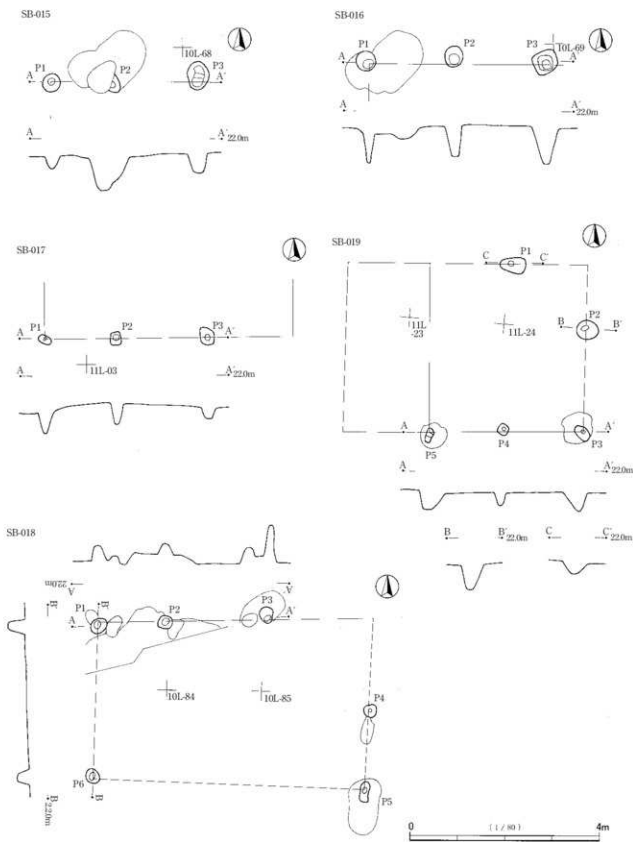


SB-014



0 (1/80) 4m

第34图 SB-013·014



第35图 SB-015·016·017·018·019

を呈しているものも確認できた。

SB-015(第35図)

SB-013・014と主軸方向はほぼ同じである。両遺構の南東、南側コンクリート基礎2A内に位置する。本遺構は東西3間×南北2間の東西棟の側柱建物と想定したが、南桁の3基のみ検出されたに止まる。柱間寸法は1.5m～1.9mを測る。柱穴の掘り方は一辺15.0cm～30.0cmの隅丸の方形を呈し、深さは20.0cm～48.0cm程度である。

SB-016(第35図)

SB-015の1.5m程北東に位置する。東西3間×南北2間の東西棟の側柱建物と想定した。主軸方向はSB-013～SB-015と同一であり、SB-015の建て替えであると考えられる。規模を桁行5.70m程度、梁行3.30m程とした。柱間寸法は1.45m～2.20mと柱穴の配列は規則正しいとはいえない。ピットが密集する中から柱穴を抽出したが、攪乱部分も多く詳細は不明瞭である。

SB-017(第35図)

10L-77グリッドを中心に位置する。SB-013と同軸上に位置する。北西隅の柱穴を基準に東西3間×南北2間の東西棟の側柱建物を想定したが、遺存している柱穴は南桁の3基のみである。柱間寸法は、0.95m～2.0mと不規則である。径35.0cm～60.0cmの円形・楕円形を呈し、深さは15.0cm～72.0cmを測る。

SB-018(第35図)

SB-017と重複関係にある。SB-014と同軸上に位置することから、SB-013とSB-014の関係と同様な建て替えが想定できる。柱間寸法は1.80m～1.90mである。径40.0cm～50.0cmの円形または丸みを有した方形を呈する。深さは76.8cm～77.8cmである。

SB-019(第35図)

SB-015・016の南に位置する。南側コンクリート基礎2B・2C内に位置する。南北2間で東西は2間、または3間を想定した。柱穴間寸法は1.60m～2.20mである。攪乱が著しいことから詳細は不明である。

4. 竪穴状遺構

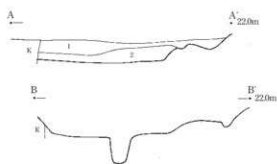
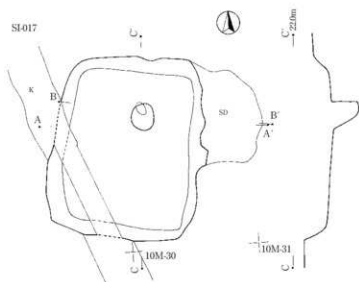
SI-017(第36図、図版10)

調査区中央北側エリアA、10M-30グリッド付近に位置する。平面形は南北に長い方形を呈する。規模は長軸2.92m、短軸2.48m、壁高は33.3cm～35.2cmを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、床面は平坦である。底面の中央よりやや北側に円形のピットが設けられている。径は40.0cm程度、深さは38.0cmを測る。炉などの施設は確認できない。堆積土から人為的な埋没であることがわかる。下層は大型のハードロームブロックを含む黄褐色土で、上層はローム粒を多量に含む黒褐色土で、埋め立てた後に上面を入念に整地していることが確認された。

遺物として土器が出土しているが、図化できるものはなかった。

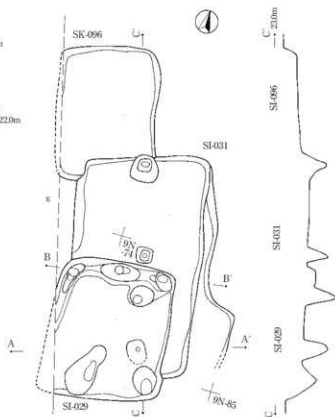
SI-029(第36図、図版10)

調査区東部エリアD、9N-74グリッド付近に位置する。SI-031を切っている。平面形態は南北に長い方形である。規模は長軸2.18m、短軸1.87mを測る。5.0cm程度のごく浅い壁溝が、北壁から西壁に巡っている。北壁の溝内に柱穴が3か所、南壁には東コーナーと、抜き取り痕の残る西寄りに2か所検出された。また、中央よりやや東に方形のピットが検出され、深さが40.0cmほどを測る。堆積土の状況からこのピットを人為的に埋めた後、遺構も一気に埋め戻したと考えられる。遺物は覆土から土器が出土したが、図化できる

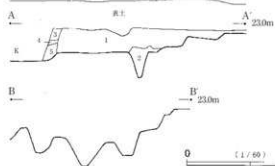


SI-017

1. 黒褐色土 ローム殻・ハードロームブロック多含、やや粗
2. 黄褐色土 丸ロームブロック主体、やや粗



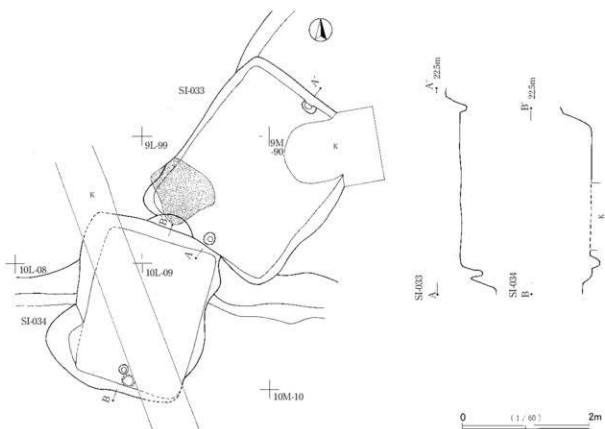
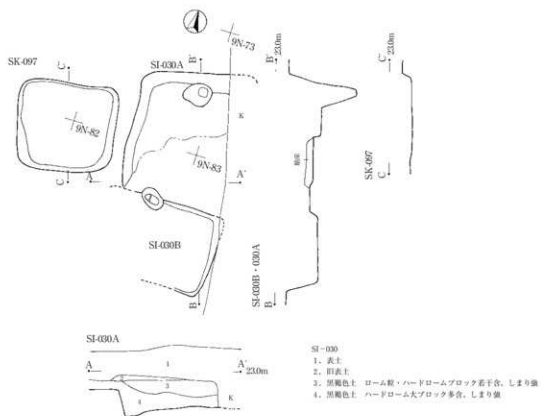
SI-029・031



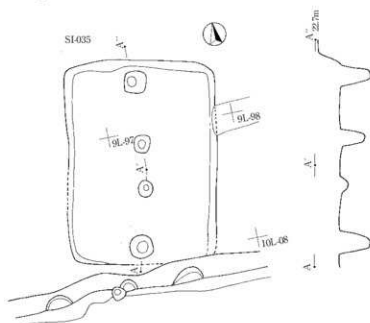
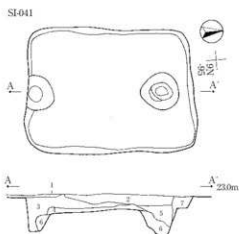
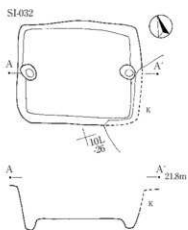
SI-029

1. 黒褐色土 ローム殻・ハードロームブロック多含、しまり強
2. 黒褐色土 ハードロームブロック多含、しまり弱
3. 黒褐色土 ローム殻・ハードロームブロック若干含、しまり強
4. 黒色土 ローム殻含まない単一土層、しまりあり
5. 黒褐色土 ハードローム大ブロック多含、しまり強

第36図 SI-017・029・031・SK-096

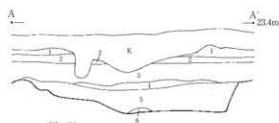
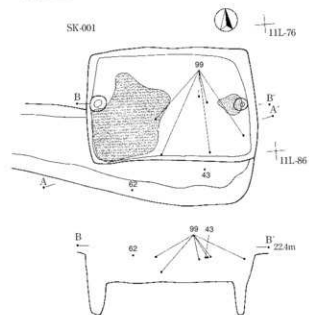


第37図 SI-030A・B・SK-097・SI-033・034



SI-041

1. 表土
2. 褐色土 ローム粒・ローム小ブロック多量
3. 褐色土 ローム粒・ハードロームブロック多量
4. 黄褐色土 ハードロームブロック主部
5. 黒褐色土 ハードロームブロック多量
6. 黄褐色土 ハードロームブロック層、もろい
7. 褐色土 ローム粒多量



SK-001

1. 黒色土 しまりあり
2. 黒色土 塊土・灰の細粒若干含、固くしまる
3. 黒色土 塊土粒・小砂粒含、しまりあり
4. 黒褐色土 ローム小ブロックが薄く層をなす、しまり弱
5. 黒褐色土 ハードロームブロック多量、しまり弱

第38図 SI-032・035・041・SK-001

0 1 / 40 2m

ものはなかった。

SI—030A・B (第37図、図版10)

調査区東部エリアD、9 N-83グリッド付近に位置する。東側は埋設管により攪乱により削平されている。北に位置する遺構をA、南に位置しSI-030Aを切っている遺構をSI-030Bとした。SI-030Aは北壁近くのほぼ中央に柱穴と思われるピットが検出された。径40.0cm程度の円形で、床面からの深さは52.0cmである。壁は緩やかに立ち上がる。遺構中央部は貼り床部が確認された。SI-030Bは東西方向に長い方形を呈すると思われる。南北の壁の一部が残るのみのため、詳細は不明である。床面は平坦である。北壁にピットが1か所検出された。40.0cm×28.0cmの楕円形を呈し、深さ43.0cmである。本遺構に伴うものかどうかは不明瞭である。遺物としては、覆土から土器が出土したものの図化できるものはなかった。

SI—031 (第36・67図、第10表、図版10)

調査区東部エリアD、9 N-74グリッド付近に位置する。SI-029に切られている。平面形態は南北に長い方形で、規模は長軸3.55m、短軸約2.0mを測る。壁高は24.0cm～28.5cmである。長軸方向を主軸とした場合、方位はN-14.0°-Wである。床面はほぼ平坦である。北壁中央と底面のほぼ中央部に方形のピットが検出された。北壁に位置するピットは壁に接して構築され、一辺20.0cm～45.0cm、深さ38.0cmを測る。中央に位置するピットは一辺22.0cm～28.0cm、深さ36.0cmである。遺物としては覆土中から銭貨(67-8)が1点出土した。

SI—032 (第38図、図版10)

調査区中央北側エリアA、10L-16グリッド付近に位置する。南東コーナーは攪乱により消失している。東西方向に長い方形を呈する。規模は長軸1.98m、短軸1.65m、深さは47.0cm～50.3cmを測る。壁はなだらかに掘り込まれ、床面は平坦である。長軸方向を主軸とすると、方位はN-72.0°-Wである。底面の東西壁際中央には2基の円形ピットが配置されている。径20.0cm～30.0cm程度で、深さは底面から15.0cm～20.0cmである。遺物は覆土から土器が出土したが、図化できるものはなかった。

SI—033 (第37・56図、第7表、図版10)

調査区北部中央エリアA、9 H-91グリッド付近に位置する。南側にSI-034があり、南西壁の一部を切られている。北東コーナーは攪乱により削平されている。南北方向に長い方形を呈している。規模は長軸3.05m、短軸2.50m、壁高は25.4cm～32.5cmである。長軸方向を主軸とすると、方位はN-38.0°-Eである。壁はなだらかに立ち上がり、床面はほぼ平坦で硬化している。南西コーナー付近で灰が検出された。密度は薄いのが、床面直上まで広がっていた。竈などの施設は検出されない。南北の壁の中央に2か所のピットが検出された。径15.0cm～25.0cm程度で、深さは北側は底面から10.0cm、南側は32.0cmである。遺物は青磁碗(56-7)や鉄滓などが出土した。

SI—034 (第37図、図版10)

調査区北部中央エリアA、10L-18グリッド付近に位置する。南北に長い方形を呈する。南西コーナー付近が突出した不整形である。北西コーナーから南東コーナーにかけて攪乱により削平されている。長軸は3.10m、短軸は2.1mを測る。壁高は20.0cm～49.0cmで、なだらかに立ち上がる。床面は平坦である。北壁中央部分の外側に、10.0cmほどの浅い掘り込みがあり、出入り口施設と思われる。この出入り口方向を主軸とすると、方位はN-19.0°-Eである。入り口と対面の南壁中央近くに1か所ピットが検出された。径15.0cmで、深さ14.0cmである。出土遺物はない。

SI-035 (第38図、図版10)

調査区北部中央エリアA、9L-98グリッド付近に位置する。南壁は台地整形区画により掘削を受け削平されている。南北方向に長い方形を呈し、規模は長軸3.2m、短軸2.4mを測る。壁高は8.7cm～25.5cmである。床面は平坦で硬化している。長軸方向を主軸とすると、方位はN-12.0°-Eである。主軸方向に平行して平面中央に4か所のピットが検出された。P1～P4とすると、P1・P2は方形を呈し、P3・P4は円形である。規模はP1は一辺30.0cm、深さ51.1cm。P2は一辺20.0cm、深さ23.3cm。P3は径22.0cm、深さ12.6cm。P4は径37.0cm、深さ47.0cmを測る。遺物は覆土から土器が出土したが、図化できるものはなかった。

SI-041 (第38図、図版10)

調査区東部エリアD、10N-05グリッド付近に位置する。平面形態は南北に長い方形を呈する。規模は長軸2.63m、短軸1.97mを測る。壁はなだらかに掘り込まれ、深さは19.8cm～25.6cmで、床面が南東側が低く、西側が高い様相である。長軸を主軸とすると方位はN-10.0°-Eである。主軸方向に平行して2基の円形ピットが配置されている。北壁中央部近くのピットは、径60.0cm程度で底面が方形を呈し、方形の柱の抜き痕であると思われる。深さ45.0cmである。南側のピットは壁に接して設置され、径45.0cm～50.0cmで、深さ28.5cmを測る。遺物は覆土から土器が出土したものの、図化できるものはなかった。

SK-001 (第38・58・60～63図、第7表、図版10)

調査区中央エリアC、11L-85グリッド付近に位置する。東西に長い方形を呈する。規模は長軸2.75m、短軸1.84m、壁高は21.7cm～50.3cmを測る。床面は硬化していないが平滑である。長軸を主軸方向とすると、方位はN-95.0°-Eである。主軸方向に平行して2基の円形ピットが配置されている。径20.0cm～25.0cmの円形で、柱痕が確認できた。東側のピットの周囲径33.0cmの円形状と床面の西側に広く灰と炭が検出された。厚さは5.0cm～6.0cm程度である。遺物は瀬戸・美濃鉢(58-43)・火鉢・掘り鉢・在地掘り鉢(62-96)・常滑甕(60-62)・鉢(61-80)・風埴(62-99)・陶製錘・転用砥石(63-110)などが出土した。

SK-009 (第39図)

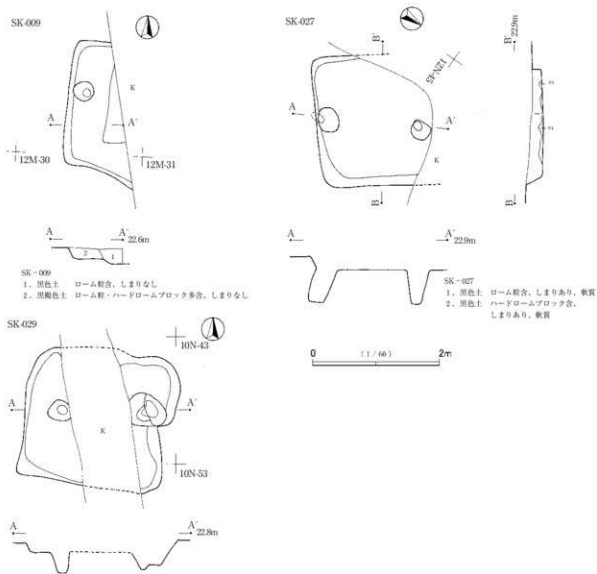
調査区中央南側エリアC、12M-30グリッド付近に位置する。東側は削平されており確認できない。おそらく東西に長い方形を呈する遺構と考えられる。西壁は一辺1.80m確認面からの深さ17.0cmである。床面は中央部で一段下がっている。西壁中央より若干北に寄った位置にピットが1基検出された。径30.0cmの円形で深さ43.0cmである。遺物は、覆土から土器が出土したが、図化できるものはなかった。

SK-027 (第39図)

調査区東部最南端、12N-45グリッド付近に位置する。北西側は掘削により消失している。北西方向に長い方形を呈する遺構と思われる。南東壁1辺は2.05m、壁高は4.2cm～11.4cmである。床面は平坦である。南東壁中央と床面中央部に2基ピットが配置されている。壁際側のピットは径28.0cmで深さ51.0cmを測る。壁方向に斜めに掘り込まれている。中央部に位置するピットは1辺28.0cmのほぼ方形を呈し、深さ53.3cmである。堆積土は黒色土でロームブロック粒を含んでおり、人為的な埋戻しと考えられる。覆土から土器が出土したものの、図化できるものはなかった。

SK-029 (第39図、図版14)

調査区東部北側エリアD、10N-53グリッド付近に位置する。遺構中央部に南北方向の掘削部分が存在する。東西方向に僅かに長い方形を呈する。長軸2.40m、短軸2.20mを測る。壁高は18.6cm～21.0cmで、床面はほぼ平坦である。東壁は直線的ではなく、中央にピットが位置するが、その部分で窪んでいる形状であ



第39図 SK-009・027・029

る。ピットは西側でも検出された。東側のピットは径64.0cmの不整形で、深さは二段になっており、床面から20.0cmと29.0cmを測る。西側ピットは径32.0cm程度の不整の円形で、深さは33.0cmである。この2基のピットを結んだ線を主軸方向とすると、方位はN-87.0°-W (N-93°-E)である。遺物は覆土から土器が出土したものの、図化できるものはなかった。

SK-090 (第48・49・63図、第7表、図版17)

調査区中央エリアB、11K-08グリッド付近に位置する。遺構を南北に下水管が走り、東側はコンクリート基礎があるため擾乱を受けている。平面形は東西方向に長い方形を呈すると思われる。西壁は1辺1.85mを測り、壁高は26.4cm~34.2cmである。西壁の南端に位置する、深さ14.0cmほどの浅い楕円形の掘り込

みは、ステップ状の出入り口施設と考えられる。出入り口方向を主軸とした場合、方位はN-102.5°-Eである。出土遺物としては、常滑転用砥石(63-100)が出土した。

SK-096(第36図、図版10)

調査区東部北端エリアD、9N-74グリッド付近に位置する。SI-031に南壁の一部を切られる。平面形は南北に長い方形を呈している。長軸2.10m、短軸約1.6mである。壁高は15.6cm～18.0cmを測る。床面は平坦である。遺物は、覆土から土器が出土したが、図化できるものはなかった。

SK-097(第37図、図版11)

調査区東部北側エリアD、9N-73グリッド付近に位置する。SI-030の西に隣接する。東西に若干長い方形を呈する。長軸1.60m、短軸1.40mを測り、壁高は5.0cm～12.5cmである。床面は平坦である。遺物はない。

5. 地下式坑

SK-004(第40図、図版11)

調査区中央南寄りエリアC、12L-09グリッド付近に位置する。地下式坑を含む柱穴等の複合遺構である。地下式坑の入り口部は確認面で円形で、径0.95m程である。上面は完全に開口しており、円筒形の井戸状を呈している。深さは、確認面から入り口底面までが1.11mを測る。主室は南東側に伸びるが、上に高圧電気ケーブルが敷設されていたため調査不可能であった。推定の壁面ラインを出すに止めた。

遺物は検出されなかった。

SK-039(第40・58～61・63・64図、第7・8表、図版11)

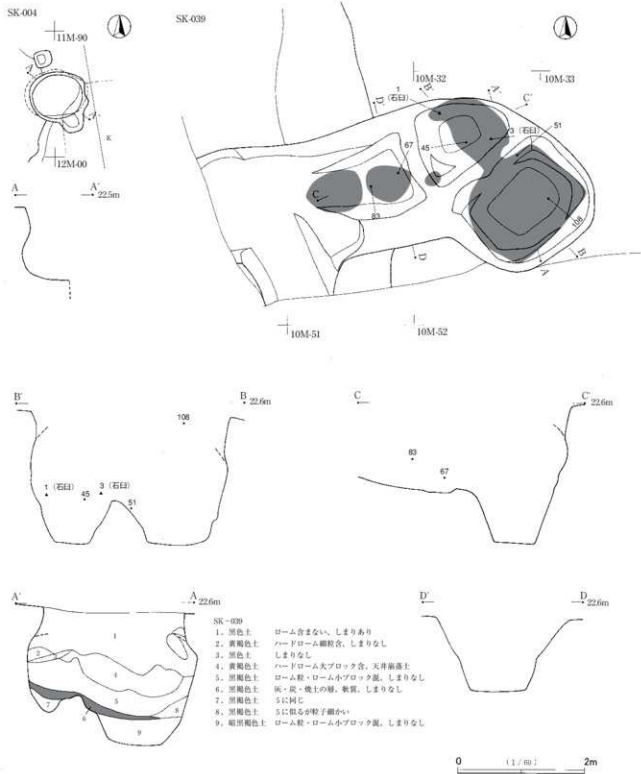
調査区北側エリアA、10M-42グリッド付近に位置する。入り口部は不整の方形を呈する。長軸は1.5m、入り口は幅60.0cm程度、奥が1.2mを測る。手前から主室に向かいならかな傾斜で低くなっていく。主室は2室に壁によって仕切られている。入り口に近い主室は平面形は台形で奥行きは1.45m、手前幅1.20m、奥幅0.5mである。底面形は方形で、床面積は約0.3㎡である。確認面からの深さは1.65mである。南東側に壁を隔てて位置する主室は方形を呈し、幅1.70m、奥行き1.90mである。底面形は方形で、床面積0.75㎡を測る。確認面からの深さは2.10mである。図面上でトーンのかかった部分からは、灰と炭、焼土が検出された。入り口部から流入したようで手前側の層が厚く奥に行くに従って薄くなる。その後一気に天井部が崩落したことが判明した。遺物については、多くの遺物が出土しているが、概ねこの層からの出土である。白磁碗、瀬戸・美濃壺、挿り鉢(58-45、59-51)、常滑甕(60-67)、片口鉢(61-83)、転用砥石(63-108)、砥石(64-1)などである。

SK-046(第44図、図版11)

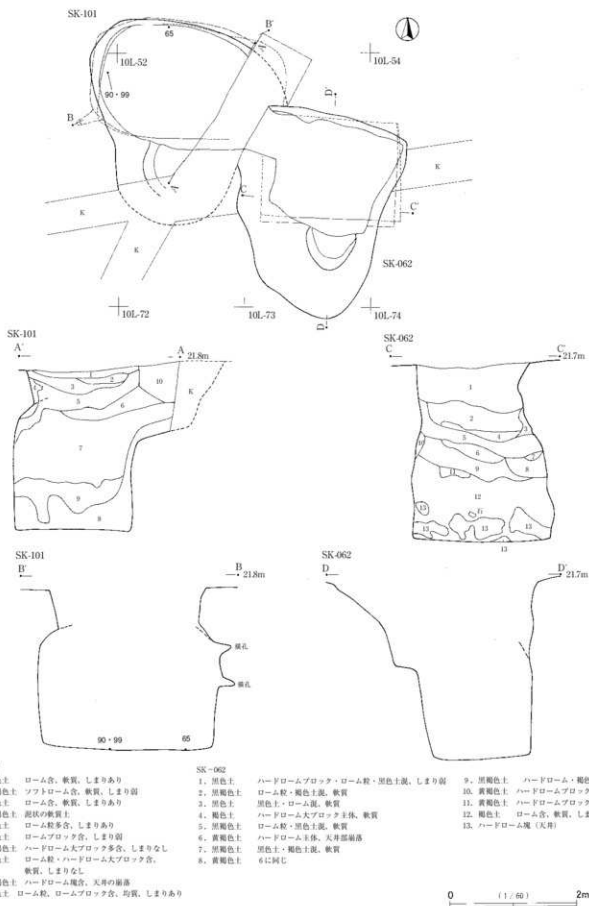
調査区中央、C-1コンクリート基礎内に位置する。ほとんどが攪乱を受けていた。入り口部の1/4程度のみのものである。平面形はおそらく不整な円形状を呈すると思われる。調査時の確認では、主室は南側に存在したと判断された。入り口部の確認面からの深さは、1.30m～0.87mを測る。堆積土は入り口部分では黒褐色土主体で3mm前後のハードローム粒を多量に含んでいる。奥は黄褐色のハードロームで天井部の崩落土が確認された。上層は黒褐色土で中世遺物を多く含む層である。図化できる遺物はない。

SK-062(第41・57図、第7表、図版11)

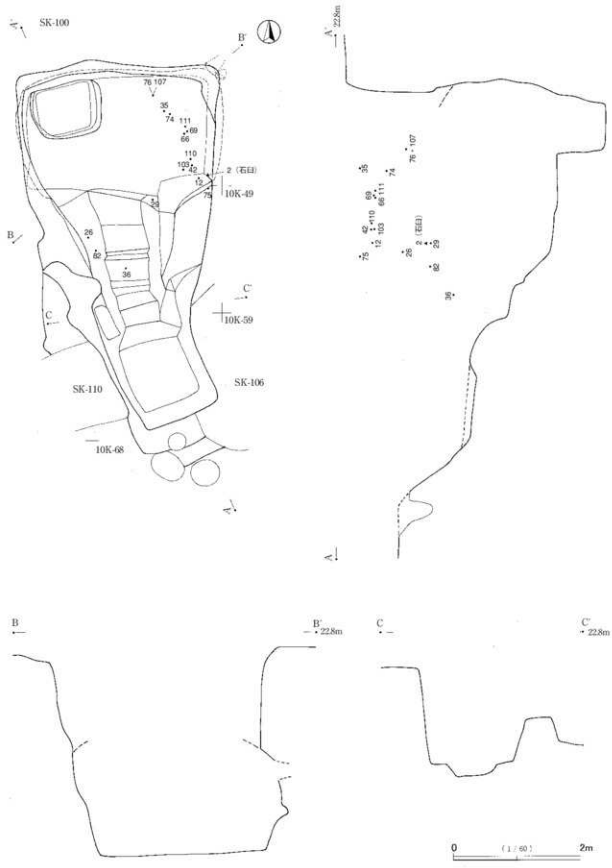
調査区中央エリアA、10L-53グリッド付近に位置する。西側に地下式坑のSK-101が存在するが、切り合い関係は不明である。確認面では天井部の存在を確認できなかった。入り口部は横方向に長い方形である。全体の長さは3.20m、主室兼全体の最大幅は2.77mである。入り口部はすり鉢状に下がり、確認面からの



第40図 SK-004・039



第41図 SK-062・101



第42図 SK-100

深さは入り口底部までが1.32m、入り口底部から主室底面までが1.45mである。主軸方向はN-120°-Eである。主室の規模は高さが2.8m、奥行きが1.55mで、床面積は約3.2㎡を測る。底面はほぼ平坦である。奥壁は垂直に立ち上がる。主室内にはローム粒やハードロームブロックを含む黒褐色土や褐色土が流れ込っていた。中層にハードローム主体の黄褐色土層が確認され、天井部の崩落の痕跡である。

遺物には瀬戸・美濃碗(57-27)、内耳鍋、転用鉢・砥石がある。

SK-100(第42・56-58・60・61・63図、第7・8表、図版11)

調査区中央北側、10K-68グリッド付近に位置する。確認面では天井部の存在を把握できなかった。形態は、入り口が方形、主室が横長の方形である。入り口は主軸方向をN-190°-Wとし、主室はN-3°-Wとほぼ真北方向に向きを変える形態である。全体の長さは5.82m、主室兼全体の最大幅は3.08mである。深さは確認面から入り口底部までが1.2m、入り口底部から主室底面までが1.35mである。入り口底部から主室までは、幅の狭い僅かな階段状を形成している。主室の規模は底面で幅が1.78m、奥行きが1.60mを測る。主室底面の面積は2.83㎡である。主室の西コーナーに奥壁に接した状態の貯蔵穴が検出された。横長の方形を呈し、長軸は0.73m、短軸0.54mである。深さは0.8mを測り、底面は平坦である。覆土中から青磁碗、瀬戸・美濃の瓶子・碗(57-26)・皿(57-29・35・58-36・42)・播鉢、常滑甕(60-66・69)・鉢(61-74～77・82)、転用砥石(63-103・107・110・111)、砥石(64-11)などが出土している。

SK-101(第41・60・62図、第7表、図版11)

調査区中央エリアA、10L-53グリッド付近に位置する。西側に地下式坑SK-062が切り合う。新旧関係は不明である。入り口はほとんど未掘であるため形状は不明瞭である。円形を呈すると考えられる。主室は横方向に長い方形で丸みを持っている。全体の長さはおおよそ4.3m、主室兼全体の最大幅は4.2mである。深さは入り口の一部残存部で確認面から1.1m、確認面から主室底面までが、2.48mである。主軸方向はN-60°-Eである。主室の規模は底面で奥行き1.85m、幅はおおよそ4.3mを測る。底面は平坦である。天井部はすでに崩落しており、堆積土層から、底面近くはハードロームブロックを含む黒色土層が堆積し、崩落し始めの入り口からの流入の状況が確認できる。その後一気に崩落した様相である。土層は自然堆積である。南西コーナーに深さ20cm～25cm程度の横孔が2か所確認できた。

遺物は多くが床面からの検出で、常滑甕(60-65)、内耳鍋(62-90)、風炉などが出土した。

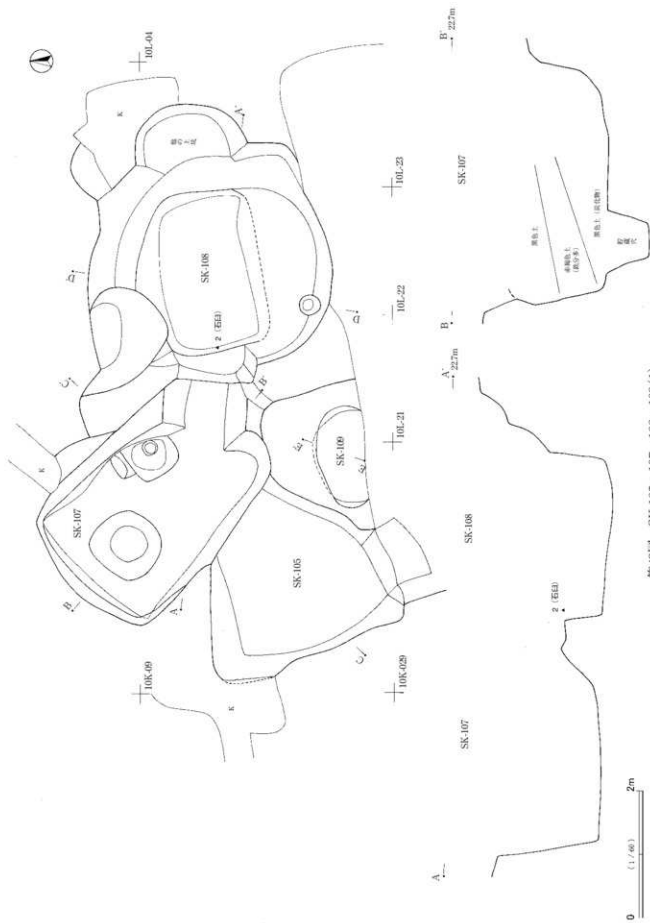
SK-105(第43・44・62図、第8表、図版12)

調査区中央北側エリアA、10L-12グリッド付近に位置する。地下式坑SK-107・108と隣接する。SK-107に切られている。入り口は南側に位置し、階段状になっている。平面形は方形を呈したのと考えられる。幅は3.0m程度である。西壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。天井部は崩落している。

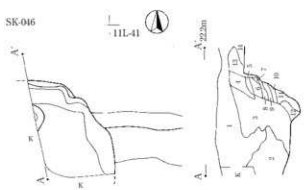
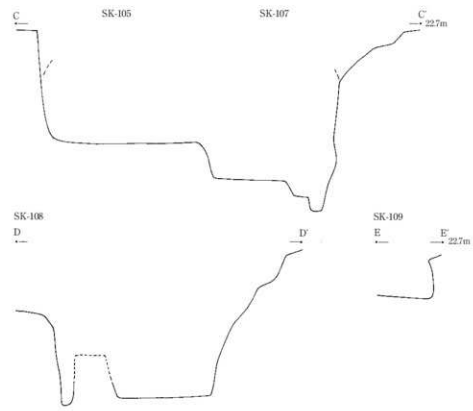
遺物は香炉(62-97)が出土した。

SK-107・108(第43・44・57図、第7表、図版12)

調査区中央北側エリアA、10L-12グリッド付近に位置する。SK-108がSK-107を切っている。SK-107は入り口を東側に持つ。主室平面形は縦に長い方形である。長さ3.7m、幅2.55mである。主軸方向はN-50°-Wである。天井部中央は崩落しており、通路側からの堆積土の流れ込みが確認できる。底面は奥側は平坦であるが、入り口側はなだらかな傾斜を有している。北東壁に最深50cmのビットと、奥壁近く中央に貯蔵穴が検出された。貯蔵穴はほぼ円形を呈し、径は確認面で1.0m、底面で0.53mである。出土遺物は瀬戸・美濃の壺(57-16)がある。



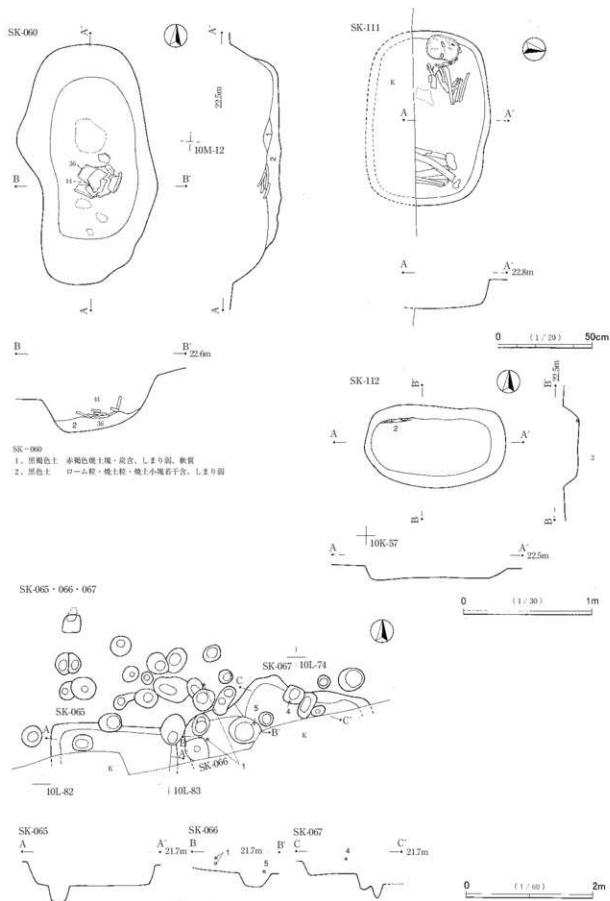
第43圖 SK-105・107・108・109(1)



- SK-046
1. 黒褐色土 ローム統合、しまりあり
 2. 黄褐色土 天井部の礫層土、しまりなし
 3. 黄褐色土 ハードローム層多含、しまりなし
 4. 黒褐色土 ローム粒多含、しまり弱
 5. 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多含
 6. 棕色土 ローム含まない単一層、軟質
 7. 黄褐色土 ローム粒主体
 8. 棕色土 6に同じ
 9. 黄褐色土 5に同じ
 10. 黄褐色土 5に同じ
 11. 黒褐色土 ローム粒少含、崩れやすい
 12. ハードローム塊、しまりなし



第44図 SK-105・107・108・109(2)・046



SK-108は平面形が縦方向に長い方形を呈している。入り口部はSK-108側に位置する。主室の長さ2.55m、幅約1.7mを測る。主軸方向はN-83.0°-Eである。深さは確認面からは2.2mである。底面は奥壁側に僅かな傾斜を有し入り口側に向かって若干高くなっている。床面積は概ね3.3㎡を測る。遺物は通路付近の覆土から瀬戸・美濃壺(57-17)、風炉、転用砥石などがある。

6. 土壇墓

SK-060(第45・58図、第7表、図版12)

調査区中央北側エリアA、10M-12グリッド付近に位置する。形態は不整の楕円形である。確認面での長径は1.28m、短径は0.71m、底面での長径は0.85m、短径は0.45mを測る。確認面からの深さは28cmである。底面から8cm程度の深さでローム粒や焼土粒・塊を若干含む黒色土を検出し、その面上から瀬戸・美濃の大皿(58-36)が出土した。また、北側からは焼土塊や炭を含む黒褐色土が検出された。

SK-066・067(第45・66図、第9表、図版11)

調査区中央エリアA、10L-74グリッド付近に位置する。南側はコンクリート基礎により、攪乱を受けているため、詳細な規模は分からない。SK-066とSK-067と切り合うが、柱穴などにより新旧関係は不明である。両遺構共に隅丸の方形状を呈すると思われる。遺物として刀子(66-3・4)や短刀(66-1)が検出され、土壇墓の副葬品と考えられる。

SK-111(第45図、図版12)

調査区北側エリアA、9L-65グリッド付近に位置する。南半分は攪乱を受けている。隅丸の東西方向に長い方形を呈している。長軸は0.92m、短軸はおそらく0.65mほどと思われる。底面から人骨が出土した。人骨は、頭部を東側に置き、北側に顔の正面を向けた屈葬である。図面の点線内では肋骨と思われる小さな骨が集中して検出された。

SK-112(第45・66図、第9表、図版12)

調査区中央北側エリアA、10K-47グリッド付近に位置する。SK-100の西側に隣接する。平面形は東西に長い隅丸の方形を呈する。確認面の長径で1.15m、短径0.75mを、底面での長径は0.95m、短径は0.45mを測る。北側の西隅などから短刀(66-2 a・2 b)が2点、白歯等が出土した。

7. 火葬施設

SK-023(第46図)

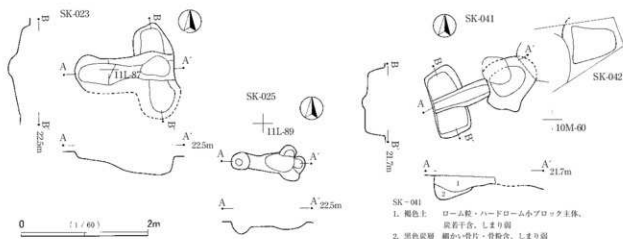
調査区南側中央エリアC、11L-88グリッド付近に位置する。上面をすでに削平されている。平面形態は燃焼部と通風坑が連結したT字型である。規模は燃焼部が57cm×138cm、深さ18.0cmを測り、通風口では45cm×156cm、深さ31.0cmである。主軸方向はW-4.0°-Sである。通風坑は奥が出口付近で浅くなる。燃焼部の北側に炭と骨片が残る部分がある。

SK-025(第46図、図版12)

調査区南側中央エリアC、12L-09グリッド付近に位置する。上面をすでに削平されている。平面形態は燃焼部と通風坑の連結したT字型である。規模は燃焼部が25cm×57cm、通風坑は32cm×118.5cmを測る。主軸方向はN-83.5°-Wである。通風坑の入り口部に焚口として、深さ20.5cmのピットが検出された。燃焼部の北側に炭と骨片が若干残されていた。

SK-041(第46図、図版12)

調査区中央エリアA、10L-79グリッド付近に位置する。すでに上面は削平されている。平面形態はT



第46図 SK-023・025・041

字型を呈している。規模は燃焼部が53cm×106cm、深さ39cm、通風坑は東側をピットに切られているが、短軸は29cmを測る。主軸方向はW-70°-Sである。燃焼部の底面は被熱により赤褐色に変色している。堆積土は下層が骨粉・片を含む黒色炭層で、上層はローム粒を含む褐色土である。

SK-042 (第46図、図版12)

エリアA、10M-51グリッド付近に位置し、SK-041の東側に隣接している。床面直上厚さ5cm～10cmの炭の層を検出した。焼かれた骨片を含んでいたことから、この位置に火葬施設の存在していたことを確認した。規模などの詳細は不明である。

8. 粘土貼り土坑

SK-045 (第47図、図版12)

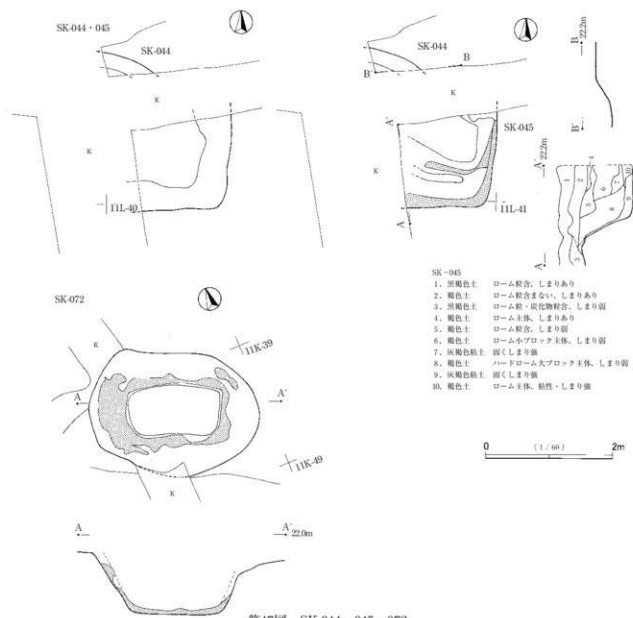
調査区中央エリアB、コンクリート基礎C-1内に位置する。基礎部分で多くを消失している。平面形態は遺存部分で方形を呈しており、南東コーナーの状況から全体の形状も方形を呈する可能性が高いと思われる。確認面からの深さは1.20mである。粘土は二重に貼られていたことが確認でき、新旧関係が判明している。まず外側の規模の大きいものが構築され、その後一気に埋められた後、内側に再度小規模なものを構築している。粘土は灰褐色土で硬くしまりが強い。

SK-072 (第47・60図、第7表、図版12)

調査区中央エリアB、11K-48グリッド付近に位置する。平面形態は隅丸の方形である。規模は長軸2.68m、短軸1.95mを測る。底面形態は方形で、長軸1.44m、短軸0.79mである。確認面からの深さは98.0cmを測る。粘土は四方全面に貼られていたと思われるが、上部ははがれ落ちて内部に堆積した状態で検出された。灰白色から灰褐色の粘土で硬質である。覆土中から瀬戸・美濃播鉢、常滑甕(60-68)が出土した。

SK-106 (第52・57・60図、第7表、図版11)

調査区中央エリアA、10L-60グリッド付近に位置する。地下式坑SK-100などと切り合う。平面形態は不整の楕円形である。長軸2.98m、短軸1.80mを測る。確認面からの深さは1.10mである。北側の壁は一部オーバーハングし、袋状になっている。



第47図 SK-044・045・072

遺物は床面直上や覆土中位から多数出土した。瀬戸・美濃卸目付き大皿 (57-34)、常滑甕 (60-70) などである。

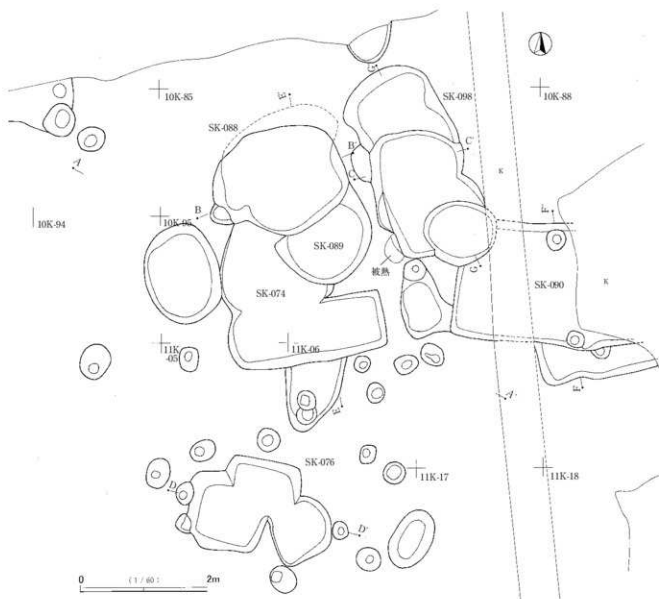
9. 袋状土坑

SK-006 (第49・67図、第10表、図版13)

調査区南側エリアC、12L-08グリッド付近に位置する。平面形態は東西に長い方形を呈する。SK-005と重複しており、東壁は確認できなかった。規模は長軸約1.95m、短軸1.30mを測る。袋状の坑内は確認面から西側に約60.0cm掘り込まれている。深さは確認面から70.0cm、奥壁面は35.0cmの高さである。天井部は良好に残っていた。遺物は、覆土中から土器と共に北宋銭 (67-3) が1点出土した。

SK-088 (第48・49・57図、第7表、図版17)

調査区中央エリアE、10K-86グリッド付近に位置する。SK-089を切っている。平面形態は東西方向に長い不整の楕円形を呈する。長軸2.3m、短軸1.75mを測る。坑内は北方向に30.0cmほど袋状に掘り込まれて



第48図 SK-074・076・088・089・090・098(1)

いる。確認面からの深さは80.0cm程度である。底面は僅かに奥にいくにしたがい深くなっている。覆土から瀬戸・美濃碗(57-28)などが出土した。

10. 土坑

SK-005(第49図、図版13)

調査区南側エリアC、12L-09グリッド付近に位置する。SK-006と切り合い、堆積土からみるとSK-006に切られており、北西コーナーが消失している。平面形態は一辺1.6m程度の不整形な方形を呈する。確認面からの深さは19.4cm~27.5cmを測る。堆積土はローム粒を含む黒褐色土が主体である。

SK-008(第49図、図版13・17)

調査区南側エリアC、12L-29グリッド付近に位置する。SK-005の南に隣接する。西側は擾乱を受けている。平面形態は南北に長い方形を呈する。長軸1.80m、短軸1.15m、深さは18cmを測る。堆積土はハードロー

SK-074



SK-074

1. 黒色土 ローム粒・粘土粒・炭化物粒若干含、自然堆積砂多含、しまりあり
2. 褐色土 ローム粒含、しまりあり
3. 褐色土 ローム粒・ハードロームブロック多含、しまりあり
4. 黄褐色土 ローム粒・ローム小ブロック主体、しまりあり
5. 黒色土 ローム小ブロック・黒色土混、しまりあり
6. 黄褐色土 4に同じ
7. 黒色土 5に同じ
8. 黄褐色土 ロームが繊維状に堆積、しまりあり
9. 黒色土 5に同じ

SK-076



SK-088



SK-090



SK-088



SK-088

1. 褐色土 ローム粒・ローム小ブロック含、しまり弱
2. 黒色土 ローム小ブロック若干含、しまりあり
3. 黒褐色土 ローム粒含、炭質、しまりあり
4. 褐色土 ローム粒・ハードロームブロック多含、しまり弱
5. 黒褐色土 しまり弱

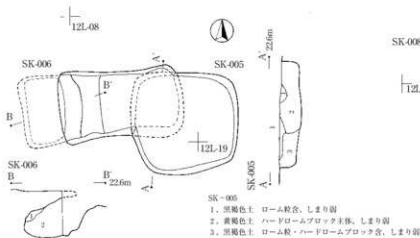
SK-098



SK-098

1. 黒褐色土 灰白色砂・赤褐色砂含、しまり弱
2. 黒褐色土 ローム粒・ハードロームブロック含、しまり弱
3. 褐色土 ハードロームブロック多含

SK-098



SK-006

1. 黒色土 ローム粒若干含、しまりなし
2. 黒褐色土 ローム粒・ハードロームブロック多含、しまりなし

SK-005

1. 黒褐色土 ローム粒含、しまり弱
2. 黄褐色土 ハードロームブロック主体、しまり弱
3. 黒褐色土 ローム粒・ハードロームブロック含、しまり弱

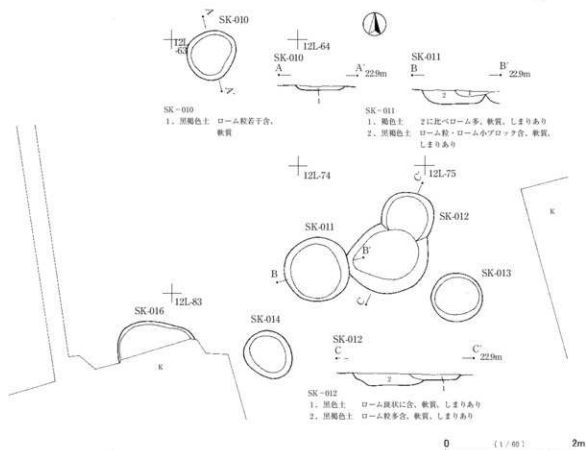
SK-008



SK-008

1. 黒褐色土 ローム粒・ハードロームブロック若干含、しまりなし

第49図 SK-074・076・088・089・090・098(2)・005・006・008



第50図 SK-010・011・012・013・014・016

ムブロック・ローム粒を含む黒褐色土で、埋め戻された様相がうかがえる。遺物は、包含層から土器が出土したが、図化できるものはなかった。

SK-028 (第51図、図版14)

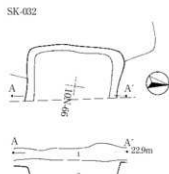
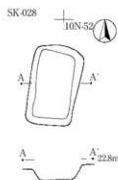
調査区東部エリアD、10N-65グリッド付近に位置する。方形竪穴状遺構SK-029の南に隣接する。平面形態は南北に長い方形を呈する。長軸は1.28m、短軸0.78m、深さは23.0cmを測る。遺物はない。

SK-031 (第51図、図版14)

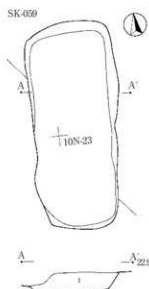
調査区東部エリアD、10N-64グリッド付近に位置する。方形竪穴状遺構SK-006、SK-029の間に位置する。平面形態は東西に長い方形を呈する。長軸2.43m、短軸1.6m、深さは42.5cmを測る。東壁は南北に長い楕円形のピットにより掘り込まれている。ピットの深さは69.5cmである。遺物は覆土から土器や瓦などが出土したものの、図化できるものはなかった。

SK-032 (第51図、図版14)

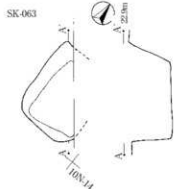
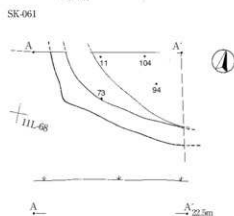
調査区東部エリアD、10N-55グリッド付近に位置する。東側は未調査のため不明である。平面形は方形になると思われる。西壁は1辺1.50m程度である。深さは50.0cm程度である。堆積土はハードロームブロックを含む黒褐色土で埋め戻されたと考えられる。遺物は覆土から土器が出土したが、図化できるものはなかった。



- SK-032
1. 黒褐色土 小砂利少量、ローム粒・粘土粒少量、しまり地
 2. 黒褐色土 ローム粒・ハードローム大ブロック少量、しまりあり



- SK-031
1. 黒褐色土 ローム粒主体、ロームブロック若干、しまり地
 2. 褐色土 黒色土にローム粒・ハードローム大ブロック混、しまり弱



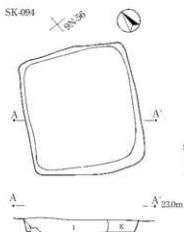
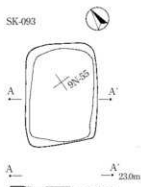
- SK-059
1. 黒褐色土 ローム粒・ハードロームブロック含、しまりあり



- SK-061
1. 黒褐色土 ハードローム粒・ハードローム小ブロック含
 2. 黒褐色土 炭化物若干、しまりあり
 3. 褐色土 ローム粒・ハードロームブロック混、しまり弱



- SK-095
1. 黒褐色土 ハードロームブロック多含
 2. 黒褐色土 ローム粒含



- SK-094
1. 黒褐色土 ローム粒含
 2. 黒褐色土 ハードローム塊含

- SK-093
1. 黒色土 ローム粒含
 2. 黒色土 ハードロームブロック含
 3. 黒褐色土 ローム粒含



第51図 SK-028・031・032・059・061・063・093・094・095

SK-059 (第51図、図版15)

調査区東部エリアD、10N-23グリッド付近に位置する。南北方向に長い方形を呈する。西側は擾乱により削平されている。規模は長軸3.30m、短軸1.40mで深さは29.0cm程度である。遺物はない。

SK-061 (第51・56・62図、第7表、図版16)

調査区中央南側エリアC、11L-79グリッド付近に位置する。北と東側が調査区外に当たり未調査のため詳細は不明である。遺物として、覆土中からは青磁碗(56-11)、瀬戸美濃の皿、常滑鉢・播鉢(62-94)などの遺物が出土している。

SK-063 (第51図、図版16)

調査区東部エリアD、10N-14グリッド付近に位置する。SK-059の北側に隣接しているが、北東側は道路により削平されている。平面形の規模の割には深さが60cmほどあり深い。遺物は覆土から土器など出土したが、図化できるものはなかった。

SK-093 (第51図、図版17)

調査区北東端エリアD、9N-55グリッド付近に位置する。南にSK-094・SK-095が隣接する。南北方向に長い方形を呈する。長軸1.6m、短軸1.15m、深さ80.0cmを測る。堆積土はロームブロックを含む黒色土が主体で、自然堆積の様相がうかがえる。遺物は、覆土から土器が出土したものの、図化できるものはない。

SK-094 (第51図、図版17)

調査区北東端エリアD、9N-66グリッド付近に位置する。平面形態は一辺1.8m～2.0mほどの方形を呈する。主軸方向が隣接するSK-093とほぼ同じ方向を向く。堆積土はローム粒を含む黒褐色土が主体で、人為的な埋戻しの様相である。遺物は、覆土から土器が出土したが、図化の可能なものは含まれなかった。

SK-095 (第51図、図版17)

調査区北東端エリアD、9N-76グリッド付近に位置する。東西に長い方形を呈する。規模は長軸1.90m、短軸1.55m、深さ28.0cm程度を測る。堆積土はローム粒・ブロックを含む黒褐色土が主体で、埋め戻しされたと考えられる。遺物については、土器の出土があったが図化できるものはなかった。

SK-098 (第48・49図、図版17)

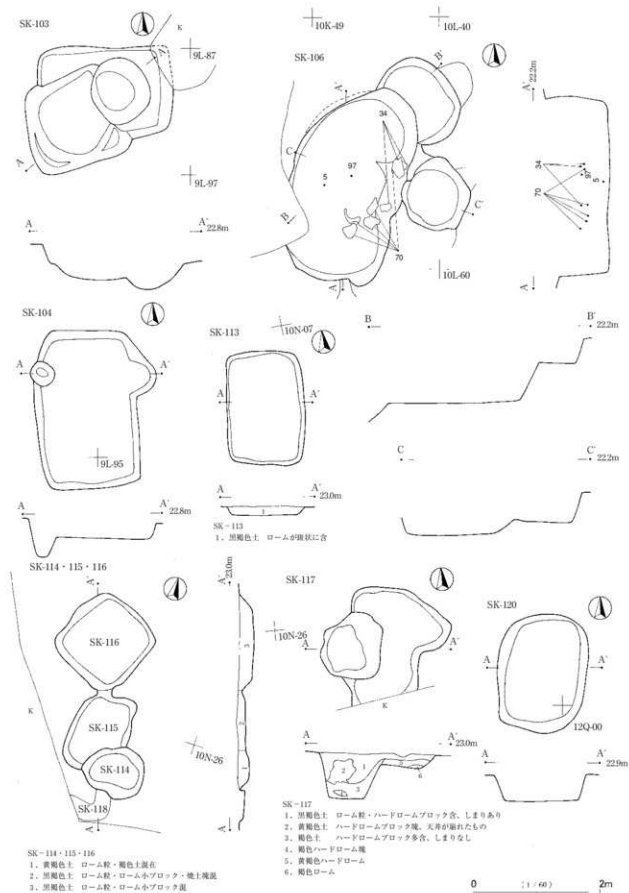
調査区中央エリアB、10K-97グリッド付近に位置する。袋状土坑SK-088の東に隣接する。3基の円形土坑の重複であると思われる。北側が一番古く、深さは徐々に深くなる。SK-090を切っている。東側は一部擾乱を受けて削平されている。遺物は覆土中から土器が出土したが、図化できるものはなかった。

SK-103 (第52図、図版17)

調査区中央北端エリアA、9L-86グリッド付近に位置する。方形土坑3基と円形土坑1基が切り合っている遺構である。最も古い方形土坑は東西方向に長い方形で、長軸2.10m、短軸1.45m程度を測る。深さは確認面から40.0cmほどである。円形土坑は径1.0mで、方形土坑の底面から20.0cmほど掘り込まれている。遺物は、覆土から土器が出土したが、図化できるものはなかった。

SK-104 (第52図、図版17)

調査区中央北端エリアA、9L-85グリッド付近に位置する。SK-103の西に隣接する。平面形態は南北に長い方形を呈する。長軸2.50m、短軸1.60mを測る。東壁の北に寄った位置に円形の張り出しが見られる。また、その対面の位置の西壁に接して、ピットが1基配置されている。径40.0cmで深さ35.1cmである。底面は平坦である。確認面からの深さは15.0cm～26.6cmを測る。遺物は覆土から土器が出土したが、図化可能



第52図 SK-103・104・106・113・114・115・116・117・120

なものはなかった。

SK-106 (第52図、図版11)

調査区北部エリアA、10K-79グリッド付近に位置する。円形土坑が複数切り合っている遺構である。白磁碗・古瀬戸皿・香炉などが出土した土坑は、長軸3.10m、短軸1.90mの東西方向に長い方形を呈する。確認面からの深さは深いところで1.0mを測り比較的深い。

SK-113 (第52図、図版17)

調査区東部エリアD、10N-16グリッド付近に位置する。平面形態は南北に長い方形を呈し、規模は長軸1.80m、短軸1.25m、深さは10.0cm前後である。覆土はロームが斑状に含まれた黒褐色土で埋め戻しの様相を呈している。遺物は覆土から土器が出土したが、図化可能なものはなかった。

SK-114・115・116 (第52図、図版17)

調査区東部エリアD、10N-26グリッド付近に位置する。南北に3土坑が並ぶ。SK-114は東西に長い不整の楕円形を呈し、規模は長軸1.0m、短軸0.8m程度である。深さは23.1cmで、SK-115を切っている。SK-115は南北方向に長い方形を呈する。長軸1.25m、短軸1.0mほどで、深さは10.0cm程度の掘り込みである。SK-116は一辺1.30mの方形を呈する。深さは25.0cmほどである。それぞれの遺構の覆土から土器が出土したが、図化できるものはなかった。

SK-117 (第52図、図版18)

調査区東部エリアD、10N-026グリッド付近に位置する。南側は攪乱により消失している。平面形態は不整の方形で、西壁に円形土坑が切り合う。円形土坑は径1.0m程度で、深さが75.0cmほどである。遺物は土器などが覆土から出土したが、図化できるものはなかった。

SK-120 (第52図、図版18)

調査区東端、12Q-00グリッド付近に位置する。平面形態は隅丸の南北方向に長い方形を呈する。規模は長軸1.88m、短軸1.40m、深さ36.0cm～43.0cmを測る。底面は平坦である。遺物は覆土からの土器の出土があったが、図化可能なものはなかった。

11. 溝状遺構・道路状遺構

SD-001 (第53・57～60・62・64図、第7表、図版18)

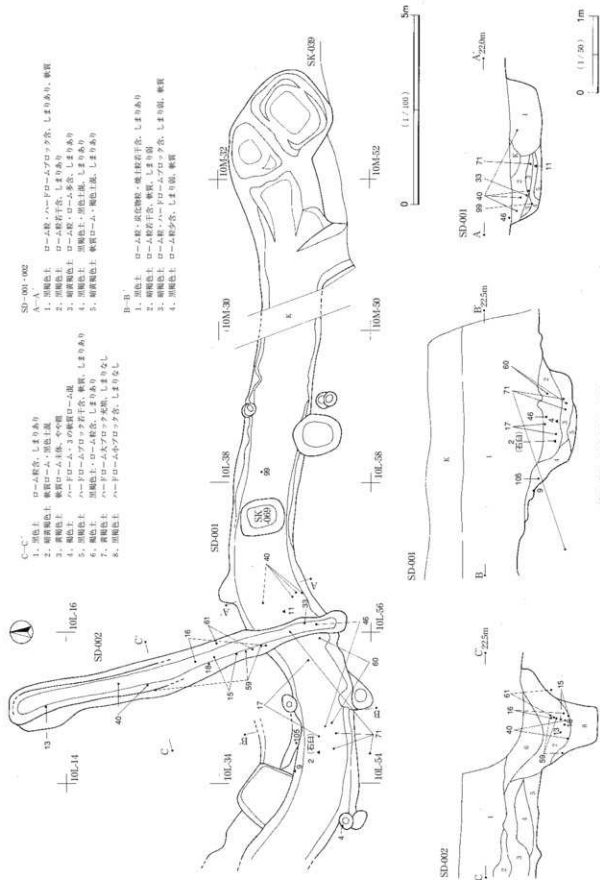
調査区北部エリアAに位置する。蛇行しながらほぼ東西方向に伸びる遺構である。長さは延べて16.5m、幅は1.6m～2.0m、確認面からの深さは46.0cm～88.0cmである。台地整形区画内に位置する竪穴状遺構を取り囲むように配置される。東の先端には地下式坑のSK-039が位置する。堆積土はローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土が主体である。遺物は瀬戸・美濃壺(57-17)、碗(57-25)、皿(58-40)、盤(57-33)、播鉢(58-46)、や常滑甕(59-60・60-71)、風炉(62-99)、砥石(64-9)などが出土した。

SD-002 (第53・56～59図、第7表、図版18)

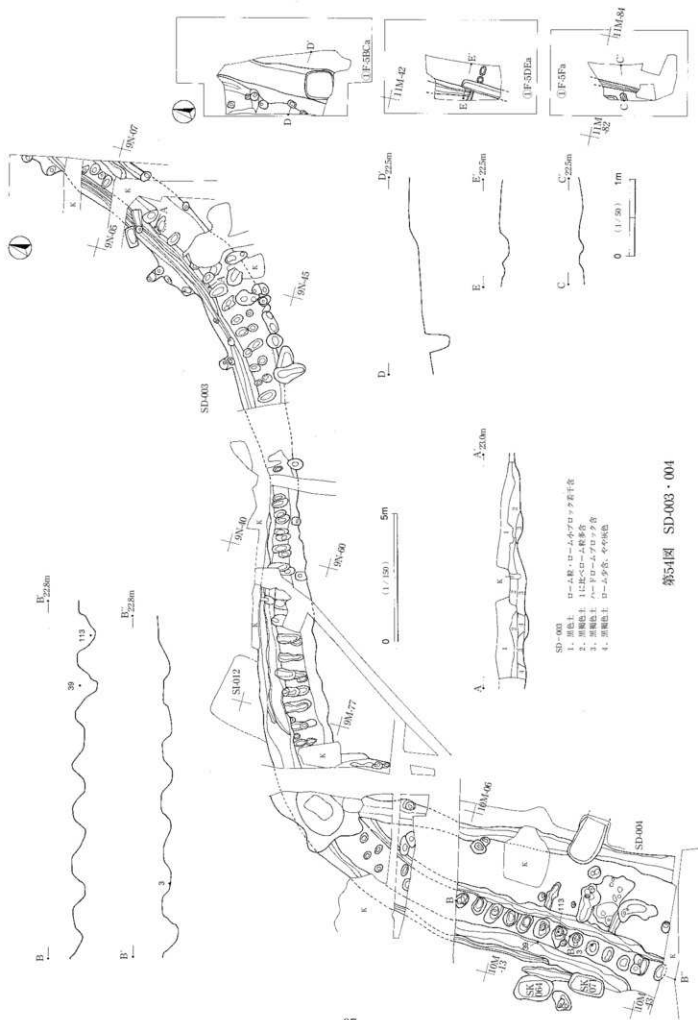
SD-001と直行する遺構でSD-001を切っている。長さ9.2m、幅0.5m～1.2m、深さ1.0mを測る。人為的な埋め戻しの様相を呈している。下層はハードロームブロックを含む黒褐色土が主体である。中層には大ハードロームブロックを含む黄褐色土が主体となり、出土遺物のほとんどがこの層からのものである。遺物としては青磁碗(56-13)、瀬戸・美濃壺(57-15-16)、瓶子、皿(58-40)、盤(57-33)、常滑甕(59-59-61)がある。

SD-003 (第54・58・64図、第7表、図版18)

調査区北東端から南方向に蛇行しながら伸びる道路状遺構である。北からみていくと、まず主軸方向を



第531図 SD-001・002



N-37.0°-Eにとり南下する。幅は1.9m~2.35mを測る。次第に西方向に向かい主軸方向をN-70.0°-Eとする。幅は1.75~2.30m程度である。その後、SI-019の付近で再び南下しSD-001に直行するように伸びるが攪乱により途切れる。この位置までの全長は46.0mを測る。コンクリート基礎5BC a・5DE a・5F a内でそれぞれ本遺構の延長が確認されている。詳細は不明であるが、南に長く伸びることは判明した。深さは20.0cm~40.0cmほどを測る。全体にピットが配置されている。各箇所形態の違うピット群を形成している。北側は溝内に平行に小ピットが1対になりほぼ同間隔で掘り込まれている。平面形は径30.0cm~40.0cmの円形、大きいものでは長軸80.0cm程度短軸40.0cmの楕円形を呈する。深さは11.0cm~20.0cmほどである。東西方向に伸びる箇所では平面形態が楕円形を呈するものが30.0cm~40.0cmの間隔で並ぶ。東側は東西方向に1対になり配置されている。規模は長軸50.0cm~75.0cm、短軸20.0cm~30.0cm程度、深さは10.0cm~14.0cmほどを測る。西側になると不整形の楕円となり、長軸1.0m~1.3m、短軸25.0cm~40.0cmを測る。深さは10.0cm~14.0cmと浅い掘り込みである。大きく屈曲し、向きを南北方向に転換する位置では2列交互に小ピットが配置される。その南では南北方向に、1列に径70.0cm~85.0cmの円形ピットが掘り込まれている。深さは11.0cm~20.3cmほどである。これらのピットの性格は判然としない。遺物は瀬戸・美濃皿(58-39)や砥石(64-3)などがある。

SD-004(第54図、図版18)

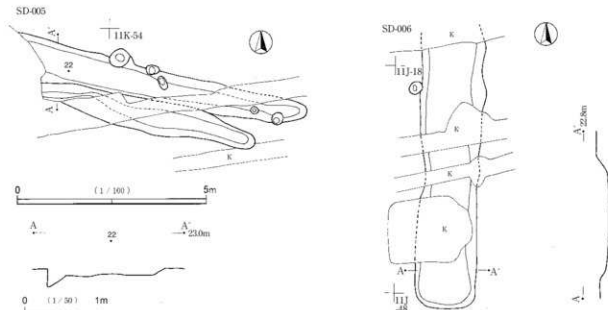
SD-003に平行して南北に掘り込まれている溝状遺構である。全長8.7mを測り、幅は0.5m~1.10m、深さ1.0cm~28.0cmである。近世から近代以降の攪乱部分もあり、詳細は不明瞭である。遺物は覆土中から土器が出土したが、図化できるものはなかった。

SD-005(第55・57・62図、第7表、図版18)

調査区中央西側エリアE内に位置する。東西方向に掘り込まれており、2条が一部で切り合っている。長さ7.2m、幅0.50m~1.0m、深さ10.0cmを測る。遺物は瀬戸・美濃の皿(57-22・23)、羽釜(62-98)がある。

SD-006(第55・57図、第7表、図版18)

SD-005の北西方向に位置する。南北に伸びるように掘り込まれている。北側は攪乱で消滅する。長さ



第55図 SD-005・006

7.0m、深さは18.0cm程度を測る。底面は平坦である。大きく擾乱を受けており、詳細は不明である。遺物は瀬戸・美濃壺(57-19)、碗(57-30)がある。

第2節 遺物

中世の以降からは陶磁器をはじめとして石製品、金属製品、銭貨などが出土した。多くを占めた陶磁器で中世のものだと判断したものは249点、そのうち産地の判明したのは223点である。一覧表には実測できなかったものも含めて114点を掲載した。内訳は貿易陶磁器14点(6%)、瀬戸・美濃63点(28%)、志戸呂3点(2%)、常滑124点(56%)、土器類14点(6%)である。また、転用砥石として常滑10点(前述の割合に加算されている)、渥美5点(2%)が検出された。

1 陶磁器・土器

それぞれの産地、編年、時期と観察による特記事項については第7表にまとめて記載している。

(1)貿易陶磁器(第56図、第7表、図版30)

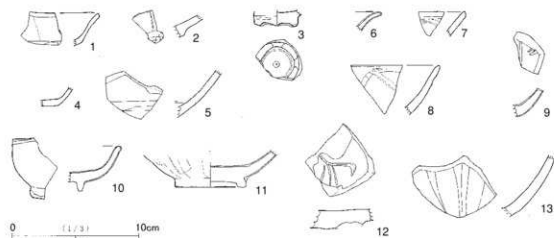
13点の破片が出土している。内訳は白磁碗1点・杯1点・皿3点・青磁碗7点・皿1点、青磁碗のうち5点は龍泉窯系で、I-5類に属し、13世紀の製品が主体を占めている。

3は高台に4か所の弧状の抉り込みが入る白磁碗である。6は後花皿の口縁部の遺存で被熱している。7・8は外面にヘラ描き連弁文のある青磁碗である。11・13は簡連弁文を持つ青磁碗である。

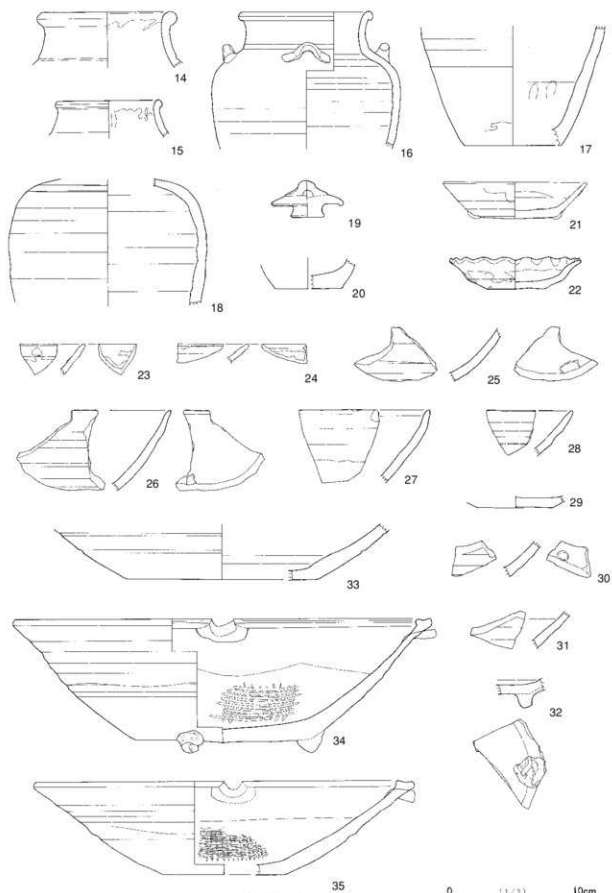
(2)瀬戸・美濃(第57・58・59図、第7表、図版30・31・32)

63点出土し、内訳は壺・瓶子などが7点、碗5点、皿類18点、挿鉢11点などである。緑釉小皿に14世紀後半から末の古手のものがみられるが、多くが15世紀に属するものである。

壺が7点出土し、14~16の3点は古瀬戸後期の製品である。4点は図化できるものではなく、時期も不明である。瓶子は2点出土し、古瀬戸後期Ⅲ~Ⅳに属する(18・19)。20は双耳小壺の蓋で古瀬戸Ⅳ古の製品である。緑釉小皿は9点出土し、4点図化した(21~24)。平碗は5点出土した(25~28・30)。深皿・中皿・大皿を含めた盤類は計20点出土した。御目付大皿は4点(34・35・38・40)、直縁大皿は2点(36・37)、折縁深皿2点(39・41)、折り縁中皿2点(42・44)などである。挿鉢は18点出土し、11点図化した。時期的にみると、古瀬戸後Ⅳ古3点、古瀬戸後Ⅳ新3点、古瀬戸後Ⅳが5点である。

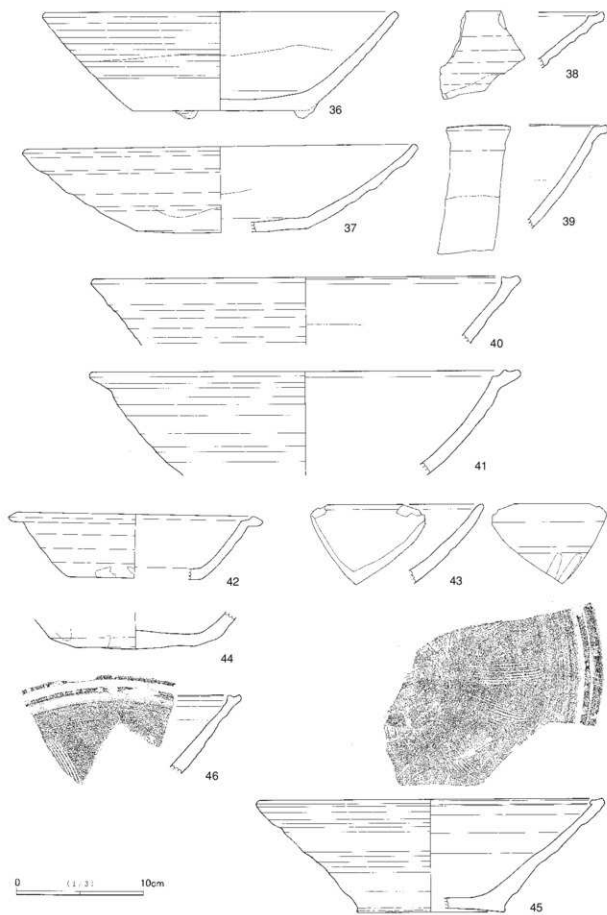


第56図 貿易陶磁器

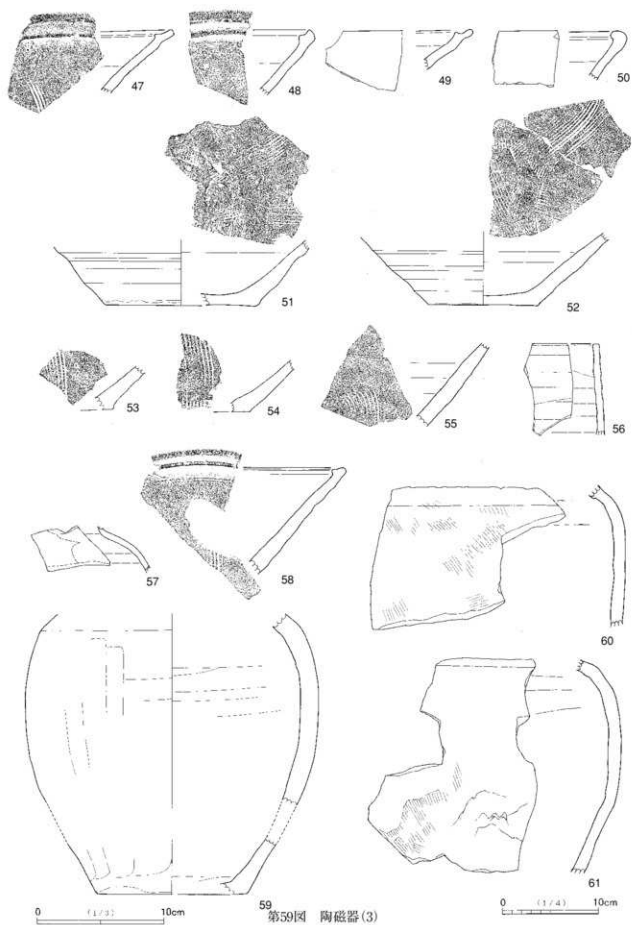


35
第57图 陶磁器(1)

0 10cm



第58图 陶磁器(2)



(3) 志戸呂(第59図、第7表、図版33)

56～58の3点が出土した。56は筒状のもの口縁部の遺存である。56・57は古瀬戸後Ⅳ、58は古瀬戸後Ⅳ古段階で、15世紀中葉～後葉の製品である。

(4) 常滑(第59～61図、第7表、図版30・33・34・35)

124点出土し、39点図化した。古いものでは13世紀中頃のものからあるが、14世紀代が主体である。

図化したものは59の壺1点、甕が60～71の12点、片口鉢が16点である。

(5) 土器類(第62図、第7表、図版35)

14点出土し、内耳鍋や挿鉢、香炉の脚部、羽釜の口縁部、風炉などである。

(6) 転用砥石(第63図、第7表、図版36)

15点出土し、そのうち常滑産10点、渥美産5点である。

2 石製品(第64・65図、第8表、図版37・38)

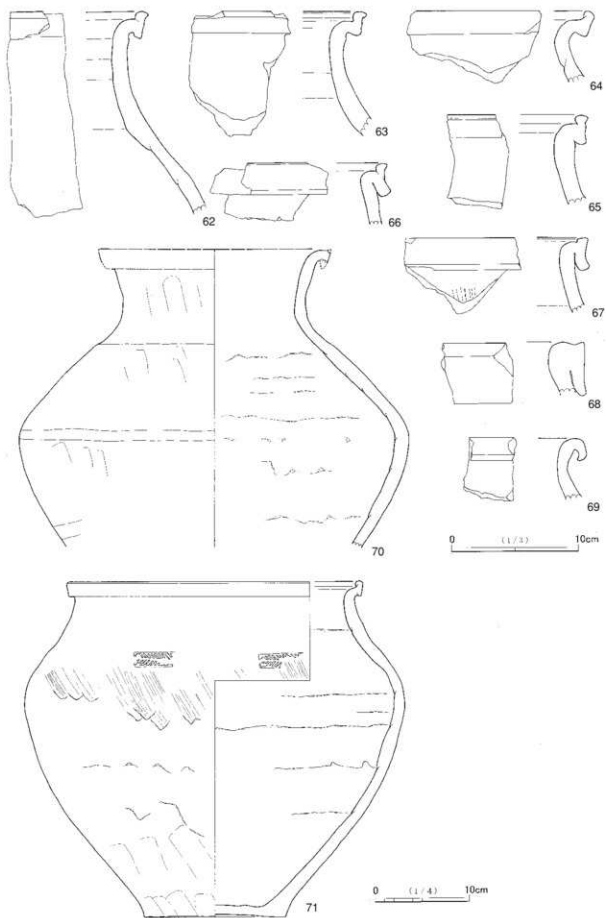
砥石11点と石臼が3点出土した。そのうち砥石7は鋭利な刃物擦痕が確認できた。石臼は3点とも形態から茶臼と判断した。1は花崗岩で火を受けたように煤の付着がみられる。遺存部は受皿を含む下臼である。残りが半分程度のため全容はつかめないが、おそらく8分割で、溝は上から11溝、10溝、12溝と一定ではない。芯木孔径は2.3cm、受皿径は38.0cm、下臼径は19.4cmで、受皿の台部は遺存せず、遺存高は9.2cmを測る。2は砂岩の下臼である。遺存状態が非常に悪く詳細はつかめない。受皿部の外面に調整痕が残る。溝は二次的な擦痕により不明瞭となっている。3は、横打ち込み式の挽き木を挿入する挽手孔の部分が遺存する上臼である。2mm程度の含みが確認できる。孔の周囲に施される文様は二重の正方形と思われる。上臼径は概ね18.6cm、原料投入孔(芯木孔径)は約2.4cmである。

3 金属製品

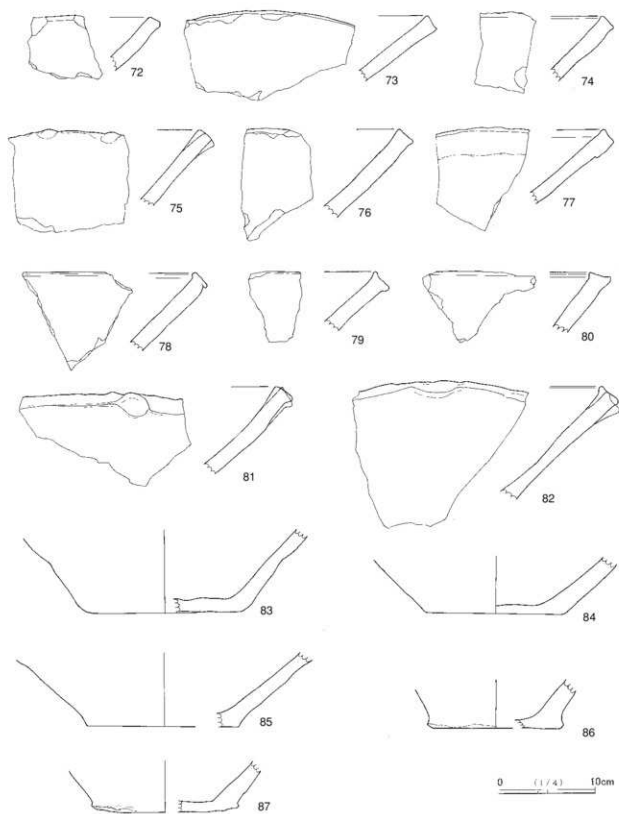
(1) 鉄製品(第66図、第9表、図版37)

1は短刀である。切先から茎の一部まで遺存するが、茎尻側を欠損する。刃部は根本側から茎にかけてやや錐形がある。調査時にはそこで折れていたが、錐の影響は全体的には少なく、比較的よく形態を留めている。刃間は曲線状であり、直角をなさない。幅の広い刃部から弧を描いて幅の狭い茎に至る。背側は概して直線的であり、背間は一見してやや不明瞭である。背間も直角をなさず、単に屈曲するだけで刃側と茎側を分けている。屈曲点から刃部側はやや内反り状であるが、茎側は直線的で、次第に幅を減じていく。背間は刃間よりもやや切先側に位置する。現存長は21.3cm、刃部長は17.4cm、刃部最大幅は2.9cm、茎最小幅は9mmである。背の厚さは刃部で3mm、茎で4.5mmである。茎長は不明であるが、現存長は背側から4.7cm、刃側からは3.9cmである。重さは77.2gである。2は刀子で、2個体が腐食により摺合した状態のままであったため、2-a、2-bとした。2-aは現存長18.2cm、身の長さ16.6cm、茎長1.6cm、身幅は1.8～2.0cmである。木質が全体に残る。茎には目釘孔が一部残る。2-bは現存長23.7cm、身の長さ17.5cm、茎長6.7cm、身幅は2.2～2.5cmである。茎には目釘孔が1個確認できる。全体に木質が付着している。現存長3.65cm、最大幅1.3cm、背厚が3mmである。概して薄い製品である。重さは4.58gである。

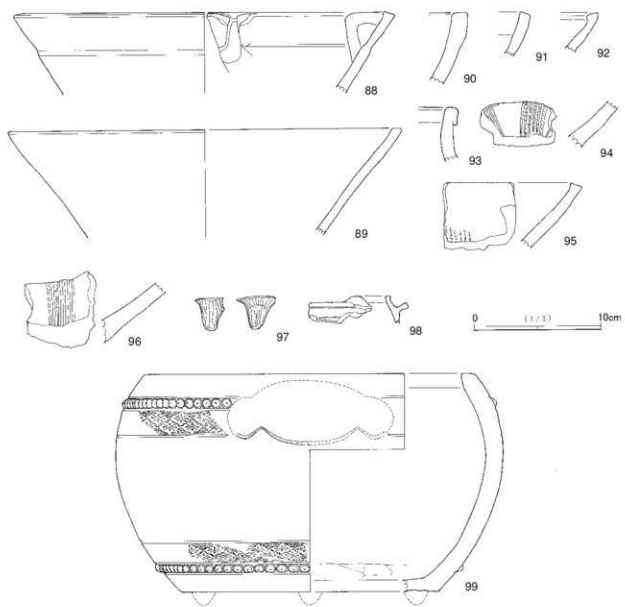
4は性格不明である。刀子刃部の根本から茎の一部と思われる形態であるが、刃がみられない。現存長は3.0cmである。幅は6mm前後の部分と11mm前後の部分がある。厚さは2mm弱～3mm弱である。重さは4.40gである。



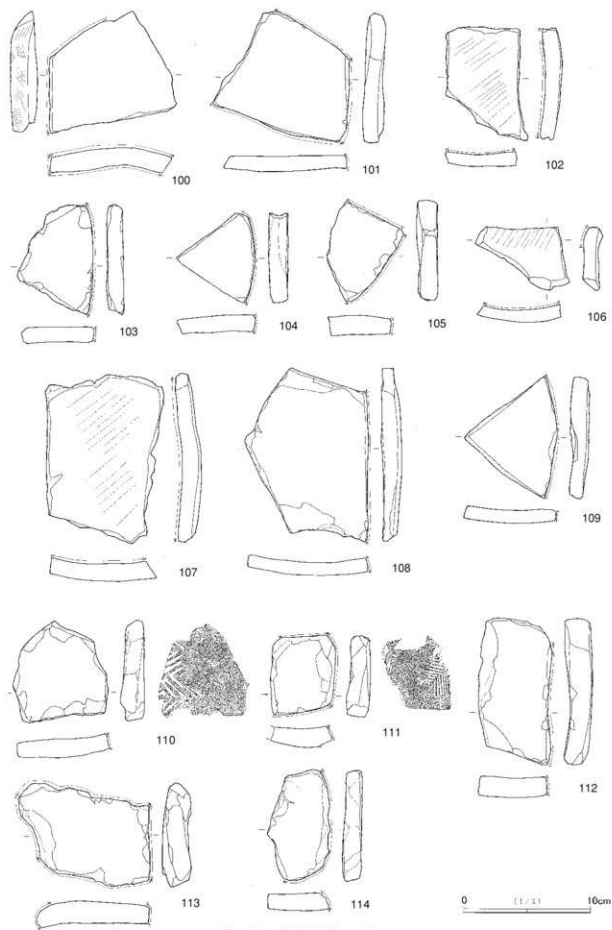
第60图 陶磁器(4)



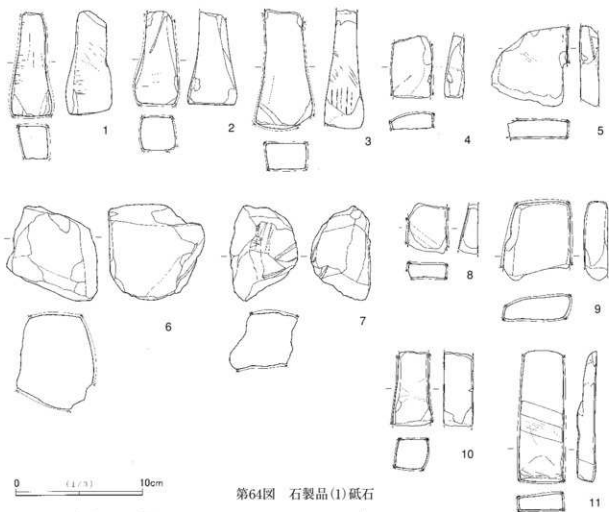
第61图 陶磁器(5)



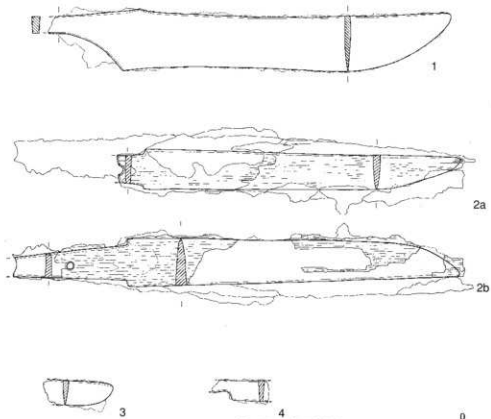
第62图 陶磁器(6)



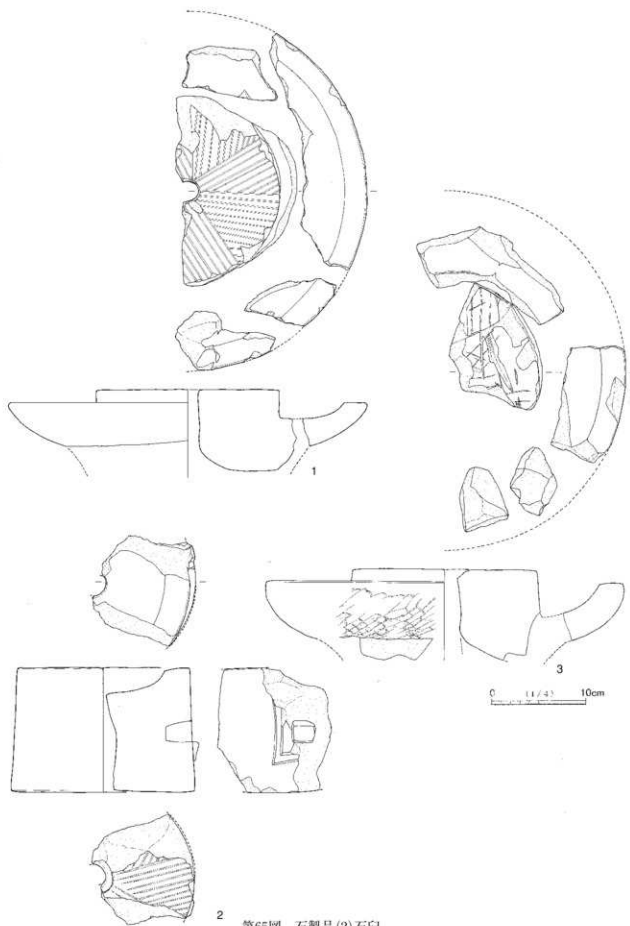
第63図 陶磁器(7) 転用砥石



第64图 石製品(1)砥石



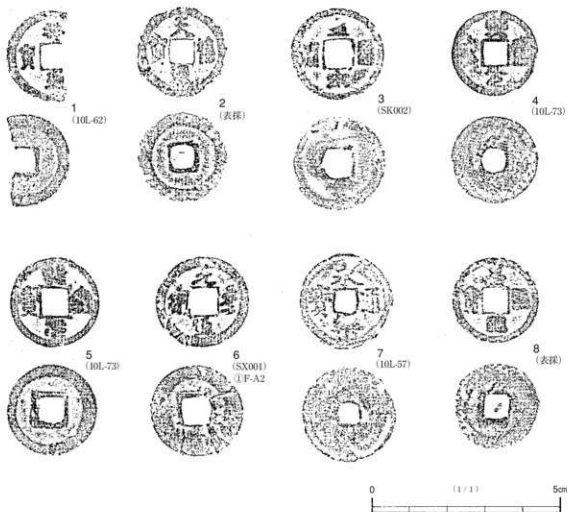
第66图 金属製品



2 第65図 石製品(2)石臼

(2) 銭貨(第67図、第10表、図版38)

総数8枚が出土した。内訳は中国銭が6枚、永楽通寶1枚、不明1枚である。中国銭は全て北宋銭である。内訳は祥符元寶1枚、天禧通寶1枚、皇宋通寶3枚、元豊通寶1枚である。



第67図 銭貨

第5章 まとめ

第1節 奈良・平安時代

当該期の遺構としては、堅穴住居33軒と掘立柱建物2棟以上などが検出されているが、中世の遺構により調査区中央部分が大きく削平されているため、本来はさらに多くの住居等が存在していた可能性が高い。

ここでは、調査区内の奈良・平安時代の時期的な変遷を中心にまとめておく。各住居から出土した土器をもとに、大まかな時期別に列挙すると以下のようになる。

8世紀中葉：SI-011・038

8世紀後葉：SI-013・016・021B

9世紀前葉：SI-015・018・021A・024・025

9世紀中葉：SI-001・002・020B・039

9世紀後葉：SI-004・005・007・019・020A・023・037・040

10世紀前葉：SI-008・036

10世紀中葉：SI-027

この調査区で見える限り、古墳時代後期の堅穴住居が1軒確認されているものの、8世紀中頃から集落が出現し、9世紀代、特に後半に集落規模が最も大きくなる。その後急速に縮小し、10世紀代に姿を消している。一方、調査区南西端で確認された2棟の掘立柱建物のうち、東西棟となるSB-002は2間×2間の形を呈しているが、両側の梁の中央柱穴が他に比して浅く、梁間が狭いことから棟持ち柱となる可能性もある。この建物から検出された土器は9世紀中頃の時期と考えられ、当該期の堅穴住居の主軸方向とはほぼ同様である。

出土遺物としては、在地の土器以外に、常陸産を主体とした須恵器や武蔵産・常陸産などが見られる。これらの遺物の中で注目されるのが、2点の圓足円面硯の存在である。近隣の国府台遺跡や国分僧寺・須和田遺跡で7点ほどの出土が確認されており、下総国府周辺での類例を増やす結果となった。円面硯の1点はSI-036からの出土である。土師器か須恵器か判断が難しい資料で、須恵器であれば下総産となろう。一部分の遺存であるが、器高に比して径が小さい類例の少ないタイプである。床面攪乱上からの出土で、この住居に共存するものかどうかは明らかではないが、近接して出土した高台付杯は10世紀代と考えられることから、県内で確認された円面硯の中では最も新しい時期となる可能性がある。2点目は近世の溝から出土したもので、常陸産と思われる須恵器の円面硯である。口径がやや小さく、やはりあまり類例の少ない形態である。近い類例としては、佐倉市高岡大山遺跡例と春日部市小湊山下北遺跡例が挙げられる。後者の遺跡は、官衙に伴う館の可能性が指摘され、後者も官衙関連施設が存在が想定されている。古河市(旧三和町)浜ノ台窯跡出土の円面硯も系統としては近いものである。

他には、後世の溝から出土した奈良三彩の托がある。托の出土例としては、八千代市井戸向遺跡や成田市飯仲金堀遺跡があげられる。国府台遺跡からは、三彩の小壺が検出されており、関連が注目される。文字資料の点数は多くないが、SI-021A及びSI-021Bから「幸」と思われる線刻と墨書が出土している。墨書土

器は8世紀末頃で、線刻例は9世紀前半に相当し、正字の墨書から模倣形の線刻へと変化している様子が窺える。この文字からは、下総国分尼寺との関連が目される。

住居内及び後世の溝や遺構外から屋瓦が比較的多く検出された。軒丸瓦は、下総国分寺の創建期に用いられた宝相華文と面違い鋸歯文縁単弁十六葉蓮華文がみられる。後者は、結城廃寺と同范で、国府推定地付近からも出土しており、本遺跡の同瓦もその一例であろう。遺構外からは、「荒」とヘラ書きされた文字瓦が1点確認され、僧寺及び尼寺の調査で、同様の文字瓦が検出されている。本遺跡の集落が8世紀中頃に形成されていたことと考え合わせると、国分寺の創建以降、不要あるいは廃棄となった屋瓦がこの集落にもたらされたのであろう。

部分的な調査であるため、本遺跡の性格は明らかではないが、遺跡の立地及び奈良三彩や円面硯の出土などを考慮すると、下総国府関連の官衙的な集落という側面も存在していたものと想定される。

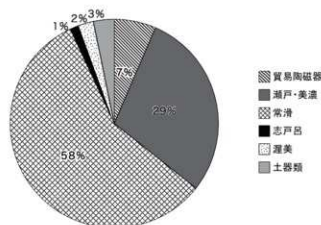
第2節 中世

中世の遺構は掘立柱建物7棟、方形竪穴状遺構17軒、地下式坑9基、土壘墓5基、火葬施設4基、粘土貼土坑2基、袋状土坑2基、土坑・小穴は86基以上である。遺構に伴う遺物が少ないことから、時期の不明な遺構が多く含まれる。遺跡中央に位置する台地整形区画内に多くの遺構が集中している。小さなピットが密集する中から7棟の掘立柱建物を検出したが、棟数はそれ以上であることは間違いなく、数次に亘る立て替えが考えられる。推定の台地整形区画の中に小規模に構築されたコの字状の方形区画がある。この区画内には方形竪穴状遺構SI-017・SI-032が配置されている。規模や性格など不明な点が多い。

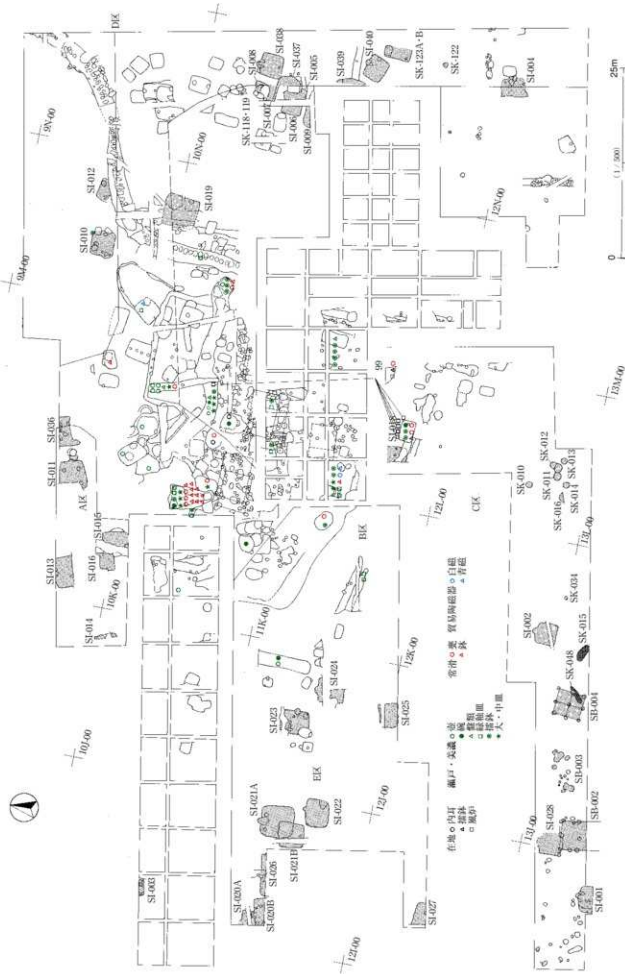
中世陶磁器・土器の出土量は249点であるが、ほとんどが破片資料である。中国製の陶磁器は14点で、多くは瀬戸・美濃、常滑産である。僅かに志戸呂、渥美産が出土した(第70図)。内訳は瀬戸・美濃で、緑釉小皿などの小皿類、卸目付大皿、折縁深皿、大皿、播鉢、常滑では甕、片口鉢などである。主な時期は瀬戸・美濃では14世紀中葉～15世紀後半で、特に15世紀代が多い。常滑は最も古いもので13世紀代があり、14世紀に属するものが多くを占めている(第11表)。分布状況は第68・69図で示した。

参考文献

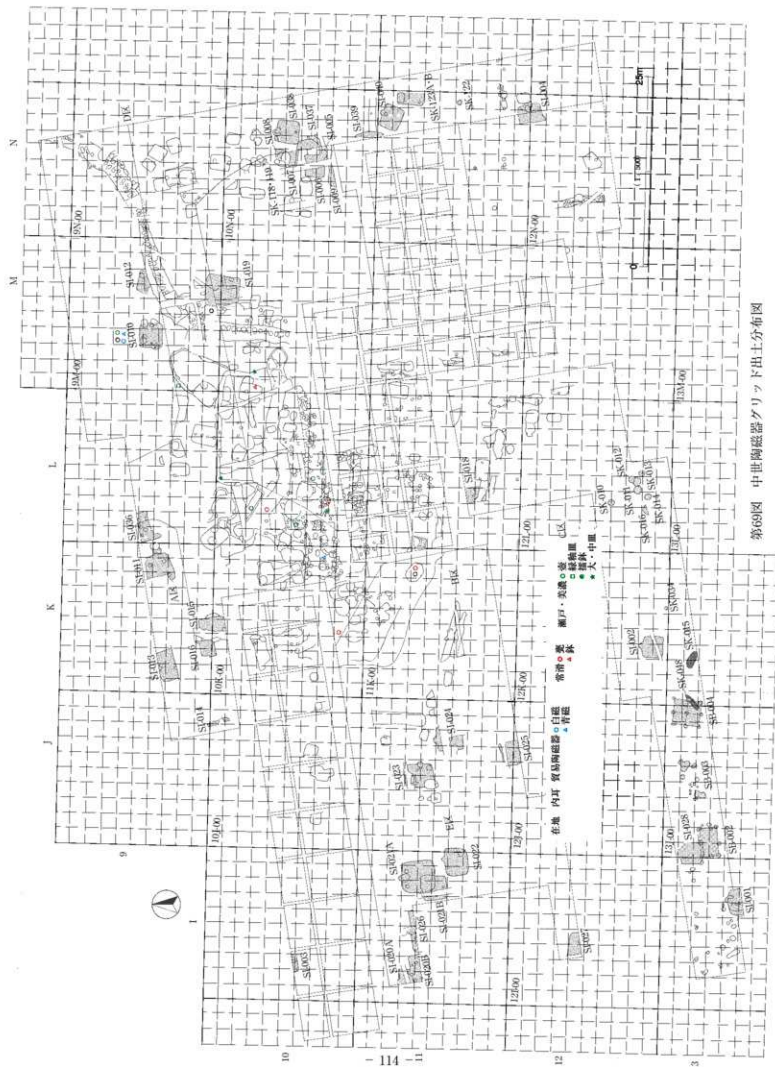
〔研究紀要25〕 助千葉県教育振興財団2006



第70図 中世陶磁器組成



第68圖 中世陶磁器遺構出土分布圖



第69図 中世陶磁器クリット出土分布図

第2表 奈良・平安時代土器観察表

遺構	経緯	造成期	器種	口径	底径	器高	造寸 %	色調内面	色調外面	胎土	構成	調整内面	調整外面	底部	備考	遺構番号	
SI001	1	土器部	杯	12.4	5.5	3.4	100	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	赤い	不具	ロクロナデ	ロクロナデ・回転 ヘラケズリ	回転ヘラケズリ		68	
SI001	2	土器部	杯	12.6	7.0	4.1	95	にぶい褐色	にぶい褐色	赤い	不具	ロクロナデ	ロクロナデ・回転 ヘラケズリ	回転赤切り後回転 ヘラケズリ		1	
SI001	3	土器部	杯	12.8	7.3	3.6	90	にぶい褐色	にぶい赤褐色	赤い	具	ロクロナデ	ロクロナデ・回転 ヘラケズリ	回転赤切り後回転 ヘラケズリ		1.30	
SI001	4	土器部	杯	12.0	6.2	3.9	40	灰褐色	灰褐色	赤い	具	ロクロナデ	ロクロナデ・回転 ヘラケズリ	回転赤切り後手持ち ヘラケズリ		1.13.38	
SI001	5	土器部	高台付 杯	-	(7.1)	(1.7)	20	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	赤い	具	1ギキ	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	再判用品	29	
SI001	6	土器部	杯	-	-	-	5	にぶい褐色	にぶい褐色	赤い	具	ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ ケズリ		墨書「」体係	1	
SI001	7	土器部	杯	-	-	-	5	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	赤い	具	ロクロナデ		回転ヘラケズリ	墨書「」体係	1	
SI002	1	埋藏陶 器	短弁 器	-	-	(1.7)	5	オリーブ灰 色	オリーブ灰 色	細砂・少量 の粗砂粒	具	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ		18	
SI002	2	土器部	杯	12.2	5.6	4.3	60	灰褐色	にぶい赤褐色	赤い	具	1ギキ	ロクロナデ・手 持ちヘラケズリ	回転赤切り後手持ち ヘラケズリ	墨書「」体係	1.32.30	
SI002	3	土器部	杯	13.1	7.0	4.2	70	灰褐色	灰褐色	赤い	具	ロクロナデ	ロクロナデ・回転 ヘラケズリ	回転赤切り後回転 ヘラケズリ		20	
SI002	4	土器部	杯	-	(7.5)	(3.0)	20	灰褐色	灰褐色	赤い	具	ロクロナ デ・ヘラ ケズリ	ロクロナ デ	回転赤切り後 無調整		14.35	
SI002	5	土器部	杯	-	(7.3)	(0.9)	10	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	赤い	具	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り後 無調整	底部墨痕?	5	
SI002	6	土器部	杯	-	(6.4)	(2.0)	10	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	赤い	具	ロクロナデ	ロクロナデ・手 持ちヘラケズリ	回転ヘラケズリ	墨書「」体係	2	
SI002	7	土器部	瓶	(2.7)	-	(6.7)	10	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	赤い	具	ロクロナデ	ヨコナデ・ヘラ ケズリ			1.7	
SI003	1	土器部	杯	12.2	(6.6)	3.9	30	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	赤い	具	ロクロナデ	ロクロナデ・回転	回転赤切り後無調 整		1	
SI003	2	土器部	瓶	(9.2)	(6.2)	2.4	30	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	赤い	具	ロクロナデ	ロクロナデ・回転	手持ちヘラケズ リ		1	
SI004	1	短弁器	杯	12.2	6.6	4.0	100	灰褐色	灰褐色	赤い	具	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラケ切り後 ヘラケズリ	下観察	29	
SI004	2	土器部	高台付 杯	-	(7.3)	(3.3)	30	赤褐色・灰 褐色	にぶい橙 褐色	赤い	具	ロク ロナ デ・1ギ キ	ロクロナ デ	高台付り後ナ デ		28.3	
SI004	3	土器部	高台付 杯	-	(5.6)	(3.4)	20	にぶい赤褐色	にぶい褐色	赤い	具	ロク ロナ デ・1ギ キ	ロクロナ デ			33.36	
SI004	4	土器部	壺	10.8	-	(13.5)	20	灰褐色	灰褐色	赤い	具	ヨコナ デ・ヘ ラケ ズリ	ヨコナ デ・ヘ ラケ ズリ	ヨコナ デ・ヘ ラケ ズリ		1.30.11.12.13.14 24.25.27	
SI005	1	土器部	杯	-	(4.7)	(1.9)	20	灰褐色	灰褐色	赤い	具	ロクロナデ	ロクロナデ・回転 ヘラケズリ	回転ヘラケズリ		4	
SI007	1	土器部	杯	-	(5.2)	(1.6)	10	にぶい褐色	にぶい褐色	赤い	具	ロクロナデ	ロクロナデ・回転 ヘラケズリ	回転赤切り後回転 ヘラケズリ		1	
SI008	1	土器部	杯	(13.3)	-	(3.8)	40	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	赤い	具	ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ ケズリ			2.45	
SI008	2	土器部	杯	(12.5)	-	(3.2)	10	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	赤い	具	ロクロナデ	ロクロナデ・一部 ヘラケズリ			8	
SI008	3	土器部	高台付 杯	-	(9.6)	(3.3)	10	灰褐色	にぶい赤褐色	赤い	具	1ギキ	ロクロナデ	回転赤切り・高台 付り後ナデ	内面黒色処理	6	
SI010	1	土器部	杯	11.6	-	4.2	50	灰褐色	灰褐色	赤い	具	ヨコナ デ・ヘ ラケ ズリ	ヨコナ デ・ヘ ラケ ズリ			赤口クロ	15
SI010	2	土器部	杯	12.6	-	3.9	75	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	赤い	具	ヨコナ デ・ヘ ラケ ズリ	ヨコナ デ・ヘ ラケ ズリ			赤口クロ	11
SI010	3	土器部	杯	13.0	-	(4.5)	45	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	赤い	具	ヨコナ デ	ヨコナ デ・ヘ ラケ ズリ			赤口クロ	5
SI010	4	土器部	杯	12.6	-	4.3	65	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	赤い	具	ヨコナ デ・ヘ ラケ ズリ	ヨコナ デ・ヘ ラケ ズリ			赤口クロ	14
SI010	5	土器部	杯	12.2	-	4.8	60	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	赤い	具	ヨコナ デ・ヘ ラケ ズリ	ヨコナ デ・ヘ ラケ ズリ			赤口クロ	16
SI010	6	土器部	杯	(12.0)	-	3.7	50	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	赤い	具	ヨコナ デ	ヨコナ デ・ヘ ラケ ズリ			赤口クロ	4.17
SI010	7	土器部	杯	(12.0)	-	(3.9)	30	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	赤い	具	ヨコナ デ	ヨコナ デ・ヘ ラケ ズリ			赤口クロ	13
SI010	8	土器部	杯	(12.8)	-	(3.8)	25	にぶい褐色	にぶい褐色	赤い	具	ヨコナ デ	ヨコナ デ・ヘ ラケ ズリ			赤口クロ	18
SI010	9	土器部	杯	-	-	-	5	褐色	にぶい褐色 白色等の粗 砂粒	赤い	具	ナデ・1ギ キ	ヨコナ デ・ヘ ラケ ズリ			北武藏産新灰	6
SI010	10	土器部	杯	-	(4.2)	(1.0)	20	にぶい褐色	にぶい褐色	赤い	具	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り後無調 整	混入品	4.2	

選種 種別 No.	構成質	芯積	口径	成積	芯高	含水 %	色調内面	色調外面	胎土	構成	調整内面	調整外面	底胚	備考	選種番号
SI-010	11	土脚部 高台付 杯	150	980	65	70	灰褐色	にぶい赤褐色		真	ロクロナデ	ロクロナデ	高台取り付け後ナデ	混入品	1
SI-010	12	土脚部 高杯	169	1114	119	60	橙褐色	橙褐色		真	ナデ・ミダ キ	ナデ・ヘラケズリ キコナデ	ヘラケズリ		1.12
SI-011	1	胎窓部 杯	140	983	36	40	灰黄色	灰黄色	白色・粘濁 灰白色(少)	真	ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ ケズリ	手持ちヘラケズリ (一方)	新治産産・ヘ ラケズリ	2
SI-011	2	胎窓部 杯	-	927	24	20	灰黄褐色	灰黄褐色	白色・黄褐色 鉄粉(多) 白雲母	真	ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ ケズリ	回転ヘラケズリ	新治産産	2
SI-011	3	土脚部 杯	130	-	20	20	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色		真	ミコナデ・ ミダキ	ミコナデ・ヘラケ ズリ		内面黒赤・赤 土	2
SI-011	4	土脚部 杯	138	-	20	20	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色		真	ナデ	ナデ・ヘラケズリ		赤ロクロ・混入 品	2
SI-011	5	土脚部 杯	223	48	45	80	にぶい褐色	にぶい褐色	赤 り 打 い	真	ロクロナデ	ロクロナデ・回転 ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	打丸つき・混 入品	3
SI-011	6	土脚部 杯	334	104	41	90	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色		真	ロクロナデ	ロクロナデ・回転 ヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	内面黒赤・打 丸つき	6
SI-011	7	胎窓部 高台付 杯	-	1108	285	5	黄灰色	黄灰色	白色針状物 質	真	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラケズリ・ 高台取り付け後ナ デ	南社企業産	2
SI-011	8	胎窓部 皿	125	-	56	5	黄灰色	灰黄褐色		真	ロクロナデ	ロクロナデ		竜田産	4
SI-011	9	胎窓部 皿	-	-	5	5	灰褐色	暗灰色		真	ナデ・ヘラ ケズリ	ミコナデ		竜田産	2
SI-011	10	胎窓部 皿	-	1839	148	10	黄灰色	黄灰色	白雲母	中 心 打 い	ナデ・庄 敷 産 品	ナデ・タキ 産	ナデ	新治産産	7
SI-011	11	土脚部 皿	158	-	117	30	灰褐色	にぶい赤褐色	白雲母	真	ミコナデ・ ヘラケ ズリ	ミコナデ・手持 ちヘラケズリ後ミ ダキ		常陸産	2
SI-013	1	胎窓部 皿	170	-	22	50	灰色	灰色	白色針状物	真	ロクロナデ	ロクロナデ・回転 ヘラケズリ		南社企業産	5.7.16
SI-013	2	土脚部 皿	178	-	26	30	橙褐色	橙褐色		中 心 打 い	ロクロナデ	ロクロナデ・回転 ヘラケズリ			1
SI-013	3	胎窓部 杯	72	82	30	80	灰黄褐色	灰黄褐色	白雲母・綿 粒	真	ロクロナデ	ロクロナデ・手持 ちヘラケズリ	回転ヘラケズリ・ 回転ヘラケズリ	新治産産・ヘラ ケズリ・土底 打ち丸	1
SI-013	4	土脚部 杯	146	-	29	10	灰褐色	にぶい赤褐色		真	ロクロナデ	ロクロナデ			12
SI-013	5	土脚部 杯	-	800	26	25	灰褐色	灰褐色		真	ロクロナデ	ロクロナデ・回転 ヘラケズリ	回転ヘラケズリ・ 回転赤取り		18
SI-013	6	胎窓部 皿	-	-	-	10	明灰色	明灰色	白雲母(多)	中 心 打 い	ナデ	タキ		転用砥石	12
SI-013	7	胎窓部 皿	-	-	28	10	青みのある 灰色	明灰色	白色鉄(多)	中 心 打 い	ロクロナデ	ロクロナデ・タキ 庄風産産・タキ		新治産産	21
SI-013	8	土脚部 皿	188	-	30	5	にぶい橙褐色	にぶい橙褐色		真	ミコナデ ヘラケ ズリ	ミコナデ・ヘラケ ズリ後ヘラケズリ 欠		武蔵産	15
SI-015	1	土脚部 杯	134	70	39	30	暗褐色	暗褐色		真	ロクロナデ	ロクロナデ・回転 ヘラケズリ			1.2.27
SI-015	2	土脚部 杯	122	72	38	60	にぶい褐色	にぶい褐色		真	ロクロナデ	ロクロナデ・回転 ヘラケズリ	回転赤取り後回転 ヘラケズリ		36
SI-015	3	土脚部 高台付 杯	-	1069	26	30	黒褐色	にぶい赤褐色		真	ミダキ	ロクロナデ・回転 ヘラケズリ	回転ヘラケズリ・ 高台取り付け後ナ デ	内面黒色処理	32
SI-015	4	土脚部 杯	-	727	16	10	暗灰色	にぶい赤褐色		真	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤取り後ナ デ		6.21
SI-015	5	胎窓部 皿	-	-	-	5	黄灰色	灰黄褐色	白雲母・油 黄褐色(多)	真	ナデ	タキ		新治産産・特別 同心円文	31
SI-015	6	土脚部 皿	126	-	58	10	暗褐色	暗褐色		真	ミコナデ ヘラケ ズリ	ミコナデ・ヘラケ ズリ後ヘラケズリ			1.38
SI-016	1	胎窓部 杯	137	78	44	80	黄灰色	暗灰色	白雲母(多)	真	ロクロナデ	ロクロナデ・手持 ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	新治産産・打ち 丸	6
SI-018	1	土脚部 杯	1289	70	55	30	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色		真	ナデ・ミダ キ	ナデ・手持ちヘラ ケズリ	手持ちヘラケズリ	赤ロクロ	2.3
SI-019	1	土脚部 杯	125	59	40	100	にぶい褐色	にぶい褐色		真	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤取り後調整		2
SI-020A	1	土脚部 皿	125	723	22	40	灰褐色	灰褐色		真	ロクロ ナデ	ロクロナデ	回転赤取り後調整		44
SI-020B	1	土脚部 皿	192	-	21	10	灰褐色	にぶい赤褐色		真	ロクロナデ	ロクロナデ・回転 ヘラケズリ			1
SI-020B	2	胎部 皿	1339	726	38	30	黒褐色	黒褐色		真	ロクロナ デ・ミダ キ	ロクロナデ・回転 ヘラケズリ	回転赤取り後回転 ヘラケズリ	内面黒色処理	1.12
SI-020B	3	胎部 皿	135	60	29	60	灰黄色	灰黄色		真	ロクロナ デ	ロクロナデ	回転ヘラケズリ後 ナデ	灰転・内面黒付 産	1.16.18
SI-020B	4	土脚部 皿	216	-	149	10	灰褐色	にぶい赤褐色		真	ミコナデ ヘラケ ズリ	ミコナデ・ヘラケ ズリ後ヘラケズリ		武蔵産	1.19.27.48
SI-020B	5	土脚部 皿	154	-	172	20	灰褐色	灰褐色		真	ミコナデ ヘラケ ズリ	ミコナデ・ヘラケ ズリ後ヘラケズリ			1.20.41
SI-021A	1	土脚部 杯	133	77	40	60	暗灰色	暗灰色		真	ロクロナ デ	ロクロナデ・回転 ヘラケズリ	回転赤取り後回転 ヘラケズリ		1.32.42
SI-021A	2	土脚部 杯	125	174	33	60	灰褐色	灰褐色		真	ロクロナ デ	ロクロナデ・回転 ヘラケズリ	回転赤取り後回転 ヘラケズリ	横割(+)・混 入	3.6

遺構	種類	構成	形状	口径	底径	器高	底径%	色調内面	色調外面	胎土	構成	調整内面	調整外面	底部	備考	遺物番号
SI-02A	3	土師器	杯	122	7.4	4.0	40	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ロクロナデ	ロクロナデ・回転ヘラナズリ	回転赤切り後回転ヘラナズリ		12
SI-02A	4	土師器	杯	131	6.7	3.7	30	灰褐色	灰褐色	黒	丸	ロクロナデ	ロクロナデ・回転ヘラナズリ	回転赤切り後回転ヘラナズリ		1
SI-02A	5	土師器	杯	126	6.6	3.4	20	灰黄褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ロクロナデ	ロクロナデ・回転ヘラナズリ	回転赤切り後回転ヘラナズリ		1
SI-02A	6	土師器	杯	128	7.4	3.4	30	灰褐色	灰褐色	黒	丸	ロクロナデ	ロクロナデ・回転ヘラナズリ	回転赤切り後回転ヘラナズリ		1
SI-02A	7	土師器	杯	-	6.0	1.9	30	灰褐色	灰褐色	黒	丸	ロクロナデ	ロクロナデ・回転ヘラナズリ	回転赤切り後回転ヘラナズリ		12
SI-02A	8	土師器	瓶	132	6.0	2.4	75	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り後無調整		1.83.42
SI-02A	9	土師器	瓶	127	6.0	3.2	40	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り後無調整		1.42
SI-02A	10	土師器	瓶	127	6.8	2.5	80	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ミダキ	ロクロナデ	回転赤切り後ナデ	断面焼内	26
SI-02A	11	土師器	类	107	-	17.2	5	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ヨコナデ・ヘラナズリ	ヨコナデ・ヘラナズリ後ヘラナズリ		武蔵型	1.57.18
SI-02A	12	土師器	类	104	-	15.4	5	灰褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ヨコナデ・ヘラナズリ	ヨコナデ・ヘラナズリ後ヘラナズリ			1
SI-02A	13	土師器	类	106	-	14.0	5	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ヨコナデ・ヘラナズリ	ヨコナデ・ヘラナズリ後ヘラナズリ		武蔵型	1.11
SI-02B	1	灰志器	瓦葺杯	99	5.0	3.3	30	褐色	褐色	白色・灰色	丸	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ	内面朱色・雲唐	27
SI-02B	2	灰志器	杯	125	7.4	3.3	30	暗黄褐色	暗黄褐色	白色粉	丸	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り後無調整	紫金子産物	1
SI-02B	3	灰志器	杯	110	7.8	4.2	30	灰黄褐色	褐色	白雲母	丸	ロクロナデ	ロクロナデ・手締り持ちヘラナズリ	手締り持ちヘラナズリ	新治産	28
SI-02B	4	灰志器	杯	114	7.6	4.4	50	灰黄褐色	褐色	白雲母・白雲母・白雲母・小石	丸	ロクロナデ	ロクロナデ・手締り持ちヘラナズリ	手締り持ちヘラナズリ	内面黒色処理・新治産	1.23
SI-02B	5	土師器	杯	118	6.6	4.0	30	褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ミダキ	ロクロナデ・回転ヘラナズリ	回転赤切り後回転ヘラナズリ	内面黒色処理	19
SI-02B	6	土師器	杯	-	-	-	5	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ロクロナデ	ロクロナデ		雲唐□□後焼内	59
SI-02B	7	土師器	杯	-	0.4	1.2	10	黄褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ミダキ	回転ヘラナズリ	回転赤切り後回転ヘラナズリ	雲唐□□焼内	1.39
SI-02B	8	土師器	高台付杯	119	6.6	4.8	40	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土赤褐色・高台短引付ナズリ	内面黒色処理・雲唐□□	5033.34.38
SI-02B	9	灰志器	类	-	-	-	5	褐色	褐色	白色粉	丸	ヨコナデ	ヨコナデ	内面白・自然釉・東海産		1
SI-022	1	土師器	杯	114	4.1	2.1	50	灰褐色	灰褐色	黒	丸	ロクロナデ	ロクロナデ・回転ヘラナズリ	回転赤切り後回転ヘラナズリ		1.23.7
SI-022	2	土師器	高台付杯	-	6.0	2.0	10	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ロクロナデ	ロクロナデ	高台短引付ナズリ		1.3
SI-022	3	土師器	类	-	-	-	5	灰褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ヘラナデ	ナデ		外周糖子ナデ	5.6
SI-023	1	土師器	杯	-	5.7	1.9	20	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ロクロナデ	ロクロナデ・回転ヘラナズリ	回転赤切り後回転ヘラナズリ		3
SI-024	1	灰志器	杯	-	5.8	2.6	65	褐色	褐色	白色粉(多)	丸	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り後無調整	紫金子産物	1.3
SI-024	2	土師器	杯	148	6.0	4.6	20	黄褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ミダキ	ロクロナデ・回転ヘラナズリ	回転赤切り後回転ヘラナズリ	内面黒色処理	1
SI-024	3	土師器	杯	118	6.8	4.9	75	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ロクロナデ	ロクロナデ・回転ヘラナズリ	回転赤切り後回転ヘラナズリ		4
SI-024	4	土師器	杯	120	6.8	3.7	35	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り		1.1
SI-024	5	土師器	杯	143	8.4	5.2	75	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ミダキ	ロクロナデ・手締り持ちヘラナズリ	回転赤切り後回転ヘラナズリ	内面黒色処理	12.18.20.30
SI-024	6	土師器	杯	122	6.0	3.0	70	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	丸	ロクロナデ・回転ヘラナズリ	回転赤切り後回転ヘラナズリ		8
SI-024	7	土師器	杯	110	8.4	4.7	85	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ロクロナデ	ロクロナデ・回転ヘラナズリ	回転赤切り後回転ヘラナズリ		3
SI-024	8	土師器	杯	122	7.0	3.1	30	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ロクロナデ	ロクロナデ・回転ヘラナズリ	回転ヘラナズリ		1
SI-024	9	土師器	杯	117	6.4	4.5	75	灰褐色	灰褐色	黒	丸	ロクロナデ	ロクロナデ・回転ヘラナズリ	回転赤切り後回転ヘラナズリ		1.9
SI-024	10	土師器	杯	-	6.8	1.6	30	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ミダキ	ロクロナデ・回転ヘラナズリ	回転ヘラナズリ	内面黒色処理	15.16
SI-024	11	土師器	杯	-	6.4	2.6	25	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ロクロナデ	ロクロナデ・回転ヘラナズリ	回転ヘラナズリ		1.3
SI-024	12	土師器	类	-	4.0	1.0	15	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ヘラナデ	ヘラナズリ後ヘラナズリ	ヘラナズリ	外周糖子ナデ・武蔵型	1.12.19.20
SI-025	1	土師器	杯	149	7.8	3.6	30	灰褐色	灰褐色	黒	丸	ロクロナデ	ロクロナデ・回転ヘラナズリ	回転赤切り後回転ヘラナズリ		6
SI-025	2	土師器	杯	-	7.4	10.8	10	灰褐色	灰褐色	黒	丸	ロクロナデ・一部ミダキ	回転ヘラナズリ	回転赤切り後回転ヘラナズリ		4
SI-027	1	土師器	杯	109	3.1	2.4	90	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り後無調整		1.9
SI-027	2	土師器	杯	102	4.6	2.3	90	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	黒	丸	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り後無調整		1.9

遺構	種類	構成	芯材	口径	径高	残存率	色調内面	色調外面	胎土	構成	調整内面	調整外面	底葺	備考	遺物番号			
SI-027	4	土師器	高台付杯	12.8	-	3.9	20	にぶい・褐色色	にぶい・赤褐色	貝	ロクロナデ、一部1	ロクロナデ			1			
SI-027	4	土師器	高台付杯	-	-	1.3	5	黒褐色	にぶい・褐色色	貝	ミナギ	ロクロナデ	高台貼り付け残す	内面黒色処理	1			
SI-027	5	土師器	高台付杯	-	-	2.7	10	にぶい・褐色色	にぶい・赤褐色	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り・高台貼り付け残す		5			
SI-036	1	土師器	高台付杯	15.4	8.0	6.2	60	にぶい・褐色色	にぶい・褐色色	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ・高台貼り付け残す		1.23.6			
SI-036	2	埴土器	円形碗	-	-	3.2	20	にぶい・褐色色	にぶい・褐色色	白色粒	貝	ロクロナデ	ロクロナデ		下底葺	3		
SI-038	1	埴土器	蓋	16.0	-	4.2	98	灰色	灰色	白色粒・小石(多)	貝	ロクロナデ	回転・ロクロナデ・ヘラケズリ		新治産	1.6.10		
SI-038	2	埴土器	高台付杯	-	-	3.3	15	灰色	灰色	白色粒(多)	貝	ロクロナデ	高台貼り付け残す		新治産	1.23		
SI-038	3	埴土器	杯	12.2	7.9	3.5	99	暗灰色	暗灰色	白色針状物質・白色粒	貝	ロクロナデ	ロクロナデ		南比企産	20		
SI-038	4	埴土器	杯	15.4	-	3.5	15	暗灰色	暗灰色	白色粒・白色針状物質(多)	貝	ロクロナデ	ロクロナデ		南比企産	11		
SI-038	5	土師器	杯	12.6	-	3.5	25	にぶい・赤褐色	にぶい・赤褐色	貝	黒コナデ	黒コナデ・ヘラケズリ		赤口コ	1			
SI-038	6	土師器	杯	8.5	6.8	4.8	95	にぶい・褐色色	にぶい・赤褐色	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	手持ちヘラケズリ		12			
SI-038	7	土師器	丸鉢形土器	10.2	10.0	7.5	70	灰色	灰色	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	回転・ヘラケズリ		1.9.1.27.28.30			
SI-038	8	土師器	短頸瓶	16.5	4.8	7.0	100	にぶい・褐色色	にぶい・褐色色	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	手持ちヘラケズリ		8			
SI-038	9	土師器	蓋	17.5	-	13.5	50	にぶい・褐色色	にぶい・褐色色	貝	黒コナデ・ヘラケズリ	黒コナデ・ヘラケズリ	手持ちヘラケズリ		1.5.7.10			
SI-039	1	土師器	杯	12.6	6.8	4.1	100	褐色色	にぶい・赤褐色	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	回転・ロクロナデ・ヘラケズリ		12			
SI-040	1	土師器	杯	13.1	6.0	3.9	85	灰色	灰色	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り・底葺調整		2.5			
SI-040	2	土師器	杯	12.6	6.0	3.9	35	灰色	灰色	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	手持ちヘラケズリ		8			
SI-040	3	土師器	杯	12.6	5.9	4.2	70	褐色	褐色	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	回転・ヘラケズリ		1.7.9.13			
SK-123A	1	土師器	杯	12.7	6.6	3.4	30	にぶい・赤褐色	にぶい・赤褐色	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り・底葺調整		1			
SK-123A	2	土師器	杯	14.8	-	3.9	50	黒褐色	にぶい・赤褐色	貝	ミナギ	ロクロナデ	手持ちヘラケズリ		内面黒色処理	12		
SB-002	1	土師器	杯	-	-	6.6	20	褐色	灰色	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	回転・ロクロナデ・ヘラケズリ		内面黒色処理	14		
SB-002	2	土師器	蓋	13.6	3.7	1.9	80	にぶい・赤褐色	にぶい・赤褐色	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	回転・ロクロナデ・ヘラケズリ		遺著「中万口」 扉・扉裏挿入	1.18.20.21		
遺構1	1	土師器	丸	-	-	-	5	淡黄色	淡黄色	白色粒・灰色物質	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ	奈良三郎	SD-001-1		
遺構1	2	埴土器	丸	-	-	8.6	1.8	灰色	灰色	白色・黄土	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ		SD-003-43		
遺構1	3	埴土器	碗	-	-	3.6	3.2	30	灰白色	灰黄色	小石	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ	O3製式	SK-062-1	
遺構1	4	埴土器	圓形碗	12.4	-	4.8	10	褐色	褐色	白色粒(多)	貝	ロクロナデ	ロクロナデ		新治産	SI-003-43		
遺構1	5	埴土器	蓋	16.3	-	1.9	20	褐色	褐色	白色粒・小石	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	回転・ヘラケズリ		新治産	SK-096-3	
遺構1	6	埴土器	杯	11.6	16.4	3.8	25	灰色	灰色	白・黒・褐色物質	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り・底葺調整		南比企産	SK-034-1	
遺構1	7	埴土器	杯	11.6	16.6	3.4	40	褐色	褐色	白色粒・白色針状物質	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	回転・ロクロナデ・ヘラケズリ		南比企産	SK-096-5	
遺構1	8	埴土器	杯	-	-	3.8	25	灰色	灰色	白・褐色物質	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	回転・ヘラケズリ		常陸	SD-003-1	
遺構1	9	埴土器	杯	-	-	1.3	1.1	10	褐色	褐色	白色粒・小石	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	回転・ヘラケズリ		SD-003.35.36	
遺構1	10	埴土器	高台付杯	-	-	14.4	3.1	10	灰色	灰色	白色粒・小石	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	回転・ヘラケズリ・高台貼り付け残す		新治産	SK-101-6
遺構1	11	埴土器	高台付杯	-	-	-	10	灰色	灰色	白色粒・小石	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	回転・ヘラケズリ・高台貼り付け残す		新治産	SK-100-1	
遺構1	12	土師器	杯	11.8	16.4	3.6	25	にぶい・褐色色	にぶい・褐色色	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り・底葺調整		SK-031-1			
遺構1	13	土師器	杯	12.7	-	3.3	60	にぶい・赤褐色	にぶい・赤褐色	貝	ロクロナデ	ロクロナデ			SK-122-1			
遺構1	14	土師器	杯	-	-	3.0	1.6	20	にぶい・褐色色	にぶい・褐色色	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	回転・ヘラケズリ		SD-003-1		
遺構1	15	土師器	杯	-	-	3.8	2.7	20	にぶい・褐色色	にぶい・褐色色	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	回転・ヘラケズリ		SK-074-2		
遺構1	16	土師器	杯	-	-	3.0	1.7	20	にぶい・褐色色	にぶい・褐色色	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	回転・ヘラケズリ		SK-106.14		

遺構	種類	構成	口径	底径	高さ	容積%	色調内面	色調外面	胎土	焼成	調整内面	調整外面	底部	備考	遺物番号
遺構群 17	土師器 杯	—	58.0	11.95	25		に濃い褐色	に濃い褐色	真	ロクロナテ	ロクロナテ	刷毛赤切り後無調整			SK-0122
遺構群 18	土師器 高台付杯	90.0	66.2	5.8	70		黒褐色	に濃い褐色	真	ロクロナテ	ロクロナテ	高台貼り付け後ナデ	内面黒色処理		9M-0031
遺構群 19	土師器 高台付杯	—	66.4	11.8	30		黒色	黒色	真	1.5ギキ	1.5ギキ	刷毛ヘラケズリ、高台貼り付け後ナデ	内面黒色処理		SK-0754
遺構群 20	土師器 杯	—	62.0	11.3	15		に濃い褐色	に濃い褐色	真	ロクロナテ	ロクロナテ	刷毛赤切り後刷毛ヘラケズリ			SK-105-14
遺構群 21	土師器 杯or碗	—	4.8	11.3	30		に濃い褐色	に濃い褐色	真	ロクロナテ	ロクロナテ	刷毛赤切り後ナデ	油繕付着、打明		SK-105-1
遺構群 22	土師器 高台付杯	—	66.0	12.1	30		黒色	に濃い褐色	真	1.5ギキ	ロクロナテ	刷毛赤切り、高台貼り付け後ナデ	内面黒色処理		10K-076-2
遺構群 23	土師器 高台付杯	—	7.4	11.95	20		暗灰色	に濃い褐色	真	1.5ギキ	ロクロナテ	高台貼り付け後ナデ	内面黒色処理		SK-001-1
遺構群 24	土師器 高台付杯	—	68.0	13.0	30		に濃い褐色	に濃い褐色	真	ロクロナテ	ロクロナテ	刷毛赤切り、高台貼り付け後ナデ			SK-0182
遺構群 25	粗意器 壺	—	104.0	14.8	5		灰色	灰色		白色粉・小石	ロクロナテ	ロクロナテ	ヘラケズリ・ナデ	雲母産	SD-0002
遺構群 26	粗意器 壺	—	—	—	5		灰色	灰色	真	ヘラケズリ	タタキ		新治黄瀬 磁石転用(中世末)		SK-001-17
遺構群 27	粗意器 蓋きりナデ	—	—	—	5		に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	真	ナデ	ナデ		下駄産		SD-031
遺構群 28	粗意器 壺	—	—	—	5		黒褐色	に濃い赤褐色	真	ナデ	タタキ		慶仁寺利根 門懸状土製品 黄瀬産		9M-23-1
遺構群 29	土師 高台付杯	—	—	—	10		黒褐色	に濃い赤褐色	真	1.5ギキ	ロクロナテ	高台貼り付け後ナデ	内面黒色処理、転用品(黄瀬産) 磁石・磨石として使用		SK-001-1

第3表 奈良・平安時代瓦観察表

棟号	出土地点	種類	瓦当部	凹面	凸面	胎土	焼成	色調	備考
8-8	SI-100	丸瓦	布目痕		ナデ	白、透明	良好	黄灰色	無段式
10-2	SI-005	平瓦	布目痕		縄タタキ目	白、黒、濁、透明	良好	黄褐色	一枚作り
14-7	SI-015	平瓦	布目痕		縄タタキ目	白、黒、濁、透明	良好	褐色	
16-14	SI-021A	平瓦	布目痕		縄タタキ目	白、透明	良好	黄灰色	
17-11	SI-021B	平瓦	布目痕		縄タタキ目	白、濁、透明	良好	褐色	
18-13	SI-024	丸瓦	布目痕		ナデ	白、濁、透明	良好	黄灰色	
19-6	SI-027	平瓦	布目痕		縄タタキ目	白、黒、濁、透明	良好	淡黄灰色	
25-1	SK-100	軒丸瓦	蓮華文		ヘラケズリ	白、褐色	良好	淡褐色、褐色	
25-2	SK-100	軒丸瓦	宝相華文		ヘラケズリ	白	良好	暗灰色	
25-3	SK-039	軒平瓦	宝相華文			白、透明	やや甘	黄灰色	
25-4	SK-103	軒平瓦	唐草文	布目痕		白	良好	淡褐色、褐色	
25-5	SK-100	軒平瓦	布目痕			白、小石	良好	暗黄灰色	磁石に転用
25-6	SK-100	軒平瓦	ナデ	ナデ	ナデ	白	良好	黄灰、褐色	
25-7	SK-060	軒平瓦	ナデ	ナデ	縄タタキ目・離れ砂	白、透明	良好	黒灰色、暗黄灰色	
25-8	SK-100	丸瓦	布目痕		ナデ	白、透明	堅牢	灰色	
25-9	SK-039	丸瓦	布目痕		ナデ		良好	灰色	
25-10	SK-001	丸瓦	布目痕		ナデ	離砂粒	良好	褐色	
25-11	SK-031	平瓦	布目痕		縄タタキ目		良好	黄灰色	
25-12	SK-100	平瓦		ナデ・ヘラケズリ	縄タタキ目	白、灰、透明	良好	淡褐色、褐色	ヘラ書き文字「荒」
26-13	10N-55	平瓦	布目痕		縄タタキ目		良好	黄灰色	
26-14	SK-001	平瓦	布目痕		縄タタキ目	褐色	やや甘	褐色	
26-15	SK-039	平瓦	布目痕		縄タタキ目		良好	黄灰色	
26-16	SK-001	平瓦	布目痕		斜格子目の叩き		良好	褐色	
26-17	SK-100	平瓦			縄タタキ目		良好	褐色	
26-18	SK-100	平瓦			縄タタキ目		良好	淡灰色	
26-19	SK-104	平瓦	布目痕・斜板痕		縄タタキ目		堅牢	灰色	磁石に転用
26-20	SK-100	平瓦	布目痕・ナデ		斜格子目の叩き		やや甘	淡褐色	

第4表 中世方形竪穴状遺構集成表

遺構No	採掘番号	長軸・短軸 (m)	主軸方向	面積 (㎡)	壁高 (cm)	柱穴深さ (cm)	位置 (グリッド)	出土遺物
SI-017	36	2.92 × 2.48	—	(4.636)	33.3 ~ 35.2	38.0	10M-30	
SI-029	36	2.18 × 1.87	—	(2.903)	—	5.0	40.0	9N-74
SI-030	37	—	—	—	34.0 ~ 32.0	43.0 ~ 32.0	9N-83	
SI-031	36	3.35 × 2.0	N-140°-W	(6.411)	24.0 ~ 28.5	36.0 ~ 38.0	9N-74	古銭
SI-032	38	1.98 × 1.65	N-720°-W	2.298	47.0 ~ 30.3	15.0 ~ 30.0	10L-16	
SI-033	37	3.05 × 2.5	N-380°-E	6.086	25.4 ~ 32.5	10.0 ~ 32.0	9H-91	青磁碗、鉄洋
SI-034	37	3.1 × 2.1	N-190°-E	(4.216)	20.0 ~ 49.0	14.0	10L-18	
SI-035	38	3.2 × 2.4	N-120°-E	6.552	8.7 ~ 25.5	12.6 ~ 51.1	9L-98	
SI-041	38	2.63 × 1.97	N-100°-E	4.477	19.8 ~ 25.6	28.5 ~ 45.0	10L-05	
SK-001	38	2.75 × 1.84	N-050°-E	3.932	21.7 ~ 30.3	—	11L-85	古陶片鉢、火鉢、播鉢、常滑 甕、鉢、風鈴、転用砥石等
SK-009	39	2.0 × (1.1)	—	—	17.0	43.0	12M-30	
SK-027	39	2.05 × (1.8)	—	—	11.4 ~ 42.0	51.0 ~ 33.3	12N-45	
SK-029	39	2.4 × 2.2	N-87.0°-W	(3.839)	18.6 ~ 21.0	20.0 ~ 33.0	10N-53	
SK-090	48・49	(2.9) × 1.9	N-102.5°-E	—	26.4 ~ 34.2	14.0	11K-08	常滑転用砥石
SK-096	36	2.1 × 1.6	—	(2.814)	15.6 ~ 18.0	—	9N-74	
SK-097	37	1.6 × 1.4	—	1.648	5.0 ~ 12.5	—	9N-73	

第5表 中世土坑集成表

遺構No	採掘 番号	長辺・長 (m)	短辺・短軸 (m)	深さ (cm)	位置 グリッド	出土遺物	備 考
SK-003	—	1.3	0.5	8.0	11L-78/88		
SK-004	40	・	・	9.5	11L-88/89、12L-09/19、11M-90、 12M-00/10		地下式坑を含む柱穴、整形等複合遺構
SK-005	49	1.7	1.7	30.0	12L-08/09/18/19		SK-006と切り合う。SK-006より新しい?
SK-006	49	1.95	1.3	60.0	12L-07/08	銭貨	袋状土坑
SK-007	—	1.2	1.1	23.0	11L-96		底面球面形
SK-008	49	2	1.2	10.0	12L-18/19/28/29		西側掘乱
SK-017	—	(1.4)	1.5	33.0	10J-61/62/71/72		東側掘乱
SK-018	—	1.6	1.5	30.0	10J-64/65/74/75/84/85		深さの同じ3基の土坑の重複
	—	1.6	1.6	30.0			
	—	0.9	0.9	30.0			
SK-019	—	1.8	1.7	27.0	10J-66/76		西側掘乱
SK-020	—	(0.9)	(0.9)	16.0	10J-79		西・南側掘乱
SK-021	—	0.9	0.9	13.0	10K-61/71		
SK-022	—	0.4	0.4	50.0	11L-94		
SK-023	46	・	・	・	11L-76/77/86/87		火葬施設
SK-024	—	0.33	0.24	44.0	11L-87/97		
SK-025	46	・	・	・	11L-88/89		火葬施設
SK-028	51	1.28	0.76	24.0	10N-51/52		
SK-031	51	2.4	1.6	42.0	10N-53/54		東端が一段下がる。
SK-032	51	(0.8)	1.44	46.0	10N-55/65/66		東側未調査
SK-035	—	1.7	1.0	35.0	11K-50/51		
SK-037	—	1	0.9	70.0	9K-59		

遺蹟No.	採掘 番号	長辺・長 軸 (m)	短辺・短 軸 (m)	深さ (cm)	位置 グリッド	出土遺物	備 考
SK-039	40	-	-	-	10M-30/31/32/33/41/42/43	白磁碗、古瀬戸壺、摺り鉢、常滑甕、鉢、カワラケ、転用砥石	地下式坑
SK-040	-	(1.2)	1	29.0	10L-26-27		北側覆乱
SK-041	46	2.7	2	30.0	9N-94/95	焼かれた骨片・骨粉	火葬施設
SK-042	46	-	-	-		焼かれた骨片・骨粉	火葬施設
SK-044	47	(0.7)	(0.4)	30.0	11L-20		ほとんど覆乱
SK-045	47	-	-	-	11L-30/40		粘土貼土坑
SK-046	44	-	-	-	11L-40/50		地下式坑 ほとんど覆乱
SK-047	-	1.1	0.8	39.0	11L-32/42		
SK-048	-	1.3	1.2	30.0	11L-33/43		
SK-049	-	1.2	(0.9)	47.0	11L-25/35		東側覆乱
SK-050	-	1.5	0.7	40.0	10L-95		西側・東側覆乱
SK-051	-	2.7	1.4	36.0	10L-96, 11L-06		東側覆乱。柱穴と切り合う
SK-052	-	(1.1)	(0.4)	9.0	10L-25/35		西側覆乱
SK-053	-	1.3	1	10.0	10L-26/36		
SK-056	-	1.1	1.1	33.0	11M-21/22		台地整形(SX-001)の東端部
SK-057	-	1.7	1	31.0	10L-47/57		
SK-058	-	1.3	0.8	43.0	10L-48/58		
SK-059	51	3.3	1.42	28.0	10N-12/13/22/23		
SK-060	45	2.6	1.4	26.0	10M-01/11	瀬戸・美濃皿、	土壇墓 焼土と土器片の集合
SK-061	51	(2.0)	(1.5)	44.0	12K-58/59	青磁碗、瀬戸・美濃皿、常滑鉢、摺鉢	南西端一部のみ
SK-062	41	3.2	2.77	-	10L-53/54/63/64	瀬戸・美濃碗、内耳、転用鉢・砥石	地下式坑
SK-063	51	(1.3)	(1.1)	66.0	10N-03	志部呂徳利	北東側未調査
SK-064	-	1.7	1	32.0	10M-12/13/22/23		
SK-065	45	2	(0.7)	28.0	10L-81		柱穴と切り合う。南側覆乱
SK-066	45	(1.3)	(0.8)	20.0	10L-73	短刀、刀子	SK-067と切り合う。南側覆乱。柱穴と切り合う 土壇墓
SK-067	45	(1.7)	(0.8)	19.0	10L-73/74		南側覆乱。柱穴と切り合う。土壇墓
SK-068	-	0.9	0.9	38.0	10L-65		北端が覆乱
SK-069	-	1.2	0.9	32.0	10L-37		SD-001内
SK-070	-	1.3	1.1	64.0	10L-48		北側でSD-001と切り合う
SK-071	-	1.4	0.8	29.0	10L-23/33		土壇墓?
SK-072	47	2.7	1.9	100.0	11K-37/38	瀬戸・美濃摺鉢、常滑甕	粘土貼土坑
SK-073	-	1.9	1.3	10.0	11J-44/54		
SK-074	48・49	(2.5)	(0.95)	13.0	10K-95/96, 11K-06		2基の土壇の切り合い
SK-075	-	1.5	1.2	26.0	10K-94/95, 11K-05/06		底面平坦
SK-076	48-49	(2.3)	(1.6)	-	11K-05/15/16		3基の土壇の切り合い
SK-077	-	9.8	6	10.0	11K-16/17	壺	掘込深く底面平坦
SK-078	-	2.2	1.4	15.0	10K-83/84/93/94		底面平坦
SK-081	-	1.5	1.2	11.0	11J-17		
SK-082	-	1.5	1.1	20.0	11J-37/47/48		
SK-083	-	(0.9)	(0.7)	9.0	11J-48/49		
SK-084	-	(1.4)	1	7.0	11J-49		

遺構No	棟回 番号	長辺・長 軸 (m)	短辺・短 軸 (m)	深さ (cm)	位置 グリッド	出土遺物	備 考
SK-085	—	(1.0)	(0.8)	8.0	11K-40		
SK-086	—	1.2	1.2	22.0	11J-43/53		
SK-087	—	0.6	0.7	25.0	11J-33/43		
SK-088	48・49	2.3	1.8	30.0	10K-85/86/95/96	瀬戸・美濃焼	袋状土坑。北側天井一部残存
SK-089	48・49	—	1.5	40.0	10K-96		SK-088と一部切り合う
SK-091	—	1.3	1.0	26.0	10K-79		竪立柱建物柱穴と切り合う
SK-092	—	1.3	1.1	21.0	10L-70		竪立柱建物柱穴と切り合う
SK-093	51	1.7	1.1	40.0	9N-44/45/54/55		
SK-094	51	2.1	1.8	24.0	9N-55/56/65		
SK-095	51	1.9	1.7	25.0	9N-65/66/75/76		
SK-098	48・49	—	—	—	10K-76/77/86/87/96/97		4～5基の土坑が切り合う
SK-100	42	5.82	3.08	-	10K-37/38/47/48/57/58/68/69	青磁碗、瀬戸・美濃飯子・ 椀・皿・漆鉢 常滑壺・鉢、 転用砥石	地下式坑
SK-101	41	4.3	4.2	-	10L-41/42/51/52	常滑壺、内耳、風炉	地下式坑
SK-102	—	—	—	—	9L-78/79/89		北側壁瓦
SK-103	52	(2.8)	(2.0)	50.0	9L-75/76	常滑鉢	方形3、円形1の土坑が切り合う
SK-104	52	2.5	1.6	20.0	9L-74/75/84/85		
SK-105	43・44	-	-	-	10K-09/19/29, 10L-00/10/20	瀬戸・美濃壺、転用砥石	地下式坑
SK-106	52	3.2	1.8	90.0	10K-48/49/58/59/69	白磁碗、瀬戸・美濃皿、 香炉	粘土貼土坑
SK-107	43・44	3.7	2.55	-	9K-99, 9L-90, 10K-09, 10L-00	瀬戸・美濃壺、	地下式坑
SK-108	43・44	-	-	-	9L-91/92, 10L-01/02/03/11/12/13	瀬戸・美濃壺、風炉、転 用砥石	地下式坑
SK-109	43・44	1.6	(0.8)	60.0	10L-10/11		袋状土坑
SK-110	—	—	1.3	40.0	10K-57/58		
SK-111	45	2.8	(2.0)	40.0	9L-65	人骨1体分	土壇墓
SK-112	45	2.2	1.3	20.0	10K-47	小刀2、白歯、瀬戸・美 濃飯子・皿	土壇墓
SK-113	52	1.8	1.2	14.0	10N-06/07/16		
SK-114	52	1.0	0.7	18.0	10N-25		
SK-115	52	1.3	0.9	12.0	10N-15/26		
SK-116	52	1.3	1.3	24.0	10N-14/15		
SK-117	52	1.1	1	72.0	10N-16/17/26/27		袋状土坑に方形土坑が切り合う
SK-120	52	1.9	1.4	40.0	11N-99, 12N-09, 11Q-90, 12Q-00		
SK-121	—	—	—	20.0	11Q-92, 12Q-02		古代堅穴住居跡か

第6表 中世溝状遺構構成表

遺構No	棟回 番号	長さ (m)	深さ (cm)	位置 (グリッド)	出土遺物
SD-001	53	(16.5)	46～78	10L-32他	瀬戸・美濃壺、椀、皿、盤、漆鉢、常滑壺、風炉、転用砥石、砥石
SD-002	53	9.2	100	10L-04他	青磁碗、瀬戸・美濃壺、飯子、皿、盤、常滑壺
SD-003	54	(46.0)	10～34	9N-15他	瀬戸・美濃壺、転用砥石、砥石
SD-004	54	(12.5)	11～36	9N-85他	
SD-005	55	(7.2)	10	11K-53他	瀬戸・美濃皿、羽釜
SD-006	55	(7.0)	18	11J-18他	瀬戸・美濃壺、椀

第7表 中世陶磁器観察表

国名 番号	産地等	器種	部位	編年	年代	遺構・グランド	遺物番号	口径	底径	器高	破片数		備考
											接 合 前	接 合 後	
1	中国	白磁皿	口縁~体部			SX-001(2次)	20				-	1	八内形皿
2	中国	白磁杯	底部			SX-001(1F-1C)	1				-	1	面取り杯
3	中国	白磁碗	高台部			SX-001(2次)	5		3.2		-	1	小型碗 高台に挟り
4	中国	白磁皿	底部	白磁皿Ⅳ -1類	13世紀前半 ~後	9M-33	1				-	1	高台なし
5	中国	白磁碗	体部			SX-001(11K,38,39) SK-106					-	2	内面に沈線
6	中国	青磁皿	口縁			9M-33	1				-	1	後花壇 焼熟
7	中国	青磁碗	口縁	龍泉窯系 青磁Ⅰ -5 a	13世紀前半	SI-033	2				-	1	へう摺き蓋寄文
8	中国	青磁碗	口縁	龍泉窯系 青磁Ⅰ -5 a	13世紀前半	SX-001(1F-1C)	1				-	1	外面にへう摺き蓋寄文
9	中国	青磁碗	体部~底部	龍泉窯系 青磁Ⅰ	13世紀前半	SX-001(2次)	4				-	1	陶文碗
10	中国	青磁碗	口縁~高台			10K-79	2			3.5	-	1	高台裏に雲形露胎
11	中国	青磁碗	底部	龍泉窯系 青磁Ⅰ -5 b	13世紀前半	SK-061	8		5.3		-	1	陶蓋寄文
12	中国	青磁碗	底部			SK-100	75				-	1	内面に割花文、高台欠損
13	中国	青磁碗	体部	龍泉窯系 青磁Ⅰ -5 b	13世紀前半	SD-002	20				-	1	陶蓋寄文
一	中国	白磁皿	高台片			SX-027	1						
14	瀬戸・美濃	茶壺	口縁	古瀬戸後 期	15世紀末~ 甲斐	組F9A	1		(10.0)		-	1	組母線、請物の上に鉄軸、胎土は黒色で緻密
15	瀬戸・美濃	壺	口縁	古瀬戸後 期	15世紀末~ 甲斐	SD-002	3,12		(8.0)		-	2	1口有耳蓋、胎軸か
16	瀬戸・美濃	(茶)壺	口縁~胴部	古瀬戸後 期	15世紀前半	SD-002,10L-51,SK-105,SK-107	7,14,1		(10.0)		○	8	1口有耳蓋、胎軸
17	瀬戸・美濃	壺	胴部~底部	不明		SD-001,SK-108	3,28		(8.0)		○	2	1口有耳蓋、胎軸、接合しないが同一個体とした
一	瀬戸・美濃	壺	胴部	不明		9M-33	1						
一	瀬戸・美濃	壺	胴部	不明		SD-002	8				-	1	
一	瀬戸・美濃	壺	胴部	不明		SK-039	1				-	1	外面に薄い鉄軸
18	瀬戸・美濃	瓶子	肩~胴部	古瀬戸後 期	15世紀末~ 甲斐	SK-112,SD-002,SX-001	1,6,8				○	4	外面鉄軸、肩に2本の沈線、胴部最大径(21.0)cm
19	瀬戸・美濃	小壺小 瓶	底部	古瀬戸後 期	15世紀末~ 甲斐	SD-006	1		(5.2)		-	1	露胎
20	瀬戸・美濃	双耳小 壺	蓋	古瀬戸後 期	15世紀中葉	10L-64	2			3.0	-	1	上面は鉄軸、蓋裏は露胎、最大径5.6cm
21	瀬戸・美濃	緑釉小 瓶	口縁~底部	古瀬戸後 期	14世紀末~ 15世紀初	9M-70	2		(12.0)	6.6 2.9	-	1	1口縁内外面に鉄軸、内外面に重ね焼き痕
22	瀬戸・美濃	緑釉小 瓶	口縁~底部	古瀬戸後 期	15世紀前半	SD-005	2		(10.4)	4.6 2.5	-	1	1口縁端から内外面に鉄軸
23	瀬戸・美濃	緑釉小 瓶	口縁	古瀬戸後 期	14世紀末~ 15世紀初	SD-005	14				-	1	1口縁端内外面に鉄軸
24	瀬戸・美濃	緑釉小 瓶	口縁	古瀬戸後 期	15世紀中葉	SX-001(1F-A3)	7				-	1	1口縁端内外面に鉄軸
一	瀬戸・美濃	緑釉小 瓶	口縁	不明		SX-001(1F-1C)	1				-	2	1口縁端内外面に鉄軸
一	瀬戸・美濃	緑釉小 瓶	底部片	不明		SX-001(1F-1C)	2				-	1	内面厚敷、焼熟
一	瀬戸・美濃	緑釉小 瓶	口縁	不明		SX-001(1F-A2)	不明				-	1	1口縁端から外面に鉄軸
一	瀬戸・美濃	緑釉小 瓶	口縁	不明		SX-001(1F-1A)	6				-	1	1口縁端内外面に厚く鉄軸
一	瀬戸・美濃	緑釉小 瓶	口縁	不明		SK-061	5				-	1	1口縁端内外面に鉄軸
25	瀬戸・美濃	平碗	体部	古瀬戸後 期		SD-001	43				-	1	外面下半露胎以外鉄軸、重ね焼き痕
26	瀬戸・美濃	平碗	口縁~体部	古瀬戸後 期	14世紀末~ 15世紀初	SK-100	1,37				○	2	外面下半露胎以外鉄軸、重ね焼き痕
27	瀬戸・美濃	平碗	口縁~体部	古瀬戸後 期	15世紀前半	SK-062	1				-	1	外面下半露胎以外鉄軸
28	瀬戸・美濃	平碗	口縁	古瀬戸後 期	14世紀後半	SK-088	3				-	1	外面下半露胎以外鉄軸
29	瀬戸・美濃	緑釉小 瓶	底部	古瀬戸後 期	14または15 世紀初	SK-100	84		6.0		-	1	内面鉄軸、ハケ塗り、重ね焼き痕
30	瀬戸・美濃	平碗	体部	古瀬戸後 期		SD-006	1				-	1	内面鉄軸、外面露胎

棟号	所在地	器種	部位	編年	年代	遺構・グラフィッド	遺物番号	口径	底径	器高	接合部	接合部	備考
31	瀬戸・美濃	盤類	底部	古瀬戸後期		SX-001 (2次)	8				○	1	内面灰釉施、外面露胎
32	瀬戸・美濃	盤類	底部(脚)	古瀬戸後期	15世紀中葉～後	SX-001 (③F-4C)	1				○	1	脚付き、内外面露胎
33	瀬戸・美濃	盤類	底部片	古瀬戸後期	15世紀中葉～後	SD-001 (2次), SD-002	001-8, 002-13		(15.0)		○	2	1 内面無釉、淨減、外面下半露胎、2本の爪脚
34	瀬戸・美濃	即日付大皿	1脚一筋欠 面のほぼ完形	古瀬戸後期	15世紀前半	SK-100	2, 2, 6, 7	32.6	14.0	10.5	○	4	1 内外面上半に灰釉、片111小所とその直下に脚目、3足脚
35	瀬戸・美濃	即日付大皿	1脚一筋部	古瀬戸後期	15世紀中葉	SK-100-SX-001 (2次)	SK-1002, SX-001-8	(29.6)	9.6	(7.3)	○	2	1 内外面上半に灰釉、片111小所とその直下に脚目
36	瀬戸・美濃	直縁大皿	1脚一筋部	古瀬戸後期	15世紀中葉	SK-100, SK-060	94, 94, 8, 6	(27.6)	14.0	8.6	○	5	1 内外面上半に灰釉、脚が欠損しているが足脚と考えられる
38	瀬戸・美濃	即日付大皿	1脚	古瀬戸後期	15世紀後半	SX-001 (③F-1C) (④F-5B)	F-110, F-54				○	2	1 外面灰釉、内面途中まで灰釉、その下は露胎
37	瀬戸・美濃	直縁大皿	1脚一筋部	古瀬戸後期	15世紀前半	SX-001 (2次), 10L-04	SX-6, 10L-2	(31.2)	(13.6)	(6.8)	○	2	1 内面灰釉をハケ塗りか削り取り
39	瀬戸・美濃	折縁深皿	1脚一筋部	古瀬戸後期	15世紀中葉	SD-003	10				○	1	1 内外面上半に灰釉、下半は露胎
40	瀬戸・美濃	即日付大皿	1脚	古瀬戸後期	15世紀後半	SD-001-002	001-16, 20, 21, 22, 002-17, 18				○	6	1
41	瀬戸・美濃	折縁深皿	1脚一筋部	古瀬戸後期	14世紀後半	10L-21	1 ?	(34.0)			○	1	1 内外面とも灰釉、外面は白濁
42	瀬戸・美濃	折縁中皿	1脚一筋部	古瀬戸後期	14世紀後半	SK-100	88	(20.0)	(10.4)	5.0	○	1	1 外面は露胎、立ち上がりから内面すべてに灰釉、重ね焼き痕
43	瀬戸・美濃	椀型鉢	1脚	古瀬戸後期	14世紀後半	SK-001	7				○	1	1 外面上半から内面全体灰釉、釉薬が飛んでいる
44	瀬戸・美濃	折縁中皿	底部	古瀬戸中期		SK-060	2				○	1	1 内面灰釉、外面露胎、被熱
—	瀬戸・美濃	皿	1脚	不明		10L-72	1				○	1	1 内外面灰釉
—	瀬戸・美濃	皿	底部片	不明		SK-112	1				○	1	1 内面に重ね焼き痕
—	瀬戸・美濃	皿	底部片	不明		SD-001	37				○	1	1
—	瀬戸・美濃	盤類	底部片	不明		SX-001 (③F-1C)	2				○	1	1 内外面露胎
—	瀬戸・美濃	盤類	底部片	不明		SX-001 (③F-1C)	1				○	1	1 内外面下半は露胎、上半は灰釉
—	瀬戸・美濃	盤類	底部片	不明		SX-001 (2次)	8				○	1	1 内外面下半は露胎、上半は灰釉
45	瀬戸・美濃	深鉢	1脚一筋部	古瀬戸後期	15世紀中葉	SK-039	9	(27.0)	11.5	8.9	○	1	1 器人が本単位、脚目、使用に伴う摩滅痕、全面露胎
46	瀬戸・美濃	深鉢	1脚一筋部	古瀬戸後期	15世紀中葉	SD-001	2, 27				○	2	1 両面露胎
47	瀬戸・美濃	深鉢	1脚一筋部	古瀬戸後期	15世紀後半	SK-039	1				○	2	1 両面露胎
48	瀬戸・美濃	深鉢	1脚	古瀬戸後期	15世紀中葉	SX-001 (③F-4C)	5				○	2	1 両面露胎
49	瀬戸・美濃	深鉢	1脚	古瀬戸後期	15世紀後半	SX-001 (③F-2A)	8				○	1	1 両面露胎
50	瀬戸・美濃	深鉢	1脚	古瀬戸後期	15世紀後半	SX-001 (③F-5B)	4				○	1	1 両面露胎
51	瀬戸・美濃	深鉢	底部	古瀬戸後期	15世紀中葉～後	SK-039	21	(12.0)			○	1	1 全面露胎、脚目は9～10本単立、使用に伴う摩滅痕、被熱
52	瀬戸・美濃	深鉢	底部	古瀬戸後期	15世紀中葉～後	SX-001 (③F-1C)	1	9.6			○	3	1 全面露胎、脚目は12本単立、使用に伴う摩滅痕
53	瀬戸・美濃	深鉢	底部	古瀬戸後期	15世紀中葉～後	SX-001 (③F-4C)	5				○	1	1 両面露胎、使用に伴う摩滅痕
54	瀬戸・美濃	深鉢	底部	古瀬戸後期	15世紀中葉～後	SX-001 (③F-4C)	5				○	2	1
55	瀬戸・美濃	深鉢	底部	古瀬戸後期	15世紀中葉～後	SX-001 (③F-4C)	5				○	1	1 両面露胎、使用に伴う摩滅有り
—	瀬戸・美濃	深鉢	1脚	不明		SK-100	1				○	1	1 蓋物、無地で小形、露胎ではない可能性も
—	瀬戸・美濃	深鉢	1脚	不明		SI-010	1				○	1	1 近景、両面露胎、煙灰による混入
—	瀬戸・美濃	深鉢	底部	不明		SX-001 (2次)	7				○	1	1 両面露胎
—	瀬戸・美濃	深鉢	底部	不明		SK-001	1				○	1	1 両面露胎
—	瀬戸・美濃	深鉢	底部	不明		SK-001	1				○	1	1 84と同一個体か 両面露胎
—	瀬戸・美濃	深鉢	底部	不明		SX-001 (③F-3A)	7				○	1	1 両面露胎
—	瀬戸・美濃	深鉢	底部片	不明		SK-072	1				○	1	1
56	志戸呂	大型筒型容器	1脚	古瀬戸後期	15世紀中葉～後	SI-018	1				○	1	1 内外面1脚に露胎

標頭番号	産地等	器種	部位	編年	年代	遺構・グリッド	遺物番号	口徑	底径	器高	破片数 検出 接合 後	備考
57	志戸呂	茶碗	肩部片	古瀬戸焼 V	15世紀中葉 -後	10L-22	1				- 1 1	肌母線、緻密な茶褐色土、黄灰色の釉薬の上に淡黄色の釉薬が施すが、おそらく変色していると思われる
58	志戸呂	磁鉢	口縁-体部	古瀬戸焼 古古	15世紀中葉	SX-001(ⅡF-1C)	1				- 3 1	両面磨飾
59	常滑	小型壺	肩部-胴部	不明		SD-002	9, 15, 16		(116)		○ 2 1	灰色、黄い胎土、被熱
60	常滑	壺	肩部	不明		SK-001	10, 26				○ 2 1	茶褐色の自然釉
61	常滑	壺	肩部-胴部	不明		SD-002, SK-100	SD002-4, 11, SK-01				○ 3 1	にふい褐色、内面縁方向の輪郭彫形痕跡著、被熱
62	常滑	壺	口縁-胴部	6 a	13世紀中	SK-001	3				- 1 1	
63	常滑	壺	口縁	6 a	13世紀中	10L-32	2				- 1 1	
64	常滑	壺	口縁	6 a	13世紀中	SX-001(11K, 38-39)	1				- 1 1	
65	常滑	壺	口縁	10	13世紀後	SK-101	9				- 1 1	
66	常滑	壺	口縁	6 b	13世紀後	SK-100	4				- 1 1	
67	常滑	壺	口縁	7	14世紀前	SK-039	8				- 1 1	
68	常滑	壺	口縁	9	15世紀	SK-072	1				- 1 1	
69	常滑	壺	口縁	6 b	13世紀後	SK-100	43				- 1 1	
70	常滑	壺	口縁-底部	6 a	13世紀前	10K-84	1				- 1 1	
70	常滑	壺	口縁-底部	5	13世紀前	SK-106	5, 8, 9, 10, 12	(304)	14.8	35.5	○ 5 1	肩に被移文
71	常滑	壺	口縁-胴部	不明		SD-001	9, 30, 31, 35	(245)			○ 4 1	肌母線の発色
72	常滑	片口鉢	口縁	7	14世紀前	SX-001(2次)	9				- 1 1	
73	常滑	片口鉢	口縁	7	14世紀前	SK-061	9				- 1 1	
74	常滑	片口鉢	口縁	7	14世紀前	SK-100	73				- 1 1	
75	常滑	片口鉢	口縁	7	14世紀前	SK-100	10				- 1 1	
76	常滑	片口鉢	口縁	7	14世紀前	SK-100	92				- 1 1	
77	常滑	片口鉢	口縁	7	14世紀前	SK-100	1				- 1 1	
78	常滑	片口鉢	口縁	7	14世紀前	SX-001(2次)	9				- 1 1	
79	常滑	片口鉢	口縁	8	14世紀後	不明	不明				- 1 1	
80	常滑	片口鉢	口縁	8	14世紀後	SK-001	1				- 1 1	
81	常滑	片口鉢	口縁	8	14世紀後	10L-72-73	72-2, 73-7				○ 2 1	
82	常滑	片口鉢	口縁	8	14世紀後	SK-100	1, 38				○ 2 1	
83	常滑	片口鉢	底部	常滑片口 鉢Ⅱ型		SK-039	3				- 1 1	内面磨滅、被質
84	常滑	片口鉢	底部	常滑片口 鉢Ⅱ型		SX-001(ⅡF-5B)	4, 19				○ 2 1	内面磨滅、被質
85	常滑	片口鉢	底部	常滑片口 鉢Ⅱ型		10M-20	2				- 1 1	器面ゴロゴロ、被質
86	常滑	片口鉢	底部	常滑片口 鉢Ⅱ型		SK-100	1				- 1 1	内面磨滅
87	常滑	片口鉢	底部	不明		SK-103	1				- 1 1	内面磨滅、被質
一	常滑	片口鉢	口縁	8	14世紀後	SK-100	1				- 1 1	
一	常滑	片口鉢	口縁	8	14世紀後	SK-100	17				- 1 1	
一	常滑	片口鉢	底部	常滑片口 鉢Ⅱ型		SK-100	1				- 1 1	
一	常滑	片口鉢	底部	常滑片口 鉢Ⅱ型		SX-001(ⅡF-1C)	1				- 1 1	器面ゴロゴロ
一	常滑	片口鉢	底部	常滑片口 鉢Ⅱ型		SX-001(ⅡF-5B)	4				- 1 1	内面磨滅、被質
88	在地	内耳	口縁(耳)	不明		SK-062, SX-001 (11K, 38-39)	SK-4, SX- 1	(298)			○ 2 1	外面磨けている、内面灰色、内耳は1点のみ確認、内耳に縁の磨滅なし
89	在地	内耳	口縁-体部	不明		SX-001(2次)	15	(308)			○ 6 1	形跡は土器跡跡のようであるが、跡目がないので内耳とした
90	在地	内耳	口縁	不明		SK-101	5				- 1 1	金髪母を多量に含む
91	在地	内耳	口縁	不明		99L-33	1				- 1 1	灰褐色
92	陶器	鉢	口縁	不明		SX-001(ⅡF-5B)	4				- 1 1	口縁端が内側に引き出される、被質、にふい褐色
93	在地	壺	口縁	不明		SK-077	1				- 1 1	長石を含む硬質で緻密な胎土、磨滅が7割、灰火灰改良陶器か
94	在地	磁鉢	口縁	不明		SK-061	4				- 1 1	長石を含む硬質で緻密な胎土、にふい褐色
95	在地	磁鉢	体部	不明		SX-001(ⅡF-1Aa)	6				- 1 1	長石を含む硬質で緻密な胎土、にふい褐色
96	在地	磁鉢	体部	不明		SK-001	1				- 1 1	濃い胎土、被質、内面は磨滅、黄灰色
97	土器	香炉	脚部	不明		SK-105	14				- 1 1	細かなヘラ磨き、褐色

採回番号	産地等	器種	部位	編年	年代	遺構・グリッド	遺物番号	口径	底径	器高	接合面	破片数	備考
98	土器	東唐系須臈	口縁	不明	15世紀か	SD-006	1				○ 1	1	同一個体か、薄手、硬質、外面・内面とも淡黄色。
99	土器	鳳凰	口縁～底部	不明		SK-001, SD-001, SK-101, SK-108, SX-001	SK-001 3, 10, 11, 12, 13, 15, SD-001-44, SK-101-5, SK-108-4, SX-001-18				○ 10	1	外面全体にカーボンを吸着させて、丁寧に表面を磨く、光沢有り。底面には半球形状の突起が3見あつたと考えられるが、調査している。内面にはハラナゲされている。外面には上と下段に半球形状の連続筋付文とその内側に4本の花のスタンプ文様が交互に帯状に一列する。辻織がこれらの裝飾帯の上下に施される。雲形の鳳人孔が上部に開けられている。すべての同質の破片を同一個体と判断した。
—	在地	土滴	底部	不明		SX-001 (2次)	15, 18				○ 2	1	外面磨けている。磨き痕跡、内面か。
—	在地	不明	底部	不明		SX-001 (① F-5B)	4				○ 1	1	灰石・スコリア含み粗い胎土、重い。
100	常滑	転用磁石				SK-000	3				○ 1	1	常滑焼片
101	常滑	転用磁石				SX-001 (① F-1C)	2				○ 1	1	常滑焼片
102	常滑	転用磁石				SK-105	1				○ 1	1	常滑焼片、143と同質
103	常滑	転用磁石				SK-100	56				○ 1	1	常滑焼片
104	常滑	転用磁石				SK-061	6				○ 1	1	常滑焼片
105	常滑	転用磁石				SD-001	34				○ 1	1	常滑焼片
106	常滑	転用磁石				SX-001 (2次)	9				○ 1	1	常滑焼片か 硬質
107	常滑	転用磁石				SK-100, 9M-71	SK-100/92, 9M-71-4				○ 2	1	常滑焼片
108	常滑	転用磁石				SK-039	15				○ 1	1	常滑焼片
109	常滑	転用磁石				SX-001 (11K-38-39)	1				○ 1	1	常滑焼片
110	瀬美	転用磁石				SK-100	47				○ 1	1	瀬美焼片
111	瀬美	転用磁石				SK-100	54				○ 1	1	瀬美焼片
112	瀬美	転用磁石				SX-001 (2次)	10				○ 2	1	常滑焼片
113	瀬美	転用磁石				SD-003	16				○ 1	1	瀬美焼片か
114	瀬美	転用磁石				SX-001 (11K-38-39)	1				○ 1	1	常滑焼片か

第8表 中世砥石計測表

採回番号	遺構No	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	遺物No	備考
1	SK-039	凝灰岩	8.2	3.4	3.1	99.0	19	
2	SK-001 (2次)	凝灰岩	7.3	3.4	3.7	106.0	1	
3	SD-003	凝灰岩	9.3	4.3	3.0	141.7	29	
4	SD-001	凝灰岩	4.9	3.2	1.2	30.3	41	
5	SX-001 (2次)	砂岩?	6.1	5.1	1.4	79.4	3	
6	SK-039	砂岩	7.5	7.4	5.4	456.4	13	
7	SX-001 (① F-5B)	不明	7.5	5.3	4.4	173.4	4	被熱
8	SX-001 (① F-1C)	砂岩	3.7	3.0	1.4	23.5	2	
9	SD-001	雲母片岩か	6.0	5.2	1.8	97.6	38	
10	SK-105	凝灰岩	5.3	3.0	2.4	64.9	1	
11	SK-100	粘板岩	10.3	3.5	1.2	65.6	1	

第9表 中世金属製品計測表

標記番号	遺構No.	製品名	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	遺物番号	備考
1	SK-066	短刀	鉄	213.0	29.0 ~ 30.0	0.3 ~ 0.45	77.50	0008・0010	10L-73
2a・2b	SK-112	短刀	鉄	140.5	230.5	0.3 ~ 0.5	20.92	0001・0002	
3	SK-067	刀子	鉄	36.5	13.0	0.3	4.58	0004	10L-73
4	SK-066	刀子	鉄	30.0	0.6 ~ 11.0	0.2 ~ 0.3	4.40	0005	10L-73

第10表 中世銭貨計測表

標記番号	遺構No.	銭種	材質	G (mm)	N (mm)	g (mm)	n (g)	T (mm)	遺物No.	時代
1	10L-62	祥符元寶	銅	24.17	20.25	6.26	1.8	1.36	0002	北宋
2	SK-101	天禧通寶	銅	23.70	19.26	6.01	2.4	1.28	0003	北宋
3	SK-006	皇宋通寶	銅	24.63	21.37	7.46	2.6	1.21	0002	北宋
4	10L-73	皇宋通寶	銅	22.87	19.29	6.04	2.1	1.17	0003	北宋
5	10L-73	皇宋通寶	銅	23.85	19.98	6.71	3.1	1.39	0006	北宋
6	SX-001 (1.F-2A)	元豊通寶	銅	23.92	18.82	7.29	1.5	1.03	0011	北宋
7	10L-57	永樂通寶	銅	25.04	20.80	5.53	2.2	1.33	0001	近世
8	SI-031	不 明	銅	22.35	19.25	6.09	2.5	1.06	0002	不明

第11表 中世陶磁器破片數集計表

遺構	貿易陶磁										瀬戸・美濃																
	白磁		青磁			壺・茶壺					瓶子		平碗			縁軸小皿				盤類		折縁深皿					
	碗	皿	I Ia 5 a	I IIa b	II IIa b 系	不明	不明	古 期 以 後	古 期 以 後	古 期 以 後	不 明	古 期 以 中	古 期 以 後	古 期 以 後	古 期 以 後	古 期 以 後	古 期 以 後	古 期 以 後	古 期 以 後	古 期 以 後	不明	古 期 以 後	古 期 以 後	不明	古 期 以 後	古 期 以 後	
SD001										1			1													1	
SD002				1								1														1	
SD003																											
SD005												1							1 or II		1						
SD006													1														
SK001																											
SK009										1																	
SK060																											
SK061				1																						1	
SK062																1											
SK072																											
SK088														1													
SK100															1					1 or II							
SK101																											
SK103																											
SK105											1																
SK106	1																										
SK107											1																
SK108											1																
SK112														1													
SI03				1																							
SX027		1																									
① F1Aa																										1	
① F1C	1		1																							2	1
① F2A																										1	
① F3A																											
① F4C																											
① F5B																											1
② F9A																											
SX001.2次	1	1																									1
9M-33			1										1														
9M-70																											1
10K-79																											1
10K-84																											
10L-04																											
10L-32																											
10L-51													1														
10L-64														1													
10L-72・73																											
10M-20																											
10M-21																											1
11K-38・39																											

写 真 图 版



图府台演跡第1398号

比例尺 1:100,000

図版2



調査前風景



1. SI-001 (北から)



図版3

2. SI-001のマド(北から)



3. SI-002遺物出土状況(北から)



4. SI-002遺物出土状況(北から)



5. SI-003
(東から)



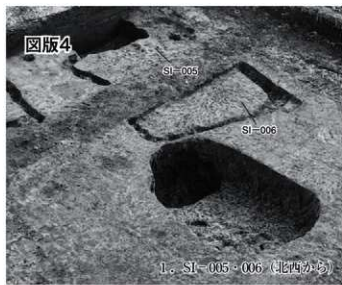
6. SI-004
(北から)



7. SI-004 東
(東から)



8. SI-004遺物出土状況
(南東から)





1. SI-010遺物出土状況



図版5

2. SI-011遺物出土状況
(北西から)



3. SI-017マブシ遺物出土状況(北西から)



4. SI-012 (北東から)



5. SI-016 (北西から)



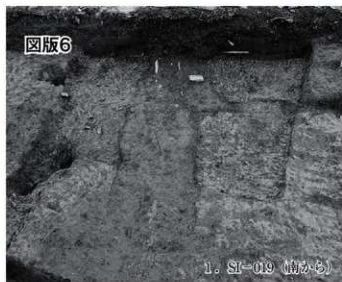
6. SI-014 (北西から)



7. SI-015 (手前)・016 (奥) (北西から)



8. SI-018 (北西から)





図版8



1. SI-038遺物出土状況 (南東から)



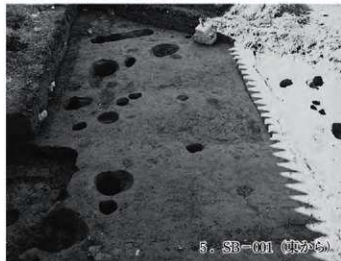
2. SI-039 (北東から)



3. SI-010遺物出土状況 (南から)



4. SK-123遺物出土状況 (南西から)



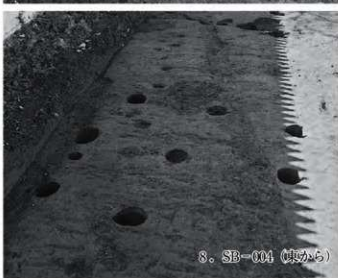
5. SB-001 (1/2:5)



6. SB-002遺物出土状況 (1/2:5)



7. SB-003 (1/2:5)



8. SB-004 (1/2:5)



1. 掘り跡の北側 (東から)

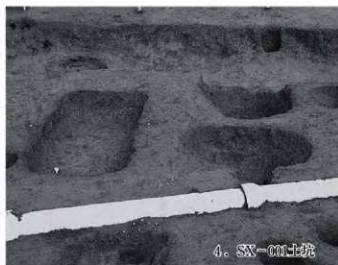


図版9

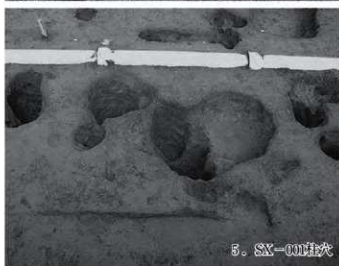
2. SK-015 (北西から)



3. SX-001坑 (北西から)



4. SX-001坑



5. SX-001坑



6. SX-001坑(途中)



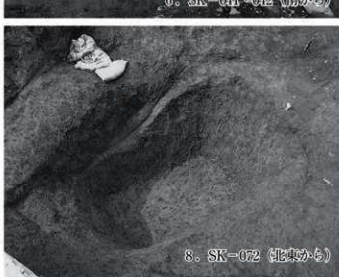
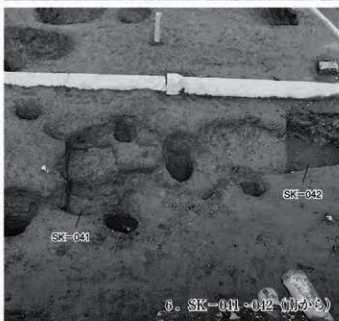
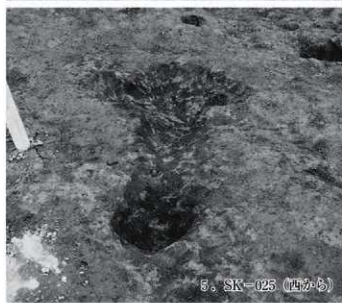
7. SB-015 (東から)



8. SB-012 (東から)









SK-028

SK-029

1. SK-028・029 (北西から)

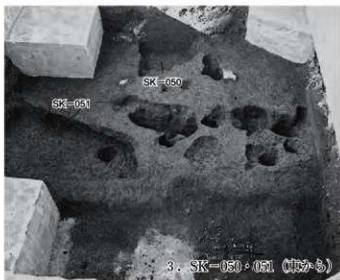




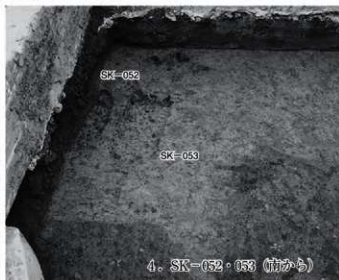
1. SK-047 (西から)



2. SK-048・049 (南から)



3. SK-050・051 (西から)



4. SK-052・053 (西から)



5. SK-055 (南から)



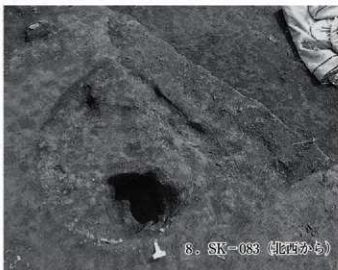
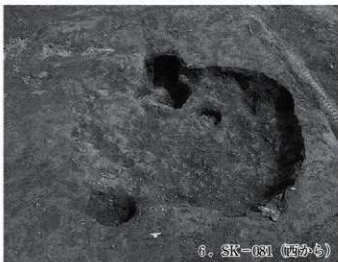
6. SK-059 (北西から)

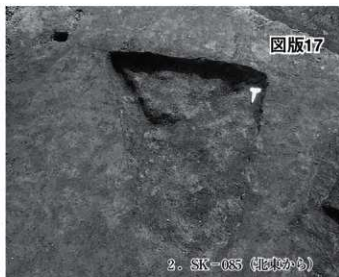


7. SK-056 (西から)

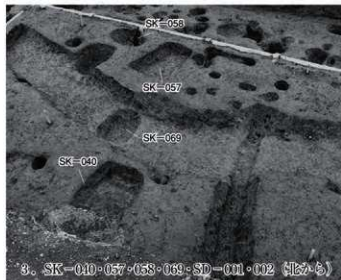
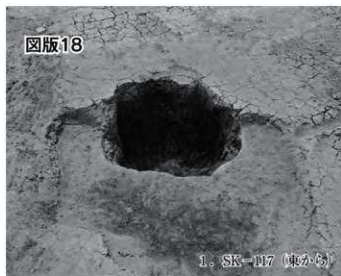


8. SK-060 (東から)





図版18





1. SX-0010F-1Aa (北かぶ)



2. 0F-1Ab (北かぶ)



3. 0F-2A (北かぶ)



4. 11L・12L (北かぶ)



5. SX-0010F-5BCa (北かぶ)



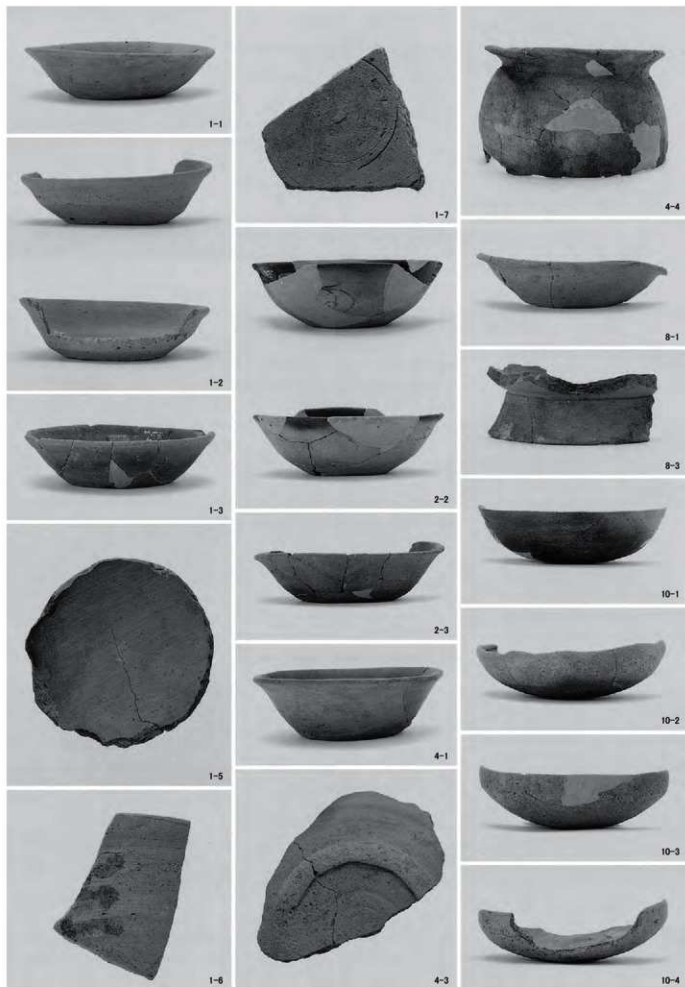
6. 3F (北かぶ)



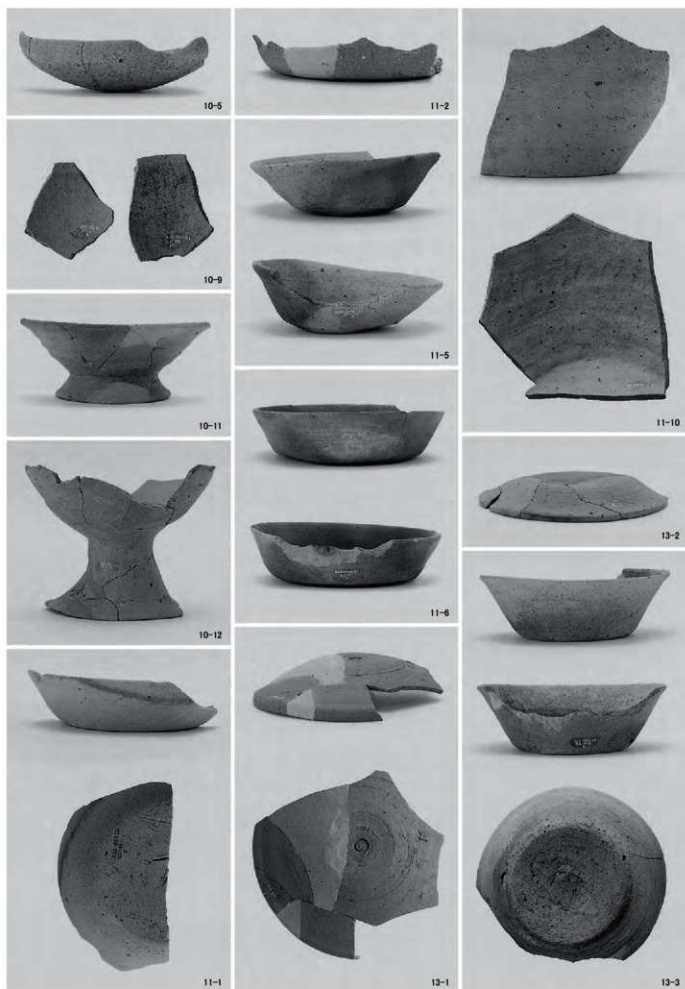
7. 0F-1A (北かぶ)



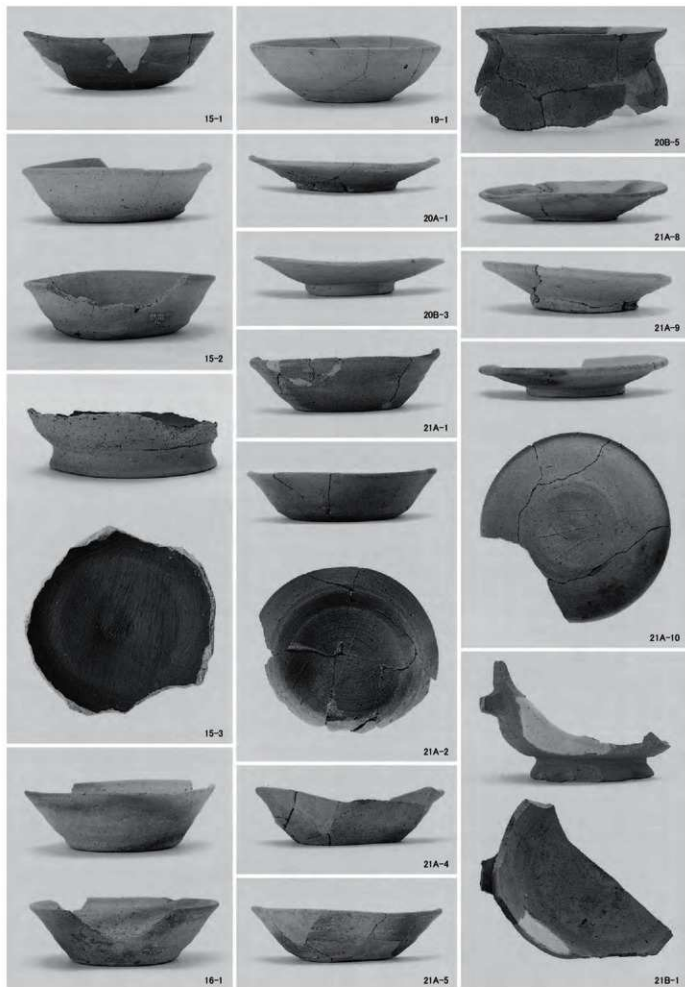
8. 3F (北かぶ)



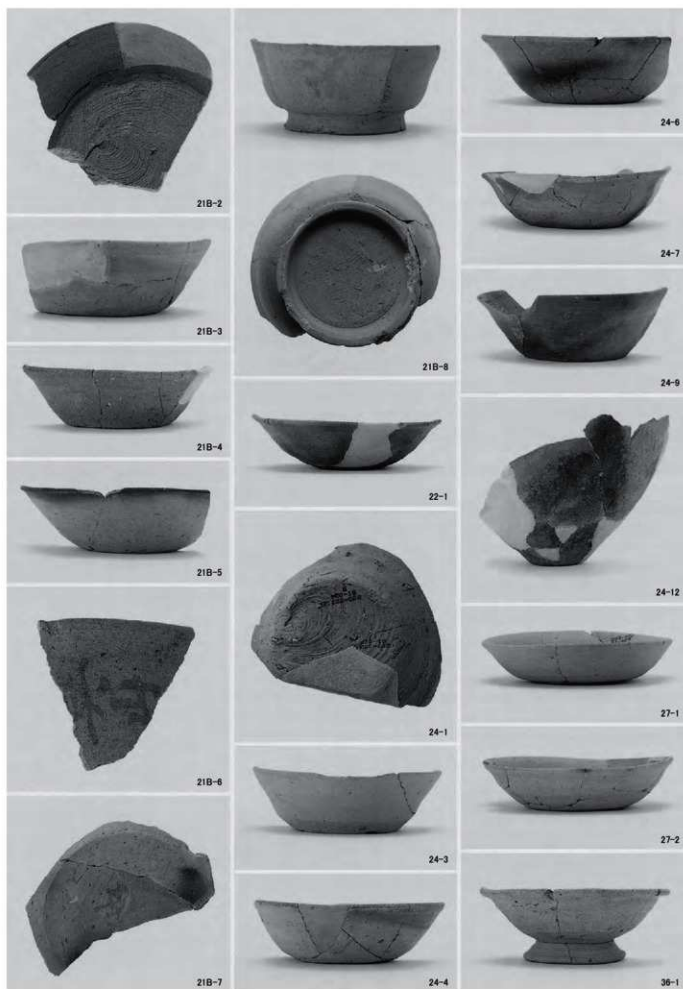
奈良・平安時代土器(1)



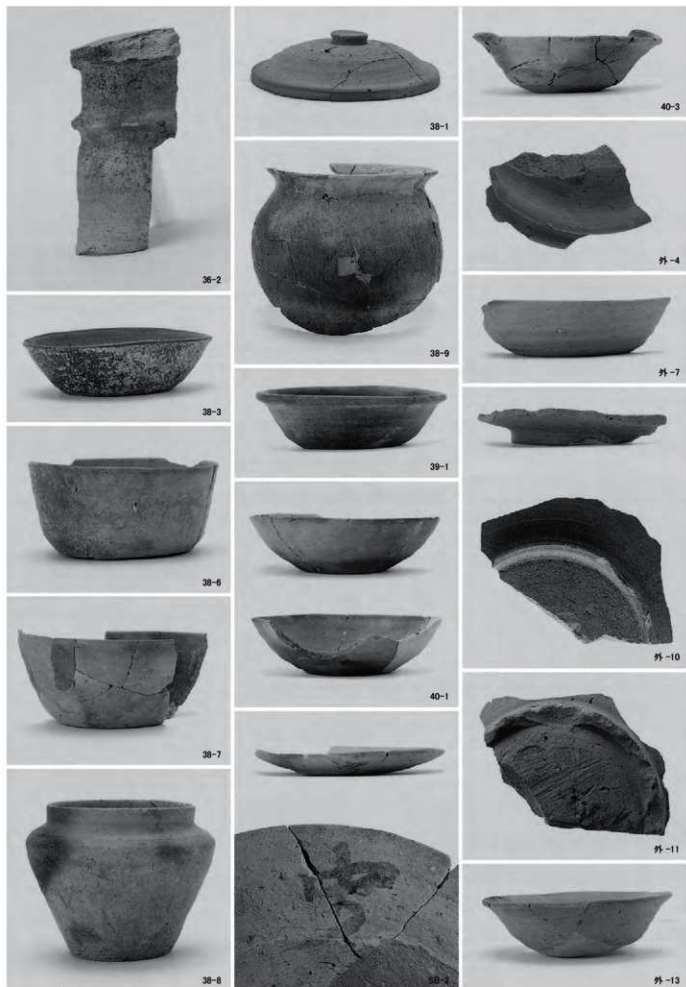
奈良・平安時代土器(2)



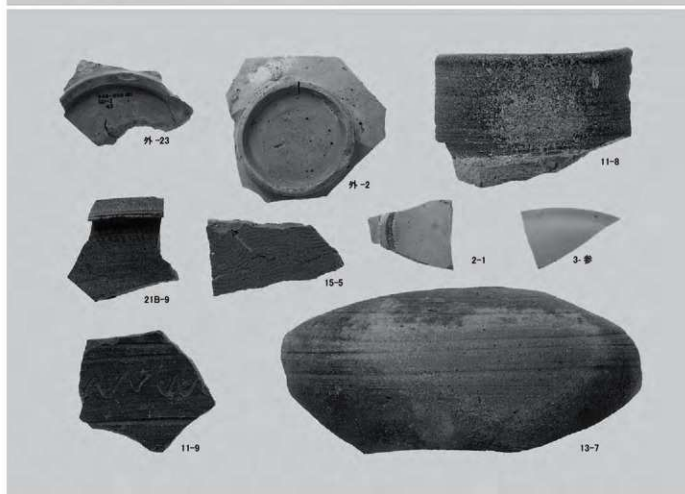
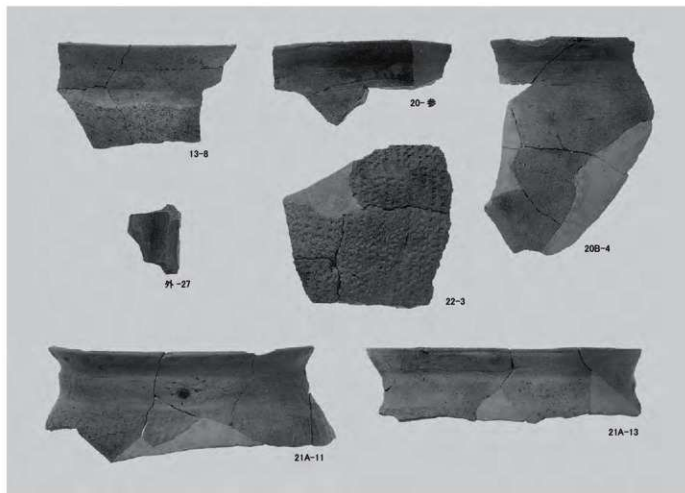
奈良・平安時代土器(3)



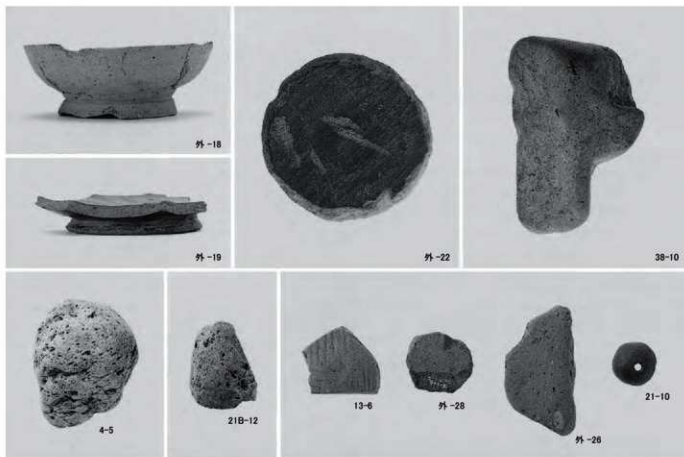
奈良・平安時代土器(4)



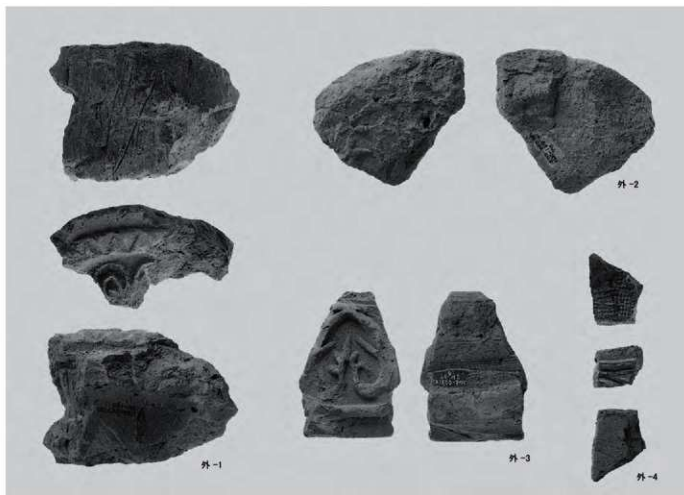
奈良・平安時代土器(5)



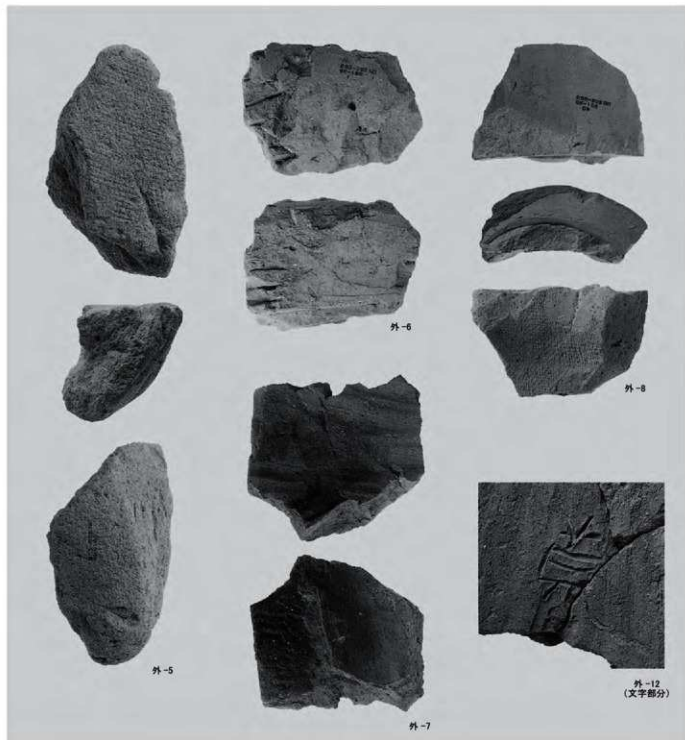
奈良・平安時代土器(6)



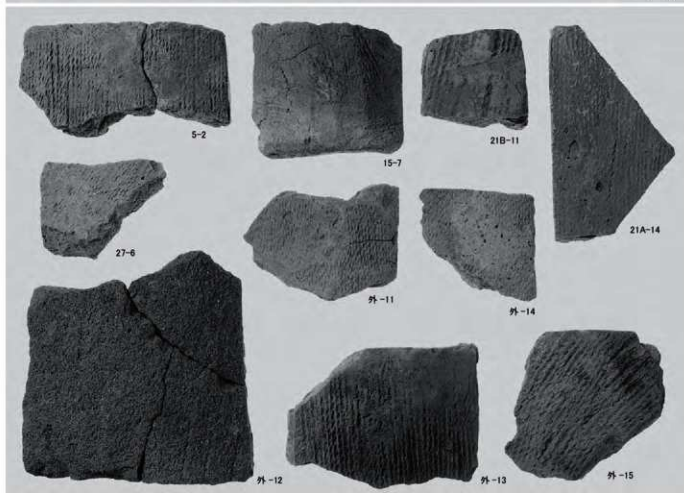
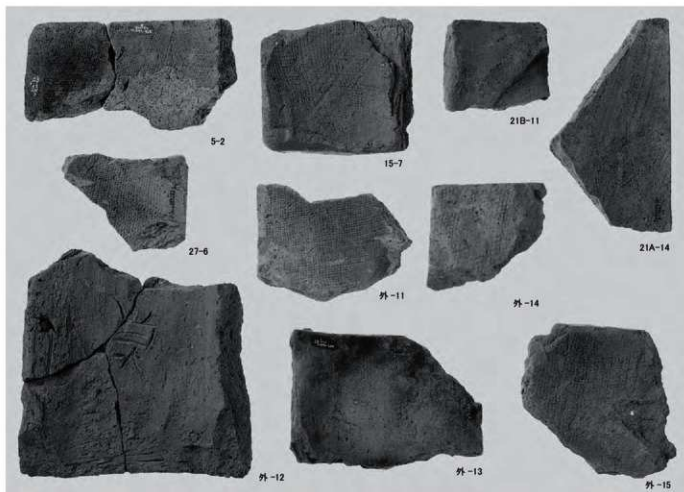
奈良・平安時代土器（7）・軽石・土製品



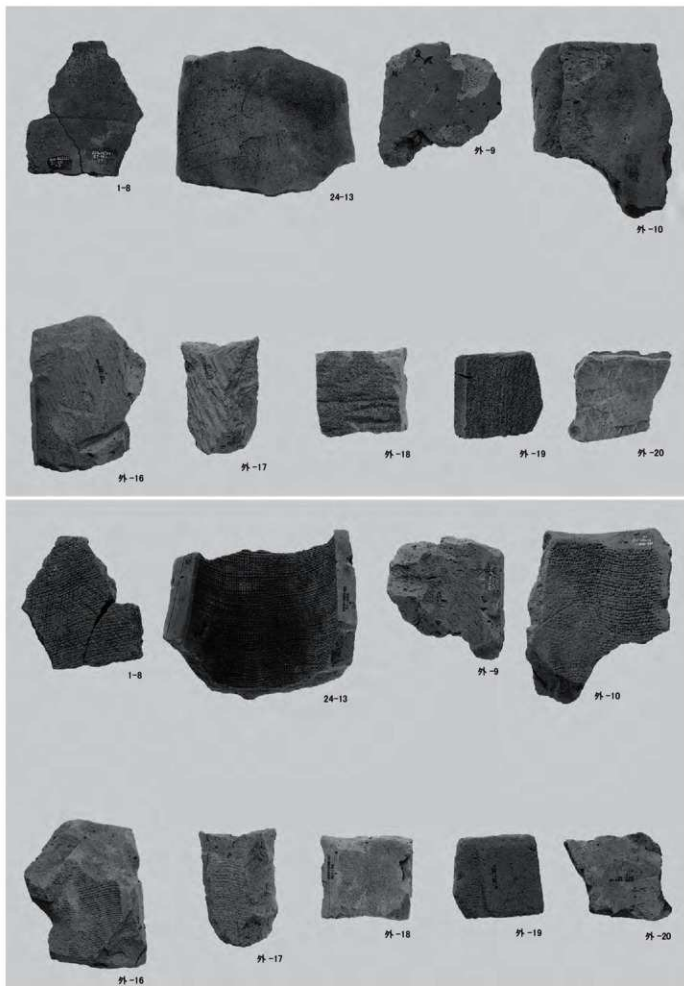
奈良・平安時代の瓦（1）



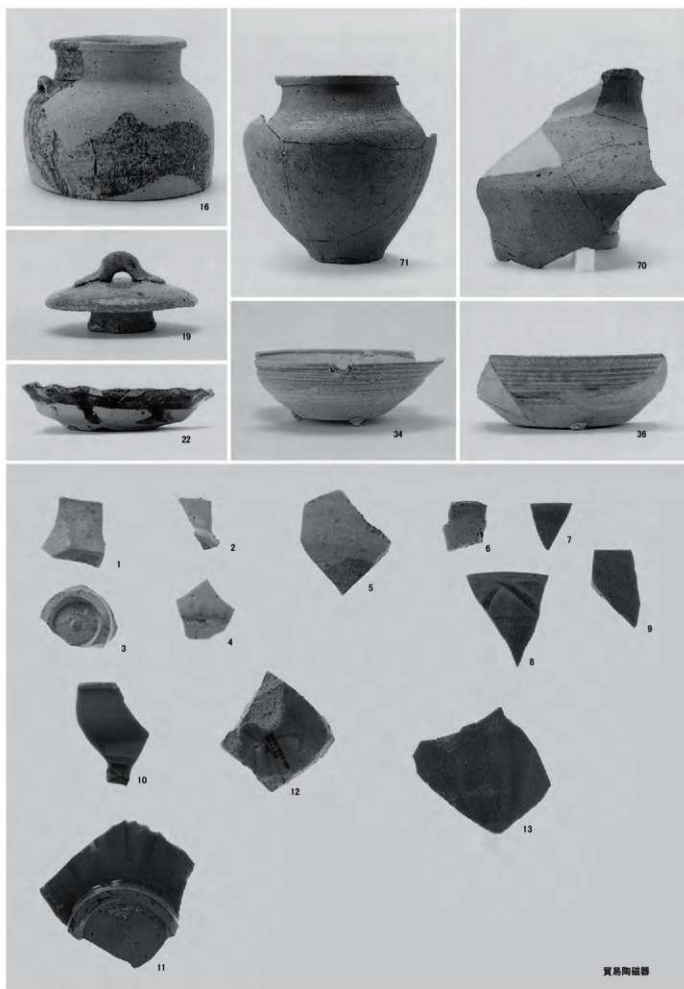
奈良・平安時代の瓦 (2)



奈良・平安時代の瓦 (3)

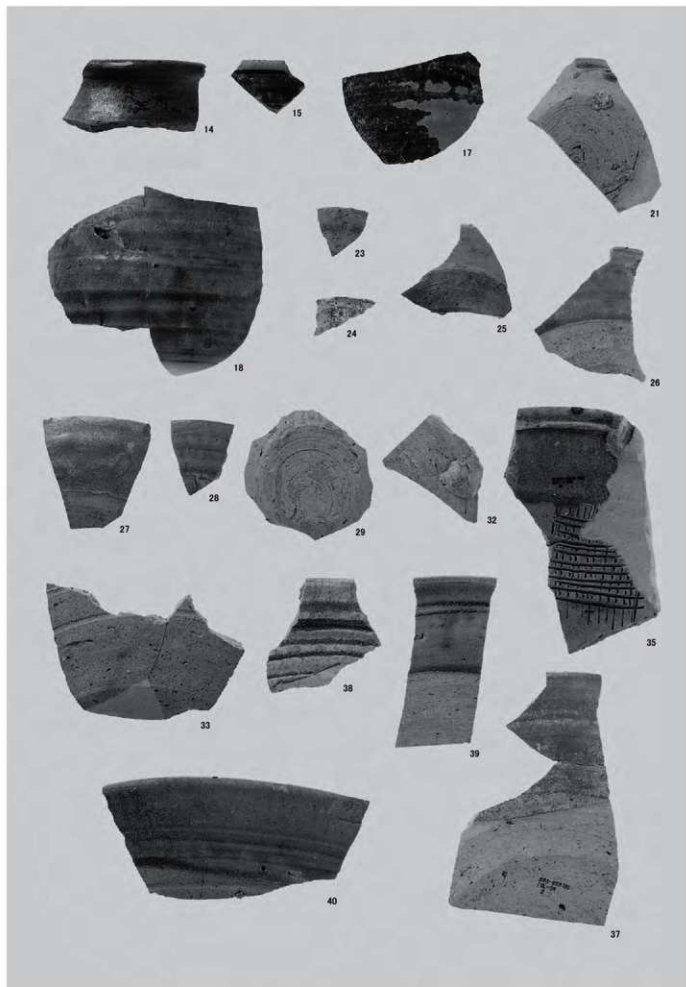


奈良・平安時代の瓦（4）

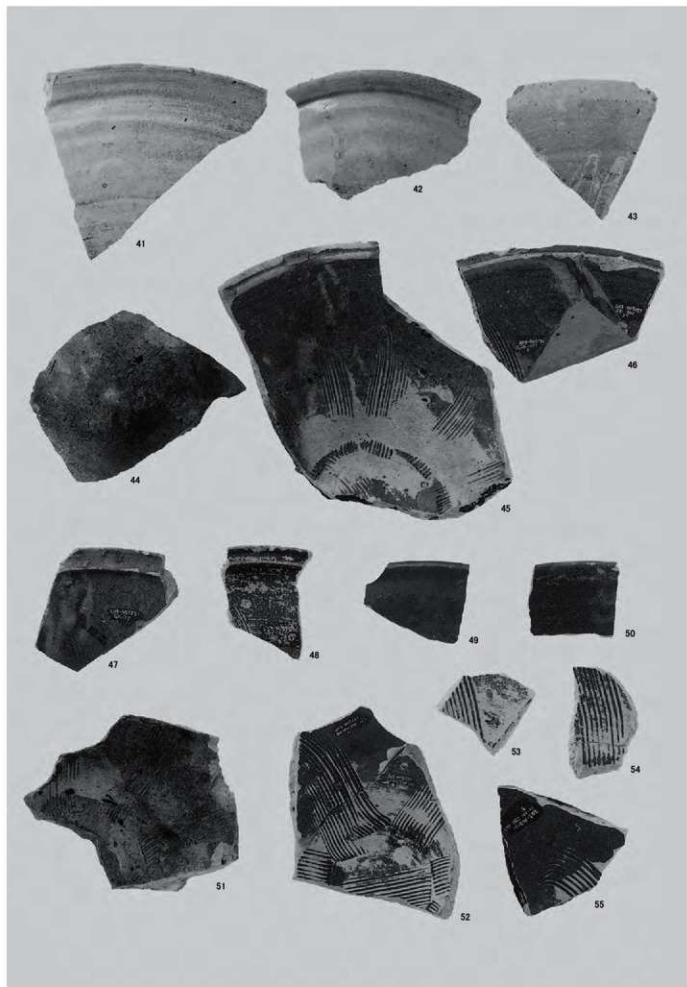


冥島陶磁器

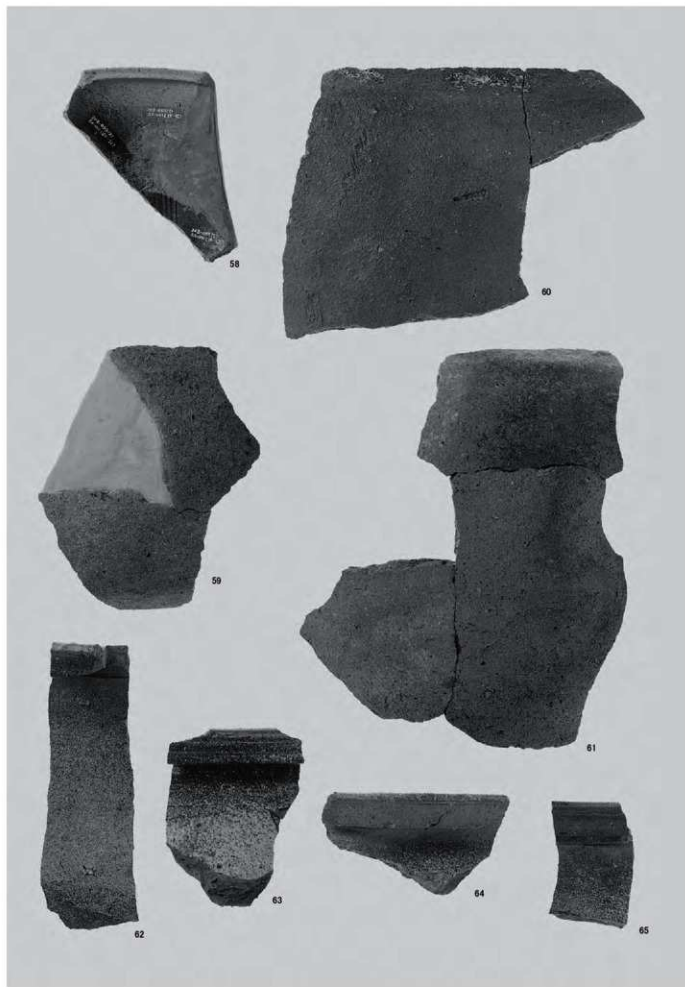
中世陶磁器 (1)



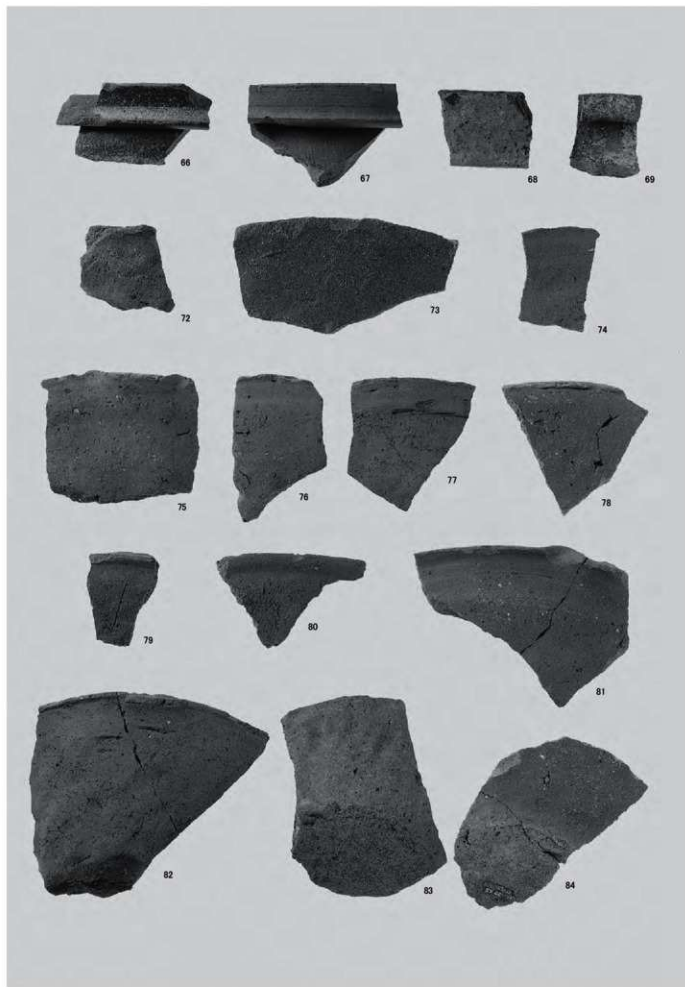
中世陶磁器 (2)



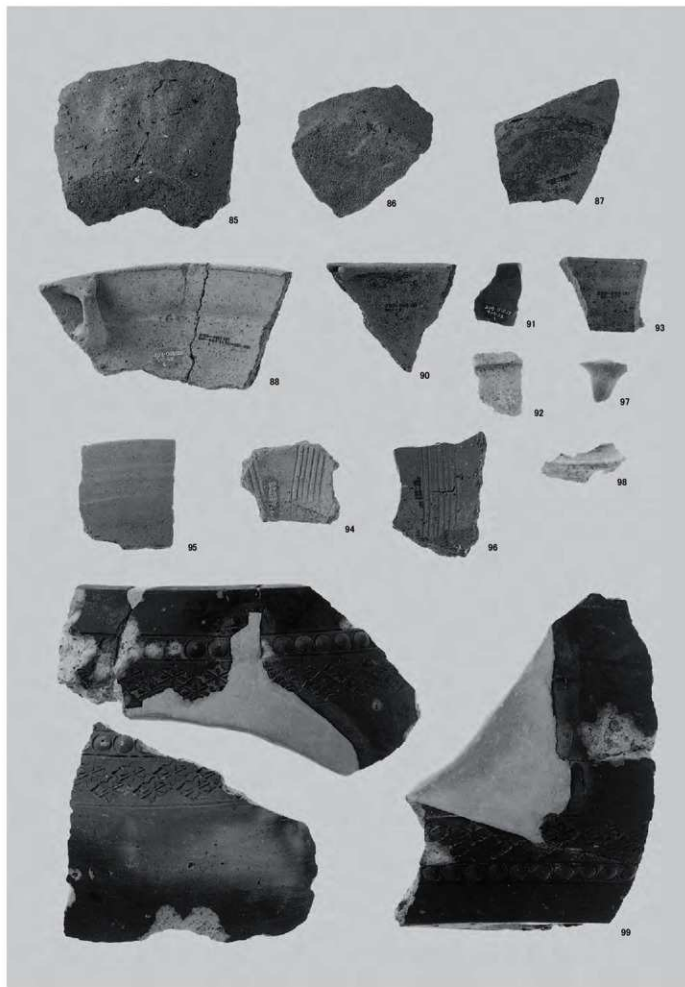
中世陶磁器(3)



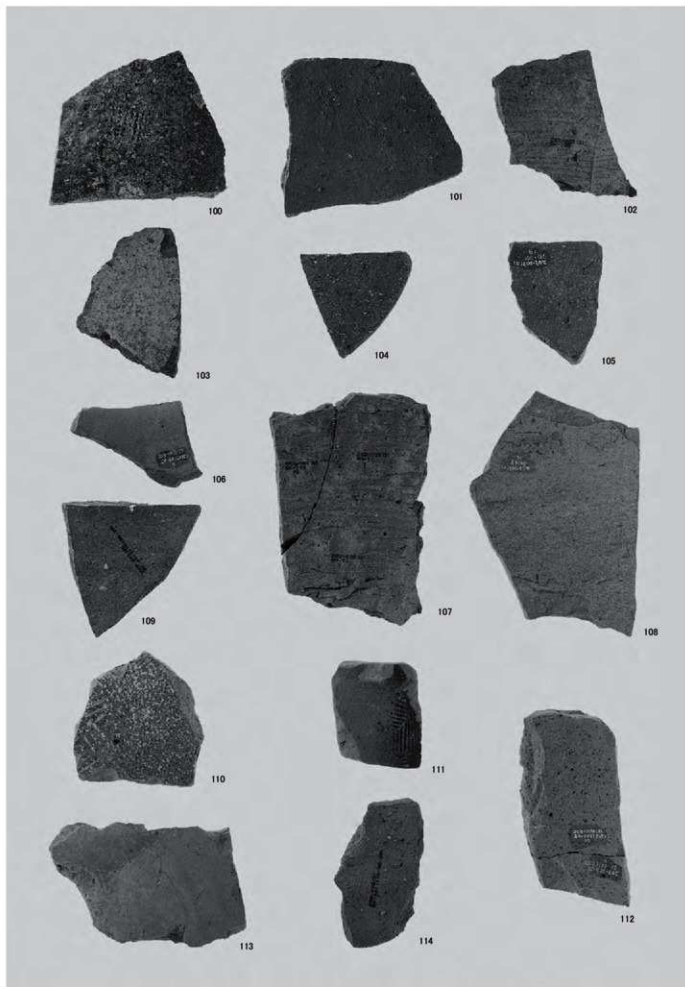
中世陶磁器 (4)



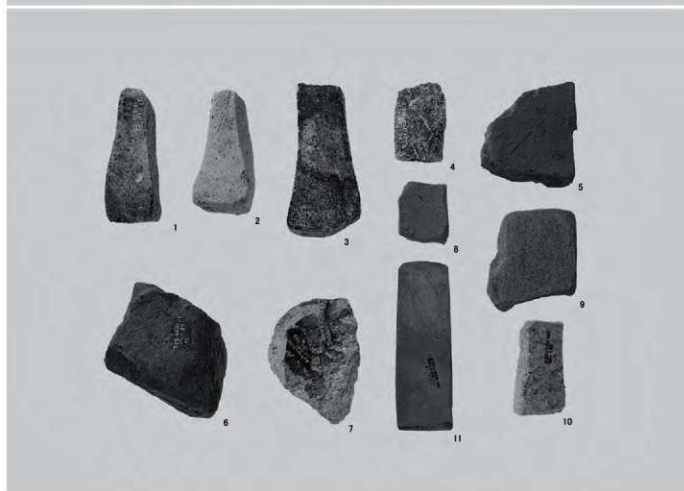
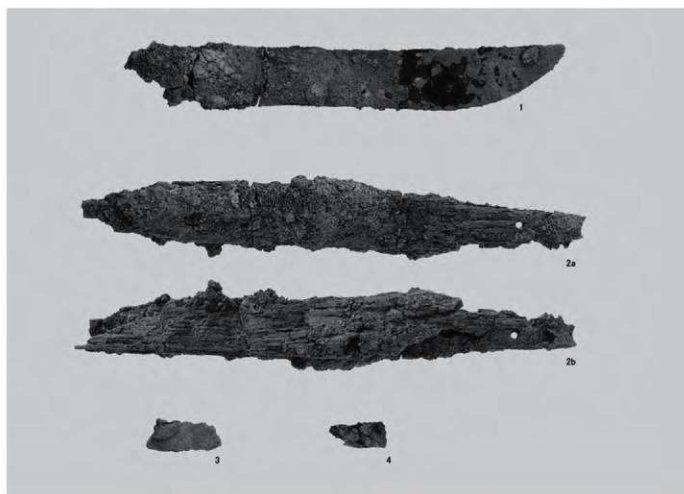
中世陶磁器 (5)



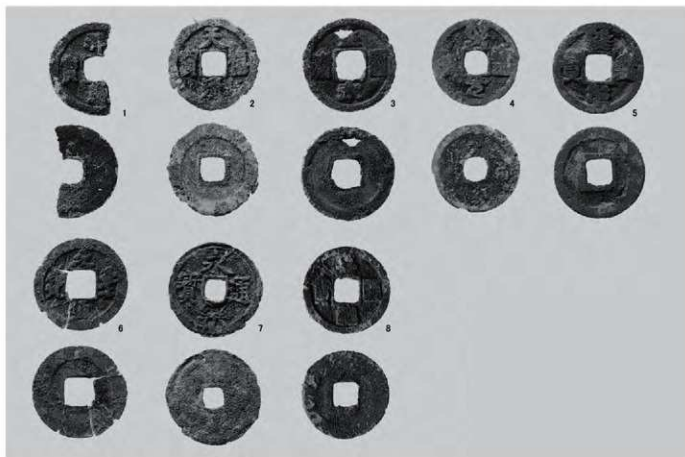
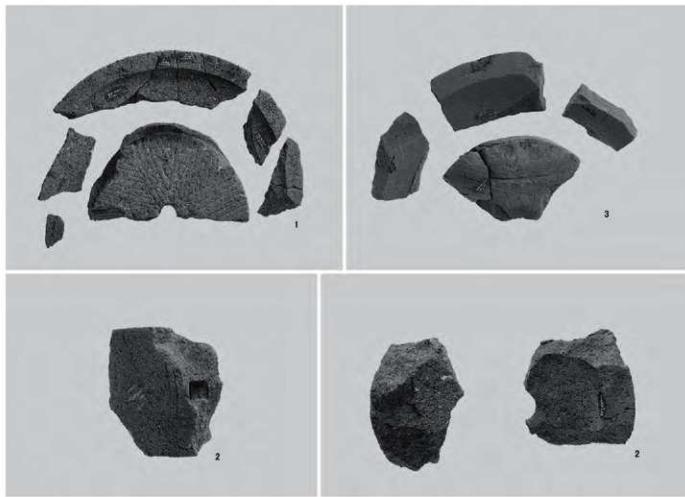
中世陶磁器 (6)



転用砥石



金属製品・砥石



石臼・銭貨

報告書抄録

ふりがな	いちかわしこうのだいいせきだいじゅうさんちてん							
書名	市川市国府台遺跡第13地点(2)							
副書名	独立行政法人 国立国際医療研究センター国府台病院埋蔵文化財発掘調査報告書 1							
巻次								
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第688集							
編著者名	鳴田浩司・糸川道行・大岩桂子							
編集機関	公益財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 In.043-424-4848							
発行年月日	西暦2012年9月28日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
こののどいせき 国府台遺跡 のいじゅうさんちてん 第13地点 の(2)	こののどいせき 市川市国府台 1-7-1	12203	003	35度 44分 48秒 (世界測地系)	139度 54分 20秒	20091104～ 20100326	5,830㎡	独立行政法人 国立国際医療 研究センター 国府台病院建 て替えに伴う 埋蔵文化財調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
こののどいせき 国府台遺跡 のいじゅうさんちてん 第13地点 の(2)	包蔵地	縄文時代	陥穴	2基	縄文土器(早期～後期) 石器(石 鏃・打製石斧・磨石・磨製 石斧)			
	集落跡	奈良・平安時代	竪穴住居 掘立柱建物 土坑	34軒 2棟 13基	土師器、須恵器、瓦、金属製品		奈良三彩	
こののどいせき 国府台遺跡 のいじゅうさんちてん 第13地点 の(2)	館跡	中世	台地整形区画	1か所	中国磁器、瀬戸産陶器、常滑産陶 器、渥美産陶器、土器推鉢、瓦質 火鉢、内耳土鍋、金属製品(刀子・ 釘)、石製品(砥石・茶臼)		下総国分 寺跡関連 瓦(「荒人」 ヘラ書き など)	
			掘立柱建物 竪穴状遺構 溝 道路遺構 地下式坑 土壘墓 火葬施設 粘土貼土坑 袋状土坑 土坑	7棟 17軒 6条 1条 9基 5基 4基 2基 2基 86基以上				
要約	下総国府推定地の隣接地調査で、奈良・平安時代を中心とした集落を検出した。 また、従来認識されていなかった中世後期の台地整形区画内に展開する有力豪族の屋敷跡を発見した。3間×2間の掘立柱建物を中心に、大型地下式坑、粘土貼土坑、火葬施設、土坑、道路跡などが検出された。出土中世陶器から15世紀半ば頃のものと同定される。							

公益財団法人千葉県教育振興財団調査報告第688集

市川市国府台遺跡第13地点(2)

－独立行政法人 国立国際医療研究センター国府台病院埋蔵文化財調査報告書1－

平成24年9月28日発行

編 集	公益財団法人	千葉県教育振興財団 文化財センター
発 行	独立行政法人	国立国際医療研究センター 国府台病院 市川市国府台1-7-1
	公益財団法人	千葉県教育振興財団 四街道市鹿渡809-2
印 刷	株式会社	エリート情報社[印刷出版局] 成田市東和田415-10
